財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第319集

久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡

－天明三年浅間災害に埋れた畑地景観と中世遺構の発掘調査－

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第３集

第１分冊《本文編》

2003

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第319集

久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡

－天明三年浅間災害に埋れた畑地景観と中世遺構の発掘調査－

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第３集

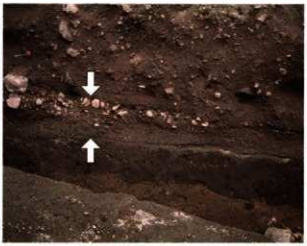
第１分冊《本文編》

2003

国 土 交 通 省

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

天明泥流が流れ下った遺跡周辺を吾妻川下流から望む（2001年７月撮影）。



As-A軽石降下後に培土がおこなわれたK11号畑跡断面（久々戸遺跡）。

天明泥流の流下過程で形成された逆級化構造の砂層（中棚Ⅱ遺跡）。

久々戸遺跡の調査風景。

中棚Ⅱ遺跡で型取りされたサトイモの石膏型。

久々戸遺跡の畑跡から出土した慶長一分判金。

写真による調査記録

本報告書で扱った４遺跡は、天明三年浅間泥流下の畑景観を構成する遺構群の調査である。部分的ではあるが、さらにその下位面の遺構も確認され、下原遺跡では中世の遺構群がみつかっている。

① **畑の景観**
泥流畑の構成を中心に概観する。

② **泥流畑の畝断面と耕作状況**
As-A軽石の降下期日から農事暦による耕作状況を読みとる。

③ **単位畑に配置された平坦面**
平坦面の解明を「ツカ」の口承に求めた。

④ **ヤックラ**
不要な畝が片付けられた場所。

⑤ **畑の開墾**
泥流畑の開墾の年代観を次の課題としたい。

⑥ **土盛り**
耕作地の外に作られた土饅頭か？

⑦ **「草津みち」**
現道の草津道直下から80ｍを検出。

⑧ **泥流被災後の石垣と道の復旧**
現況石垣が直上に築かれていたことを確認した。

⑨ **栽培されていた作物**
サトイモと点播きされた豆科作物を確定した。

⑩ **天明泥流流下に関する記録**
遺構調査と同時に泥流流下に伴う事象を記録した。

⑪ **中世面の遺構**
下原遺跡では焼土やピットを中心とする中世の生活面がみつかった。

⑫ **浅間山起源のテフラ検出**
指標となるAs-A軽石・As-A′・As-A灰他の降下テフラが同定された。

⑬ **出土遺物**
２面目の土砂崩れや畑開墾の年代観の確定を目標とした。

⑭ **現地見学会・巡検**
天明泥流の発掘調査では歴史学・民俗学・火山学・農学などとの共同研究が求められる。

写真図版１　1. 畑の景観

写真1. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区N22号畑 西→。

天明三年８月５日、浅間山噴火で発生した泥流に埋まった畑跡を本書の中では「泥流畑」と呼ぶ。その畑は開墾され礫が取り除かれ、耕作が続けられていた。礫は畑の一画に集められている。これらは現在でも地元で「イシヤックラ」とか「ヤックラ」と呼ばれている。畑の周囲や地境に礫を積み上げた例(写真１)の他に、地面を掘って埋め込んだものもある。天明泥流堆積物の堆積層の薄いところでは、泥流畑の耕作土が、現代までの耕作で攪拌されている場合もみられる（写真３・４)。

写真2. 久々戸遺跡 Ⅰ区 西→。

写真3. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区N30−１号畑 西→。

写真4. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区11号石垣とその上段の畑 南→。

写真1. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区N26号畑 西→。

写真2. 中棚Ⅱ遺跡 同 南東→。

写真3. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅱ区N28-6号畑 東→。

写真4. 中棚Ⅱ遺跡 同　鋤込み土除去状況 西→。

写真１～４ではN26号畑を示した。この畑は13枚の単位畑に細分され、さらに東へ広がることが確認されている。単位畑が集まった「中単位」があり、その単位面積や耕作状態を考える資料となる。各畑には平坦面が規則正しく配置されていることにも着目しておきたい。鋤込みがおこなわれた単位畑もある（写真３・４）。反転された鋤込み土を剥がすと、As-A軽石が筋状に確認され、As-A軽石降下時には通路となっていたと考えられる（写真４）。

泥流畑に溝状の撹乱痕跡が確認された。大半は、埋土に礫が充填されていた。付近の天明泥流堆積物の堆積は最大でも１mには及んでおらず、30～40cm程度の地点であることから、泥流被災以降に不要な礫を充填させたいわゆる復旧溝の底部と考えられる（写真５）。
泥流畑は、傾斜が20度に及ぶ畑もみられた（写真６）。

写真5. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区N27-３号畑に残された撹乱痕跡 西→。

写真6. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区調査風景。

写真図版３　1. 畑の景観

写真１．中棚Ⅱ遺跡 Ⅲ区天明泥流下全景。

写真２．中棚Ⅱ遺跡 Ⅲ区N10号畑 東→。

写真３．中棚Ⅱ遺跡 同　南→。

礫が散在する中棚Ⅱ遺跡Ⅲ区の泥流畑は、写真１の通りである。礫は周囲に除けられていて、「猫の額」とでも形容したくなるような狭い畑（写真２・３）であった。Ⅲ区の下位面ではN37(2)号畑（写真６）が検出された。Ⅲ区の泥流畑が他の調査区とは大きく景観が異なり不揃いなのは、土砂災害復旧直後の状態であったことが理由の１つであることが判った。土砂災害は、地元の区有文書の記録から「子歳」の記録と判読され、下流の利根川の水害史記録と出土遺物年代から、天明三年の３年前の安永九年（1780）と判断するにいたった。この畑には、泥流畑にみられる平坦面（写真４）も存在しており、農業史的な視点でもその年代観は重要である。

写真４．中棚Ⅱ遺跡 Ⅲ区N37(2)－１号平坦面 北東→。

写真５．中棚Ⅱ遺跡 同 畝断面ａ－ａ′ 東→。

写真６．中棚Ⅱ遺跡 Ⅲ区N37(2)号畑 北東→。

写真1. 久々戸遺跡 Ⅲ区草津みちからの降口 北→。

写真2. 久々戸遺跡 Ⅳ区Ｋ８－４号畑。

写真3. 久々戸遺跡 Ⅳ区Ｋ８・６号畑の地境 北東→。

写真4. 久々戸遺跡 Ⅳ区Ｋ７号畑踏み分け道 北→。

泥流畑の構成要素を概観しておきたい。草津みちから畑への降口（写真１）やヤックラの隙間が畑への降口となっているもの（写真２）がある。畑の境には、境木（写真３・７・８）や踏分道が確認される（写真４）。写真５は、畑の隅に確認された覆屋構造物の跡（今日、地元では「オヤ」と呼ぶ）と推定され、範囲内にはAs-A軽石がない。

写真８は境木から得られた根痕と調査現場周辺で採取された桑の根である。

写真5. 下原遺跡 Ⅱ区覆屋構造物 南→。

写真6. 久々戸遺跡 Ⅳ区Ｋ５号畑 南→。

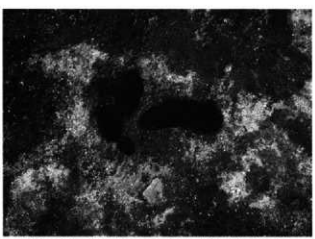


写真7. 久々戸遺跡 Ⅳ区Ｋ８－Ｋ10号畑１号境木痕 南→。

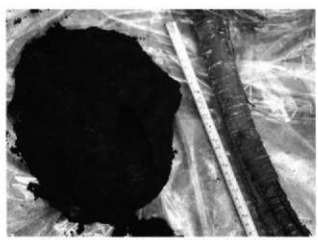


写真8. 久々戸遺跡 Ⅳ区 同 境木痕の空洞と桑の根。

写真図版５　2. 泥流畑の畝断面と耕作状況

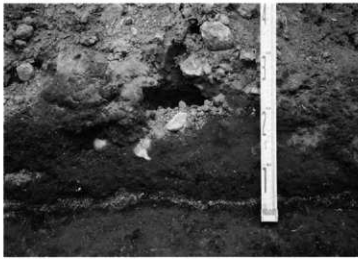


写真１. 久々戸遺跡 Ⅰ区Ｋ９号畑As-A軽石堆積状況 東→。

浅間山火口から北東に20㎞離れたこの地域では、写真１にみるようにAs-A軽石が１～３㎝程度の厚さで確認される。したがって、一般に畝立てされた畑では、サク部分にAs-A軽石が筋状に確認できる（写真２・３）。しかしながら、奇妙に思える畝断面の畑がみつかった。この地域の農事暦と史料の「砂降」の期日を照らし合わせ耕作状況を読みとると、軽石降下後も耕作が継続され、土用の培土である一番ザクと二番ザクの間にAs-A軽石が降下したことが判った（写真４・５）。さらに、鋤き込みされた畑も確認された（写真６・７）。これらをあわせて、９種類の畝断面の分類がおこなえた（Ⅶ章４節に記述）。このことから泥流畑の被災時の耕作状況を読み取ることができた。その分析考察結果からは、新たな問題点が浮かび上がってきた。

写真２. 久々戸遺跡 Ⅲ区Ｋ13号畑畝断面ｃ－ｃ′ 北→。

写真３. 久々戸遺跡 Ⅲ区Ｋ16－３号畑 南→。

写真４. 久々戸遺跡 Ⅰ区Ｋ11号畑畝断面ｂ－ｂ′ 南→。

写真５. 久々戸遺跡 Ⅰ区 同畑培土痕跡。

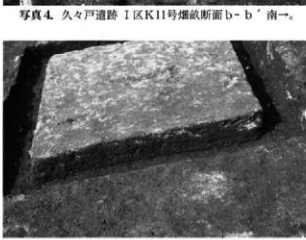


写真６. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区N21－２号畑断面ａ－ｄ 東→。

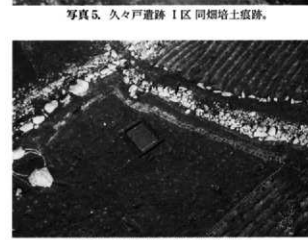


写真７. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区 同畑 南西→。

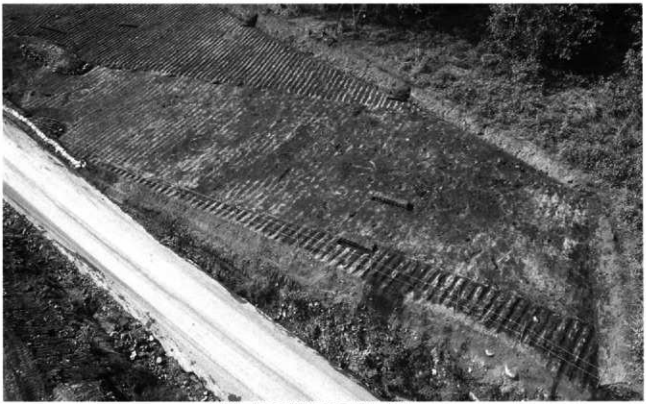


写真1. 久々戸遺跡 IVKK10号畑周辺 南→。

1枚の畑の中でも単位ごとに状況が異なっている。耕作状況や平面の範囲からみた畑の小単位を「単位畑」と呼ぶことにする。畝サクの形状（写真2～4）や平坦面の存在、サクの平面的なズレ（写真5）などがその区分けの根拠である。この単位畑の集合で1枚の畑が構成される。

写真2. 中棚Ⅱ遺跡 VKN21-2・4号畑地境 西→。

写真3. 久々戸遺跡 ⅢKK16-2・3号畑地境 南→。

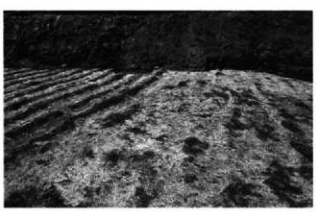


写真4. 久々戸遺跡 IVKK5・6号畑地境 東→。

写真5. 久々戸遺跡 IVKK8-3・4号畑地境 南東→。

写真図版７　3. 単位畑に配置された平坦面

平坦面はこれまでその存在が解明されていない径２ｍ程度の畝サクを潰して存在する遺構である。平坦面解明の糸口を「ツカ」の口承に求めた。溝が周囲に廻るものをはじめいくつかの特徴から分類がなされるが、いずれも水平を意識して構築されていることが観察された。傾斜畑であるために、山側を削り込み谷側が盛り上がる形状となる。それ故に、被災後の耕作で撹拌されてしまって、山側の窪んだ部分だけが残された例もみられた(写真５)。泥流畑と平坦面については Ⅶ章４節(2)に記述した。

写真1. 久々戸遺跡 Ⅳ区K10- ３号平坦面。

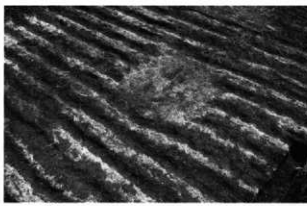


写真2. 久々戸遺跡 Ⅳ区K８- １号平坦面 北→。

写真3. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区N26-12号平坦面。

写真4. 久々戸遺跡 Ⅳ区K10- ３号平坦面。

写真5. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区N20- １号平坦面 南→。

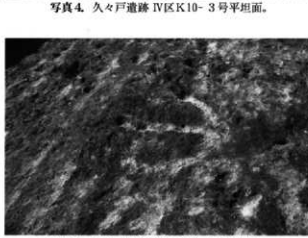


写真6. 久々戸遺跡 Ⅳ区K10- １号平坦面。

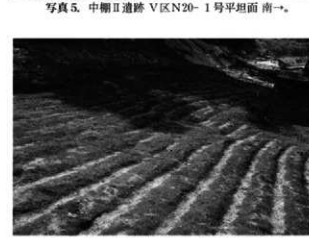


写真7. 久々戸遺跡 Ⅲ区K13- ３号平坦面 北東→。

写真1. 久々戸遺跡 Ⅲ区10号ヤックラ 北東→。

写真2. 久々戸遺跡 同 北西→。

写真3. 久々戸遺跡 Ⅳ区1・24号ヤックラ 東→。

不要な礫を片付けた場所である「ヤックラ」は、畑の内側に築かれたものもある。石垣状に丁寧に積まれた内部に小礫を片付けていた作業の様子までが偲ばれる（写真1・2）。想像を逞しくすれば、礫間の空隙が目立ち開墾から時間経過が少なくして天明泥流に被災したと思われるものもみられた。久々戸遺跡3号ヤックラのように40mにも及ぶと考えられるものもある。また、ヤックラに伴い出土した遺物などから、畑開墾の年代観を導き出す可能性は次の課題といえるかもしれない。

写真4. 久々戸遺跡 Ⅳ区1号ヤックラの礫(As-A軽石が載る)。

写真5. 久々戸遺跡 Ⅳ区17号ヤックラ キセル出土状況（久-152、153）。

写真6. 久々戸遺跡 Ⅲ区3号ヤックラ調査風景 北→。

写真図版９　4. ヤックラ

写真１．中棚Ⅱ遺跡 Ⅲ区現況ヤックラ断面３－３′ 南西→。

写真２．中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区現況ヤックラ断面７－７′ 南西→。

発掘調査前の現況地形にもヤックラがみられた（写真１・２）。中棚Ⅱ遺跡周辺では昭和10年に大きな山津波の災害記録が残されている。写真１・２のヤックラはその後に築かれたものと考えられる。このヤックラの下位面には、土砂層、さらに天明泥流堆積物の下から泥流畑、さらに安永九年（1780）に比定される畑跡がみつかった。

写真３～５は、泥流畑中に築かれた久々戸遺跡16号ヤックラである。南側の草津みち側には平坦面が確認された。周辺は調査範囲が制約されたために不明な点も多いが、草津みちから進入するための通路なども残されているものであろう。

写真３．久々戸遺跡 Ⅲ区16号ヤックラ 西→。

写真４．久々戸遺跡 同 断面 西→。

写真５．久々戸遺跡 Ⅲ区16号ヤックラとK13-２号平坦面 西→。

ヤックラは、畑の境界に築かれたものが多い。写真１のように２mの段差に築かれたものもある。他には、２つの巨礫の隙間に礫を布目積みで基壇状に築いたもの（写真２・３）もヤックラとした。なお、土坑状に明らかに不要な礫を充填させたものについてもヤックラと呼称した(写真４～６)。

写真1. 久々戸遺跡 Ⅰ区６号ヤックラ 東→。

写真2. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅲ区16号ヤックラ 近接。

写真3. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅲ区16号ヤックラ 南→。

写真4. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区下位面調査風景。

写真5. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区33(1′)号ヤックラ周辺。

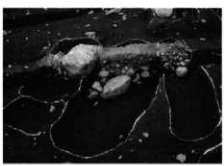


写真6. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区37(1′)号ヤックラ周辺 東→。

中棚Ⅱ遺跡の２面目を覆った安永九年の土砂崩れ層はⅢ区からⅤ区60号ヤックラの西側の範囲まで及んでいることが判った（写真７)。このヤックラの西半分付近までは、泥流畑に続く面とヤックラの上位に土砂が堆積していた。

写真7. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区60号ヤックラ 西→。

写真1. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区19(1′)号ヤックラ検出状況 北→。

写真2. 中棚Ⅱ遺跡 同 掘り方 北→。

泥流畑の地境に設けられた中棚Ⅱ遺跡Ⅳ区の19(1′)号ヤックラ（写真1・2）は、耕作土の下位に溝状に礫を埋め込んだものである。表土掘削中にも、この手法と同じように天明泥流被災後、掘り込んで不要な泥流中の礫を片付けたと考えられる列状に並んだ礫が確認できた（写真3・4）。つまり、泥流被災後も同じ場所に地境としたと読みとれる。19(1′)号ヤックラ付近で寛永通宝の出土があったが、畑開削の時期決定にまではいたらなかった。

写真3. 中棚Ⅱ遺跡 同 断面A-A′ 南→。

写真4. 中棚Ⅱ遺跡 同 近接。

写真5. 中棚Ⅱ遺跡 同 調査風景。

写真6. 中棚Ⅱ遺跡 同 断面B-B′ 近接 南→。

土盛りは耕作地の外に作られた土饅頭と考えられる。久々戸遺跡でみつかったこの遺構は、民俗例から亡骸を埋めたものの可能性が考えられる。土饅頭の上には鋳物製品の破片（鋤・鍬の刃の類か？）が載せられていた。この場所は、K16号畑と同一面であるにも関わらず、敢えて耕作地としなかったことにも注目しておきたい。単位畑の面積に関する考察はⅦ章４節(3)を参照されたい。

写真1. 久々戸遺跡 Ⅱ区土盛り 北→。

写真2. 久々戸遺跡 Ⅲ区草津みち。

旧現道の草津街道である「草津道」に対して、天明泥流堆積物下から検出された古道を「草津みち」と呼ぶことにした。草津みちは、調査区際の草津道（写真３）のおよそ30～50cm下位、と天明泥流堆積物の下からみつかった。このことから、天明泥流が当時の地形を踏襲し堆積することに着目できるようになった。最大幅2.4m、長さ80mにわたって確認された。東に向かって登っていく草津道は、この先吾妻川沿いの急崖に沿う山道へと切り替わり、横壁の集落へ至る。

写真3. 久々戸遺跡 Ⅲ区現道草津道 西→。

写真4. 久々戸遺跡 Ⅲ区草津みち 西→。

写真5. 久々戸遺跡 同。

写真1. 久々戸遺跡 Ⅲ区草津みち（左奥は建設中の長野原めがね橋）西→。

草津みちは調査区内では80mの長さで、2mには及ばない高低差である。途中長さ8m程の2号石垣や4号石垣、さらに8カ所の樹根痕が道脇に並んで確認された。As-A軽石が最大で3㎝の均等な堆積が確認され、中央はやや窪み当時の往来を偲ぶことができた。天明三年以前に土砂の流入と道の復旧があったことが、周辺の地形や20号ヤックラの土層断面の状況から想定される。

写真2. 久々戸遺跡 Ⅲ区3号ヤックラ 北西→。

写真3. 久々戸遺跡 Ⅲ区1・2号石垣と草津みち 北西→。

写真4. 久々戸遺跡 同 北→。

写真5. 久々戸遺跡 Ⅲ区草津みち樹根痕 東→。

写真1. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区14号石垣と現況石垣 南→。

写真2. 中棚Ⅱ遺跡 同 南→。

写真3. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区1号道 南→。

写真4. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅱ区2号石垣 南東→。

中棚Ⅱ遺跡1号道はⅡ区からⅤ区中央を段差沿いに北へ続く。調査区内のその上端と下端で、現況石垣が天明泥流被災後直上に築かれていたことを確認した。天明泥流がもとの地形を踏襲することもその理由の一つかもしれないが、災害復旧にはまず道の復旧が優先されたことを推定できる資料といえる。

写真5. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅱ区現況石垣 東→。

写真6. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅱ区2号石垣と直上位の現況石垣 東→。

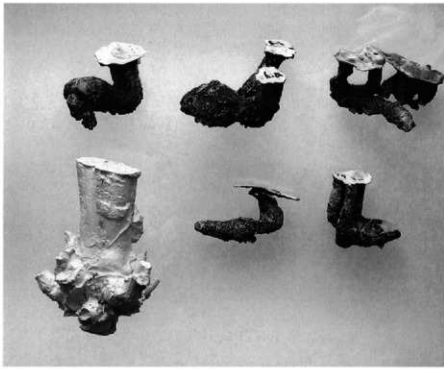


写真1. サトイモの石膏型。

写真2. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区N21号畑石膏取り作業風景。

直接的な作物痕跡であるイモと点播きされた豆科作物を確認することができた。同じ天明三年の発掘調査でも、As-A軽石が地表面を保護するように厚く残されてはいないこの地域の発掘調査では、極めて稀な例といえよう。

石膏型を取るには発電機と家庭用掃除機を用いて確認された空洞を確保した。その結果、イモの型取りに成功した。このことは、単に栽培された作物種がサトイモと特定できたのみではなく、サトイモの作柄の不良状況を示し、天明の飢饉を考察検証する資料価値が認められることが判明した。その試験栽培からみた所見をⅦ章4節(4)に記述した。写真1の左下は、試験栽培をおこない2002年8月5日に掘り起こした石川早生種の石膏型である。

写真3. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区N21号畑イモ畝 東→。

写真4. 中棚Ⅱ遺跡 同 西→。

発掘調査では、自然科学分析による栽培作物の特定もある程度までは可能であるが、中棚Ⅱ遺跡では、逆級化構造を呈する砂層が当時の耕作面を極めて良好な状態で保存していた。このため、N26号畑では、特定な部分のみを厳重に精査した。その結果、20cm間隔で1カ所に3粒ずつ点播きされた豆科作物と考えられる作物の痕跡を検出した。根成孔隙を確認するために軟X線写真撮影などをおこなったが、栽培されていた品種などの特定にはいたらなかった。

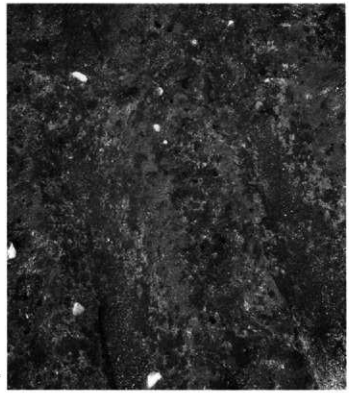


写真1. 中棚Ⅱ遺跡 ⅦⅧN26号畑株痕検出③。

写真2. 中棚Ⅱ遺跡 同 作業風景。

写真3. 中棚Ⅱ遺跡 同 断面 西→。

写真4. 中棚Ⅱ遺跡 同 近接。

写真1. 久々戸遺跡 Ⅲ区表土掘削。

写真2. 久々戸遺跡 周辺に散在する流れ岩。

遺構調査と同時に泥流流下に伴う事象を記録化した。遺跡内の天明泥流の流下と逆級化構造等についてはⅦ章に記述した。天明泥流堆積物の堆積厚は最大で２m程度であり、下流域の４mにも及ぶ天明泥流被災遺跡の状況とは異なる。吾妻渓谷までは、吾妻川の流下傾斜が大きい。それ故に吾妻渓谷までの天明泥流流下は特異な流下や堆積をしているのではないかという視点をもつ研究者もいる。天明泥流堆積物の比重は、子持村北牧地内で計測されたもので2.679の値などが求められている（利根川水系砂防工事事務所資料）が、写真１の礫は径が３m以上もある、黒斑山を構成していた「赤岩」と思われる礫である。石材店の協力で立方体に加工し、比重を求め、乾燥状態で1.622の値を得た。天明三年の災害を記録する史料には、本質岩塊以外に、発泡度の高く密度が小さい岩塊が吾妻川の遙か下流で泥流に浮かんでいた記述が残されている。このことからすれば、巨大な岩石が容易に移動することも理解できる。写真２は遺跡周辺に散在する天明泥流に運ばれてきた流れ岩で、周辺では径２m前後のものがいくつもみられる。

写真３は吾妻川右岸、横壁地区側の現在の岸壁である。写真左の崖上で泥流畑が確認された。

写真４は長野原めがね橋の橋脚建設予定地点の試掘断面である。現河岸面から２m下位に２mの厚さで天明泥流堆積物が確認された。天明泥流堆積物が利根川の河床の上昇をもたらしたために当時の水運に大きな被害をもたらしたり、その後の水害の際の破堤に大きな影響を及ぼした記録などが残されていることを頷かせるものといえよう。これらに関しては、Ⅶ章２節(3)に記述した。

写真５は標高610m地点で天明泥流堆積物の到達天端を記録した断面である。付近の吾妻川河床との比高は50mに及ぶ。

写真3. 横壁中村遺跡（屋上）北→。

写真4. 久々戸遺跡 橋脚建設予定地試掘。

写真5. 久々戸遺跡 Ⅴ区断面 東→。

写真1. 久々戸遺跡 Ⅲ区K16-3号畑 南東→。

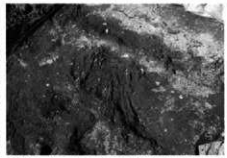


写真2. 久々戸遺跡 Ⅲ区K11号畑植物痕剥ぎ取り。

写真3. 下原遺跡 Ⅱ区泥流により移動した2号石垣 東→。

写真4. 下原遺跡 Ⅱ区泥流中の石による攪乱 南→。

写真5. 久々戸遺跡 Ⅶ区泥流中の石による攪乱。

調査区内を天明泥流がどの方向に流下したかを確認しておきたい（詳細はⅦ章2節に記述）。写真1では畝サクとAs-A軽石の歪んだ状況から礫の移動方向が確認できる。写真2は作物痕跡の倒伏方向、写真3は石垣が面で押圧されて移動した痕跡である。逆級化構造とは、土石堆積物において上位ほど砂礫の粗粒分が優勢な堆積構造をいう。中棚Ⅱ遺跡と下原遺跡の限られた地点で天明泥流堆積物の一部として確認された（口絵・写真6・8～10）。その部分といわゆる天明泥流堆積物の篩分けをおこなった結果、構成物の差は認められなかった。写真7は中棚Ⅱ遺跡Ⅴ区N26-10号畑畝断面1－1′の試料で篩分けをおこなった結果である。

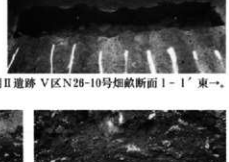


写真6. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区N26-10号畑畝断面1－1′ 東→。

写真7. 逆級化構造の砂層篩分け。

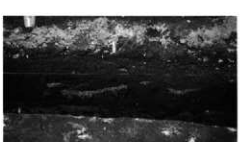


写真8. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅱ区考察A-A′ 断面 7～8m付近。

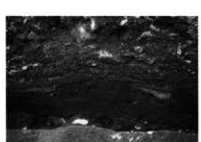


写真9. 中棚Ⅱ遺跡 同 10～11m付近。

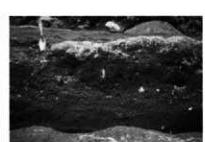


写真10. 中棚Ⅱ遺跡 同 13～14m付近。

写真1. 下原遺跡 Ⅱ区6(中)号焼土周辺 西→。

写真2. 下原遺跡 Ⅱ区2(中)号石列 南→。

下原遺跡では中世の生活面が発掘調査された。ピットと囲炉裏跡と思われる焼土などを含む。2次3次的に移動した土層から、面構成を明確にすることは難しかったが、南に石垣や柵列を配置した生活域が確認された。今後の周辺調査の進展を待って性格付けがなされる必要があろう。写真2は2(中)号石列で、63(中)号土坑とあわせて壇状に構成される9(中)号焼土などが特徴的である。

写真3. 下原遺跡 Ⅱ区2(中)号石列と9(中)号焼土 南→。

写真4. 下原遺跡 Ⅱ区6(中)号焼土完掘 南→。

写真1. 下原遺跡 Ⅱ区3(中)号焼土（古銭は下-108)。

写真2. 下原遺跡 同 完掘 南→。

写真1・2は3(中)号焼土で、その検出状況や焼土の状態から火葬跡である可能性が高いと考えられる。写真3は2カ所の筒状を呈するピットがみられる焼土痕跡である。
2(中)号柵列と4(中)号石垣は平行して東に延びていく可能性があり、今後の周辺調査によりその構成が明らかになるものと考えられる。

写真3. 下原遺跡 Ⅱ区7(中)号焼土。

写真4. 下原遺跡 Ⅱ区中世面（4(中)号石垣）南→。

写真5. 下原遺跡 Ⅱ区2(中)号柵列（4(中)号石垣礫除去後）東→。

写真6. 下原遺跡 Ⅱ区2(中)号石組 北西→。

写真7. 下原遺跡 Ⅱ区4(中)号石組 東→。

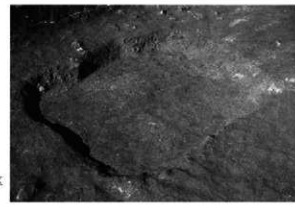


写真1. 下原遺跡 Ⅱ区6(中)号土坑 南東→。

写真2. 下原遺跡 同 断面A-A′ 南→。

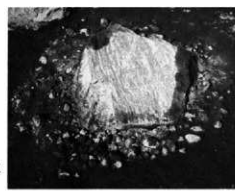


写真3. 下原遺跡 Ⅱ区41(中)号土坑 南東→。

写真4. 下原遺跡 Ⅱ区41(中)号土坑 南西→。

下原遺跡中世面の土坑は、概ね7種類に区分けされた。①南北に長軸を持ち長方形ないしは隅丸長方形を呈するもの。②概ね長軸が南北方向で楕円形や不定形を呈し、長楕円や円形を中心とする形態。③東西に長軸を持ち、長方形ないしは長楕円形のプランを呈するもので、掘立柱建物やピット群と位置的に重複し長方形の特徴的なプランが存在するもの。④2.5m×2.3mの規模の長方形プラン。⑤焼土遺構が上位に位置し、焼土遺構との関連が想起されるもの。⑥約200基のピット群よりやや規模が大きくピットと同様な性格と考えられるもの。⑦土坑墓と判断されるもの、である。

写真5. 下原遺跡 Ⅱ区29(中)号土坑 南→。

写真6. 下原遺跡 同 断面A-A′ 南→。

写真7. 下原遺跡 Ⅱ区31(中)号土坑人骨出土状況 東→。

写真1. 下原遺跡 Ⅱ－ｂ区９(1′)号石垣 東→。

写真2. 下原遺跡 Ⅱ－ｂ区１(1′)号井戸 南→。

Ⅱ－ｂ区では、層位的には天明泥流下面の下位で中世面の上位となるため、1′面帰属の遺構とした。段を構成する石垣や地下水脈を利用したと思われる井戸などが確認された。1′面としたが中世面に極近い時期のものと考えられる遺構群である。周辺調査によりその真相が判明してくるものと考えられる。

＊

調査地域は浅間山火口からみて北東20kmの位置で、浅間山の噴火活動の歴史が色濃く残されている地域といえる。これまで調査の中で日常的に確認され指標となったAs-A軽石の他に、補遺資料として川原湯勝沼遺跡で採取したAs-A灰に対比できる火山灰層の分析もおこなった。これは、新暦６月26日の「桑を洗いて蚕ニくれて」と史料で記録される降灰と考えられるもので、農事暦により考古学的に検証でき得る資料である（関 2002）。

また別に、遺構調査の中で、片蓋川のガリーなどで確認され、層位的にはAs-AとAs-Bの中位に位置するAs-A′層の検出の可能性を追求してきた。その結果、Ｓ５(1′)号畑A-A′（写真３～５）ではAs-A′の可能性が確認された。今後の資料の蓄積により、年代や時期決定の指標となる浅間山起源のテフラ検出となることを期待したい。

自然科学分析については、Ⅵ章に掲載。

写真3. 下原遺跡 Ⅱ区Ｓ５(1′)号畑と４(1′)号ヤックラ 南東→。

写真4. 下原遺跡 Ⅱ区４(1′)号ヤックラA-A′ 北→。

写真5. 下原遺跡 同近接。

写真6. 久々戸遺跡 Ⅳ区Ｋ８号畑火山灰サンプル（久20）東→。

写真1. 中棚Ⅱ遺跡 Ⅲ区遺物出土状況（中-13）北→。

写真2. 中棚Ⅱ遺跡 同 近接 北→。

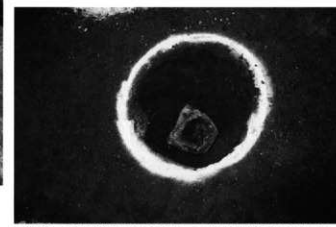


写真3. 下原遺跡 Ⅱ区104(中)号ピット遺物出土状況（下-121）東→。

久々戸遺跡では鑛長一分判金の出土が注目された（口絵）。中棚Ⅱ遺跡では、畑の２面目土砂崩れの年代観の確定をおこなえる遺物の出土があった（写真１・２）。写真３は104(中)号ピットからの遺物出土状況である。出土当時は、窪みの内部には煤の付着が確認された。写真４は畑内で確認された作物の痕跡で、遺存体自身は消失し鉄分の凝集がその痕跡を残している。写真は、幅10mmに満たない長さ30cm以上が確認できる長葉脈の作物痕跡と判断される。天明泥流の流下による倒伏方向を判別できるが、限られた地点でみつかっただけであった。平坦面の性格付けという視点でも着目しておく必要がある。
下原遺跡の中世面では、石臼や石鉢などの石製品が多く出土している。

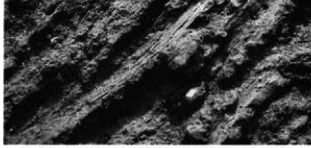


写真4. 久々戸遺跡 Ⅳ区Ｋ８-２号平坦面の作物痕跡。

写真5. 下原遺跡 Ⅱ区中世面遺物出土状況（下-145）南→。

写真1. 中棚Ⅱ遺跡 長野原町文化財調査委員会来跡(2000.7.19)。

写真2. 中棚Ⅱ遺跡 相模原市立博物館加藤隆志氏来跡 (2001.7.13)。

写真3. 中棚Ⅱ遺跡 国立歴史民俗博物館「ドキュメント災害史」展示火山部会視察(2001.11.17)。

写真4. 下原遺跡 須永薫子氏土壌採取作業(2000.12.18)。

現地見学会では、地元の方々から農事や民俗に関する貴重な情報を提供頂く機会にもなった。天明泥流下の発掘調査では、歴史学・民俗学・火山学・農学などとの、多くのクロスチェックが調査に成果をもたらした。これらの写真の他にも、各分野の研究者の方々から、見学に際しての指導を頂いたことが、天明三年浅間災害に関する多くの知見を得ることに繋がった。発掘調査により得られたデータが総合的に活用され、天明三年浅間災害解明の一助となることに期待したい。

写真5. 中棚Ⅱ遺跡 伊勢屋ふじこ氏来跡 (2001.12.3)。

写真6. 中棚Ⅱ遺跡 林地区現地見学会(2001.12.7)。

写真7. Peter J Matthews氏 (サトイモに関する教示) (2002.4.24)。

序

平成６年から始まった八ッ場ダム建設に伴う発掘調査では、群馬県の北西部を東に流れる吾妻川流域の歴史が掘り起こされています。

本報告書では、一部中世の遺構と天明三年の浅間山噴火で発生した火山泥流に埋もれた４つの遺跡を扱っています。

「天明の浅間押し」と呼ばれる江戸時代の火山災害は、その後の人々の生活に大きく関わり、この地域の風土を語る出来事として伝えられてきました。調査からわかる当時の景観は、天明三年七月八日の日付で人々の営みをそのまま保存しており、このことから多くの新知見を得ることができました。地元に伝わる伝承やその地に眠る先代の人々の姿をよみがえらせることを通して、地域に対する愛着や誇りをもたらす素材を提供したといえます。

３万㎡に及ぶ調査面積の畑地景観を分析し、江戸時代の農業史を伝える資料や遺物などの情報を抽出することができました。火山学や歴史史料などとの援用により、浅間火山としての天明噴火の詳細な経過復元もなされました。勿論それは噴火に直面しながらも、心豊かに生き抜こうとした当時の人たちの姿が景観に映し出されていたことに拠ります。発掘調査の中では、今まで知られていなかった天明泥流流下のメカニズムを解く資料を集積することにも取り組んでいます。多くの学問との間に存在する隙間を埋めつつ、学術研究に提供できる資料も沢山得られたと考えます。

「天災は忘れたころにやってくる」といったのは物理学者の寺田寅彦でした。我々が自然と共存し、いざというときに災害から身を守り豊かに生きていこうとするまず第一歩は、「史実を知ること」ともいえるでしょう。この意味からも、災害を直視し得られた成果を多くの方々にご覧頂き、豊かな将来の発想に役立てて頂くことを期待いたしております。

発掘調査着手から報告書刊行にいたるまで、調査委託者である国土交通省八ッ場ダム工事事務所はもとより、群馬県教育委員会及び長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者の皆様には終始ご指導を頂き、ここに感謝申し上げます。220年前の罹災者への供養と我々の輝く未来を創造するための題材として史実が扱われることを願って序といたします。

平成15年８月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小野宇三郎

例　言

1．本書は八ッ場ダム建設工事に伴い事前調査された久々戸遺跡、中棚Ⅱ遺跡、下原遺跡、横壁中村遺跡の発掘調査報告書である。このうち横壁中村遺跡では、天明泥流堆積物下の遺構についてのみ本書の中で扱い、その他の部分については後の刊行予定である。また、久々戸遺跡については、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第240集で報告の長野原久々戸遺跡と調査区が隣接する同一遺跡であるが、平成14年３月遺跡名変更がおこなわれたため遺跡名称が異なることを留意されたい。

2．各遺跡の呼称及び所在地は以下の通りである。

久々戸遺跡（くぐどいせき）　吾妻郡長野原町大字長野原字久々戸地内
中棚Ⅱ遺跡（なかだな２いせき）　吾妻郡長野原町大字林字中棚地内
下原遺跡（しもばらいせき）　吾妻郡長野原町大字林字下原地内
横壁中村遺跡（よこかべなかむらいせき）　吾妻郡長野原町大字横壁字観音堂地内

3．本発掘調査は、群馬県教育委員会の調整に基づき財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省（平成13年１月まで建設省）より委託を受けて実施した。

4．発掘調査期間は、平成８年４月１日から平成14年３月31日である。この間、断続的に調査が行われた。本報告で扱う遺跡調査区、発掘調査組織及び遺跡毎の調査期間等は次の通りである。

	平成８年 1996年	平成９年 1997年	平成10年 1998年	平成11年 1999年	平成12年 2000年	平成13年 2001年
久々戸遺跡		Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ区	Ⅶ・Ⅷ区	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区		
中棚Ⅱ遺跡				Ⅰ・Ⅱ区	Ⅱ・Ⅲ区	Ⅳ・Ⅴ区
下原遺跡					Ⅰ・Ⅱ区	Ⅱ-b区
横壁中村遺跡	試掘	(30区)	沢区	試掘		

事務担当

平成８年度　理事長　小寺弘之　常務理事　菅野清　事務局長　原田恒弘　管理部長　蜂巣実　調査研究第１部長　赤山容造　総務課長　小澤淳　調査研究第２課長　岸田治男　総務係長　笠原秀樹　國定均　総務　須田朋子　吉田有光　柳岡良宏　宮崎忠司　大澤友治　事務補助　吉田恵子　内山佳子　羽鳥京子　星野美智子　若田誠　佐藤美佐子　本間久美子　松井美智代　菅原淑子　山口陽子　今井もと子　松下次男　浅見宣記　山本正司　吉田茂

平成９年度　理事長　小寺弘之　常務理事　菅野清　事務局長　原田恒弘　副事務局長（調査研究第１部長）赤山容造　管理部長　渡辺健　総務課長　小澤淳　調査研究第２課長　能登健　総務係長　笠原秀樹　井上剛　総務　須田朋子　吉田有光　柳岡良宏　岡嶋伸昌　宮崎忠司　大澤友治　事務補助　吉田恵子　内山佳子　若田誠　佐藤美佐子　本間久美子　北原かおり　安藤友美　狩野真子　羽鳥京子　星野美智子　今井もと子　並木綾子　松下次男　浅見宣記　吉田茂

平成10年度　理事長　小寺弘之　菅野清　常務理事兼事務局長（調査研究第１部長）赤山容造　管理部長　渡辺健　総務課長　坂本敏夫　調査研究第２課長　能登健　総務係長　笠原秀樹　小山建夫　総務　須田朋子　吉田有光　柳岡良宏　岡嶋伸昌　宮崎忠司　大澤友治　事務補助　吉田恵子　内山佳子　若田誠　佐藤美佐子　本間久美子　北原かおり　狩野真子　本地友美　並木綾子　松下次男　浅見宣記　吉田茂

平成11年度　理事長　菅野清　小野宇三郎　常務理事兼事務局長　赤山容造　管理部長　住谷進　調査研究

第１部長　神保侑史　総務課長　坂本敏夫　調査研究第１課長　能登健　総務係長　笠原秀樹　小山建夫　総務　須田朋子　吉田有光　柳岡良宏　岡嶋伸昌　片岡徳雄　大澤友治　事務補助　吉田恵子　並木綾子　内山佳子　若田誠　佐藤美佐子　本間久美子　北原かおり　狩野真子　今井もと子　松下次男　浅見宜記　吉田茂

平成12年度　理事長　小野宇三郎　常務理事兼事務局長　赤山容造　管理部長　住谷進　調査研究２部長　能登健　総務課長　坂本敏夫　調査研究第５課長　飯島義雄　総務係長　笠原秀樹　小山建夫　総務　須田朋子　吉田有光　柳岡良宏　森下弘美　片岡徳雄　大澤友治　事務補助　吉田恵子　並木綾子　内山佳子　若田誠　佐藤美佐子　本間久美子　北原かおり　狩野真子　今井もと子　松下次男　吉田茂　蘇原正義

平成13年度　理事長　小野宇三郎　常務理事　吉田豊　赤山容造　管理部長　住谷進　調査研究部長　能登健　総務課長　大島信夫　調査研究第４課長　下城正　総務係長　笠原秀樹　小山建夫　総務　須田朋子　吉田有光　森下弘美　片岡徳雄　事務補助　吉田恵子　並木綾子　内山佳子　若田誠　佐藤美佐子　本間久美子　北原かおり　狩野真子　今井もと子　松下次男　吉田茂　蘇原正義

発掘担当及び調査期間

久々戸遺跡

Ⅰ・Ⅱ区	諸田康成　関俊明		平成９年５月19日～平成９年７月３日
Ⅵ区	山口逸弘　諸田康成　石田真		平成９年10月17日～平成９年10月22日
Ⅶ区	山口逸弘　石田真　田中雄		平成10年７月13日～平成10年８月31日
Ⅷ区	山口逸弘　児島良昌		平成10年11月16日～平成10年12月８日
Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区	関俊明　石田真		平成11年６月28日～平成11年10月26日

中棚Ⅱ遺跡

Ⅰ・Ⅱ区	関俊明　石田真		平成11年12月15日～平成11年12月27日
Ⅱ・Ⅲ区	関俊明　石田真　久保学		平成12年４月17日～平成12年７月27日
Ⅳ・Ⅴ区	関俊明　石田真　久保学		平成13年４月９日～平成13年12月20日

下原遺跡

Ⅰ・Ⅱ区	関俊明　石田真　久保学		平成12年９月１日～平成12年12月25日
Ⅱ-b区	関俊明　石田真　久保学		平成13年８月17日～平成13年10月16日

横壁中村遺跡

試掘	綿貫邦男　榛沢健二　関俊明		平成８年12月９日
(30区	小野和之　榛沢健二　松原孝志		平成９年６月)
沢区	小野和之　児島良昌　関俊明　松原孝志		平成10年６月29日～平成10年８月７日
試掘	藤巻幸男　関俊明　松原孝志　久保学　石田真		平成11年12月１日

５．整理事業は、群馬県教育委員会の調整に基づき財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省より委託を受けて実施した。

６．整理期間は、平成14年４月１日から平成15年３月31日である。

７．整理組織は、次の通りである。

事務担当　理事長　小野宇三郎　常務理事　吉田豊　事業局長　神保侑史　八ッ場ダム調査事務所長　水田稔　調査研究部長　津金澤吉茂　庶務係長　野口富太郎　主事　矢嶋知恵子

整理担当　関俊明

整理補助　鈴木幹子　水出園江　唐沢美紀　吉澤新二郎

８．報告書作成関係者

編　集　関俊明

本文執筆　赤沼英男　飯森康広　石田真　伊勢屋ふじこ　神津弘良　坂寄富士夫　須永薫子　津金澤吉茂　仲野泰裕　楢崎修一郎　株式会社古環境研究所　パリノ・サーヴェイ株式会社　関俊明

遺物観察　縄文土器　藤巻幸男　縄文石器　下城正　弥生土器　石田真　近世陶磁　仲野泰裕　中世石製品　津金澤吉茂　銭貨を除く中世金属製品　杉山秀宏　それ以外の遺物観察は、大西雅広、坂井隆、清水豊、下城正、津金澤吉茂、徳江秀夫、富田孝彦、中沢悟、深澤敦仁、水田稔各氏をはじめとする諸氏にご教示頂き、関俊明がおこなった。

遺構写真　発掘調査担当者

遺物写真　佐藤元彦　関俊明

保存処理　関邦一　土橋まり子　横倉知子　小材浩一　湯浅美枝子

9．発掘調査及び整理事業での依託関係

遺構測量及び空中写真　株式会社測研　技研測量設計株式会社

石材同定（石臼）　飯島静男

自然科学分析　株式会社古環境研究所　パリノ・サーヴェイ株式会社

遺構図及び遺物実測図作成編集　株式会社測研

10．出土遺物・図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

11．本遺跡の発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関にご教示・ご指導を頂いた（敬称略）。また、発掘調査にあたっては、前橋市・沼田市・渋川市・利根郡・吾妻郡内在住の多くの方々に作業員としてご協力を頂いた。記して感謝申し上げる。

赤沼英男　浅見弘　新井房夫　新井雅之　荒牧重雄　安藤稀環子　飯島義雄　伊勢屋ふじこ　市村敬司　井上公夫　大塚昌彦　神津弘良　加藤隆志　金子宥巻　唐澤定市　菊池貴広　北原糸子　河野通明　小菅尉多　三枝友治　坂井秀弥　坂寄富士夫　佐藤公　篠原徹　篠原よね　清水豊　下山覚　白石光男　須永薫子　勢藤力　寺田匡宏　富田孝彦　中島直樹　仲野泰裕　西澤正晴　西谷大　西田健彦　野口茂男　能登健　巾隆之　早川智也　早川由紀夫　Peter J Matthews　福田貴之　福田徹　福田義治　松島榮治　丸山浩治　丸山直美　水出一三　宮崎常治　森田秀策　矢口裕之

岩島麻保存会　群馬県教育委員会文化課　群馬県土木部特定ダム対策課　群馬県八ッ場ダム水源地域対策事務所　国土交通省関東地方建設局八ッ場ダム工事事務所　国土交通省利根川水系砂防工事事務所　長野原町教育委員会

凡　例

1．平成14年３月、長野原町の遺跡名称の変更がなされた。その結果、本書の中で該当するのは、「長野原久々戸遺跡」→「**久々戸遺跡**」、「林中棚Ⅱ遺跡」→「**中棚Ⅱ遺跡**」、「林下原Ⅱ遺跡」→「**下原遺跡**」である。従って、本書以前の文献で使用された名称は、本書で扱う新遺跡名称に一致する。他の遺跡等については、既刊行の八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第287集）及び第２集（同第303集）を参照頂きたい。

2．遺構図及び遺物図には該当箇所に縮率を掲載しているので、それぞれの図中で確認頂きたい。なお、横壁中村遺跡を除く遺構全体図（縮率は一部を除いて1:250）を第２分冊で添付している。本文中では、一部に平面図を掲載したが、それ以外は別刷付図に遺構平面図を掲載するものとした。断面図の位置についても同様である。畑遺構には、平坦面・境木痕など畑に付随する遺構を含むものとして記述掲載した。

3．本書の図版で使用した網掛けの摘要は、本文中で示した。

4．畑及び平坦面の面積計測は、縮率1:100及び1:40の平面図を原則として用い、CADソフトを用いて計測した。特に山間地の斜面畑であることを考慮し、傾斜角度から斜面積も算出した。算出にあたって畑の範囲は一部推定により確定したものが含まれる。

5．遺物観察表では、全体を計測できず推定によるものは、（　）で表した。土器・陶磁類の色調は、農林水産技術会議事務局監修／(財)日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1991年度版を用いた。

6．表中等で「Ⅶ．２を参照」と記した部分については、目次の章.節に対応する。

7．自然科学分析番号と試料採取地点とは「**中１**(ゴシック体)」(＝中棚Ⅱ遺跡分析番号１）のように通し番号を整理段階で付し、本文中・分析報告・実測図等で統一して用いた。

8．各遺跡の出土遺物には、「中-１(ハイフン明朝体)」(＝中棚Ⅱ遺跡遺物番号１）のように改めて共通番号を付し、本文中・実測図・写真等で統一して用いた。

9．本書の中で「泥流畑」は天明三年浅間泥流堆積物に埋まった畑遺構を指す呼称とした。特に畑遺構と天明浅間災害に関しての詳細な検証を試みた。Ⅰ章４節にその視点等を記述したので参照頂きたい。

10．本書で用いる土層断面図には、As-A軽石（天明三年浅間山噴火に伴う降下テフラ）を極力忠実に図中で表示するよう努めたが、純層で１～３㎝という厚さであるため、その意図を反映し尽くすことができなかった。考慮の上確認頂きたい。また、各断面図中には原則として、As-A軽石については土層注記していないので併せて留意頂きたい。

11．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年４月改正前の旧日本測地系を用いている。

12．断面図、立面図等の平面ポイントは、本文中に平面図が掲載されていないものについては、別刷付図中に示してある。畑の畝断面図では、補助的に△や▼を用いて畝の単位を示した。

13. 本書の中では、史料に基づく旧暦を漢数字で、新暦に換算したものを算用数字で記している。

14. 遺構名称は原則的に調査時の遺構名称を用いている。しかしながら、畑遺構については、調査時には検出順に遺構名称を付与しており、多くの調査では本書の中で扱う「単位畑」の視点は定まるにはいたっていなかった。本書の中で扱う畑は、単位畑の集合によって構成される。また、単位畑には多くの場合、平坦面が検出され、単位畑に所在する平坦面として名称を付すことにした。各遺跡の畑の計測表の通り、畑及び平坦面の番号を付け直している。以下に示す遺構番号置き換え一覧表と併せて照合頂きたい。なお、整理作業終了後も、遺物の注記、実測原図内の個別名称、本文分析報告等では旧名称のままである。

15. 遺構番号表示と置き換えについて

本書の中では、遺跡毎に通し番号で遺構番号を付した。その際、発掘調査時の遺構番号を優先した。同一遺構であるが、年度や調査区が跨ぐことで複数の遺構名をもつものや整理段階で新たな番号に置き換える必要が生じたものなどがある。遺構番号の置き換えと遺構表示の原則を示しておくので遺構番号置き換え一覧表とともに参照頂きたい。畑や平坦面については、前述の通りである。

①畑遺構と平坦面（一部区画）については、遺跡名の頭文字のアルファベットを付して遺跡を区別する。

例：**Ｎ３号畑**　→中棚Ⅱ遺跡３号畑

②遺構名称は、天明泥流堆積物直下以外の遺構面では、それぞれの帰属する遺構面を略号で（　）内に付し、遺構の帰属面を遺構名で把握できるようにした。下原遺跡の中世面で検出されたピットのみ(中)の略号を省く場合がある。

例：**N17(2)号畑**　→中棚Ⅱ遺跡17号畑でそれは第２面の遺構である。

82号石垣＝As-A下面の遺構　／**82(2)号石垣**＝２面目の遺構

→２面目からAs-A下面まで継続していた遺構の場合で、(　) の有無が異なり面を越えて同数字の遺構が存在することもある。

③必要に応じて、図中などで遺構番号を略す場合がある。

例：**２ヤックラ**　→２号ヤックラ　　**ｐ２**　→２(中)号ピット

④遺構内に所属する遺構名は「-」で結んだ遺構番号を充てた。

例：**Ｋ４－１号平坦面**　→久々戸遺跡４号畑内の１号平坦面

16. 出土銭貨の観察には、『日本貨幣カタログ』（日本貨幣共同組合 1998）を用いた。

遺構番号置き換え一覧表

久々戸遺跡

掲載遺構名		発掘調査時遺構名
畑		
K１畑		なし
K２畑		なし
K３畑		なし
K４畑		なし
K５畑		16畑
K６畑	K６－１畑	20畑
	K６－２畑	20畑
K７畑		17畑
K８畑	K８－１畑	22畑
	K８－２畑	22畑
	K８－３畑	22畑
	K８－４畑	19畑
	K８－５畑	22畑
K９畑		２畑
K10畑	K10－１畑	21畑
	K10－２畑	21畑
	K10－３畑	21畑
K11畑	K11－１畑	１畑
	K11－２畑	１畑
	K11－３畑	１畑
K12畑		５畑
K13畑	K13－１畑	４畑=14畑
	K13－２畑	４畑=15畑
	K13－３畑	４畑
K14畑	K14－１畑	３畑＝12畑
	K14－２畑	３畑＝12畑
	K14－３畑	３畑＝12畑
	K14－４畑	３畑＝12畑
K15畑	K15－１畑	８畑＝11畑
	K15－２畑	８畑＝11畑
	K15－３畑	８畑＝11畑
	K15－４畑	８畑＝11畑
K16畑	K16－１畑	６畑
	K16－２畑	10畑
	K16－３畑	７畑
K17畑		13畑
K18畑		９畑

掲載遺構名	発掘調査時遺構名
平組面	
K６－１平	20畑１平
K６－２平	20畑２平
K７－１平	17畑１平
K８－１平	22畑１平
K８－２平	22畑２平
K８－３平	22畑３平
K８－４平	19畑１平
K10－１平	21畑１平
K10－２平	21畑２平
K10－３平	21畑３平
K11－１平	１畑３平
K11－２平	１畑２平
K11－３平	１畑１平
K12－１平	５畑１平
K13－１平	４畑１平
K13－２平	15畑１平
K13－３平	４畑２平
K14－１平	３畑３平
K14－２平	12畑１平
K14－３平	12畑２平
K14－４平	12畑４平
K15－１平	11畑１平
K15－２平	11畑２平
K15－３平	11畑３平
K15－４平	８畑２平
K16－１平	６畑１平
K16－２平	10畑１平
K16－３平	７畑１平
K18－１平	９畑１平
ヤックラ	
27ヤックラ	１集石

中棚Ⅱ遺跡

掲載遺構名		発掘調査時遺構名
畑		
N１畑		７畑
N２畑		６畑
N３畑		11畑
N４畑		12畑
N５畑		８畑
N６畑		９畑
N７畑		17畑
N８畑		13畑
N９畑		14畑
N10畑		10畑
N11畑		１畑
N12畑		15畑
N13畑		16畑
N14畑		38畑
N15畑		37畑
N16畑	N16－１畑	36畑
	N16－２畑	35畑
N17畑		39畑
N18畑		40畑
N19畑		41畑=47畑
N20畑		42畑=43畑=44畑
N21畑	N21－１畑	50畑
	N21－２畑	49畑
	N21－３畑	53畑
	N21－４畑	51畑
	N21－５畑	48畑
	N21－６畑	68畑
N22畑	N22－１畑	45畑
	N22－２畑	45畑
N23畑		46畑
N24畑		37畑=66畑
N25畑		２畑=52畑
N26畑	N26－１畑	54畑
	N26－２畑	61畑
	N26－３畑	64畑
	N26－４畑	65畑
	N26－５畑	69畑=４畑
	N26－６畑	３畑
	N26－７畑	55畑
	N26－８畑	60畑
	N26－９畑	62畑
	N26－10畑	63畑=５畑
	N26－11畑	58畑
	N26－12畑	58畑
	N26－13畑	59畑
N27畑	N27－１畑	21畑
	N27－２畑	21畑
	N27－３畑	22畑
N28畑		23畑=24畑
N29畑	N29－１畑	25畑
	N29－２畑	25畑
N30畑	N30－１畑	26畑
	N30－２畑	27畑
N31畑	N31－１畑	29畑
	N31－２畑	28畑
N32畑		30畑
N33畑		31畑
N34畑	N34－１畑	32畑
	N34－２畑	32畑
N35畑		33畑
N36畑		34畑
N37（２）畑		20（２）畑
N38（２）畑		67（２）畑

掲載遺構名	発掘調査時遺構名
平組面	
N２－１区画	６畑１区画
N２－１(2)区画	６畑１(2)区画
N12－１区画	15畑１区画
N15－１平	37畑１平
N16－１平	36畑１平
N16－２平	35畑１平
N18－１平	40畑１平
N20－１平	43畑１平
N21－２平	49畑１平
N21－４平	51畑１平
N21－５平	48畑１平
N22－１平	45畑１平
N22－２平	45畑２平
N23－１平	46畑１平
N24－１平	66畑１平
N26－１平	54畑１平
N26－２平	61畑１平
N26－３平	64畑１平
N26－４平	65畑１平
N26－５平	69畑１平
N26－７平	55畑１平
N26－８平	60畑１平
N26－９平	62畑１平
N26－10平	63畑１平
N26－11平	56畑１平
N26－12平	58畑１平
N26－13平	59畑１平
N27－１平	21畑１平
N29－１平	25畑１平
N30－１平	26畑１平
N30－２平	27畑１平
N31－１平	29畑１平
N33－１平	31畑１平
N34－１平	32畑１平
N34－２平	32畑２平
N37(2)－1平	20(2)畑1平
石塚	
３石塚	3石塚=5石塚（一部）
３(１′)石塚	19(１′)石塚
21石塚	９ａ石塚
22石塚	９ｂ石塚
23石塚	９ｃ石塚
24(１′)石塚	９ｄ石塚
25(１′)石塚	９ｅ石塚
区画	
１区画	５石塚

下原遺跡

掲載遺構名		発掘調査時遺構名
畑		
Ｓ１畑	Ｓ１－１畑	１畑
	Ｓ１－２畑	１畑
	Ｓ１－３畑	１畑
	Ｓ１－４畑	１畑
	Ｓ１－５畑	１畑
	Ｓ１－６畑	１畑
Ｓ２畑	Ｓ２－１畑	２畑
	Ｓ２－２畑	２畑
Ｓ３畑		３畑
Ｓ４畑		４畑
S5(1′)畑		5（1′）畑

掲載遺構名	発掘調査時遺構名
平組面	
Ｓ１－１平	１畑１平
Ｓ１－２平	１畑３平
Ｓ１－３平	１畑５平
Ｓ１－４平	１畑２平
Ｓ１－５平	１畑４平
Ｓ１－６平	１畑６平
Ｓ２－１平	２畑１平
Ｓ２－２平	２畑２平
ヤックラ	
２ヤックラ	なし
掘立柱建物・柵列	
本文を参照	
石塚	
５石塚	５石塚=６石塚
覆屋構造物	
覆屋構造物	１住居
土坑	
19(中)土坑	12(中)ピット

横壁中村遺跡

畑	
Ｙ１畑	なし
石列	
１石列	30区１石列

本文目次

巻頭写真／写真による調査記録／序／例言凡例／目次
Ⅰ発掘された遺跡 ―1
1．調査にいたる経緯と経過 …1
(1)調査にいたる経緯…1
(2)4遺跡の調査経過…1
(3)整理作業の経過…3
2．調査の方法 …4
3．遺跡の環境 …4
(1)遺跡の位置と周辺の地形…4
(2)周辺の歴史的環境…9
4．泥流畑の発掘調査の方法…11
(1)災害考古学の視点と天明浅間災害 …11
(2)天明三年の噴火と軽石の降下期日 …13
(3)畑調査の視点 …14
Ⅱ久々戸遺跡の調査記録 ―19
1．調査の概要…19
2．久々戸遺跡の基本土層…19
3．泥流面の遺構と遺物…24
(1)畑の全体構造 …24
(2)畑 …26
(3)ヤックラ …45
(4)草津みち …50
(5)土盛り …53
(6)石垣 …54
(7)出土遺物 …57
4．小結…66
Ⅲ中棚Ⅱ遺跡の調査記録 ―69
1．調査の概要…69
2．中棚Ⅱ遺跡の基本土層…73
3．泥流面の遺構と遺物…73
(1)畑の全体構造 …73
(2)畑 …78
(3)ヤックラ…106
(4)道…112
(5)石垣…114
(6)区画…122
(7)墓…123
(8)イモの石膏型…124
(9)出土遺物…129
4．泥流面以外の遺構と遺物 …139
(1)畑の全体構造…139
(2)畑…139
(3)ヤックラ…141
(4)石垣…148
(5)道…150
(6)出土遺物…151
5．小結…152
Ⅳ下原遺跡の調査記録 ―159
1．調査の概要 …159
2．下原遺跡の基本土層 …160
3．泥流面の遺構と遺物 …162
(1)畑の全体構造…162
(2)畑…162
(3)ヤックラ…168
(4)覆屋構造物…169
(5)石垣…170
(6)出土遺物…173
4．泥流面以外の遺構と遺物 …181
(1)焼土…181
(2)ピット…184
(3)土坑…191
(4)石組…201
(5)石列…203
(6)ヤックラ…205
(7)井戸…207
(8)石垣…208
(9)溝…211
(10)畑 …213
(11)柵列 …214
(12)出土遺物 …215
5．小結 …230
Ⅴ横壁中村遺跡の調査記録 ―231
1．調査の概要 …231
2．横壁中村遺跡の基本土層 …232
3．泥流面の遺構 …233
(1)畑の全体構造…233
4．小結 …234
Ⅵ分析結果報告 ―235
1．自然科学分析の着眼点と今後の課題 …235
2．群馬県、久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡の自然科学分析 …241
3．中棚Ⅱ遺跡自然科学分析 …290
4．久々戸遺跡出土一分金のEPMAによる分析結果 …299
5．浅間山噴火(1783年)に伴う泥流により埋没した畑遺構土壌の理化学的特徴および地力評価 …301
Ⅶ考察1 －天明三年の浅間泥流と畑について－ ―308
1．ハッ場地区の天明泥流の流下 …308
(1)両岸の地形と天明泥流…308
(2)泥流到達範囲…309
2．遺跡内の天明泥流の流下 …321
(1)流下方向の痕跡…328
(2)逆級化構造の砂層の記録…337
(3)遺跡調査から見た天明泥流堆積物…342
3．泥流の流動と逆級化構造の成因 …347
4．天明三年泥流畑の耕作状況 …356
(1)畑の耕作状況…357
(2)平坦面の用途・分類…362
(3)泥流畑の開墾形態と「ツカ」…366
(4)サトイモの石膏型取り…372
(5)泥流畑の構成と諸課題…378
5．天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流下の畑跡出土の近世陶磁 …381
Ⅶ資料編 －天明三年に関する新史料拾遺－ ―385
1．道しるべにみる草津道 …385
2．浅間荒れによるハッ場地区の被害 －長野原町と林村の文書から－ …394
3．天明泥流に関する補完史料 －草津道と横壁の泥流被害－ …399
Ⅸ考察2 －天明泥流面以外の遺構と遺物について－ ―408
1．下原遺跡の中世掘立柱建物跡と焼土・墓・土坑をめぐる景観 －イロリを伴うとみられる掘立柱建物跡を前提として－…408
2．下原遺跡出土の石臼を中心に …421
3．中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡出土人骨 …427
報告書抄録

挿図・表・写真・写真図版・付図目次

第１分冊《本文編》

写真

写真Ⅱ.１　久々戸遺跡　K11号畑　作物痕跡土層剥ぎ取り ……34
写真Ⅱ.２　久々戸遺跡　K11号畑　土層断面剥ぎ取り ……34
写真Ⅱ.３　久々戸遺跡　草津みち土壌硬度測定作業風景……51
写真Ⅲ.１　中椎Ⅱ遺跡　N26号畑株痕検出①地点 ……94

挿図

図Ⅰ.１　グリッド設定模式図……5･6
図Ⅰ.２　調査遺跡位置図……8
図Ⅰ.３　調査遺跡周辺図……9
図Ⅰ.４　天明泥流流下図……13
図Ⅰ.５　天明三年浅間山噴火降下物の記録地点……13
図Ⅰ.６　植付間隔（株間と「畝幅」）……16
図Ⅰ.７　サケタテナワと真似木……16
図Ⅰ.８　畑の計測方法……17
図Ⅱ.１　久々戸遺跡グリッド設定図……20
図Ⅱ.２　久々戸遺跡位置図……21･22
図Ⅱ.３　久々戸遺跡基本土層図……23
図Ⅱ.４　久々戸遺跡　K２･３号畑……26
図Ⅱ.５　久々戸遺跡　K５号畑……27
図Ⅱ.６　久々戸遺跡　K６号畑及びK６･K８号畑１～６号堆木…27
図Ⅱ.７　久々戸遺跡　K７号畑及びK７･K８号畑１･２号堆木…28
図Ⅱ.８　久々戸遺跡　K８･K10号畑１～８号堆木及び堆木の根痕、
K８･２号平坦面の作物痕跡……29
図Ⅱ.９　久々戸遺跡　K８号畑……30
図Ⅱ.10　久々戸遺跡　K８号畑平面図……31
図Ⅱ.11　久々戸遺跡　K10号畑……32
図Ⅱ.12　久々戸遺跡　K11号畑・作物痕跡及びK11･K14号畑１･２
号堆木……33
図Ⅱ.13　久々戸遺跡　K11号畑平面図……34
図Ⅱ.14　久々戸遺跡　K12号畑……35
図Ⅱ.15　久々戸遺跡　K13･３号畑及びK13･K14号畑１～４号堆木
……35
図Ⅱ.16　久々戸遺跡　K13畑･K13･１号畑株痕及び鹿柵一分判
金出土地点……36
図Ⅱ.17　久々戸遺跡　K13･14号畑平面図……37･38
図Ⅱ.18　久々戸遺跡　K14号畑……39
図Ⅱ.19　久々戸遺跡　K15号畑……40
図Ⅱ.20　久々戸遺跡　K16号畑……41
図Ⅱ.21　久々戸遺跡　K16号畑及び耕具痕……42
図Ⅱ.22　久々戸遺跡　K17号畑及び鹿ふみ痕……43
図Ⅱ.23　久々戸遺跡　K18号畑……44
図Ⅱ.24　久々戸遺跡　１～Ⅳ区　１～５段位置図 ……45
図Ⅱ.25　久々戸遺跡　３･11･16･17･19号サックラ ……46
図Ⅱ.26　久々戸遺跡　１･２･６･12･17･23･34号サックラ…47･48
図Ⅱ.27　久々戸遺跡　７･15号サックラ……49
図Ⅱ.28　久々戸遺跡　26号サックラ……49
図Ⅱ.29　久々戸遺跡　10･13号サックラ……49
図Ⅱ.30　久々戸遺跡　草津みち指標硬度測定地点位置図 ……51
図Ⅱ.31　久々戸遺跡　草津みち……52
図Ⅱ.32　久々戸遺跡　土橋り……53
図Ⅱ.33　久々戸遺跡　１･２号石垣……54
図Ⅱ.34　久々戸遺跡　１～４号石垣……55･56
図Ⅱ.35　久々戸遺跡　鹿長一分判金出土地点……57
図Ⅱ.36　久々戸遺跡　出土遺物（１）……58
図Ⅱ.37　久々戸遺跡　出土遺物（２）……59
図Ⅱ.38　久々戸遺跡　出土遺物（３）……60
図Ⅱ.39　久々戸遺跡　「鹿芯村のもがり」……67
図Ⅲ.１　中椎Ⅱ遺跡グリッド設定図……70
図Ⅲ.２　中椎Ⅱ遺跡位置図……71･72
図Ⅲ.３　中椎Ⅱ遺跡基本土層図……74
図Ⅲ.４　中椎Ⅱ遺跡　Ⅱ･Ⅴ区　１～５段位置図……75
図Ⅲ.５　中椎Ⅱ遺跡　Ⅴ･Ⅳ区複乱煙跡……76
図Ⅲ.６　中椎Ⅱ遺跡　N１～３号畑……78
図Ⅲ.７　中椎Ⅱ遺跡　N４号畑……79
図Ⅲ.８　中椎Ⅱ遺跡　N５～８号畑……80
図Ⅲ.９　中椎Ⅱ遺跡　N９号畑……80
図Ⅲ.10　中椎Ⅱ遺跡　N10号畑……81
図Ⅲ.11　中椎Ⅱ遺跡　N11号畑（１）……81
図Ⅲ.12　中椎Ⅱ遺跡　N11号畑（２）……82
図Ⅲ.13　中椎Ⅱ遺跡　N12･13号畑……83
図Ⅲ.14　中椎Ⅱ遺跡　N14号畑……84
図Ⅲ.15　中椎Ⅱ遺跡　N15号畑……84
図Ⅲ.16　中椎Ⅱ遺跡　N14～18号畑平面図……84
図Ⅲ.17　中椎Ⅱ遺跡　N16号畑……85
図Ⅲ.18　中椎Ⅱ遺跡　N14号畑A･A'･N16－２号畑B･B'……85
図Ⅲ.19　中椎Ⅱ遺跡　N17～19号畑……86
図Ⅲ.20　中椎Ⅱ遺跡　N20号畑……87
図Ⅲ.21　中椎Ⅱ遺跡　N22～24号畑……88
図Ⅲ.22　中椎Ⅱ遺跡　N21号畑平面図及び石菖整取り地点位置図…89
図Ⅲ.23　中椎Ⅱ遺跡　N21号畑（１）……90
図Ⅲ.24　中椎Ⅱ遺跡　N21号畑（２）……91
図Ⅲ.25　中椎Ⅱ遺跡　N25号畑……92
図Ⅲ.26　中椎Ⅱ遺跡　N26号畑株痕検出①地点……93
図Ⅲ.27　中椎Ⅱ遺跡　N26号畑（１）……94
図Ⅲ.28　中椎Ⅱ遺跡　N26号畑（２）……95
図Ⅲ.29　中椎Ⅱ遺跡　N26号畑（３）……96
図Ⅲ.30　中椎Ⅱ遺跡　N26号畑（４）……97･98
図Ⅲ.31　中椎Ⅱ遺跡　N26号畑平面図……99
図Ⅲ.32　中椎Ⅱ遺跡　N27号畑……100
図Ⅲ.33　中椎Ⅱ遺跡　N29･30号畑平面図……101
図Ⅲ.34　中椎Ⅱ遺跡　N29号畑……102
図Ⅲ.35　中椎Ⅱ遺跡　N30号畑……102
図Ⅲ.36　中椎Ⅱ遺跡　N31号畑……103
図Ⅲ.37　中椎Ⅱ遺跡　N32～36号畑平面図……104
図Ⅲ.38　中椎Ⅱ遺跡　N32～36号畑……105
図Ⅲ.39　中椎Ⅱ遺跡　５･８･10･11号サックラ……107
図Ⅲ.40　中椎Ⅱ遺跡　16号サックラ……108
図Ⅲ.41　中椎Ⅱ遺跡　17･18号サックラ……109
図Ⅲ.42　中椎Ⅱ遺跡　19（１'）号サックラ……110
図Ⅲ.43　中椎Ⅱ遺跡　22号サックラ……111
図Ⅲ.44　中椎Ⅱ遺跡　43～46号サックラ……112
図Ⅲ.45　中椎Ⅱ遺跡　３･４号道……113
図Ⅲ.46　中椎Ⅱ遺跡　２～４号石垣・現況石垣……115
図Ⅲ.47　中椎Ⅱ遺跡　１～４･３（１'）号石垣……116
図Ⅲ.48　中椎Ⅱ遺跡　８･11～13号石垣……117･118
図Ⅲ.49　中椎Ⅱ遺跡　14･16･17･19･21～23号石垣……119･120
図Ⅲ.50　中椎Ⅱ遺跡　１号区画……122
図Ⅲ.51　中椎Ⅱ遺跡　１･２号墓……123
図Ⅲ.52　中椎Ⅱ遺跡　代石菖型（１）（１：３）……125
図Ⅲ.53　中椎Ⅱ遺跡　代石菖型（２）（１：３）……126
図Ⅲ.54　中椎Ⅱ遺跡　19（１'）号サックラ遺物出土地点位置図…129
図Ⅲ.55　中椎Ⅱ遺跡　出土遺物（１）……130
図Ⅲ.56　中椎Ⅱ遺跡　出土遺物（２）……131
図Ⅲ.57　中椎Ⅱ遺跡　X37（２）号畑……139
図Ⅲ.58　中椎Ⅱ遺跡　X37（２）･38（２）号畑平面図……140
図Ⅲ.59　中椎Ⅱ遺跡　X38（２）号畑……141
図Ⅲ.60　中椎Ⅱ遺跡　５（２）･６（２）･10（２）･12（２）･15（２）号サックラ
……142
図Ⅲ.61　中椎Ⅱ遺跡　20（１'）～29（１'）･33（１'）～50（１'）･53（１'）
～56（１'）･59（１'）号サックラ……143･144
図Ⅲ.62　中椎Ⅱ遺跡　30（２）･31（２）･51（２）･52（２）･57（２）･58
（２）号サックラ……145
図Ⅲ.63　中椎Ⅱ遺跡　60（２）･67（１'）～69（１'）号サックラ…146
図Ⅲ.64　中椎Ⅱ遺跡　６（２）･７（２）･11（２）･20（２）号石垣 148
図Ⅲ.65　中椎Ⅱ遺跡　10（１'）･24（１'）･25（１'）号石垣 ……149
図Ⅲ.66　中椎Ⅱ遺跡　６（２）･９（２）号道平面図 ……150
図Ⅲ.67　中椎Ⅱ遺跡　掘流面以外の出土遺物……151
図Ⅲ.68　中椎Ⅱ遺跡　Ⅴ区現況地図……153
図Ⅲ.69　中椎Ⅱ遺跡　地積図……155
図Ⅲ.70　中椎Ⅱ遺跡　Ⅱ･Ⅴ区遺構全体図 ……157
図Ⅳ.１　下原遺跡位置図……159
図Ⅳ.２　下原遺跡グリッド設定図……160
図Ⅳ.３　下原遺跡基本土層図……161
図Ⅳ.４　下原遺跡　S１号畑現木痕及び２･３（中）号石垣……162
図Ⅳ.５　下原遺跡　S１号畑平面図……163
図Ⅳ.６　下原遺跡　S１号畑（１）……164
図Ⅳ.７　下原遺跡　S１号畑（２）……165
図Ⅳ.８　下原遺跡　S２･４号畑……166
図Ⅳ.９　下原遺跡　S３号畑a･a'……167
図Ⅳ.10　下原遺跡　１･３号サックラ……168
図Ⅳ.11　下原遺跡　覆屋構造物……169
図Ⅳ.12　下原遺跡　１号石垣……170
写真Ⅳ.１　下原遺跡　出土炭化種実……216
写真Ⅴ.１　横壁中Ⅱ遺跡　30区１号石列 ……234
写真Ⅴ.２　横壁中Ⅱ遺跡　Y１号畑……234

図IV. 13　下原遺跡　2号石垣……171・172
図IV. 14　下原遺跡　出土遺物……172
図IV. 15　下原遺跡　3（中）・4（中）・9（中）号焼土……181
図IV. 16　下原遺跡　5（中）～8（中）・15（中）号焼土　……182
図IV. 17　下原遺跡　10（中）・12（中）～14（中）・16（中）～18（中）号焼土……183
図IV. 18　下原遺跡　1（中）～78（中）号ピット……185・188
図IV. 19　下原遺跡　79（中）～158（中）号ピット……187・188
図IV. 20　下原遺跡　1（中）～7（中）・159（中）～204（中）号ピット……189・190
図IV. 21　下原遺跡　22（中）・26（中）・29（中）・35（中）・37（中）・40（中）・46（中）・47（中）・51（中）・52（中）・54（中）号土坑　……193・194
図IV. 22　下原遺跡　1（中）～5（中）・12（中）・18（中）・20（中）・30（中）・32（中）・38（中）号土坑……195
図IV. 23　下原遺跡　39（中）・41（中）・44（中）・60（中）・65（中）号土坑……196
図IV. 24　下原遺跡　23（中）・48（中）・49（中）号土坑……196
図IV. 25　下原遺跡　50（中）・53（中）・55（中）・61（中）・64（中）・67（中）号土坑　…197
図IV. 26　下原遺跡　6（中）・63（中）・66（中）号土坑……198
図IV. 27　下原遺跡　7（中）～11（中）・13（中）・14（中）号土坑…198
図IV. 28　下原遺跡　15（中）・17（中）・19（中）・21（中）・25（中）・31（中）・42（中）・43（中）・45（中）・57（中）・59（中）・62（中）号土坑　……199
図IV. 29　下原遺跡　21（中）・31（中）・56（中）号土坑……200
図IV. 30　下原遺跡　1（中）～3（中）号石組……201
図IV. 31　下原遺跡　4（中）・5（中）号石組……202
図IV. 32　下原遺跡　1（中）～4（中）号石列……203
図IV. 33　下原遺跡　5（1′）号石列　……204
図IV. 34　下原遺跡　1（1′）・2（1′）号ヤックラ　……205
図IV. 35　下原遺跡　4（1′）・5（中）・6（1′）・7（1′）号ヤックラ…206
図IV. 36　下原遺跡　1（1′）号井戸……207
図IV. 37　下原遺跡　3（中）・5（中）・7（中）・8（1′）～10（1′）号石組…209・210
図IV. 38　下原遺跡　1（1′）・2（1′）号溝……211
図IV. 39　下原遺跡　3（中）～5（中）号溝……212
図IV. 40　下原遺跡　5 S（1′）号畑　……213
図IV. 41　下原遺跡　1（中）・2（中）号畑列　……214
図IV. 42　下原遺跡　古銭出土地点位置図……215
図IV. 43　下原遺跡　茶臼出土地点位置図……216
図IV. 44　下原遺跡　泥流面以外の出土遺物（1）……217
図IV. 45　下原遺跡　泥流面以外の出土遺物（2）……218
図IV. 46　下原遺跡　泥流面以外の出土遺物（3）……219
図IV. 47　下原遺跡　泥流面以外の出土遺物（4）……220
図IV. 48　下原遺跡　泥流面以外の出土遺物（5）……221
図IV. 49　下原遺跡　泥流面以外の出土遺物（6）……222
図IV. 50　下原遺跡　泥流面以外の出土遺物（7）……223
図IV. 51　中種の野・林城　……230
図V. 1　横梁中村遺跡位置図……231
図V. 2　横梁中村遺跡グリッド設定図……232
図V. 3　横梁中村遺跡　30Eトレンチ配置図及び断面図……232
図V. 4　横梁中村遺跡　Y1号墳　……233
図V. 5　横梁中村遺跡　30E 1号石列……234

表

表I. 1　長野原町分の村高の変遷　……10
表I. 2　天明三年浅間災害の発掘調査に関する知見と経緯　…12
表II. 1　久々戸遺跡　畑計測値等一覧表　……25
表II. 2　久々戸遺跡　畝幅計測値等一覧表……25
表II. 3　久々戸遺跡　ヤックラ計測値等一覧表……50
表II. 4　久々戸遺跡　草津みち指標硬度一覧表……51
表II. 5　久々戸遺跡　石垣計測値等一覧表……54
表II. 6　久々戸遺跡　出土遺物観察表　……63
表III. 1　中棚II遺跡　畑計測値等一覧表　……77
表III. 2　中棚II遺跡　畝幅計測値一覧表　……77
表III. 3　中棚II遺跡　ヤックラ計測値等一覧表……106
表III. 4　中棚II遺跡　石垣計測値等一覧表……114
表III. 5　中棚II遺跡　墓計測値等一覧表……123
表III. 6　中棚II遺跡　代石青銅製鏡表（泥流面以外を含む）…124
表III. 7　中棚II遺跡　出土遺物観察表（泥流面以外を含む）…132
表III. 8　中棚II遺跡　泥流面以外ヤックラ計測値等一覧表…147
表III. 9　中棚II遺跡　泥流面以外石垣計測値等一覧表……150
表III. 10　中棚II遺跡　II区2面目出土特定遺物一覧表……151
表III. 11　利根川子流水害年表抜粋……152
表IV. 1　下原遺跡　畝幅計測値一覧表……164
表IV. 2　下原遺跡　畑計測値等一覧表……165
表IV. 3　下原遺跡　ヤックラ計測値等一覧表……168
表IV. 4　下原遺跡　石垣計測値等一覧表……170
表IV. 5　下原遺跡　出土遺物観察表（泥流面以外を含む）……173
表IV. 6　下原遺跡　泥流面以外焼土計測値等一覧表……184
表IV. 7　下原遺跡　ピット切り合い断面一覧表……184
表IV. 8　下原遺跡　泥流面以外土坑計測値等一覧表……191
表IV. 9　下原遺跡　泥流面以外石垣計測値等一覧表……202
表IV. 10　下原遺跡　泥流面以外石列計測値等一覧表……204
表IV. 11　下原遺跡　泥流面以外ヤックラ計測値等一覧表……206
表IV. 12　下原遺跡　泥流面以外井戸計測値等一覧表……207
表IV. 13　下原遺跡　泥流面以外石溝計測値等一覧表……208
表IV. 14　下原遺跡　泥流面以外畑計測値等一覧表……212
表IV. 15　下原遺跡　1（中）号畑列計測値等一覧表……214
表IV. 16　下原遺跡　2（中）号畑列計測値等一覧表……214
表IV. 17　下原遺跡　内耳土器片計測表……215

写真図版

写真図版1　写真1. 中棚II遺跡　V区N22号畑 西→.
写真2. 久々戸遺跡　I区 西→.
写真3. 中棚II遺跡　IV区N30-1 号畑 西→.
写真4. 中棚II遺跡　VK11号石垣とその上段の畑 南→.
写真図版2　写真1. 中棚II遺跡　V区N29号畑 西→.
写真2. 中棚II遺跡　同 南→.
写真3. 中棚II遺跡　II区N29-6 号畑 東→.
写真4. 中棚II遺跡　同　隠ふみ上跡去状況 西→.
写真5. 中棚II遺跡　IV区N27-3 号畑に残された掘乱痕跡.
写真6. 中棚II遺跡　IV区調査風景.
写真図版3　写真1. 中棚II遺跡　II区天明泥床下全景.
写真2. 中棚II遺跡　II区N10号畑 東→.
写真3. 中棚II遺跡　同 南→.
写真4. 中棚II遺跡　II区N37(2)-1 号平坦面 北東→.
写真5. 中棚II遺跡　同 畝断面a-a′ 東→.
写真6. 中棚II遺跡　II区N37(2)号畑 北東→.
写真図版4　写真1. 久々戸遺跡　II区草津みちからの降口 北→.
写真2. 久々戸遺跡　IVK8・4 号畑.
写真3. 久々戸遺跡　IVK8・6 号畑の地境 北東→.
写真4. 久々戸遺跡　IVK7 号畑踏み分け道 北→.
写真5. 下原遺跡　II区復屋構造物 南→.
写真6. 久々戸遺跡　IVK5 5 号畑 南→.
写真7. 久々戸遺跡　IVK6・8-10 号畑 1 号境木板 南→.
写真8. 久々戸遺跡　IVK 同 境木板の空洞と桑の根.
写真図版5　写真1. 久々戸遺跡　I BK 9 号畑a-a′畝石地積状況.
写真2. 久々戸遺跡　II区K13 号畑畝断面c-c′ 北→.
写真3. 久々戸遺跡　II区K18-3 号畑 南→.
写真4. 久々戸遺跡　I BK11 号畑畝断面b-b′ 南→.
写真5. 久々戸遺跡　I K 同畑頂土痕跡.
写真6. 中棚II遺跡　VIX N21-2 号畑断面a-d 東→.
写真7. 中棚II遺跡　VIX 同畑 南西→.
写真図版6　写真1. 久々戸遺跡　IVK K10号畑西辺 南→.
写真2. 中棚II遺跡　VIX N21-2・4 号畑地境 西→.
写真3. 久々戸遺跡　II区K18-2・3 号畑地境 南→.
写真4. 久々戸遺跡　IVK K5・6 号畑地境 東→.
写真5. 久々戸遺跡　IVK K 8-3・4 号畑地境 南東→.
写真図版7　写真1. 久々戸遺跡　IVK K10-3 号平坦面.
写真2. 久々戸遺跡　IVK K 8-1 号平坦面 北→.
写真3. 中棚II遺跡　VIX N26-12 号平坦面.
写真4. 久々戸遺跡　IVK K10-3 号平坦面.
写真5. 中棚II遺跡　VIX N26-1 号平坦面 南→.
写真6. 久々戸遺跡　IVK K10-1 号平坦面.
写真7. 久々戸遺跡　II区K13-3 号平坦面 北東→.
写真図版8　写真1. 久々戸遺跡　II区10号ヤックラ 北東→.
写真2. 久々戸遺跡　同 北西→.
写真3. 久々戸遺跡　IV区 1・24号ヤックラ 東→.
写真4. 久々戸遺跡　IV区 1号ヤックラの縁(As-A軽石が載る).
写真5. 久々戸遺跡　IV区キセル出土状況(久-152, 153).
写真6. 久々戸遺跡　II区 3号ヤックラ調査風景 北→.
写真図版9　写真1. 中棚II遺跡　II区現況ヤックラ断面3-3′ 南西→.
写真2. 中棚II遺跡　V区現況ヤックラ断面7-7′ 南西→.
写真3. 久々戸遺跡　II区16号ヤックラ 西→.
写真4. 久々戸遺跡　同 断面 西→.
写真5. 久々戸遺跡　II区16号ヤックラとK13-2 号平坦面.
写真図版10　写真1. 久々戸遺跡　I区6 号ヤックラ 東→.
写真2. 中棚II遺跡　II区16号ヤックラ 若干.
写真3. 中棚II遺跡　II区16号ヤックラ 南→.
写真4. 中棚II遺跡　IVK 下位面調査風景.
写真5. 中棚II遺跡　IVK33(1′)号ヤックラ周辺.
写真6. 中棚II遺跡　IVK37(1′)号ヤックラ周辺 東→.
写真7. 中棚II遺跡　V K60号ヤックラ.
写真図版11　写真1. 中棚II遺跡　IVK19(1′)号ヤックラ横出状況 北→.
写真2. 中棚II遺跡　同 掘り方 北→.
写真3. 中棚II遺跡　同 断面A-A′ 南→.
写真4. 中棚II遺跡　同 近接.
写真5. 中棚II遺跡　同 調査風景.
写真6. 中棚II遺跡　同 断面B-B′ 近接 南→.
写真図版12　写真1. 久々戸遺跡　II区土盛り 北→.
写真2. 久々戸遺跡　II区草津みち.
写真3. 久々戸遺跡　II区現道草津道 西→.

写真4.久々戸遺跡 Ⅲ区草津みち 西→.
写真5.久々戸遺跡 同.

写真図版13写真1.久々戸遺跡 Ⅲ区草津みち 西→.
写真2.久々戸遺跡 Ⅲ区3号ヤックラ 北西→.
写真3.久々戸遺跡 Ⅲ区1・2号石垣と草津みち 北西→.
写真4.久々戸遺跡 同 北→.
写真5.久々戸遺跡 Ⅲ区草津みち側柵堀 東→.

写真図版14写真1.中畑Ⅱ遺跡 Ⅴ区14号石垣と現況石垣 南→.
写真2.中畑Ⅱ遺跡 同 南→.
写真3.中畑Ⅱ遺跡 Ⅴ区1号道 南→.
写真4.中畑Ⅱ遺跡 Ⅱ区2号石垣 南東→.
写真5.中畑Ⅱ遺跡 Ⅱ区現況石垣 東→.
写真6.中畑Ⅱ遺跡 Ⅱ区2号石垣と直上位の現況石垣 東→.

写真図版15写真1.サトイモの石溝堀.
写真2.中畑Ⅱ遺跡 ⅤⅩN21号畑石寄取り作業風景.
写真3.中畑Ⅱ遺跡 ⅤⅩN21号畑化欲 東→.
写真4.中畑Ⅱ遺跡 同 西→.

写真図版16写真1.中畑Ⅱ遺跡 ⅤⅩN26号畑検出痕検出①.
写真2.中畑Ⅱ遺跡 同 作業風景.
写真3.中畑Ⅱ遺跡 同 断面 西→.
写真4.中畑Ⅱ遺跡 同 近接.

写真図版17写真1.久々戸遺跡 Ⅲ区表土剥出.
写真2.久々戸遺跡 周辺に散在する流れ岩.
写真3.横堅中村遺跡(崖上) 北→.
写真4.久々戸遺跡 横堅遺跡予定地試掘.
写真5.久々戸遺跡 Ⅴ区断面 東→.

写真図版18写真1.久々戸遺跡 ⅢⅩK16-3号畑 南東→.
写真2.久々戸遺跡 ⅢⅩK11号畑植物痕剥ぎ取り.
写真3.下原遺跡 Ⅱ区泥流により移動した2号石垣 東→.
写真4.下原遺跡 Ⅱ区泥流中の石による現況.南→.
写真5.久々戸遺跡 Ⅵ区泥流中の石による現況.
写真6.中畑Ⅱ遺跡 ⅤⅩN26-10号畑紙断面1-1' 東→.
写真7.泥破化構造の砂層部分け.
写真8.中畑Ⅱ遺跡 Ⅱ区考察1-A' 断面 7～8m付近.
写真9.中畑Ⅱ遺跡 同 10～11m付近.
写真10.中畑Ⅱ遺跡 同 13～14m付近.

写真図版19写真1.下原遺跡 Ⅱ区6(中)号焼土周辺 西→.
写真2.下原遺跡 Ⅱ区2(中)号石列 南→.
写真3.下原遺跡 Ⅱ区2(中)号石列と9(中)号焼土 南→.
写真4.下原遺跡 Ⅱ区6(中)号焼土完掘 南→.

写真図版20写真1.下原遺跡 Ⅱ区3(中)号焼土(古墳は下-108).
写真2.下原遺跡 同 完掘 南→.
写真3.下原遺跡 Ⅱ区7(中)号焼土.
写真4.下原遺跡 Ⅱ区中世面(4(中)号石垣).
写真5.下原遺跡 Ⅱ区2(中)号爆列(4(中)号石垣撤除去後).
写真6.下原遺跡 Ⅱ区2(中)号石垣 北西→.
写真7.下原遺跡 Ⅱ区4(中)号石垣 東→.

写真図版21写真1.下原遺跡 Ⅱ区6(中)号土坑 南東→.
写真2.下原遺跡 同 断面A-A' 南→.
写真3.下原遺跡 Ⅱ区41(中)号土坑 南東→.
写真4.下原遺跡 Ⅱ区41(中)号土坑 南西→.
写真5.下原遺跡 Ⅱ区29(中)号土坑 南→.
写真6.下原遺跡 同 断面A-A' 南→.
写真7.下原遺跡 Ⅱ区31(中)号土坑人骨出土状況 東→.

写真図版22写真1.下原遺跡 Ⅱ-b区9(1')号石垣 東→.
写真2.下原遺跡 Ⅱ-b区1(1')号井戸 南→.
写真3.下原遺跡 Ⅱ区5(1')号横土4(1')号ヤックラ.A' 北→.
写真4.下原遺跡 Ⅱ区4(1')号ヤックラ.A' 北→.
写真5.下原遺跡 同 近接.
写真6.久々戸遺跡 ⅣⅩK8号畑々山灰サンプル(久20).

写真図版23写真1.中畑Ⅱ遺跡 Ⅲ区遺物出土状況(中-13) 北→.
写真2.中畑Ⅱ遺跡 同 近接 北→.
写真3.下原遺跡 Ⅱ区104(中)号ピット遺物(下-121).
写真4.久々戸遺跡 ⅣⅩK8-2号平坦面の作物痕跡.
写真5.下原遺跡 Ⅱ区中世面遺物出土状況(下-145) 南→.

写真図版24写真1.中畑Ⅱ遺跡 長野県埋文化財調査委員会来跡.
写真2.中畑Ⅱ遺跡 相模原市立博物館加藤義志氏来跡.
写真3.中畑Ⅱ遺跡 国立歴史民俗博物館 火山部会視察.
写真4.下原遺跡 東水素子氏土壌採取作業(2000.12.18).
写真5.中畑Ⅱ遺跡 伊勢見ふじこ氏来跡(2001.12.3).
写真6.中畑Ⅱ遺跡 林地区現地見学会(2001.12.7).
写真7.Peter J Matthews氏(サトイモに関する教示).

写真図版25 久々戸遺跡出土遺物(3)
写真図版26 久々戸遺跡出土遺物(1)
写真図版27 久々戸遺跡出土遺物(2)
写真図版28 中畑Ⅱ遺跡(石行青型)(1)
写真図版29 中畑Ⅱ遺跡(石行青型)(2)
写真図版30 中畑Ⅱ遺跡出土遺物(1)-泥流面以外出土遺物
写真図版31 中畑Ⅱ遺跡出土遺物(1)-泥流面以外出土遺物
写真図版32 中畑Ⅱ遺跡出土遺物(2)
写真図版33 下原遺跡出土遺物-泥流面以外出土遺物(1)
写真図版34 下原遺跡出土遺物
写真図版35 下原遺跡泥流面以外出土遺物(2)
写真図版36 下原遺跡泥流面以外出土遺物(3)
写真図版37 下原遺跡泥流面以外出土遺物(4)
写真図版38 下原遺跡泥流面以外出土遺物(5)
写真図版39 下原遺跡泥流面以外出土遺物(6)
写真図版40 下原遺跡泥流面以外出土遺物(7)

第2分冊《別刷付図》

付図

a.久々戸遺跡 泥流面(1～Ⅷ区) (29地区)
b.中畑Ⅱ遺跡 第2面(Ⅲ・Ⅴ区) (28地区)
c.中畑Ⅱ遺跡 泥流面(1・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ区) (28地区)
d.中畑Ⅱ遺跡 泥流面/1'面・1"面・第2面(Ⅳ区)(27・28地区)
e.下原遺跡 泥流面(Ⅱ区) (27地区)
f.下原遺跡 1'面(Ⅱ・Ⅱ-b区) (27地区)
g.下原遺跡 中世面(Ⅱ区・概念図) (27地区)
h.下原遺跡 中世面(Ⅱ区) (27地区)

写真図版

写真図版41久々戸遺跡 泥流面(1～Ⅷ区)
写真1.久々戸遺跡 1区東→(1997.6).
写真2.久々戸遺跡 Ⅱ区北西→(1997.6).
写真3.久々戸遺跡 Ⅲ区西→(1999.7).
写真4.久々戸遺跡 Ⅳ区南東→(1999.10).
写真5.久々戸遺跡 Ⅴ区北西→(1999.10).
写真6.久々戸遺跡 Ⅵ区南西→(1997.10).
写真7.久々戸遺跡 Ⅶ区上が区(1998.8).
写真8.久々戸遺跡 Ⅷ区北→(1998.11).

写真図版42中畑Ⅱ遺跡 第2面(Ⅲ・Ⅴ区)
写真1.中畑Ⅱ遺跡 ⅢⅩN37(2)号畑南→(2000.7).
写真2.中畑Ⅱ遺跡 ⅢⅩN37(2)-1号平坦面北東→.
写真3.中畑Ⅱ遺跡 Ⅲ区調査風景.
写真4.中畑Ⅱ遺跡 ⅢⅩN35(2)号畑北東→(2001.12).

写真図版43中畑Ⅱ遺跡 泥流面(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ区)
写真1.中畑Ⅱ遺跡 ⅠⅩN11号畑北東→(1999.12).
写真2.中畑Ⅱ遺跡 Ⅱ区南東→(2000.4).
写真3.中畑Ⅱ遺跡 Ⅱ区南東→(2000.6).
写真4.中畑Ⅱ遺跡 Ⅴ区南→(2001.11).
写真5.中畑Ⅱ遺跡 Ⅴ区北西→.
写真6.中畑Ⅱ遺跡 Ⅲ区調査風景北東→.
写真7.中畑Ⅱ遺跡 Ⅴ区現況地形(2001.10).
写真8.中畑Ⅱ遺跡 Ⅴ区全景(2001.12).

写真図版44中畑Ⅱ遺跡 泥流面/1'面・1"面・第2面(ⅣⅤ区)
写真1.中畑Ⅱ遺跡 ⅣⅤ南→(2001.7).
写真2.中畑Ⅱ遺跡ⅣⅤ区東→.
写真3.中畑Ⅱ遺跡ⅣⅤ区(1'～2面)南西→(2001.9).
写真4.中畑Ⅱ遺跡ⅣⅤ区南西→.
写真5.中畑Ⅱ遺跡ⅣⅤ調査風景.
写真6.中畑Ⅱ遺跡ⅣⅤ空洞風景.

写真図版45下原遺跡 泥流面(Ⅱ区)
写真1.下原遺跡Ⅱ区(2000.10).
写真2.下原遺跡Ⅱ区.
写真3.下原遺跡付近を東流する得意川(2001.2).
写真4.下原遺跡 同.
写真5.下原遺跡Ⅱ区調査風景.
写真6.下原遺跡 同.
写真7.下原遺跡Ⅰ区北→(2000.9).

写真図版46下原遺跡 1'面(Ⅱ・Ⅱ-b区)
写真1.下原遺跡Ⅱ-b区南→(2001.10).
写真2.下原遺跡Ⅱ-b区1(1')号井戸.
写真3.下原遺跡Ⅱ区調査風景.
写真4.下原遺跡Ⅱ区1'面南→(2000.11).

写真図版47下原遺跡 中世面(Ⅱ区)
写真1.下原遺跡Ⅱ区中世面南→(2000.12).
写真2.下原遺跡Ⅱ区3(中)号溝東→.
写真3.下原遺跡Ⅱ区調査風景.
写真4.下原遺跡Ⅱ区調査風景(2000.12).
写真5.下原遺跡Ⅱ区4(中)号石垣周辺西→.
写真6.下原遺跡Ⅱ区中世面ピット群.

Ⅰ発掘された遺跡

1. 調査にいたる経緯と経過

(1) 調査にいたる経緯

八ッ場ダム建設は、建設省（現国土交通省）による事業として進められている。昭和24年利根川改定改修計画の一環として調査が着手され、「八ッ場ダム建設に関わる基本協定」及び「用地補償調査に関する協定」の締結（平成４年７月）により本格的に工事が着工されることになった。洪水調節・都市用水・水道用水・工業用水・首都圏への都市用水の供給などを目的とした多目的ダムで、天端標高586m、堤高131m、湛水面積3.04㎢、総貯水容量1.07億㎥、右岸は群馬県吾妻郡長野原町大字川原湯字金花山、左岸は同大字川原畑字八ッ場に建設が予定されている。この事業により５地区340世帯、1000人を超す人々が故郷を失うことになる。

昭和61年７月にはダム湖関連地域の文化財総合調査計画の策定があり、これに基づいて長野原町教育委員会による「民俗」「石造文化財」「自然」に関する調査がおこなわれ、埋蔵文化財の詳細分布調査が平行して実施されてきた。この結果、確認された埋蔵文化財包蔵地は183、他に石造物などの指定文化財や名勝・天然記念物などを含めた文化財総数は199を数える。このうち、ダム建設に関係する５地区（川原畑・川原湯・横壁・林・長野原）の埋蔵文化財包蔵地は79であり、その調査対象面積は約57万㎡であった。(その後、平成14年３月に長野原町教育委員会により遺跡の追加と遺跡名の変更等がなされ、合計89遺跡、対象面積は146万㎡となった。)

また下流の吾妻町松谷、三島地区などでも、ダム建設の関連工事が進展しつつある。この地域は群馬県教育委員会の『群馬県遺跡地図』(昭和48年)で、遺跡の存在が確認されている。

このような状況を踏まえ、八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協議がおこなわれ、平成６年３月18日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」が締結され、八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定した。実施計画に示された調査組織は群馬県教育委員会で、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。この協定を踏まえて、平成６年４月１日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、八ッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とする八ッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

平成11年４月１日には、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年４月以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制にいたっている。

この間、平成10年からは発掘調査と平行し整理事業が開始され、発掘調査は現在も継続中である。なお、「建設省」は平成13年１月６日より、「国土交通省」へ省名が変更となった。

(2) 4遺跡の調査経過

ダム建設に関連する工事に伴い発掘調査がおこなわれ、個々の工事工程や地上権設定等の調整により、同一遺跡でも調査は多年度にわたる。水没時に要調査など発掘調査工程上の困難もある。各遺跡の調査期間は例言を参照頂き、ここでは４遺跡個々の調査区の調査原因と経過を中心に記述する。

久々戸遺跡

各調査区の調査原因は、Ⅰ区：久々戸仮設道路建設工事、Ⅱ区:国道145号橋脚及び橋台建設工事、Ⅲ・Ⅳ区:尾坂橋取付道路建設工事及び長野原（久々戸）地区防災ダム工事用進入路建設工事、Ⅴ区：尾坂橋取付道路建設追加工事、Ⅵ区：鉄塔建設工事、Ⅶ・Ⅷ区：工事用進入路建設工事である。

Ⅰ発掘された遺跡

平成７年度県道長野原草津口停車場線道路（橋梁）建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査がおこなわれた長野原久々戸遺跡（既報告済、遺跡名称については例言の通り）は、Ⅰ～Ⅳ区の西側に隣接する調査区である。本書で扱うのは、ダム建設工事の関連事業として平成９年度～同11年度にかけて実施された第２～６次までの調査の部分である。第２次の調査ではⅠ・Ⅱ区を、第３次の調査はⅥ区を、第４次の調査はⅦ区を、第５次の調査はⅧ区を、第６次の調査はⅢ・Ⅳ・Ⅴ区をそれぞれ対象とした。いずれも県教育委員会文化財保護課の試掘の結果やこれまでの経緯から天明三年の浅間山噴火に伴う天明泥流堆積物下に江戸時代の文化層が存在する可能性が強いと判断された結果、発掘調査の必要が生じたものである。なお、Ⅱ区の東側の橋脚建設予定地内は発掘調査に伴い試掘をおこなった結果、遺構が確認されず試掘のみで終了した。また、Ⅲ区では過年度おこなわれた工事の残土処理の際に一部が大きく撹乱を受けていることが判明した。Ⅶ区では遺構の検出はなされず、泥流による押圧撹乱により遺構面が乱されたとの想定がなされた。各調査区とも天明泥流下の１面で終了した。

調査の成果として、「草津みち」と呼ぶ当時の街道の発見や天明噴火で降下したAs-Aテフラのうちの限られた降下期日に堆積していたことが本遺跡の調査で検証され、以後の調査の指標となった。

中棚Ⅱ遺跡

各調査区の調査原因は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区：楡木沢進入路（その３）建設工事、Ⅳ・Ⅴ区：下田残土置場整備工事である。

八ッ場ダム建設工事に伴う楡木沢進入路仮設道路建設工事に関する打診により、文化財保護課による試掘調査がおこなわれたのは、平成11年11月12日であった。その結果、対象範囲内の一部で天明泥流堆積物下から江戸時代の畑跡を確認し、埋蔵文化財発掘調査の措置がとられた。吾妻川左岸の下田残土置場整備が急がれ、そのための仮設道路建設先行着手が要請される状況のもとで、同年度内に発掘調査を実施することが急務となった。建設省工務課と県埋蔵文化財調査事業団との調整・協議の結果、道路建設範囲のうち、掘削の及ぶ範囲のみを急遽発掘調査することになった。用地の調整等により発掘調査が開始されたのは、同年12月15日であり、同月27日までの発掘調査で同年度の調査は終了した（Ⅰ区、Ⅱ区）。平成12年２月10日におこなわれた、建設省（工務課、工事課、用地課）・県文化財保護課・県埋蔵文化財調査事業団との打ち合わせ会議において、進入路による移転地の代替地部分と進入路の用地未決部分の発掘調査が、平成12年度当初から必要とされ、平成12年度の調査では、Ⅱ区及びⅢ区の調査が４月17日から７月27日にかけておこなわれた。

平成13年は、下田残土置場整備工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査がおこなわれた。これは、平成12年11月28日から29日にかけておこなわれた県保護課の試掘調査の結果に基づくものである。平成13年４月26日におこなわれた国土交通省、県文化財保護課、県埋蔵文化財調査事業団による立ち会いにより当年度の調査内容が確認された。その結果西側の進入路と国道に挟まれる部分（Ⅴ区）についての緊急性はないことが確認され、残土置場部分を優先しⅣ区として発掘調査を開始した。Ⅳ区調査終了後、Ⅴ区の調査を継続し12月末をもって終了した。

これらの調査からは、泥流下面では近世農業史に一石を投じることができるといえるいくつかの知見を得ることに繋がった。また、極限られた地形地点での泥流流下に伴う逆級化を呈する砂層が見つかり天明泥流の流下に伴う新知見を得ることになった。被災直後に石垣が復旧され現在まで継続しており、それに接続した被災前の石垣が検出された。いわば当時の泥流災害の状況とその後の復旧の姿を残した「自然災害を伝える歴史遺構」といえる。災害を通して、その後の人々がどう対処してきたかを考える災害考古学の観点からは、対象地の現況を含めた調査手法の必要性が指摘された。

さらに、泥流畑よりも下位に土砂崩れに埋まった畑が一部で検出された。被災年代に関する検証もな

されつつある。他にも時期決定はできないが、文化層の異なる遺構群も確認された。

下原遺跡

下原遺跡では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅱ-b区とも下田残土置場整備工事に伴う発掘調査である。吾妻川の上流に位置し平成７年度以降調査されてきた久々戸遺跡（長野原久々戸遺跡）や平成11年度以降調査された中棚Ⅱ遺跡などの発掘調査例から、天明三年の浅間山大噴火の際に堆積した天明泥流堆積物層の下に江戸時代の文化層が存在する可能性が想定された。工事予定対象地を含む立ち入り可能になった林字下原地内の埋蔵文化財に関する試掘調査が県教育委員会文化財保護課によっておこなわれたのは、平成12年８月１日～４日であった。その結果、吾妻川河岸付近の土取場跡は以前の土取り作業により遺跡が破壊されており、本格的な発掘調査を実施する遺跡の分布は確認されず、この部分の発掘調査の必要はないとの判断がなされた。事業対象地の北側にあたる平坦上には、遺存状態が良好な近世の畑跡などの分布が確認されこの範囲の発掘調査をおこなう必要性が生じ、８月23日建設省八ッ場ダム工事事務所、県文化財保護課及び県埋蔵文化財調査事業団との協議調整の結果、同年９月１日から県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査が着手されることになった。

同年度調査途中の11月、天明泥流堆積物下の近世面終了後の確認トレンチにより下位面の文化層が確認された。中世の遺構を伴う遺構調査の必要性が確認され、調査予定期間の延長の必要性が生じた。一旦12月末時点で泥流下面とⅡ区中世面の主要部分の調査を終了し、一部未終了部分については平成13年度に調査をおこなうこととなった。その未調査部分をⅡ-b区と呼称することにした。平成13年度は前述の中棚Ⅱ遺跡のⅣ・Ⅴ区の調査工程と調整をはかりながら下原遺跡Ⅱ-b区の調査がおこなわれ10月に終了した。

下原遺跡では、泥流中の石による撹乱痕跡の方向から泥流の流下過程を説明できる調査観点を得ることになった。また、中世面では柵列や焼土を伴う遺構群の検出がおこなわれた。As-A′と称されるこれまで極一部の研究者でしか意識されなかったテフラの可能性も確認され、浅間山起源のテフラ研究にも成果を残したといえる。

横壁中村遺跡

横壁中村遺跡は、平成８年度より工事用進入路他に伴う調査が開始されている。本書の中では、天明泥流に被災した畑遺構に関する部分を扱っている。天明泥流に関する調査は、沢区と調査中に呼称した沢沿いの部分のみで検出された。また、前後の年度に遺構確認の試掘で確認された天明泥流堆積物とAs-A軽石が含まれる土層断面を扱っている。また、後の報告で扱う遺構を含む調査範囲で、天明泥流で運ばれ堆積したと考えられる浅間山起源のAs-B（天仁元年）噴火に伴う火山弾（俗称浅間石）で構築された石列が確認されている。

（３）整理作業の経過

久々戸遺跡、中棚Ⅱ遺跡、下原遺跡、横壁中村遺跡（一部）の４遺跡は同時におこなう整理事業として扱うことになった。同４遺跡は天明泥流堆積物により被災したという一連の共通性をもつものであり、遺跡の理解及びこの地域でおこなわれる特徴的な調査事例として分離しがたいことによる。

横壁中村遺跡については平成８年度から発掘調査が開始され、現在も継続される縄文・平安・中世・近世等の時代の遺構を伴う大規模な遺跡である。このうち、天明泥流の被災が想定される吾妻川寄りに関する部分は既に調査が終了しており、その性格上から天明泥流に関する部分を本書で扱い整理作業にあたることとなった。石列については、災害とその後の復旧に関する遺構として敢えて取り上げることとした。なお、調査に関する詳細な経過については、後日刊行される横壁中村遺跡報告書を参照して頂きたい。

整理作業は、平成14年度におこなわれ、報告書を次年度の平成15年度刊行の予定で取り組んだ。整理作業は、図面・遺物の整理、遺構図修正、遺物遺構図トレース、図版作成をおこない、平行して遺物の

接合・復元、写真撮影をおこなった。年次が異なり、足掛け6年にわたり断続的におこなわれた調査記録を整理集約するには難儀したが、できる限り同一の尺度で得られる調査成果を抽出できるよう努めた。

2. 調査の方法

平成6年度から始まった八ッ場ダム建設に伴う発掘調査では、遺跡名称の略号やグリッドの設定など「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき調査が進められてきた。以下、本書でもそれに準拠し必要部分について掲載する。

①調査における遺跡番号は、八ッ場ダム建設に関わる長野原町の大字5地区（1：川原畑、2：川原湯、3：横壁、4：林、5：長野原）に番号を付し、八ッ場ダムの略号（YD）に続けた。ハイフン以下、各地区内に所在する遺跡に対して調査順の通し番号を遺跡番号とした。遺物に対する注記及び資料整理にはこの遺跡番号を用いている。（本書で用いる遺跡には、「YD5－03」＝久々戸遺跡、「YD4－07」＝中棚Ⅱ遺跡、「YD4－08」＝下原遺跡、「YD3－03」＝横壁中村遺跡が該当する。）

②基準座標は、国家座標（2002年4月改正以前の旧日本測地系）に基づく日本平面直角座標第Ⅸ系を使用し、吾妻町大柏木付近を原点（座標値X＝＋58000.0、Y＝－97000.0）とした1km方眼を基点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。X、Yの座標値については図Ⅰ．1及び各遺跡のグリッド設定図の数値を参照頂きたい。

③1km方眼を南東隅から100m方眼の1～100に区画し、この中グリッドを「区」とする。南東隅を1とし、東から西へ連続する10単位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。さらに、100m方眼内を4m方眼で625区画に分割し、4m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA～Yまでのアルファベットを用い、南北には1～25までの算用数字を用いて、南東隅を基点としグリッドを呼称する。

④例えば、図Ⅰ.1における中央付近の「→」で示す4m方眼の小グリッドは、「39地区1区A－1グリッド」となり、遺構図面では、特に混乱が予想されない場合は、「地区」を略して用いている。

＊

現場での遺構測量については作業員及び委託した測量業者がおこなった。

遺構平面図は原則として縮率1:40割付図で作成し、断面図等もそれに準じた。全体図については、原則的には、1:100ないしは1:200の縮率を用いた。3次元のデジタルデータを用いた現場実測の導入なども中途でおこなわれ、空中測量図などと併せて、デジタル作成図が混在している。

遺構写真撮影は、地上写真は現場担当者がおこない、空中写真撮影については委託業者がおこなった。撮影には35mm版白黒フィルムとカラースライドフィルムを用いた。必要に応じて、6×7版白黒フィルムを使用した。また、撮影対象に応じて高所作業車を用いた。

各遺跡の発掘調査においては、バックフォーによる表土掘削をおこない、作業員の手による遺構検出作業と精査により順次作業を進めた。遺跡では急斜面なども多く、調査には作業を進める上での工夫が要求された。

出土遺物は、現場作業内で洗浄・注記作業を完了させた。調査対象地は冬季の厳寒な気象状況のため屋外での発掘調査は4月から12月にかけて実施し、冬季の室内整理作業では記録図の整理や写真検索台紙等の作成等を可能な限りおこなった。

3. 遺跡の環境

（1）遺跡の位置と周辺の地形

遺跡の所在する長野原町は群馬県の北西部に位置する。吾妻郡の西南隅に位置し、北部は吾妻川に沿って東西に延び、その西部から南に開け浅間高原を経て長野県に接している。町は地形から、高間・白根両山系と大洞山系によってはさまれた吾妻川流域地帯の北部と高原地帯の南部に大別される。

水源を上信国境の鳥居峠（1,362m）付近とする吾

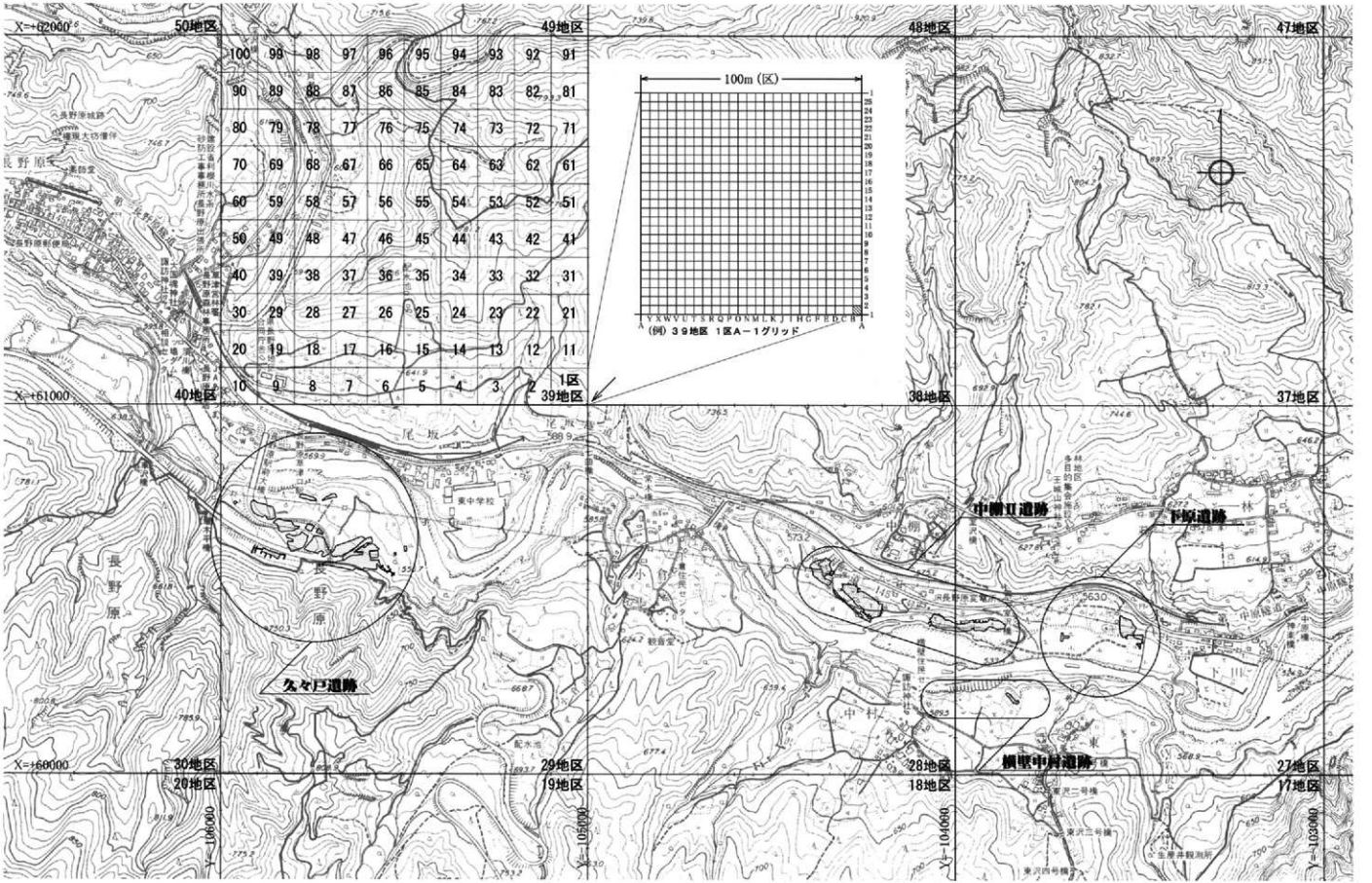


図1.1 グリッド設定模式図

妻川は途中、万座川、熊川、白砂川さらに温川、四万川、名久田川等の支流が注ぎ、流長76.2kmからなる。渋川市街地付近で、全長322kmをもつ利根川の右岸に合流する。その間の比高差を利用した水路式発電所は、支流を合せ30カ所近くあり、関東有数の水力電源地帯となっている。また、浅間山や白根山など第四紀の新期火山帯が誕生する以前の古吾妻川は今とは全く逆の上田・小諸方面に流れていたと推定されている。

この地域の地質の形成に大きな影響を与えた火山が浅間山である。町域の北西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。約2.1万年前に黒斑火山の噴火で、「応桑泥流」が発生した。この泥流堆積物は、当時の河床を数十m以上の厚さで埋めている。この堆積物によって吾妻川の浸食が進み、その両岸に最上位と上位の段丘面が形成されたといわれている。浅間山は、この後も多くの火山噴出物を堆積させているが、特に町域では浅間－草津黄色軽石（As-YPk・10,500～11,500？）の堆積が顕著である。また、天明三年（1783）の噴火により発生した泥流は下位段丘や中位段丘を数m～数十cmの厚さで覆っている。

町域の北部に該当する本遺跡群の位置は、「お辞儀をすると頭が山にぶつかる」とまでいわれ、東流する吾妻川に沿った山岳傾斜地帯である。吾妻川の両岸は長野原付近でやや幅が広く、岸に段丘が発達するが、川原湯から東では峡谷をなし、「吾妻渓谷」と称されている。北部の主な集落は吾妻川の河岸段丘上にある。この段丘は、吾妻川からの比高差を基準に下位段丘・中位段丘・上位段丘・最上位段丘の4つに分類されており、各段丘面の現在の吾妻川からの平均的な比高差は、下位段丘で約10～15m、中位段丘で約30m、上位段丘で約60～65m、最上位段丘で約80～90mとなっている。吾妻川は強酸性の支流の流入により、酸性を帯びた水質となり魚類の生息に適さない状況であった。現在は、草津町にある中和工場で石灰投入による中和処理がおこなわれ水質改善がおこなわれている。

各遺跡の所在を俯瞰すれば、北に王城山（1,123m）、南に丸岩（1,124m）の2峰がそびえ、その谷間を東流する吾妻川の中位段丘と下位段丘に4遺跡がそれぞれ位置している。遺跡の所在する地域は、久々戸遺跡上流700m付近で強酸性河川の1つである白砂川と合流する。地形の制約を受けるこの地点は、古くからの交通の要所となっていて、現在の須川橋と琴橋が架かる地点である。

久々戸遺跡は、吾妻川が右に蛇行し川幅が広くなって両岸にやや広い段丘が認められる右岸の中位段丘に位置する。大字長野原に所在し、該当する調査部分は概ね標高615～585mの地点である。現況は畑や雑木林などとなっていて、調査地に隣接した箇所では水田も営まれている。遺跡付近の吾妻川の水面標高は約560～555mで、遺跡との比高差は50mに及ぶ。遺跡地内には、南背面には急峻な山影が立ち上がっている。等高線に平行して山間を横壁から長野原の琴橋に向かう街道「草津道」が通るが、現在は不通となっている。

中棚Ⅱ遺跡は、吾妻川がやや右に蛇行し川幅が広がり始める左岸の下位段丘に位置する。大字林に所在し、該当する調査部分は概ね標高565m～540mの地点である。調査前には畑や資材置き場あるいは砂利採集場として利用され一部遺跡が削平された場所もある。調査地に隣接したさらに低位箇所では水田も営まれている。また、昭和10年には周辺は大規模な山津波に襲われ、大規模な復旧工事がおこなわれている。遺跡付近の吾妻川の水面標高は約535～530mである。

下原遺跡は、吾妻川が右に蛇行し川幅が狭窄する左岸の下位段丘に位置する。大字林に所在し、該当する調査部分は概ね標高545m～535mの地点である。調査以前には畑として利用され、調査地に隣接した箇所では水田も営まれている。砂利取りがおこなわれた箇所が付近に残されていた。遺跡付近の吾妻川の水面標高は530m弱である。

横壁中村遺跡は、東流する吾妻川と40m以上の断

図1.2　調査遺跡位置図（国土地理院1:200,000地勢図「長野」を使用。）

崖により隔てられており、右岸の中位段丘に位置する。大字横壁に所在し、該当する調査部分は概ね標高570m前後の地点である。調査以前には畑や水田として利用され、本書の中で取り上げる畑遺構がみつかった付近では、昭和30年代に水田造成をおこなったという聞き取りがある。遺跡付近の吾妻川の水面標高は約535～530mである。

（2）周辺の歴史的環境

周辺の埋蔵文化財包蔵地や付近の歴史的環境をはじめ、周辺遺跡や近隣町村に分布する遺跡等については、既刊行の『八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡報告書』第１集（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第287集）及び第２集（同第303集）に詳細に記述されているのでそちらを参照頂きたい。本書の中では、遺跡周辺地域の中世以降の歴史的な変遷を概観し、長野原町内の歴史記録をトピック的に拾い出すに留めたい。

中世の記録では、与喜屋の外輪原に室町時代応永年間頃のものと思われる宝塔があり、横壁には丸岩城や柳沢城などの城館跡が知られている。小宿村に

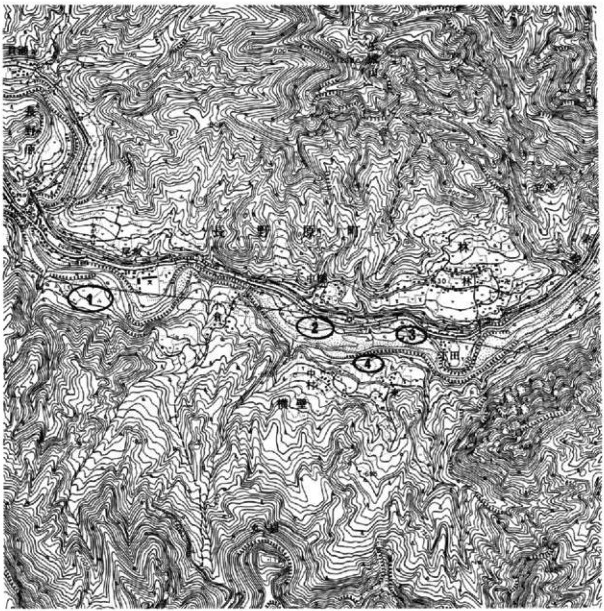


図１．３　調査遺跡周辺図（1:久々戸遺跡、2:中棚Ⅱ遺跡、3:下原遺跡、4:横壁中村遺跡、国土地理院1:25,000地形図「長野原」を使用。）

は文安二年（1445）馬庭念流で知られる13代樋口高重が住んだといわれている。

高崎豊岡から大戸、横壁、長野原、草木原、草津へ至る道は関東平野から草津へ通じる最も古い幹線とされ、連歌師宗長も文亀二年（1502）と永正六年（1509）このルートを通っている。中世の交通概要の中では、暮坂道と並んで周辺の街道の中では重要な幹線であった。また、永禄年間（1558～1569）には羽尾氏と鎌原氏との攻防合戦や真田氏と斉藤氏との「長野原合戦」が繰り広げられた舞台にもなった。『加沢記』には「須賀保峠丸屋の要害」の記述が見られ前述の丸岩城の存在が確認できる。

天正十八年（1590）沼田藩真田氏が吾妻郡を支配すると、長野原町旧10カ村はその所領となり、江戸幕府成立後も沼田藩に属した。天和元年（1681）真田氏改易となり、幕府の直轄領（天領）で代官、旗本の支配下となった。『長野原町誌』に拠る「石高の比較表」と、『群馬県史』の「寛文八年上野国郷帳」・「元禄年間上野国一国高辻」・「天保五年上野国郷帳」・「上野国村高記」から作成された郷村変遷表とを基に、表Ⅰ．1に長野原町内の村別石高の変遷を引用編成した。

近世の交通路は、真田道や草津道と呼ばれている。道陸神峠道、暮坂峠道、赤岩通り道などが、戦国時代の合戦攻防戦の進軍路となったことから真田道と総称される。一方、草津道は須賀尾峠道（大戸道）、鼻田峠道があげられ、草津温泉の湯治や善光寺参りへの街道として栄えていたものと伝えられている。須賀尾峠道の草津道については、Ⅷ章を参照頂きたい。

天明三年（1783）浅間山大噴火では吾妻川に面する地域は甚大な被害を受けた。特に旧長野原町や旧新井村、旧坪井村では壊滅的な被害状況であった。

長野原町における被害状況は、富沢久兵衛の『浅間山津波実記（浅間記）』(上)の「草木原：3軒流失、林：11軒流失18人死、与喜屋：8軒流失5人死、坪井：21軒流失8人死、川原湯：19軒流失14人死、羽根尾：63軒流失27人死、川原畑：21軒流失4人死、古森：13軒流失14人死、新井：6軒流失2人死、長野原：71軒流失152人死」などが知られているが、史料により数値に差がある。

弘化三年（1846）野口円心が道陸神峠を開削した後、明治二十八年（1895）野口新道開削工事が竣工した。このことは吾妻渓谷により阻まれていた東西

表Ⅰ．1　長野原町分の村高の変遷　　＊1『長野原町誌』上P.346による　　＊2『群馬県史』11による

		寛永二十年検地 ※1 1643	伊賀守寛文二年検地 ※1 1662	寛文八年 ※2 1668	貞享三年検地 ※1 1686	元禄十六年 ※2 1703	天保五年 ※2 1834	明治元年旧高 ※1 1868	幕末所轄
旧　村　名		村高（石未満を切り捨て）							
横壁村		44	205	44	55	55	56	56	岩鼻支配所
川原湯村		60	273	60	73	73	73	74	同
川原畑村		75	343	75	159	159	159	159	同
林村		125	571	125	195	195	202	202	同
長野原町		116	541	116	252	252	252	252	同
大津村	立石村	54	333	54	97	97	97	97	小栗九郎左衛門
	勝場木村	24	111	24	32	32	32	32	同
	坪井村	79	132	79	77	84	85	84	同
羽根尾村		43	368	43	258	258	258	258	岩鼻支配所
古森村		34	139	34	46	46	46	46	小栗九郎左衛門
与喜屋村	新井村	22	138	22	24	24	24	24	岩鼻支配所
	与喜屋村	89	407	89	126	126	126	126	同
応桑村	小宿村	73	335	73	113	113	113	113	同
	狩宿村	57	304	57	99	99	107	107	同

の交流に大きく影響を与えた。開削前後の生活文化を考える上では着目すべき点であろう。明治二十二年（1889）には、旧10カ町村が合併して長野原町が誕生した。

長野原町の明治以前の町村は、上野国吾妻郡川（河）原畑村、川（河）原湯村、横壁村、林村、長野原町、坪井村、立石村、勘場木村、与喜屋村、新井村、羽根尾村、古森村、狩宿村、小宿村があった。明治元年（1868）岩鼻県に、明治四年（1871）第一次群馬県に、明治六年（1873）熊谷県に属した。明治九年（1876）に第二次群馬県となり現在にいたっている。明治十一（1878）～二十一年（1888）の郡長・戸長時代は、林村戸長役場・大津村戸長役場・応桑村戸長役場があり、その後分離を経て、明治二十一年（1888）には、長野原町外四カ村戸長役場・川原畑村外三カ村戸長役場・応桑村戸長役場が置かれた。明治二十二年（1889）市制町村制施行で、旧町村が合併して長野原町となった。これにより「長野原町大字横壁村」などとなり、大正六年（1917）村の呼称が取れ、「長野原町大字横壁」などとなった。

遺跡周辺の災害の歴史記録として、明治四十三年の水害に加え、昭和十年の山津波についての記録が残されている。昭和十年の山津波は長野原町で33棟の流出崩潰、50棟の毀損、30棟の浸水などであった。中棚Ⅱ遺跡の立地する林字中棚地内は、災害応急復旧土木事業がおこなわれている。

4. 泥流畑の発掘調査の方法

（1）災害考古学の視点と天明浅間災害

群馬と長野の県境に位置する浅間山（2,568m）は、2003年１月の火山噴火予知連絡会でＡランクに分類された活発度の高い活火山である。明治以降の小規模な噴火では登山者の死傷者が出ている。戦後、1947年には噴石で11人、1950年には１名の犠牲者を出し、その後1973年の中噴火を最後にほぼ静穏な状況が続いている。ユネスコのリスク評価で浅間山は、日本国内で第２位の火山に位置づけられている。天明三年の噴火を最後に、小規模な活動を除いて前掛山の噴火活動は途絶え、現在は釜山が中央火口丘として活動している。釜山火口丘は前掛山よりも70m以上高くなっており、その活動が現在の噴火活動の中心となっていて、火口の深さは200～300mの範囲で変動を繰り返していると考えられている。

浅間火山の噴火活動を概観すれば、すでに９万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称を持つ。また、堆積物は現在前橋市街に15mもの厚さで堆積し、その後の地形に大きな影響を与えている。その後は、仏岩火山の活動期で、浅間板鼻黄色軽石（As-YP）降下などをもたらした。１万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火によりもたらされた縄文時代のAs-B、４世紀のAs-C、天仁元年（1108）のAs-Bと呼ばれるテフラは、浅間山の活動史を物語り、群馬県内の考古年代の指標となっている。As-Aは天明三年（1783）の噴火で噴出したテフラで、この災害は有史以来の記録的な火山災害として知られている。

火山災害遺跡の発掘調査視点として、能登は「①被害状況の把握（火砕流、泥流、降下物などによる被害範囲の確定）、②被災後の地域動向の分析（復旧か、放棄か？復旧の場合のプロセスはどうなのか）、③被災季節の決定（農業社会における収穫の後先が食料危機などの社会不安に繋がる）」を指摘する（能登 2003）。この視点で、今回の吾妻川流域の八ッ場ダム建設予定地域の天明三年の発掘調査をみると次のようになる。

①については、全体の噴火の中では比較的ローカルなものとされる６月26日のAs-A灰（関 2002）と７月27日～29日にかけてのAs-A軽石が、本書で扱う遺跡群の所在地域に降下している（関・諸田 1999）。また、噴火の最大のイベントであった８月５日の泥流被災は、この発掘調査の根幹となる出来事で、当時の遺構面を厳封している。本書では、周辺被害範囲の詳細な復元にも取り組んでいる。②では、As-Aの降下災害に対して本書に収録の自然科学分析で、降

表Ⅰ.2　天明三年浅間災害の発掘調査に関する知見と経緯

平成９年(1997) ５月	久々戸遺跡 Ⅰ・Ⅱ区	プライマリーなAs-A軽石の堆積、ＮＥ降下軽石(安井・小屋口・荒牧 1997)が１～３cm厚で確認される。
平成９年(1997) ５月	久々戸遺跡 Ⅰ・Ⅱ区	橋台建設予定地内の試掘で、河岸下２ｍで２ｍの厚さの天明泥流堆積物を確認。
平成９年(1997) ５月	久々戸遺跡 Ⅰ・Ⅱ区	サク部分から慶長一分判金が出土。草津街道の存在が影響するのか？
平成９年(1997) ６月	久々戸遺跡 Ⅰ・Ⅱ区	As-A軽石は２cm を超える大きさと５mm程度以下のものが観察される場合があるが今後の検討を要する。
平成９年(1997) ６月	久々戸遺跡 Ⅰ・Ⅱ区	畑耕作における上田の埋土とＮＥ降下軽石の考古学的な検証が可能になった。浅間噴火で消えた畑（上毛1999.7.26）。
平成９年(1997) ６月	久々戸遺跡 Ⅰ・Ⅱ区	畑の畝には埋土されたAs-A軽石や耕作土が確認され、畝の断面形状（耕作の状態）はいくつかのタイプがあることが判明してきた。このことから、調査記録として畝断面の実寸実測をおこなうようにした。
平成９年(1997) ６月	久々戸遺跡 Ⅰ・Ⅱ区	作物の痕跡の倒伏方向が吾妻川の流下方向と異なることを確認する。
平成９年(1997) ６月	横壁中村遺跡 西区	浅間石の石列を確認。
平成９年(1997)10月	久々戸遺跡 Ⅵ区	天明泥流堆積物は、これまで調査してきたⅠ・Ⅱ区と様相が異なり、礫を含む割合が少なくやや淘汰されているようにも観察される。
平成10年(1998) ６月	横壁中村遺跡 沢区	アクトと北ケイドに被災の伝承。調査区は後者にあたるものと考えられる。
平成10年(1998) ８月	久々戸遺跡 Ⅶ区	天明泥流の流心が遺構面を傷つけた痕跡が顕著。
平成11年(1999) ７月	久々戸遺跡 Ⅲ区	鋤込みがおこなわれた畑が確認された。軽石降下後の一週間の営みが考察される。
平成11年(1999) ８月	久々戸遺跡 Ⅲ区	草津みち沿580mにわたり、現道直下から検出された。「草津みち」確認（上毛1999.8.28、東京1999.9.6）。
平成11年(1999) ８月	久々戸遺跡 Ⅲ区	草津みち中周辺の地形から、天明泥流堆積物が旧地形をトレースすることが確認されはじめた。
平成11年(1999) ８月	久々戸遺跡 Ⅳ区	畑遺構面に天明泥流中の石による撹乱の痕跡が残されており、その方向は天明泥流の流下方向とは明らかに異なることが判明する。
平成11年(1999)10月	久々戸遺跡 Ⅴ区	610mで天明泥流堆積物の堆積天端地点を確認。吾妻川との比高は50mに及ぶ。
平成11年(1999)12月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅰ・Ⅱ区	標高555～543m付近をトレンチ状に調査したⅡ区では、表面は泥流の押圧と削平により表面が乱れ、検出されたヤックラ底下の影となる下流側部分ではA軽石の堆積があり、明瞭なⅠ区とⅡ区の泥流による地表面の対比を確認した。
平成11年(1999)12月	横壁中村遺跡	純文遺構調査にあわせておこなった吾妻川寄りの確認トレンチで、天明泥流堆積物とその下位にAs-A軽石の堆積を確認。
平成11年(1999)12月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅱ区	逆級化構造を呈する砂層が厚さ最大20cmで、いわゆる天明泥流堆積物と天明三年の耕作面の間に確認された。天明泥流流下に伴う新たな調査視点となった。ＮＨＫ総合テレビ首都圏ネットワーク（2000.1.28）。吾妻川左岸から砂の層（上毛2000.1.8、産経2000.1.11、日経2000.1.11）。
平成12年(2000) ４月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅱ区	表土掘削時から着目した結果、泥流畑に築かれていた石垣の直上に被災後の石垣が築かれていたことが確認でき、罹災後の復興状況を語ることができる資料となった。
平成12年(2000) ７月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅲ区	泥流畑の下位に土砂崩れに埋まった２面目の畑が検出された。年代確定により、平坦面の年代が遡れる可能性あり。泥流頭で確認される農事がどこまで遡れるかという観点でも注目に値する。
平成12年(2000)10月	下原遺跡 Ⅱ区	平坦面や一定面積を単位として、畑地内の単位と単位の間には畝の断面形状の差違が認められる。これが民俗学的な〈ツカ〉に対する解明の足掛りか？
平成12年(2000)11月	下原遺跡 Ⅱ区	（泥流中の石による押圧方向）として天明泥流流下に伴う遺構への撹乱の方向を記録化した。
平成12年(2000)11月	下原遺跡 Ⅱ区	As-BとAs-Aテフラの間に存在するといわれているAs-A′テフラの可能性が確認された。
平成13年(2001) ７月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区	天明泥流の堆積以降掘られた溝状の撹乱痕跡を確認した。不要な機を充填させたいわゆる「復旧溝」の可能性がある。
平成13年(2001) ７月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区	地境の溝状のヤックラは天明泥流被災後にも同じ位置をトレースし、泥流中の石を埋め込んで現在の地境としている。復旧の過程が読みとれ、人々が罹災後どう取り組んできたかを示している。
平成13年(2001) ８月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅳ区	開墾時に不要な石を溝ないし土坑状に埋め込んだヤックラ。
平成13年(2001)11月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区	泥流畑の開墾時期、等高線に直交し開口の割付幅が同じと考えられる。このことは、飛躍的な耕地面積の増大として知られる、「慶長年間(163万町歩）から享保年間(297万町歩)、明治７年（305万町歩)」の文獻資料に寄与するところがあろう。
平成13年(2001)11月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区	畝込まれた畑からは救荒的な意味合いから蕎麦の播種が想定されるものであるが、まだ結論を導き出すには早い。
平成13年(2001)11月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区	逆級化構造を呈する砂層の記録化。地形や地点の確認。
平成13年(2001)12月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区	イモの型取り。文獻資料による天明飢饉を考古資料で説明できるかもしれない。石こう型で復元（読売2002.1.12）。
平成13年(2001)12月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区	点播きされた作物痕。軟Ｘ線写真で根痕の撮影。
平成13年(2001)12月	中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ区	作業単位の面積としての〈ツカ〉の面積の定量値が出揃った。

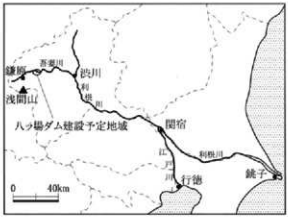
灰に関わらず時節に則った農事が営まれたことが検証された川原湯勝沼遺跡(関 2002)の補遺資料から、6月26日の降下物のガラス屈折率測定値を知ることになった。また、7月27日～29日にかけて降下したAs-A軽石も農耕作の痕跡とともに堆積層として遺構面に残されていた。この軽石は、土用の培土痕跡や鋤き込みなど農作業によって埋められた状態で確認できるものもあり、人為的な痕跡を示している。そのことによって詳細な耕作痕跡を意味する畑の畝断面の分類分析が可能になった。また、中棚Ⅱ遺跡の場合、調査前と被災前の耕作地の状況を比較することで被災後どう復旧がなされたかについても視点を当てた。③については、極めて詳細な史料による期日の記録が残されており、日時の単位で時節と農事の営みの復元を可能にしている。発掘調査と史料を農事暦からクロスチェックすることで、降下日時を検証するにいたっている。これらは、火山学・文献史学・農事暦研究などの異分野の研究成果を援用し総合化したものであり(原田・能登 1984)、その際に天明浅間噴火がもたらしたテフラを鍵層としたことなどが肝要であった。詳しくは、後述する。

本書で扱った4遺跡は、天明三年浅間噴火により発生し流下した天明泥流堆積物に覆われた遺跡である。6年次にわたる断続的な発掘調査では、同一視点で調査にあたることは容易ではないが、調査の積み重ねと視点を広めることで天明泥流と発掘調査に対するいくつかの新知見を得ることができた。表Ⅰ.2に天明泥流に関する一連の発掘調査と知見に関する経緯一覧記録を示した。

(2) 天明三年の噴火と軽石の降下期日

天明三年の浅間噴火は、5月9日に始まり、8月5日の大噴火で終息にむかう3カ月間の出来事であった。

これまでの噴火の経緯の全体像は荒牧によって集約されている(荒牧 1993)。その要旨は、「5月9日に最初の噴火があった。6月25日(26日)の降灰、7月17日の北麓への軽石降下を挟んで静穏期と鳴動と噴火とを繰り返した。7月26日から8月2日にかけて噴火の強さは次第に増していった。火山灰と軽石の降下がつづき、短時間の休止期を挟みながら鳴動と噴火を繰り返した。2日の夜は特に激しく、南東麓の村では3日になって逃げ出すものがあり、午後の噴火の規模はさらに大きくなって、絶え間ない爆発的な噴火が続いた。4日には、北東麓へ仰木型に吾妻火砕流を発生させたが人家へは到達せず、人



図Ⅰ.4 天明泥流流下図

図Ⅰ.5 天明三年浅間噴火降下物の記録地点

命に関わる被害はなかった。この夜にも激しい噴火があり、長野県側では大粒の軽石が降下し、人々はパニックを引き起こすようになる。そして、群馬県側では運命の８月５日の災害を迎える。」ということである。

８月５日の昼頃の噴火に伴って発生した火砕流は、土石なだれ（岩屑流）に変化し、旧鎌原村を呑み込み吾妻川に流れ込んだ。そして、泥流と化して吾妻川流域をのみ込み田畑を埋め尽くす未曾有の被害を発生させた。泥流は渋川で利根川に合流し、銚子沖の太平洋にまで到達している。千葉県関宿で分流した後に、江戸川を流れ江戸湾へも流れ下った。これが「天明泥流」である（図Ⅰ.4）。途中県内では、1400人を超す犠牲者を出したといわれている。天明泥流による河岸の被害状況は、Ⅰ章３節に、また、Ⅶ章１～３節には天明泥流に関して記述した。

遺跡が所在する八ッ場ダム建設予定地域は、浅間山火口から見て直線距離で、北東方向に20km離れた吾妻川両沿岸に立地する。この地域では、８月５日に発生した天明泥流堆積物下からAs-A軽石が概ね１～３cm程度の厚さで検出される。そこで、この地域の農事暦と降下日時を対比させ、畑耕作における人為的な耕作の痕跡とAs-A軽石の降下期日の検証を試みた。その結果、７月27日～29日にかけて降下したAs-A軽石であること、噴火に直面した人々は時節の農事暦に従い耕作を続けていたことが判読できるようになった。

３カ月の噴火イベントの中で、具体的に史料で確認できる吾妻郡内に関するものは、①６月26日の降灰、②７月17日の北方向への降砂灰、③７月27日～29日の北東方向への降砂灰である。

前述の噴火の経緯に吾妻郡内史料を加えると、史料に記録された「砂・石・小石」の記述より、浅間山火口から北軸方向、北東軸方向に位置する郡内の地域で噴火したと記録される降下物は次のように集約できる（図Ⅰ.5）。

①５月８日ないし９日に降灰が始まり、６月26日の降灰を経ている。この時は「近村ニ灰降り　桑を洗て蚕ニくれて」と記録されており、郡内で広く降灰があった。７月17日には北軸方向への降砂があったが、北東軸方向への降下の記録は残されていない（この噴火は佐渡でも降灰が記録されている）。②７月27日～29日までの噴火では、北軸方向と北東軸方向へも降砂をもたらした。そして、この29日までの降砂灰被害は作物に大きな被害を与え、訴状が書付けられるほどであった（東北地方でもこの一連の降下物が記録されている）。③30日以降の北東地域への降下物の具体的な記録については残されていない。以上から推測すれば、北東地域では30日から８月５日の泥流発生までの間、噴火による直接の軽石の降下はなかったとの見方ができる。これは、東南東軸方向では８月２日から５日にかけて噴火が激しさを増し、特に８月４日から５日の降下軽石層が天明噴火全体の２分の１から３分の２の量におよぶと推定されていることと対照的である。

火山学の分野では、天明三年の噴火で浅間山から東南東方向へ大量の降下テフラがあったことは早くから論じられてきた。しかし、この北東方向へのテフラ降下は、MINAKAMI（1942）、荒牧（1968）等において存在が指摘され、層厚線の方向は吾妻火砕流下を中心に分布することは認められてきたが、安井・小屋口・荒牧（1997）が発表されるまでは定量的な研究はなされてこなかった。

八ッ場ダム建設に伴う天明泥流下の発掘調査の成果から、農事暦や地元に残される史料とのクロスチェックにより、北東方向へのテフラ降下が考古学的に確認された（関・諸田 1999、関 2002、関 2003）。このことはテフラの降下日時を把握することでもあり、発掘調査では鍵層として天明三年に関する発掘調査の精度を高められるものと考えてきた。

（３）畑調査の視点

畑は大きく分ければ、家の周辺にある屋敷畑（菜園）と家から離れた場所にある外畑に分けられる。本書で扱う畑遺構は、この範疇で捉えれば、いずれも外畑と判断される。

本書の中では天明泥流堆積物直下の畑を「泥流畑」

と呼ぶ。調査を通じて、畑遺構の存在だけではなく、その畑がどう耕作されていたかを確認し、天明浅間災害に直面した人々の営みを検証し得る資料を蓄積するよう努めてきた。ここでは、発掘調査における畑遺構に関する視点を集約しておきたい。

また、畑の面積へ着目することで、近世の畑についての歴史的な視点を得た。このことは「単位畑」の項で説明する。

As-A軽石直前か？天明泥流被災直前か？

一般的な発掘調査では、「As-A軽石下」の認識で調査にあたる。しかし、天明泥流堆積物が顕著な本地域では、「被災した８月５日の天明泥流被災直前」の状況に視点を捉えて発掘調査に取り組んだ。

調査の進展に伴って、「As-A軽石を剥がすこと」が調査の本質ではないことが意識され始めた。つまり、As-A軽石降下後の人為的な耕作痕が残され、８月５日の泥流被災をむかえたわけで、As-A軽石を除去したのでは降下直前と泥流被災直前の時間が混在することになる。これは、発掘調査を担当した関、石田による視点であった。

実際の発掘調査では、８月５日の泥流面の検出の後As-A軽石を除去したのは、検討の上必要部分のみとした。調査年度に応じて必ずしも完全とはいえないが、本書で扱った遺跡の発掘調査の中では極力、「天明三年８月５日の天明泥流被災時の復元」を目指した。さらに前項で記述した通り、As-A軽石が７月27日～29日に降下したことが検証されることで、発掘調査では軽石降下後泥流に被災するまでの間の農事を復元することが可能になったのである。特に本書の泥流畑ではこのことを重視している。

「単位畑」の視点

畑遺構の調査では、その中に広さや耕作状況からおよその規格性をもつことがわかる。今回の発掘調査からは、一筆の畑の中にさらに単位が存在するという共通点を抽出した。

本書の中では、これについて「単位畑」の呼称を用いることにした。多くの場合、「単位畑には平坦面が存在すること」、「畝断面の観察からは耕作状況が異なること」などが、単位分けの根拠である。しかしながら、その後の整理作業を通して、耕作状況からみた畑の「単位」ではなく「畑の地割り（＝開墾時の地割り）」のなかに、さらに厳密な単位分けが存在することを見い出すことができた。

これらに関しては、この地域の近世農業史を明らかにできる資料として、面積や畝幅など詳細な計測をおこない分析を試みた。詳しくは、第章４節考察に記述した。

発掘された畑の視点

■農事用語の定義

環境や条件に制約され地域で培われてきた地域の伝統的な農事は、発掘調査と平行しておこなった農事の聞き取りでは200年前並の農業が昭和30年代までは残されていた感すらあった。昨今の農業経営の変化により、この伝統的な農事は消滅しかかっているといっても過言ではないだろう。

天明浅間災害により辛くも当時の農業景観が保存されていたと考えれば、近世農業社会の地域の歴史をそのまま掘り起こすことになる。当地域の現行の農事を基に、被災当時の農山村社会の農業形態の復元を目指したところも本発掘調査の特徴であるといえよう。そのため、地域で用いられてきた用語や民俗学的な情報を盛り込むことを重視した。

以下に、本書の中で用いた畑作を中心とする用語について記述する。

【作土】と【耕作土】 本書の中では、恒常的に耕作がおこなわれる部分に対して「作土」の用語を用い、作土を含み人為的な土壌の移動や礫除去などの痕跡を確認できる部分として広義に「耕作土」の用語を用いた。作土については鉄分凝集層の存在や色調や土層の締まりの違いなどの観察により、畑土の表土層の明らかな区別ができたもののみを判断して用いた。土壌肥料用語では、「耕耘により攪乱された土壌上部をいい、作物を栽培するための人為的な作用を大きく受けている土層」という。起耕により改善され、やわらかくなり、空気を含む土壌に改善された部分ともいえる。また、作土の下位には、す

き底にあたる位置に「すき床層」が位置すると定義される。作土は作物の耕作により常に施肥や耕耘のおこなわれている土層であり、発掘調査では耕作により母体は同じでも、作土部分あるいは耕作土部分では鍬が取り除かれるなどの状態も観察された。

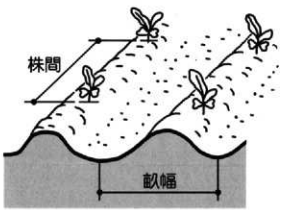
【畝の形態】 限られた狭い地域でも異なる耕作の形態の存在が指摘される、長野県の遠山谷の例を見ると、等高線に直行する「タテ畝」は比較的谷底の面積の狭い地域で見られ、多くは等高線に平行する「ヨコ畝」である。また、特に「キョンキラ」といい、傾斜が30度を超えるような場所では、サクを切らずに穴を掘りそこに種を播く方法もある。本調査遺跡内ではそれと思われるものは検出されていないが、山間部の畑跡の発掘調査では留意しておきたい項目である。

【サク】 畝間と表記される場合があるが、本書の中では地域の民俗例から「サク」の用語を用いることにした。サクが形成される作業名称が存在することから、サクの表記をする。このことは、農作業からくる「サクキリ」などの作業と直感的に結びつき、現行の農事との対比を容易くする。「サクキリ」（＝培土）の作業がおこなわれることでサクと畝が形成されていく。

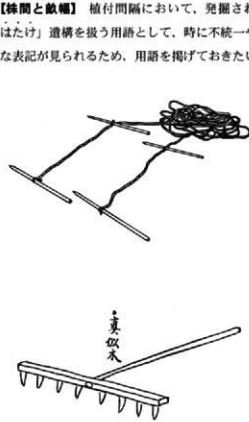
【培土】 培土は生長した作物の倒伏防止や養分補給、除草などを目的とする土寄せのことで、サクの土を作物の根際へ寄せ畝立てする作業をいう。「サクキリ」と同一作業。特に本書では、この作業がおこなわれる時節の前後に、As-A軽石の降下があったことが鍵となっている。

【サクキリ】 高畝にして作物の播種・移植をおこなう場合を除いて、作物の生長にあわせ根元に培土がおこなわれる。サクを切ることと土が寄せられていくことは、別の呼び名ではあるが土の移動により畝サクが作られていくわけであり、同一の作業ともいえる。作物の生育途中で何度かおこなわれるこの作業は、個々の作業でも【一番ザク】・【二番ザク】などわずかな時間差（例えば数日～１週間など）をおいておこなわれる。畝に対して最初におこなわれる作業は「一番ザク」、後に畝の反対側に施されるのが「二番ザク」と呼ばれる作業である。【ヤリザク】や【ヒキザク】などの様に、表面の除草や地面を均すようにおこなういわば培土の類がある。これらも、広義にはサクキリの作業に含まれるものと考え、本書の中では農事を説明する用語として用いた。

【株間と畝幅】 植付間隔において、発掘された「はたけ」遺構を扱う用語として、時に不統一や曖昧な表記が見られるため、用語を掲げておきたい。



図Ⅰ.6　植付間隔（「株間」と「畝幅」）

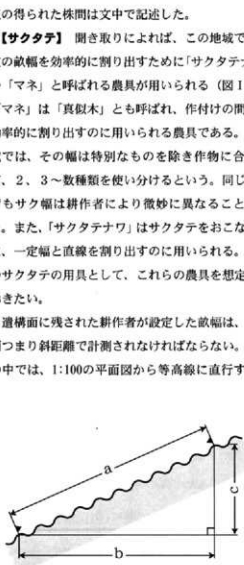


図Ⅰ.7　サクタテナワと真似木

「株間」は作物と作物の根株の間隔をいう。「畝幅」はサクタテの幅で作付け時の条の間隔である。畝と畝の中心の間隔で、サクとサクの中心の距離（図Ⅰ.6）でもある。（この定義からすれば、1条播きされた場合、植付株数は、栽培面積÷(畝幅×株間）で求められることになる。）泥流畑では、この間隔が毎年新しく設定されるかは不明だが、一定の畝幅を設定して耕作がなされる。この植付間隔である「株間」と「畝幅」の値を求めることは、作物、耕作者、農事の地域性などを特定するデータとして掲げておきたい計測値である。本書の中では、可能な限りの畝幅を計測し、一覧表に盛り込んだ。また、明確な確証の得られた株間は文中で記述した。

【サクタテ】 聞き取りによれば、この地域では一定の畝幅を効率的に割り出すために「サクタテナワ」や「マネ」と呼ばれる農具が用いられる（図Ⅰ.7）。「マネ」は「真似木」とも呼ばれ、作付けの間隔を効率的に割り出すのに用いられる農具である。当地域では、その幅は特別なものを除き作物に合わせて、2、3～数種類を使い分けるという。同じ作物でもサク幅は耕作者により微妙に異なることもある。また、「サクタテナワ」はサクタテをおこなう際に、一定幅と直線を割り出すのに用いられる。当時のサクタテの用具として、これらの農具を想定しておきたい。

遺構面に残された耕作者が設定した畝幅は、耕作面つまり斜距離で計測されなければならない。本書の中では、1:100の平面図から等高線に直行する走行で、平面図の距離（以下、図中：b）と高低差（：c）より斜距離（：a）を求め、畝幅を単位畑ごとに計測した。作物の限定まではいたらないが、耕作の特徴となる分析項目とした。



図Ⅰ.8 畑の計測方法

【作物の痕跡】 当時栽培されていた作物の痕跡は、それ自体は残存せず酸化鉄が沈着した状態で作物の痕跡が検出される場合が稀に見られた。調査の時点では「植物依存体」や「植物遺存体」の用語を用いてきた。本来生痕化石と捉えるべきかもしれないが、土壌学でいう、「主根状酸化鉄・うん管状酸化鉄・環状酸化鉄・板状酸化鉄・雲状酸化鉄」などと呼称するものと類する現象であろうと考えるが、的確な用語が選択できないので、本書中では「鉄分の凝集による作物の痕跡」として、場合に応じて単に「作物の痕跡」・「作物痕跡」などと表記する。

畑の記録化と計測

畑の耕作状況を平面的な観察で確認することは不十分であった。昭和30年代の機械化が広まる以前の農事をめざし古老の聞き取りから作成した農事暦（関・諸田 1999）を根拠とし、As-A軽石を鍵層とする微妙な耕作状況を抽出するよう努めた。表土掘削時から畑ごとに観察をおこない、天明泥流堆積物を土層として残した状態で実寸の畝断面測量で、データの蓄積をおこなった。畝幅による分類や栽培種、また耕作状況の分類につながる可能性を含んでいたからである。

なお、平面図の描画については、原則としてサクを溝と見なす表現として上端線で表現し、下端線は畝とサクの高低が明瞭な場合（被災前の土用の培土がおこなわれたものと判断した畝、Ⅶ章4節図2・3を参照）に用いた。これは、観察で得られた耕作工程の差を区別するためでもある。以下に、その他の視点と項目について記述する。

■畝の高さ 畝の頂部とサクの底部の差は、被災当時の状況を反映することは確かであるが、天明泥流堆積物や経年変化による圧密作用をどう考慮するかなどの問題を含んでいる。今回の発掘調査では、実際の遺構面の状況を比較観察し判読してきた。畝

断面図から高さの計測はおこなっていない。畝サクの高さについての定量的な数値がどれだけ資料となり得るかは今後の課題でもある。本書では、相対的に比較することで、「明瞭な畝立て」などとして対比するに留めている。

■傾斜畑　遺跡の所在する地域は、山間部に位置し、いずれも傾斜畑である。しかしながら、傾斜の度合いを表す客観的な数値を判読できない。このことを農林水産省の管轄する「平成12年度農林水産省・中山間地域等直接支払制度のあらまし」の農用地の区分けによって比較しておく。一定条件の不利な条件をもった農地の畑に関する定義は、「①急傾斜農地（畑は15度以上の傾斜をもった農地）②地方自治体の長の判断により緩傾斜農地（畑は８度以上15度未満の傾斜をもった農地）の内、①の急傾斜農地と連担している農地」としている。本書では三角関数により、各畑遺構の傾斜を概測し、計測値等一覧表に掲載した。この数値を、泥流畑の傾斜畑に当てはめ比較することで、泥流畑の傾斜の度合いを概観すれば、部分的に、急傾斜農地に該当する山間地域の畑作地域であることがわかる。

参考文献

吾妻教育会 1936『吾妻郡誌』。
荒牧重雄 1968「浅間火山の地質」『地団専報』14。
荒牧重雄 1993「浅間天明の噴火の推移と問題点」『火山灰考古学』古今書院。
丑木幸男 1992『碓茂左衛門一揆の研究』文献出版。
草津町役場 1976『草津温泉誌』第老巻。
群馬県 1980「群馬県史」資料編11 近世３。
小島敦子 2000「畠の形態と計測値」『三ッ木遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『長野原久々戸遺跡』群埋第240集。
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『長野原一本松遺跡（1）』群埋第287集。
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『八ッ場発掘調査集成（1）』群埋第303集。
関俊明・諸田康成 1999「天明三年浅間災害に関する地域史的研究-北東地域に降下した浅間Ａ軽石の降下日時の考古学的検証-」『研究紀要』16 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
関俊明 2002「農事「サクイレ」と降灰による川原湯勝沼遺跡の畝断面解析- 天明三年浅間災害に関する地域史的研究②-」『八ッ場ダム調査遺跡集成（1）』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 第303集。
関俊明 2003「７月27日～29日降下浅間Ａ軽石の健屋としての位置づけ- 天明三年浅間災害に関する地域史的研究-」『研究紀要』21 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（印刷中）。
田村知栄子・早川由紀夫 1995「史料読解による浅間山天明三年（1783年）噴火推移の再構築」『地学雑誌』104、６。
長野原町 1976『長野原町誌』上・下巻。
萩原進 1948『草津温泉史』文進社。
萩原進 1986『浅間山天明噴火史料集成Ⅱ』群馬県文化事業振興会。
萩原進 1995『浅間山天明噴火史料集成Ⅴ』群馬県文化事業振興会。
原田恒弘・能登健 1984「火山災害の季節」『群馬県立歴史博物館紀要』５号。
藤原俊六郎・安西哲郎・小川吉雄・加藤哲郎 1998『土壌肥料用語事典』社団法人農山漁村文化協会。
中之条町誌編纂委員会 1983『中之条町誌』資料編。
日本第四紀学会 1996『第四紀露頭集-日本のテフラ』。
能登健 2003年２月８日 象形文化の継承と創世に関する資料アーカイブ・データベース構造に関する打ち合わせ会議 当日配付資料。
MINAKAMI, T　1942「On the distribution of volcanic ejecta (part 2). The distribution of Mt. Asama pumice in 1783.」『Bull. Earthq. Res. Inst.』Vol. 20.
安井真也・小屋口剛博・荒牧重雄 1997「堆積物と古記録からみた浅間火山1783年のプリニー式噴火」『火山』第42巻 第４号。

Ⅱ久々戸遺跡の調査記録

1. 調査の概要

久々戸遺跡は、県道長野原草津口停車場線（橋梁）に伴って平成７年度発掘調査がおこなわれた長野原久々戸遺跡と同一遺跡であることは例言の通りである。本書で扱う部分は29地区56～60区、65～70区、77～80区に該当する。

各調査区は、工事対象の個別に調査が進められたため、時間や調査観点の違いにより、得られたデータの整合性を図るにはやや難があるかもしれない。調査区番号も必ずしも調査順に付してはいないので留意頂きたい。

橋台部分の試掘により吾妻川現河岸の２ｍ下に厚さ２ｍの泥流堆積物を確認した。Ⅰ・Ⅱ区は平成９年度に調査をおこなった。この調査で見つかった畑の畝断面から、降下したAs-A軽石降下の期日を農事と史料の上から検証するにいたった。隣接する平成11年度調査のⅢ・Ⅳ区でも同様に畑の畝断面から噴火に直面した人々の農事を読みとることができる。Ⅲ区では、南側山際に当時の街道である「草津みち」が80ｍの長さで検出された。付近には住居域の存在も示唆されるが、今後の周辺調査の成果を待ちたい。平成10年度調査のⅦ区では、天明泥流が地表面を流下方向に傷つけた痕跡が顕著に記録された。

一部確認トレンチからはAs-BまたはAs-Kkのテフラを検出したが、いずれも下位の遺構面は確認されなかった。

2. 久々戸遺跡の基本土層

久々戸遺跡における基本的な土層は以下の通りである。ここに取り上げたものの他に、さらに下位にはいくつかの土層が見られたが土層柱間で層序を確定しきれずにすべての土層を取り扱うことができなかった。吾妻川の中位・上位段丘に位置する周辺の遺跡で見られる土層に対比できるもので、As-C、As-Dをテフラ分析で確認できたものもある（例えばⅦ区の場合など）が、部分的にしか検出できず、ここでは取り上げられなかった。これらについては、Ⅵ章を参照されたい。

第Ⅰ層　表土

橋脚２地点の確認トレンチでは、河川堆積物の灰色シルト層及び黒褐色砂層の互層（厚さ約２ｍ）がⅡ層上にのる（**久13**）。

第Ⅱ層　暗褐色土（天明泥流堆積物）

Ⅴ区の確認トレンチでは天明泥流堆積物の堆積天端標高を記録することができた。Ⅵ区での様相は、他の調査区において見られるものと比較して色調が明るく、５～10㎝大の礫が多く、それを超える径の礫は見当たらない。Ⅴ・Ⅵ区を除けば、いずれの調査区でも径1.5ｍ程度以上の礫が確認された。

第Ⅲ層　As-A軽石

発泡のよい白色軽石。少量ではあるが20㎜大の同質の軽石を含む。現時点では、降下日時の違いによるユニット分けはできない。（詳細な降下日時については１章４節に記述。）本遺跡ではプライマリーな状態で２～３㎝程度の堆積厚を確認できる。Ⅶ区においては、地表面に平面径５㎝程度のパッチ状に残されたものが確認されているが天明泥流堆積物の営力をうけた痕跡と考えられる。

第Ⅳ層　黒褐色土

小角礫を多く混入している。山崩れによる堆積を起源と考える。地点により20㎝大の亜角礫を含む。Ⅳ′層としたのは人為的な培土層。

第Ⅳa層　暗褐色土

小角礫を少量含み、Ⅳb層を基とし礫が人為的に片付けられた作土。

第Ⅳb層　褐色土

小角礫と褐色土の混土層。５～15㎝の礫を含む。

第Ⅴa層　黒色土

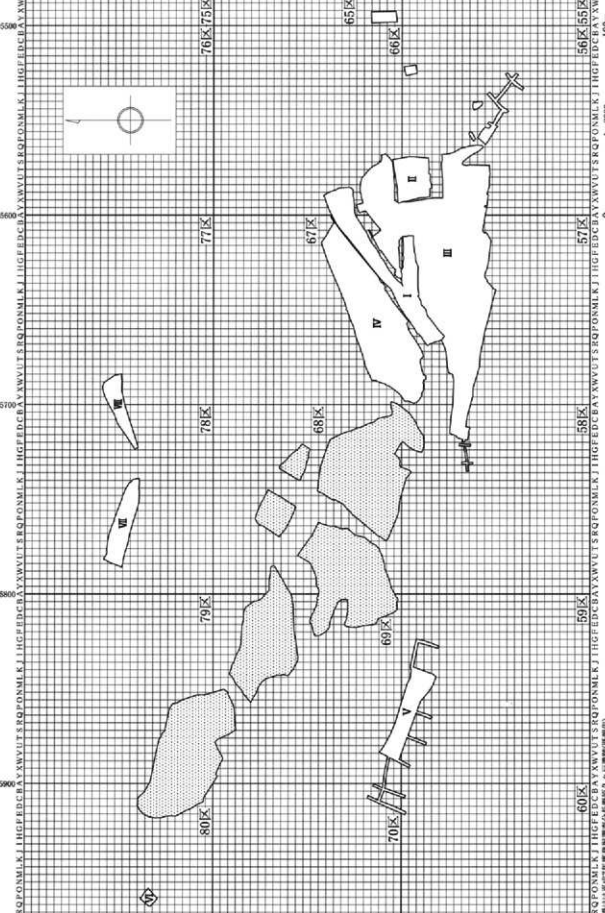
小角礫と褐色土の混土層。15㎝大の礫混じる。

第Ⅴb層　褐色土

褐色土を主体に小角礫を多く含む。

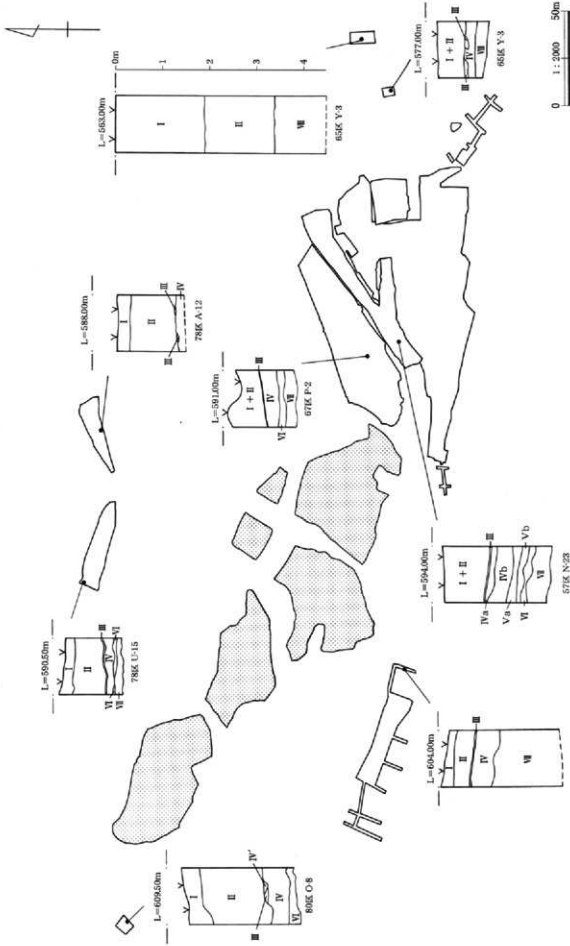
第Ⅵ層　黒色土

黒色味強く、やや光沢を持つ。黒色土層中に火山



図Ⅱ.1　久々戸遺跡グリッド設定図

図II.2 久々戸遺跡位置図（1:2,500「長野原町都市計画図」を使用）



図II.3 久々戸遺跡基本土層図

灰が部分的に見られる。上位から厚さそれぞれ2mm程度で、①灰色土(極細粒)・②暗黄褐色土(極細粒)・③暗黄褐色土(やや粗粒)の3層を含み、他に、黄色及び白色の軽石粒が見られる場合もある。テフラ分析でAs-BないしはAs-Kkの可能性が確認された。

第Ⅶ層　暗黄褐色土

暗黄褐色土と3～5cm大の小礫の混土層。ややボサボサした均質土。砂利状の小礫を多く含む。

第Ⅷ層　黄褐色砂層

5～30cm大の亜円礫である河床礫を多く含む。地点により2m以上の堆積厚が確認できる。

3. 泥流面の遺構と遺物

(1) 畑の全体構造

天明泥流堆積物の下から見つかった畑跡は、最大傾斜の計測値が14～15度に及ぶ傾斜の強い畑と5度未満の緩傾斜の畑に大別される。多くは小礫を含む石畑であるが、畑の外へ(畑の内側の場合もあるが、その場合は取り除くことが不可能な巨礫を核にしている場合が多い。)不要な石をはじき出して積み上げた、現在地元で「ヤックラ」とか「イシヤックラ」と呼ぶ石置き場が目立つ。全長が40mにも及ぼうとするものも確認できる。

畑地景観が甦った調査区内は、草津から須賀尾峠を経て高崎宿へ向かう当時の街道「草津みち」が南斜面を通り、東の山裾に向かっていく。この道は西約1kmで琴橋を経て集落のある長野原へ通じていたと考えられる。貞享三年の検地帳に載る帳付百姓は長野原宿在住者と推定され、耕作へはこの街道を利用したものであろう。草津みちから畑地への降り口と見られるスロープも確認された。

ヤックラの項で記述する通り、Ⅰ～Ⅳ区の調査区では、概ね5つの段(図Ⅱ.24)が確認され、過去の土砂の移動により耕作地形が形成されたことが読みとれる。1段と2段の間の20号ヤックラ、Ⅲ区K13号畑撹乱付近から南側には黄褐色土が耕作土となっており、草津みち同様比較的近い時期の土砂崩れが想定される。また、4段には、黒色味が強く、地点により軽石の混入を特徴とする耕作土が確認される。

等高線に対して垂直方向に一定の単位の幅で区画され、草津みちがその基準となっているようにもみえる。その間口は、概ね15～18m内外である。このことは開墾時の一定の規格性とも考えられ、今後の調査の留意点とすべきであろう。

いずれの畑の場合においても、多くの場合は等高線耕作がなされていたことがわかる。特に傾斜の強い畑地では、この傾斜が理由で地滑り的な客土がおこなわれるため、比較的良好な地味を形成することが指摘される。久々戸遺跡の場合には不要な石は残らず片づけられており、入念に手入れされた耕作地景観が偲ばれる。

特に畑には平坦面を配置した単位畑が確認できる。その広さは概ね200㎡内外で、「五ツカ一反」と今日地元で古老に聞く私的な面積表示と一致する値と近似することが分かる。詳細については、Ⅶ章4節を参照頂きたい。

概ね、本遺跡の畑からは9種類の耕作状況を読みとることができた。これらは、天明三年の浅間噴火災害に伴うAs-A軽石の鍬層としての役割と農事暦を含めた畝断面形状の検証による成果から判読し得るものである。

Ⅴ区では、畝サクの検出ができなかったものの、自然科学分析の結果、耕作のおこなわれていた可能性が提示されたことで畑と確認した(K4号畑)。それ以外の部分でも、①なだらかな傾斜で礫が片付けられていた、②現況は戦前～戦後くらいまで秣場として利用されていた、などの点から被災当時も周辺は秣場などであった可能性が考えられる。古老の聞き取りによれば、かつては一戸あたりにして、馬1頭を飼うにしても、所有する田畑の2～3倍の広さの採草地をもっていたという。このことからすれば、地形により制約を受けるこの地域において、平坦や礫の除去された状況は耕作地として検討すべき要素であり、被災前の耕作地の景観を復元するには必要とされる視点であろう。

表Ⅱ.1　久々戸遺跡　畑計測値等一覧表

＊面積単位は㎡。1歩＝6尺平方で算出。

畑名	単位畑名	単位畑 面積	単位畑 反・畝・歩	単位畑 斜度	単位畑 傾斜面積	単位畑 反・畝・歩	畑面積 畑面積	畑面積 反・畝・歩
K 1 畑		—	・・・	—	—	・・・	—	・・・
K 2 畑		—	・・・	—	—	・・・	—	・・・
K 3 畑		—	・・・	—	—	・・・	—	・・・
K 4 畑		—	・・・	15	—	・・・	—	・・・
K 5 畑		—	・・・	9	—	・・・	—	・・・
K 6 畑	K 6-1畑	—	・・・	5	—	・・・	—	・・・
	K 6-2畑	—	・・・	3	—	・・・		・・・
K 7 畑		609	・6・4	11	620	・6・7	620	・6・7
K 8 畑	K 8-1畑	—	・・・	4	—	・・・	—	・・・
	K 8-2畑	—	・・・		—	・・・	—	・・・
	K 8-3畑	—	・・・		—	・・・	—	・・・
	K 8-4畑	204	・2・1	5	205	・2・2	—	・・・
	K 8-5畑	—	・・・	4	—	・・・	—	
K 9 畑		1007	1・・4	10	1024	1・・9	1024	1・・9
K10畑	K10-1畑	—	・・・	1	—	・・・	—	・・・
	K10-2畑	—	・・・	1	—	・・・	—	・・・
	K10-3畑	—	・・・	1	—	・・・	—	・・・
K11畑	K11-1畑	583	・5・26	2	583	・5・26	583	・5・26
	K11-2畑							
	K11-3畑							
K12畑		—	・・・	1	—	・・・	—	・・・
K13畑	K13-1畑	728	・7・10	12	745	・7・15	—	・・・
	K13-2畑	—	・・・	14	—	・・・	—	・・・
	K13-3畑	—	・・・	14	—	・・・	—	・・・
K14畑	K14-1畑	154	・1・16	2	158	・1・16	638	・6・12
	K14-2畑	482	・4・25	4	483	・4・26		
	K14-3畑							
	K14-4畑							
K15畑	K15-1畑	144	・1・13	3	144	・1・13	609	・6・4
	K15-2畑	464	・4・20	3	465	・4・20		
	K15-3畑							
	K15-4畑							
K16畑	K16-1畑	205	・2・2	4	205	・2・2	558	・5・18
	K16-2畑	179	・1・24	4	179	・1・24		
	K16-3畑	174	・1・22	5	174	・1・22		
K17畑		405	・4・2	10	411	・4・4	411	・4・4
K18畑		—	・・・	8	—	・・・		・・・

＊1 凡例は、表Ⅳ.2を参照。

平面	平坦面＊1 面積	形状	溝	隆み	形状	比高
K6-1平	2.10	円	○	／	—	±
K6-3平	0.56 ≪	(円)	(○)	／	—	(↓)
K7-1平	2.74	不	×	／	—	±
K8-1平	2.71	不	×	／	—	↓
K8-2平	2.50	円	○	／	—	±
K8-3平	2.32	円	○	／	—	±
K8-4平	2.11	不	×	／	—	±
K10-1平	1.28	円	○	凹	溝	↑
K10-2平	2.19	円	○	／	—	↓
K10-3平	2.03	円	○	／	—	↓
K11-1平	3.30	—	—	—	—	—
K11-2平	1.74	円	○	／	—	↓
K11-3平	1.47	円	○	／	—	↓
K12-1平	0.66 ≪	(円)	○	／	—	↓
K13-1平	1.92	不	×	／	—	↓
K13-2平	1.33 ≪	—	—	—	—	—
K13-3平	1.70	円	×	／	—	±
K14-1平	2.09 ≪	円	○	—	—	—
K14-2平	2.33	円	○	／	—	↓
K14-3平	2.01	円	○	／	—	↓
K14-4平	2.24	円	○	／	—	↓
K15-1平	0.90	円	○	凹	棚	↑
K15-2平	1.80	不	○	／	—	↓
K15-3平	2.08	円	○	／	—	↓
K15-4平	0.62 ≪	(円)	○	／	—	—
K16-1平	1.14 ≪	円	○	凹	円	↑
K16-2平	1.49	円	○	／	—	↓
K16-3平	1.48	円	○	／	—	↓
K18-1平	1.54 ≪	(円)	○	／	—	±

表Ⅱ.2　久々戸遺跡　畝幅計測値等一覧表

＊尺換算は曲尺：1尺＝10／33mを用い、「参考」は同畑内の別地点の計測値を指す。

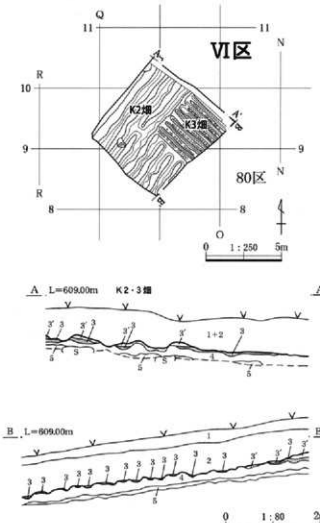
畑名	単位畑名	畝幅：m	相当尺寸
K 1 畑		0.48	1.57
K 2 畑		0.90	2.98
K 3 畑		0.49	1.61
K 4 畑		-	-
K 5 畑		0.47	1.54
K 6 畑	K 6-1畑	0.45	1.50
	K 6-2畑	0.47	1.54
K 7 畑		0.58	1.90
	参考	0.59	1.93
K 8 畑	K 8-1畑	0.48	1.57
	K 8-2畑	0.48	1.59
	K 8-3畑	0.49	1.62
	K 8-4畑	0.48	1.58
	K 8-5畑	0.49	1.61
K 9 畑		-	-
K10畑	K10-1畑	0.50	1.64
	K10-2畑	0.48	1.60
	K10-3畑	0.50	1.63
K11畑	K11-1畑	0.52	1.72
	K11-2畑	0.51	1.70
	K11-3畑	0.52	1.71
K12畑		-	-
K13畑	K13-1畑	0.51	1.67
	K13-2畑	0.53	1.75
	K13-3畑	0.54	1.78
	参考1	0.52	1.72
	参考2	0.48	1.60
	参考3	0.49	1.63
K14畑	K14-1畑	0.51	1.67
	K14-2畑	0.49	1.62
	K14-3畑	0.49	1.62
	K14-4畑	0.50	1.66
K15畑	K15-1畑	0.53	1.73
	K15-2畑	0.53	1.74
	K15-3畑	0.53	1.75
	K16-1畑	0.53	1.74
K16畑	K16-2畑	0.53	1.76
	K16-3畑	0.54	1.78
K17畑		-	-
K18畑		0.52	1.71
	参考1	0.51	1.68
	参考2	0.51	1.69

Ⅵ区では、極限られた範囲の調査であったが、畑の境界部分が検出された。Ⅶ区では、畑の一部が確認され、遺跡一帯の畑地の広がりが確認された。

畑遺構及び平坦面に関する計測値等については、表Ⅱ.1及び2に掲載する。

（2）畑

Ｋ１号畑はⅧ区で確認された。40㎝の表土、80㎝の天明泥流堆積物の下位から検出されている。確認部分が僅かな面積であったことなどから、被災当時の耕作状況がどうなっていたかなどについては不詳であるが、本遺跡における畑遺構の広がりが確認されることとなった。遺構面に残された撹乱は天明泥流の流下に伴うものと推定される。



図Ⅱ.4　久々戸遺跡　Ｋ２・３号畑

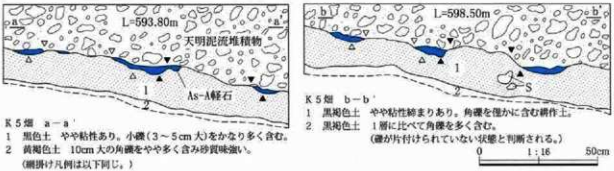
Ｋ２号畑と**Ｋ３号畑**はⅥ区で検出されたものである。いずれも、黒色味の強い耕作土であった。前者は畝幅が３尺相当と広く、As-A軽石降下後に培土がおこなわれた痕跡が確認できる。後者は、平面図に軽石の密度の濃い部分を図示しているが、作物の痕跡かどうかの確証は得られていない。

Ｋ４号畑はⅤ区で検出されたものである。周辺は調査時には礫が片付けられた状況が観察され意図的に礫が除去されたものと判断した。しかしながら、畝サクの検出がなされず人為的な痕跡は調査区西端に集石状のヤックラと判断した27号ヤックラの存在をみるだけであった。調査時には、畑としての判断ができなかったが、周囲と異なる平坦な範囲の輪郭のみを図化した。その後、**久19**の分析結果により、その耕作地としての可能性を追求することとなった。ヤックラの周辺で採取した２点については、他試料との明らかな差異がみられ、イネ、ムギ類の栽培が示唆された。このことから耕作地であった可能性が高いと判断し、本書の中では畑遺構として報告する。また、周辺における景観の復元については前述した通りである。

Ｋ５号畑はⅣ区の西端に位置する。草津みちの段下に位置し、Ⅲ区17・19号ヤックラに囲まれる部分と同一の畑と判断する。東側は区画溝が廻る。1995年に調査がおこなわれた長野原久々戸遺跡Ｄ区東側の２・３号円形遺構を配する畑と同一遺構と考えられる。図化精度の違いから平面図を割り当てても、畑全体の構造復元は難しいが、18m×45m程度の規模の畑でさらに２基の平坦面を持っていたことが推定される。

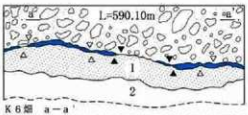
Ｋ２・３号畑

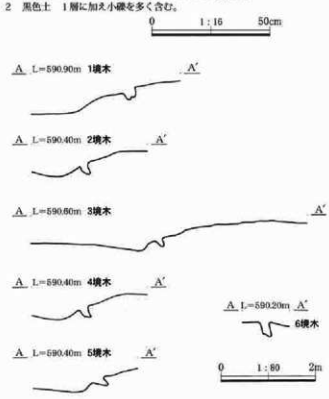
1 暗褐色土　表土。締まり弱い。
2 褐色土　天明泥流堆積物。Ⅰ～Ⅳ区でみる天明泥流堆積物に比べて色調明るく５～10㎝大の円礫を多く含む。
3 As-A軽石
3' As-A軽石混土層　As-A軽石が暗褐色土と塊状に存在する。
4 暗褐色土　やや明るく軟質土。５㎜大の小礫を含む。均質で耕作に伴う変質土はない。
5 暗褐色土　色調暗い。２㎜大の砂粒を含む。均質で軟質。場合によっては、４層と同質であり、４層が耕作に伴う変色の可能性がある。

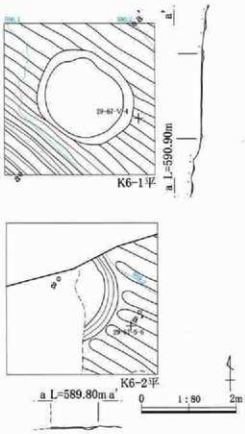


図Ⅱ.5 久々戸遺跡 K5号畑

K6号畑は、K5号畑との地境がおよそ30cmの段差となり、さらに区画溝が廻る。畝の形状は高低差が少なく、軽石はほぼ畝サク全面に堆積する状況で検出され土用の培土がおこなわれていない状況を呈していると考えられる。**K6－1号畑**の南端の区画溝に隣接する**K6－1号平坦面**は全面に3cm程度の厚さで軽石が堆積し、溝が一周する。**K6－2号平坦面**は**K6－2号畑**に位置し、その大半を撹乱により削平されていたが、溝が廻る形状のものと考えられる。部分のみの検出であるが畑の区画の中で単位畑の存在を提示する上での価値は大きい。なお、K7・8号畑との段差に境木の根痕が確認された。樹種等詳細については不明である。

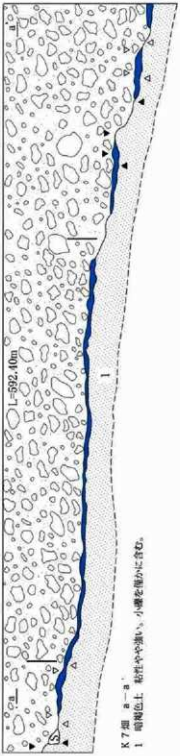


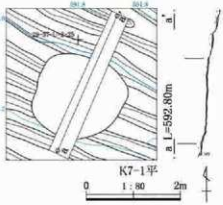


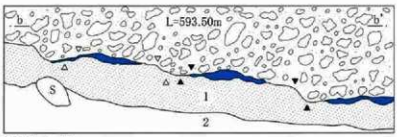


図Ⅱ.6 久々戸遺跡 K6号畑及びK6－K8号畑1～6号境木

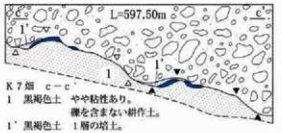
Ｋ７号畑は、17・23号ヤックラ及び法面の段差により区画され、区画溝が廻る。Ｋ６・８号畑との地境には境木痕が確認された。Ｋ７-Ｋ８号畑１号境木からＫ６号畑へ向かう畝までを畑の範囲と判断した。Ｋ８号畑との区分けの根拠は，境木の存在、畝幅の差異である。**Ｋ７－１号平坦面**は、それよりも北側の畝サク部分の単位畑を担うものと考える。敢えて、単位畑に分割し得なかったが、これより北側の畝サクの方向が乱れ、いわゆる「ヒコザク」となっている部分から北側を単位畑と考えた場合、面積は他の単位畑とほぼ対応する値をとる。畝断面図から確認できる様に、南のⅢ区側の畝サクでAs-A軽石降下後の培土が確認される。一方、北のⅣ区側では一番ザクが終了しAs-A軽石降下後人為的な耕作の痕跡がなく泥流被災をむかえたと考えられる。単位畑や詳細な作業段階については、主要部分がⅢ区とⅣ区の間の攪乱部にあたるため不詳である。

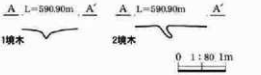






K７畑　b－b'
1　暗褐色土　3cm大の小礫を僅かに含み粘性あり。
2　暗黄褐色土　10～20cm大の礫を多く含む。



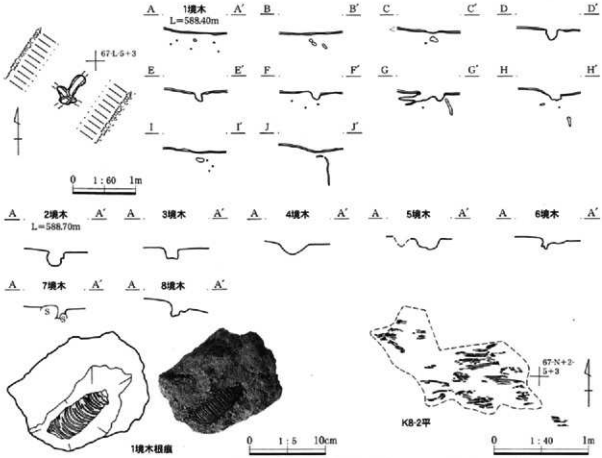


図Ⅱ.7　久々戸遺跡　Ｋ７号畑及びＫ７-Ｋ８号畑１・２号境木

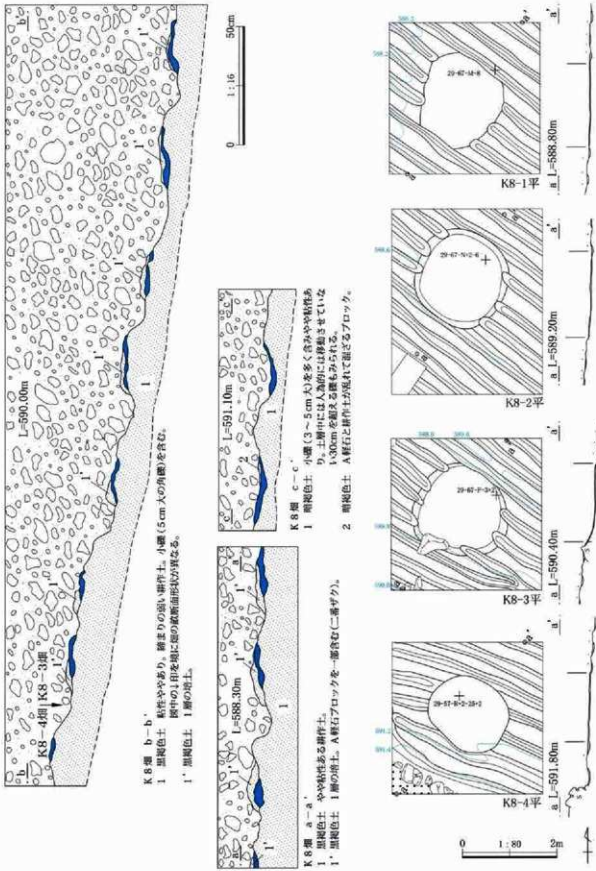
K８号畑は23・24・26号ヤックラに囲まれた範囲から北側に位置する。**K８－１～４号畑**には規則正しく**K８－１～４号平坦面**が配置されている。K８－３号平坦面の南のヒコザクからK７号畑に区画される範囲をK８－４号畑の範囲と考えると、単位畑の広さは他の畑と比較して同等な測定値をとることが分かる。なお、他の単位畑については測定不能としたが、幅20m平坦面間の距離10mを概測できる。

K８－５号畑では断面記録を残すことができず平面図によるレベルから、畝の高低差が最大で３cm程度であり、土用の培土がおこなわれなかったと判断する。K８－５号畑との区分けの根拠は、規則正しく配置されているK８－１～４号畑のK８－１～４号平坦面間の間隔にもよる。K８－１～３号畑では山側にAs-A軽石降下後の二番ザクの痕跡を残している。一方で、K８－４号畑については、軽石降下後の培土がおこなわれた痕跡が確認されず、「ヤリザク」などがおこなわれていた可能性がある。つまり、K８号畑においては、３種の断面形状が残されることになる。なお畝断面図b－b′において、K８－４号畑の断面は、畝頂部の軽石のみしか記録できなかったが同c－c′と同様な形状を留めていた。

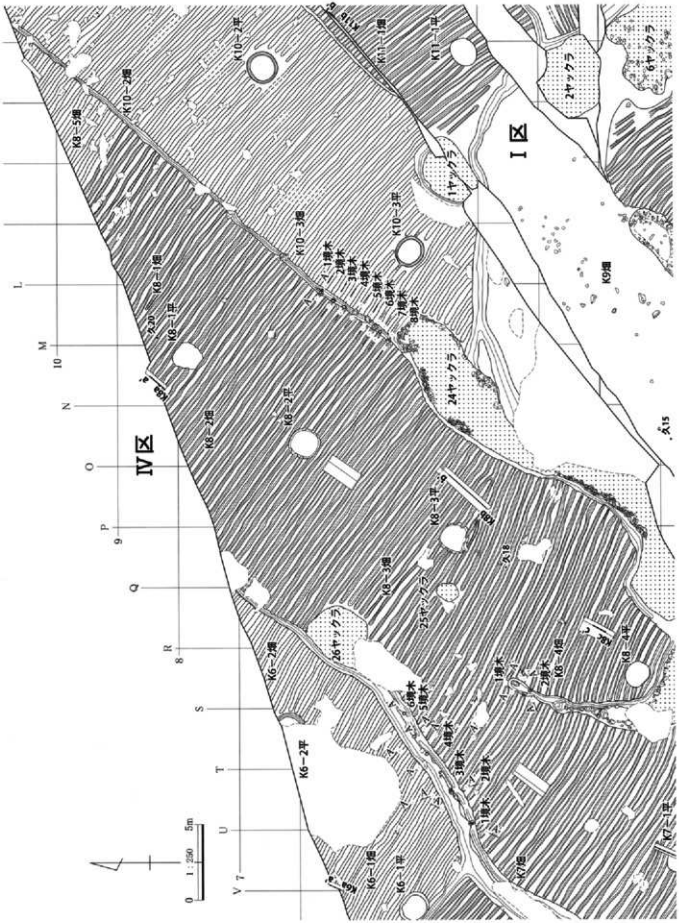
K８－２号平坦面では、平坦面の全面に良好な状態で長葉脈をもつ丈45～50cm程の作物の痕跡が確認できた。残念ながら倒伏方向を確認せず、部分的な記録に留まったが、平坦面全面に確認できたことは平坦面の性格を解明することに貢献できるものと考えられる。また、K10号畑との地境に境木痕の根痕を確認した。写真及び図化記録した１号境木の試料ブロックは、横方向に走る縞などの特徴から桑の根皮と判断できる直径４cm程の空洞であった。北東壁の10cm毎の断面を記録した。K８－１号畑は、K８－１号平坦面とK７－１号平坦面の面積の相関から同一畑の可能性もあるが撹乱によるK７－１号畑のデータ不足から確定はできない。



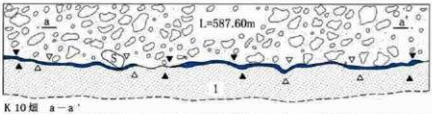
図Ⅱ.８ 久々戸遺跡 K８－K10号畑１～８号境木及び境木の根痕、K８－２号平坦面の作物痕跡



図Ⅱ.9 久々戸遺跡 K8号畑

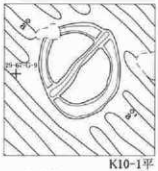


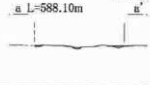
図Ⅱ.10　久々戸遺跡　Ｋ８号畑平面図

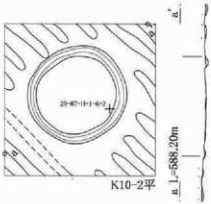


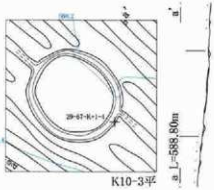
K10畑　a－a'
1　黒褐色土　粘性やや強く，5cm大の角礫を僅かに含み，1～2mm大の灰白色軽石を少量含む。
（畝とサクの判断は平面からの判断も加味した。）

0　1:16　50cm









0　1:80　2m

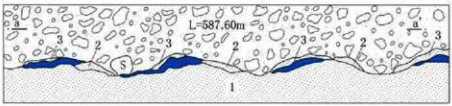
図Ⅱ.11　久々戸遺跡　K10号畑

K９号畑は，１～５・20・21号ヤックラなどに囲まれているが，２～３cmの軽石が一様に堆積していた。畝立てがなされておらず，耕作が被災当時にはおこなわれていなかった畑と判断した。開墾途中，ないしは20号ヤックラの項で述べる通り，時間的に近く被災時よりも以前の時期に土砂崩れが起こっていたことを示す可能性がある。４号ヤックラや５号ヤックラが内側に存在する。

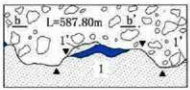
工事用残土搬出入による撹乱及び３つの調査区に分断しての調査での検出作業などの理由によりこれ以上の検証を得るにはいたらなかった。K17号畑にみるような，次の作物の播種期にあたる畑であるとすれば，ソバ畑の可能性がある。As-A軽石降下日時の限定と軽石が一様に堆積することからすれば，播種がおこなわれる前もしくは直後の状態であることは想定できる。

K10号畑は，調査区内では**K10－１～３号畑**の単位畑に区分される。畝断面からは，土用の培土がおこなわれていない状況が読みとれる。**K10－１～３号平坦面**の３つの平坦面の間隔からみると調査区際に新たな平坦面が存在するものとも考えられる。撹乱部分がその一部の可能性もある。K10－１号平坦面はその形状が他とは異なり，中央に溝状の窪みを有している。仮に単位畑の幅を14m，平坦面間の間隔から奥行きを14mとすると，他の単位畑の測定値と一致する値をとる。北東の撹乱は泥流の流心に近いことが理由と考えられる。

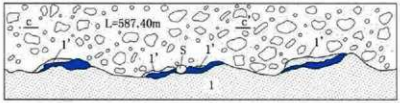
K11号畑は，**K11－１～３号平坦面**が配置されている。K11－１号平坦面（実測不備）については，調査時における遺構認識の不足から誤差が含まれ



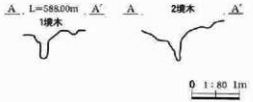
K 11畑　a－a'
1　黒褐色土　耕作土。粘性やや強く5cm大の角礫を僅かに含み，1～2mm大の灰白色軽石を含む。
2　黒褐色土　土層中最下部に鉄分の凝集が観察されることにより1の土層を母体とする培土痕跡と考えられる(一番ザク)。
3　黒褐色土　1層の培土(A軽石降下後の二番ザクに相当)。



K 11畑　b－b'
1　耕作土。
1'　耕作土(培土)。



K 11畑　c－c'
1　黒褐色土　締まりやや弱い。白色軽石を極僅かに含み粘性ややあり。礫をほとんど含まない。
1'　黒褐色土　1層の培土。

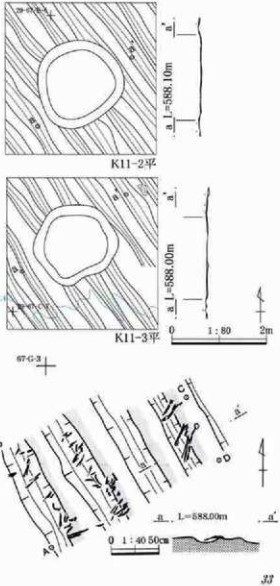


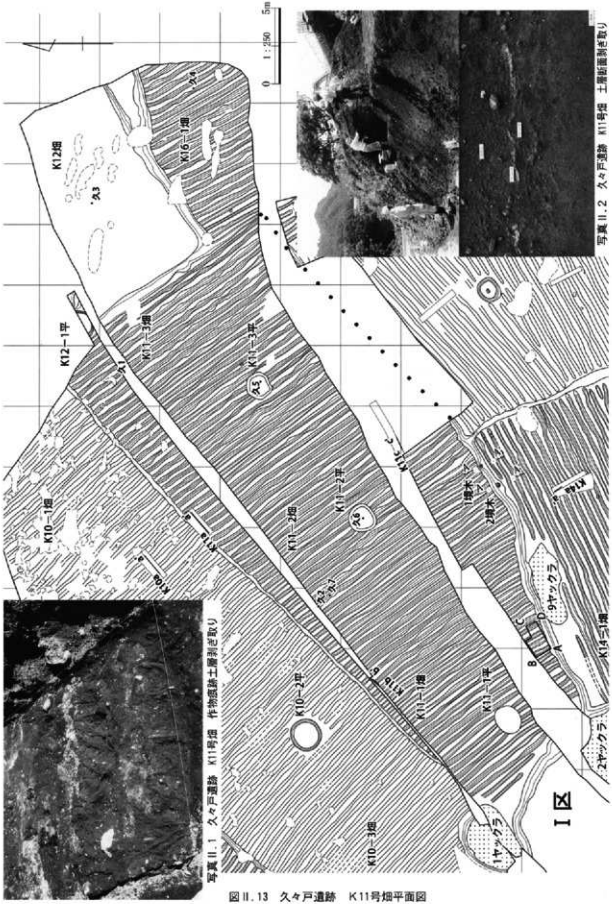
図Ⅱ.12　久々戸遺跡　K11号畑・作物痕跡及びK11-K14号畑1・2号境木

る。また、K11号畑と1号ヤックラ付近の遺構図に関しては、整理段階で測量精度からくる修正不能な箇所がある状況を加味頂きたい。

K10号畑との境を呈する踏み分け道には、1号ヤックラに向かうものと考えられるが、調査年度が異なるなどの不整合により、不確定である。範囲には一部推定を含むが、面積を583㎡と計測することができる。このことにより**K11-1～3号畑**の単位畑の広さは平均195㎡内外となる。K14号畑との境には境木痕が確認された。また、部分的な精査により株痕の検出作業をおこなったが、株痕と思われる窪みと鉄分凝集による作物の痕跡を確認した。断面の観察をおこなっても明確な確認はできなかったが、倒伏方向は吾妻川の流下方向と異なっている。このことは天明泥流の流下方向を把握する上で重要である。倒伏方向を含め天明泥流の流下とその痕跡に関しては、Ⅶ章の考察を参照頂きたい。

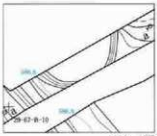
この畑の畝断面形状は、As-A軽石降下後の二番ザクにより、土用の培土が終了しその後泥流に被災した状況を示している。K11-1号畑では畝断面c－c'及び作物痕跡の一部について土層剥ぎ取り保存してある。(平面図網掛けは培土痕跡位置。)




K12畑
K12—1平
K10—1畑
K10—2平
K10—3畑
K11—1畑
K11—2畑
K11—3畑
K11—1平
K11—2平
K11—3平
K11—4畑
K11—5畑
K11—6畑
1井水
2井水
1ヤックラ
2ヤックラ
3ヤックラ
A1
A2
A3
A4
A5
A6
A7
A8
A9
A10
A11
A12
A13
A14
A15
A16
A17
A18
A19
A20
A21
A22
A23
A24
A25
A26
A27
A28
A29
A30
A31
A32
A33
A34
A35
A36
A37
A38
A39
A40

K12号畑は、K11号畑同様遺構ラインの詳細について不備があるかもしれない。また、全面に攪乱が多く**K12- 1号平坦面**については、主要部分の調査と異なる調査区で検出されたため、存在を確認するのみとなってしまった。周辺調査時の詳細調査を待ちたい。K11号畑との境には踏み分け道が存在している。なお、現況では、この東側では数mで断崖となるため、天明泥流の流心部の流下により浸食作用が顕著であった可能性を指摘しておきたい。

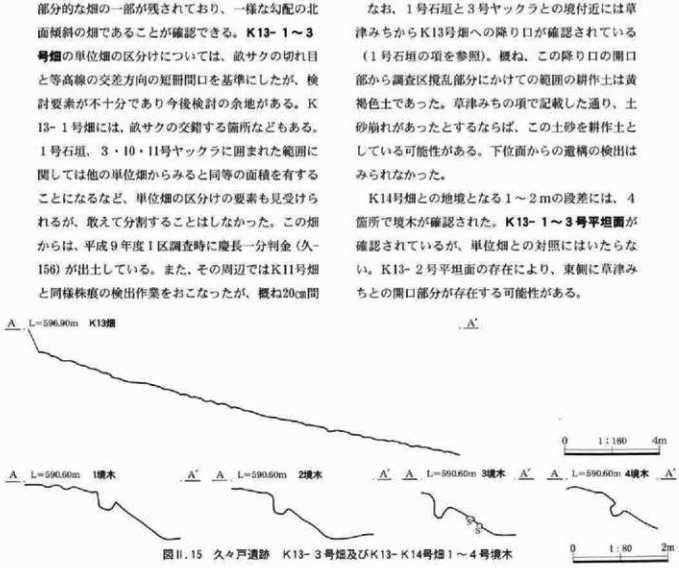
K13号畑はその主要部分が攪乱により削平されており、畑としての区割りや範囲、単位畑、平坦面など詳細については不詳な点が多い。16・11・3号ヤックラが等高線に直行して存在する中に位置する。攪乱部分についても、11号ヤックラ付近には浮島状に部分的な畑の一部が残されており、一様な勾配の北面傾斜の畑であることが確認できる。**K13- 1～3号畑**の単位畑の区分けについては、畝サクの切れ目と等高線の交差方向の短冊間口を基準にしたが、検討要素が不十分であり今後検討の余地がある。K13- 1号畑には、畝サクの交錯する箇所などもある。1号石垣、3・10・11号ヤックラに囲まれた範囲に関しては他の単位畑からみると同等の面積を有することになるなど、単位畑の区分けの要素も見受けられるが、散えて分割することはしなかった。この畑からは、平成9年度I区調査時に慶長一分判金（久-156）が出土している。また、その周辺ではK11号畑と同様株痕の検出作業をおこなったが、概ね20cm間隔で直径4cm内外の株痕と思われるAs-A軽石が集中する窪みを確認した。断面の観察をおこなっても明確な根痕の確認はできず株痕である確証は得られていない。



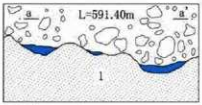
図II.14 久々戸遺跡 K12号畑

なお、1号石垣と3号ヤックラとの境付近には草津みちからK13号畑への降り口が確認されている（1号石垣の項を参照）。概ね、この降り口の開口部から調査区攪乱部分にかけての範囲の耕作土は黄褐色土であった。草津みちの項で記載した通り、土砂崩れがあったとするならば、この土砂を耕作土としている可能性がある。下位面からの遺構の検出はみられなかった。

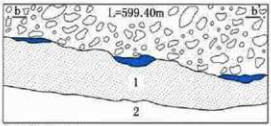
K14号畑との地境となる1～2mの段差には、4箇所で境木が確認された。**K13- 1～3号平坦面**が確認されているが、単位畑との対照にはいたらない。K13- 2号平坦面の存在により、東側に草津みちとの開口部分が存在する可能性がある。



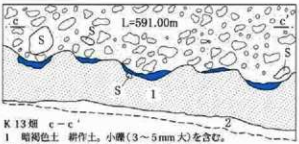
図II.15 久々戸遺跡 K13- 3号畑及びK13- K14号畑1～4号境木



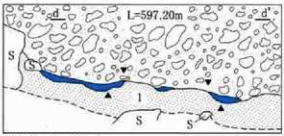
K 13畑　a－a'
1　耕作土。



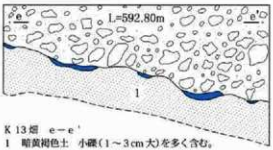
K 13畑　b－b'
1　黄褐色土　やや粘性のある耕作土。角礫(3～5cm)を
　　やや多く含む。
2　黄褐色土　1層に加えさらに角礫を多く含む。



K 13畑　c－c'
1　暗褐色土　耕作土。小礫(3～5mm大)を含む。
2　暗褐色土　1層に加え，5cm大の角礫を含む
　　(畑耕作土の礫を片付けていない土)。

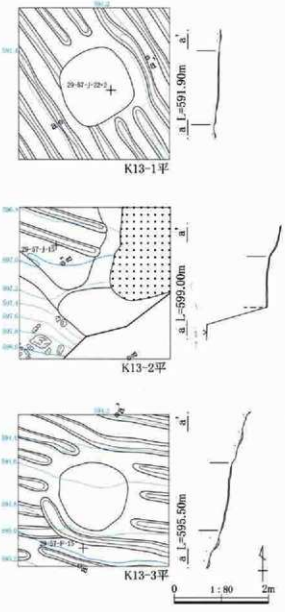


K 13畑　d－d'
1　黄褐色土　耕作土。角礫(5～30cm大)を含む。やや粘性あり。



K 13畑　e－e'
1　暗黄褐色土　小礫(1～3cm大)を多く含む。

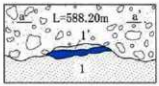
0　1:16　50cm



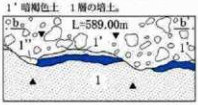
図Ⅱ.16　久々戸遺跡　K13号畑・K13-1号畑株痕及び農具一分判金出土地点

図Ⅱ.17　久々戸遺跡　K13・14号畑平面図

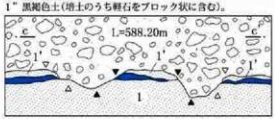
K14号畑は、畝サクの方向の異なる**K14- 1号畑**とその南に位置する**K14- 2～4号畑**の4枚の単位畑で構成される。**K14- 1号平坦面**はK14- 2号畑に配され、**K14- 2～4号平坦面**の3基と形態が異なるが、各単位畑の面積（159㎡）、各平坦面の面積（2.0㎡強）や配置状況、畝断面形状（As-A軽石降下後の埋土終了後の被災）、畝幅（1尺6寸相当）など、別表の通りの単位畑の構成状況を把握することができる。畝断面形状は、前述の通り、As-A軽石降下後の埋土終了後に被災したことは明らかであるが、一番ザクと二番ザクの判断し難い断面形状を呈している。耕作者による違いなのか、耕作の手法的な違いなのかは不明である。



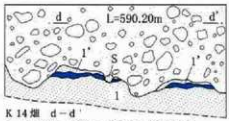
K 14畑　a－a'
1　暗褐色土　3～5mm小礫を少量含む。
　　やや粘性ある 耕作土。
1'暗褐色土　1層の埋土。



K 14畑　b－b'
1　黒褐色土。
1'黒褐色土(埋土)。
1''黒褐色土(埋土のうち軽石をブロック状に含む)。

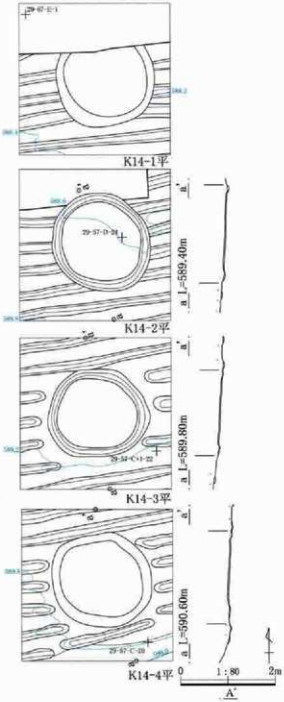


K 14畑　c－c'
1　黒褐色土　耕作土。白色軽石を僅かに含む。やや粘性あり。
1'黒褐色土　1層の埋土。



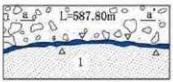
K 14畑　d－d'
1　黒褐色土　耕作土。粘性締まりややあり。
1'黒褐色土　1層の埋土。

0　1:16　50cm

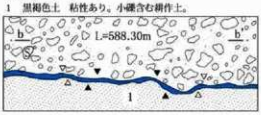


図Ⅱ.18　久々戸遺跡　K14号畑

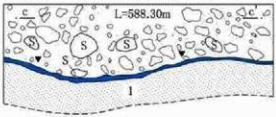
K15号畑は畝断面形状からみる通り、畝サクの高低差が少なくAs-A軽石は部分的には厚薄があるものの、概ね均一に堆積しており、土用の培土がおこなわれずに被災した状況を呈している。**K15-1号畑**はK14号畑の場合と同様に畝サクの方向が他の単位畑と異なっている。都合、**K15-2～4号畑**に加え4枚の単位畑に4基の平坦面が存在すると考える。このことから、単位畑あたりの面積は152㎡となり、K14号畑同様に他の例とは異なる。畝幅は各単位畑で共通する値をとっている。K15-3・4号畑の境は未確定である。**K15-1号平坦面**には、中央に窪みがあることが特徴としてあげられる。また、**K15-2・3号平坦面**は互いに近接する。K15-2号平坦面については、調査時に不確定ながら平坦面としたもので、撹乱の跡である可能性も高い。整理段階で判断がつけられなかったので現場判断を優先した。**K15-4号平坦面**との間隔等を加味すればK15-2・3号平坦面の間に単位畑であるK15-2・3号畑の境があるように考えられる。K16号畑との境



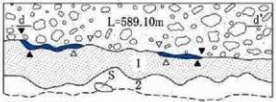
K15畑　a－a'
1　黒褐色土　粘性あり。小礫含む耕作土。



K15畑　b－b'
1　黒褐色土　やや粘性あり。軽石粒を僅かに含む。

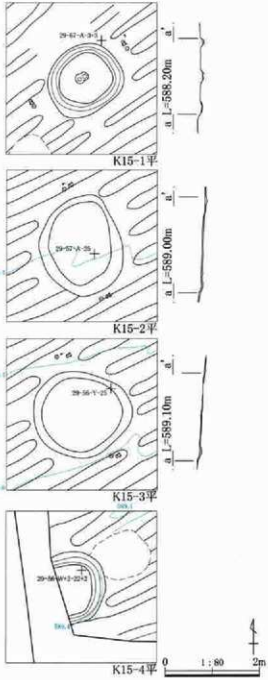


K14畑・K15畑　c－c'
1　黒褐色土　やや粘性あり。軽石粒を僅かに含む。



K15畑　d－d'
1　黒灰褐色土　やや締まりあり。白色軽石粒をやや多く含む。
　　下層に赤色の鉄分凝集あり。
2　黒灰褐色土　1層と同様でやや色調明るい。

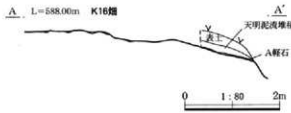
0　1:16　50cm



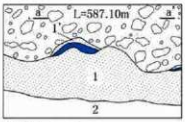
図Ⅱ.19　久々戸遺跡　K15号畑

である段差に境木が３箇所で見つかっているが、図化記録にはいたらなかった。また、K15号畑とK16号畑の段差の不良な残存状況は天明泥流による可能性が高い。

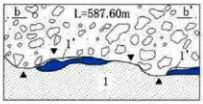
K14号畑と本畑は隣接し、「単位畑の広さが異なる」という共通する点で着目しておく。K14・15号畑の面積は合計1247㎡を測る。これをK15号畑の平坦面が３基か４基か、または畑は３枚か４枚かが不明確であることから、両畑がそれぞれ仮に３つの単位畑で構成されているという仮定をすると、６で除し207㎡の単位畑の面積を得ることになる。意図する単位面積と平坦面の数が一致しない理由は畑の形態の変化として、次の点を指摘しておきたい。①それぞれの畑は天明泥流被災時には異なる耕作形態がとられていた、②２つの畑に踏み分け道が存在していることも２筆に分けられていると考える判断要素である、③畝幅の微妙な数値からは、耕作者ないしは作物が異なることを窺い知ることができる、④開墾時には６つの単位畑で構成されていた１枚の畑が、その後２分割された可能性がある、⑤K13・16・17号畑とは明らかな段差があり、等高線方向に短冊形が延びる形状をとっていないことから開墾～天明三年までに分割されたと考えると自然である、⑥地形的に制約がある中で、２筆で1200㎡程の広さに面積を揃えている、⑦平坦面の配される個数は概ね開墾の単位を遵守し、その後の耕作形態により変化してきた可能性がある、⑧K11号畑の600㎡の面積とも対応する、などである。



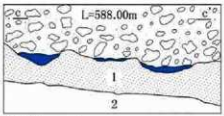
図Ⅱ.20 久々戸遺跡 K16号畑



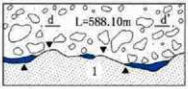
K 16畑　a－a'
1　黒褐色土　耕作土。やや粘性あり。
　　小礫を含む。
1'　黒褐色土　1層の培土。
2　黄褐色ローム　締まりやや強い。
　　黄色軽石を僅かに含む。



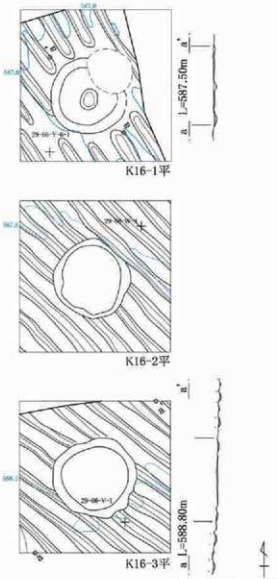
K 16畑　b－b'
1　黒色土　やや粘性あり。小礫を含む。
1'　黒色土　1層の培土。

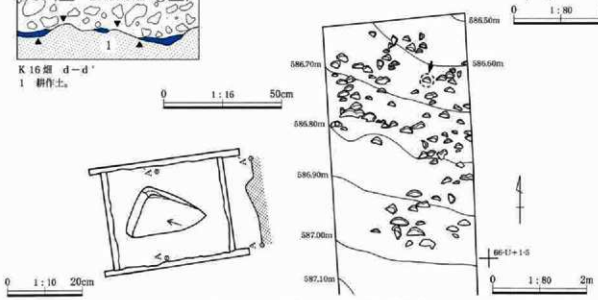


K 16畑　c－c'
1　黒色土　耕作土。やや粘性あり。小礫を含む。
2　黄褐色ローム　締まりやや強い。黄色軽石を僅かに含む。



K 16畑　d－d'
1　耕作土。



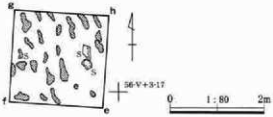


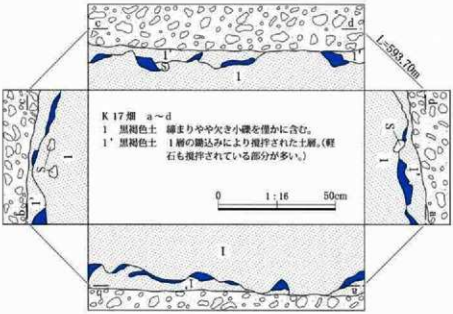
図Ⅱ.21　久々戸遺跡　K16号畑及び耕具痕

K16号畑は、**K16- 1～3号畑**は耕作状況が異なることから3単位に区分けされ、K16- 1・2号畑はAs-A軽石降下後、土用の培土終了後に被災した状況、K16- 3号畑は培土終了後にAs-A軽石の降下その後被災した状況を呈している。つまり、3単位畑の中では、僅かな期間の中で耕作状況の進捗状態と軽石降下を示していることになる。畝幅は同数値を測る。各単位畑の面積算出は、K16- 3号畑の範囲確認の拡張作業と断崖と現況地形の対照により範囲を推定した。拡張作業で確定した部分は南東端のみであり、推定は北側部分が広がる可能性等を含んでいて実際の面積は多少増加すると考える。**K16- 1～3号平坦面**が各単位畑に整然と配置され、K16- 1号平坦面には中央部分に窪みが確認される。K16- 3号畑において天明泥流による遺構面の押圧痕跡が見られた。作物の痕跡の倒伏方向と併せて、天明泥流の流下に関する知見として注目しておきたい。また、K16号畑の南側は、耕作されていない平地が確認できる。土盛りの存在などが見られるが、広い耕作地を確保する意味合いからすれば、空白地としておくのは疑問を抱かざるを得ないが、耕作地の面積を規定値に合わせようとする意図が窺えるとするならば興味深い。調査時点で、北崖側の範囲確認がなされなかったことが悔やまれるが、面積として最小値を推定値とした。

また、耕作土に関して部分的におこなった確認トレンチの精査作業で、耕具痕の検出を確認した。耕作土除去後下位の黄褐色土に残された、部分的な耕具の耕作痕である。これについて、平面実測及び石膏型取りをおこなった。型取りの分析から、地面に幅12cmの耕具がN50°Eの方向へ南西から北東側が深くなる状態で刃が入った痕跡と判断される。石膏型の実測図（木枠が付く）は縦型である。

K17号畑は、平面的にはK9号畑等と同様に畝サクを認めない表現がなされる。表土掘削後の遺構検出作業時には状況を判断できなかったが、断面図に見るようにAs-A軽石がブロック状に鋤込まれており、明らかにAs-A軽石降下後に人為的に攪拌された痕跡を呈している。どの方向と順序で鋤込みがおこなわれたかは不詳であるが、N15°Wの走方向にAs-





図II.22 久々戸遺跡 K17号畑及び鋤込み痕

A軽石ブロックが確認でき、この方向でAs-A軽石降下後、鋤込み作業がおこなわれたことが看取される。なお、平面図e～hはAs-A軽石ブロックを含んだ耕作土の検出状況図である。網掛けはAs-A軽石ブロックを示す。

この畑では、計測された面積はほぼ400㎡の値をとり、久々戸遺跡内で分析集約された単位畑の規格に当てはまる値をとる。開墾時の地積に関して、詳しくは第Ⅵ章4節を参照頂きたい。

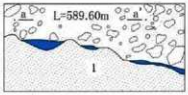
K18号畑の東には2条の踏み分け道、ないしは根切りの溝が存在している。東側には、礫のある程度片付けられた開墾途中を思わせる地面が広がっている。溝はこれらに起因する可能性があるが、詳細は不明である。また、排水を意図した可能性もある。14号ヤックラも確認されていて開墾に関しての関連で注目できるが、その詳細は不明である。畑の全体の形状は東西に扁平で南北に長い形状をとっている。

Ⅱ区とⅢ区の境界部分は、調査時期が異なり周辺工事の削平により畑の中心部分を失っている。そのために詳細については不詳となってしまった。Ⅲ区の南側の調査区外については、この畑がどの様な構成になっているか、あるいはどれくらいの面積となっているかについてを把握する上で、重要である。今後の周辺調査で明らかにされる必要がある。

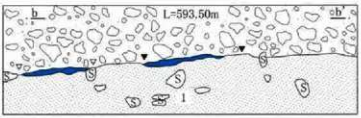
畝の断面形状からは、土用の培土終了後As-A軽石降下、その後天明泥流により被災した状況と判断できる。3箇所で計測した畝幅は、いずれもほぼ同一値をとる。このことから、1枚の畑である可能性が高い。しかしながら、Ⅱ区とⅢ区で畝の走行が異なっており、削平された部分の構造が興味を引く部分である。

K17号畑とは、明確な踏み分け溝と僅かな段差があるが、両畑が続きの畑と敢えてしていないところが、面積を意識しての開墾の結果かもしれない。今後の類例と検証の蓄積が求められよう。

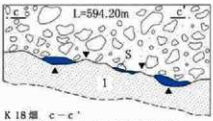
K18-1号平坦面が確認されているが、他の平坦面の存在や単位畑など分析のための範囲確定のデータが得られなかった。Ⅱ区とⅢ区の境界部分である削平部分には平坦面があった可能性がある。



K 18畑　a－a'
1　耕作土。

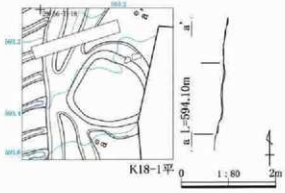


K 18畑　b－b'
1　黒色土　握り拳大の角礫をやや多く含む。



K 18畑　c－c'
1　黒褐色土　1cm大の小礫を少量含む。
やや粘性ある耕作土。

0　1:16　50cm



図Ⅱ.23　久々戸遺跡　K18号畑

(3)ヤックラ

ヤックラは、不要な礫を片付けておいた場所であり、現在この地方で見られる畑地景観の特徴でもある。計測値等については表Ⅱ．3を参照頂きたい。段を形成するための土砂の移動とその開墾に伴う、礫の片付け作業が畑開墾の要素となる。そのために、地形による区分けも耕地を検討する材料となるものと考える。そこで、久々戸遺跡Ⅰ～Ⅳ区における遺跡内の段を図Ⅱ．24の通り１～５段と仮称し、その地形における位置に従い、記述したい。

図Ⅱ.24　久々戸遺跡　Ⅰ～Ⅳ区　１～５段位置図

１段と２段の際に構築されたヤックラは、草津みちに隣接するものと段下の畑に沿って築かれたものに分けられる。この段差に位置するものは、**16・11・3・20・17・19号ヤックラ**である。

16号ヤックラは調査区法面際に平坦面を確保している。最下部の北側部分は５段の石積みが見られる。11・3・17号ヤックラは地形の等高線に直行するように開墾される畑の側を形成するように、傾斜に直行して築かれている。11号ヤックラは、撹乱の南北で寸断されていると考えたが、別個のものとも考えられる。北側については、10号ヤックラと同様な形態のものかもしれない。３号ヤックラは、一部残土工事により撹乱を受けているものと考えられるが、長さ50m近くにわたっているものと考えられる。側には大きめの礫を積み内側に、握り拳大の礫を投げ込んでいる様子が看取される。規格性と作業手順が読みとれる。キセルの出土があり、畑開墾の時期決定の材料になる可能性もある。

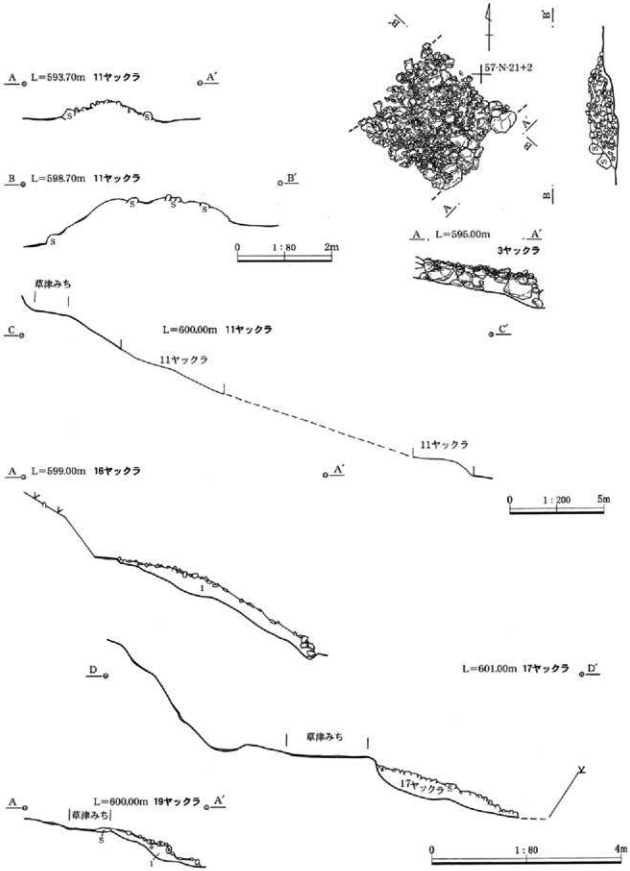
また、草津みちと１号石垣との間にはK13号畑へのスロープが存在している。17号ヤックラも同様な形態である。20号ヤックラは草津みちの項で記載したとおり、他のヤックラよりも時期の新しい可能性を含んでいる。草津みちの項を参照されたい。19号ヤックラは、Ｋ５号畑に隣接するが、詳細は不明である。

２段と４段の際に構築されたヤックラは、**12・6・2・1・24・23・5・21号ヤックラ**である。12号ヤックラは、K17号畑とK13号畑の段差を構成し、K17号畑側には踏み分け道が通る。都合上１箇所のヤックラとしたが、間の礫は疎らである。６号ヤックラと２号ヤックラの間にはK14号畑とを区画する踏み分け道が西へ上がるものと考えられるが、調査区の端境となってしまい不詳である。24号ヤックラと23号ヤックラの間にはＫ８号畑と24号ヤックラとの踏み分け道から続くスロープがＫ９号畑方向へ続くものと考えられるが、上記と同様に調査区の端境となってしまい不詳である。

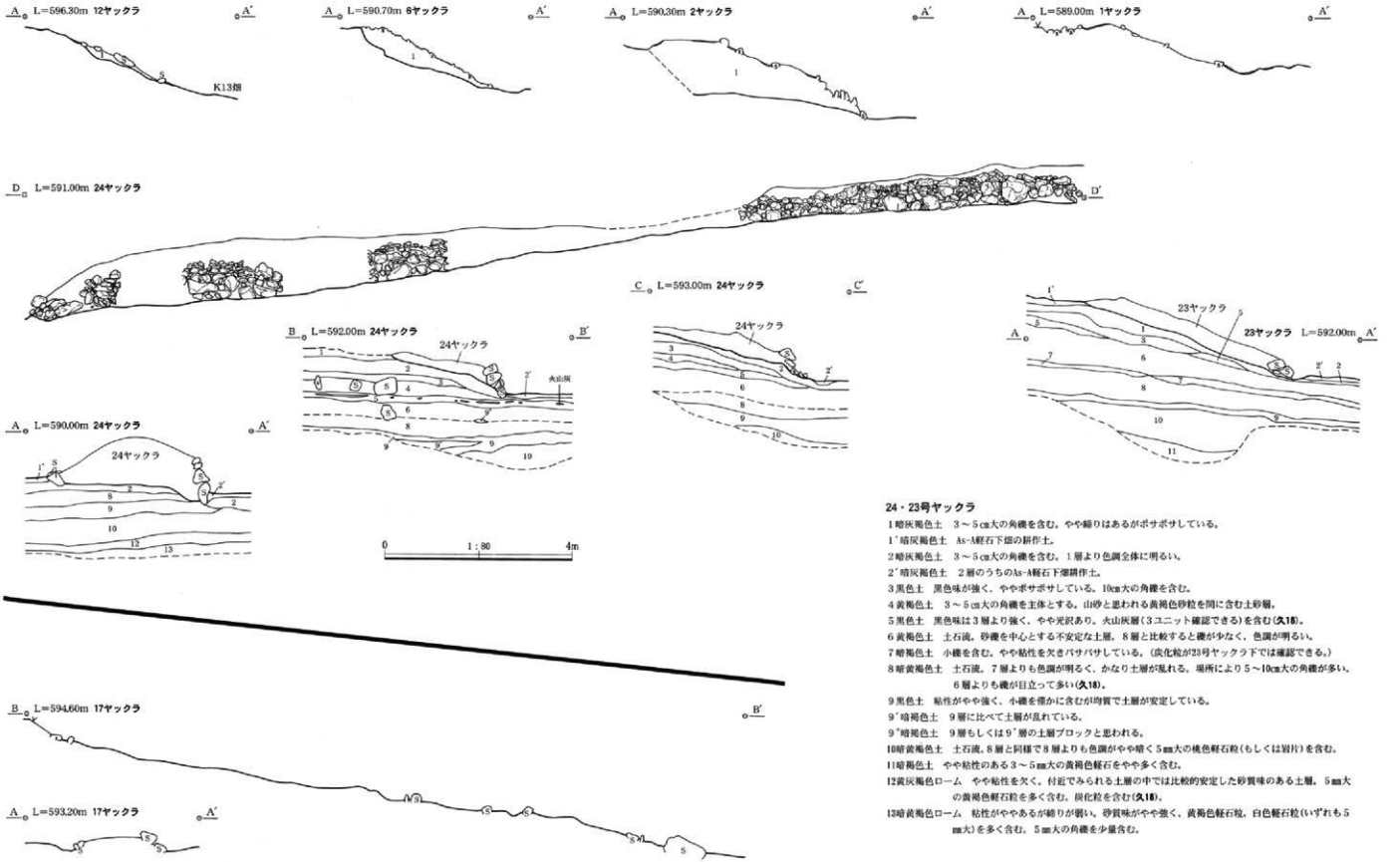
また、23・24号ヤックラは傾斜が低い側を中心に最大で50cm以上の礫を不規則に数段に礫を積み上げている。礫の総量は相当な量と考えられる。このヤックラ周辺の南に位置するＫ９号畑とヤックラ群の状況も開墾途中という視点では着目しておく必要があろう。５号ヤックラと21号ヤックラはいずれも20～30cmの高さに亜角礫が集められている。

３段と４段の際に構築されたヤックラは、**7・15号ヤックラ**である。７号ヤックラは、Ⅱ区中央に位置し、K15号畑・K16号畑・K18号畑の境界部分に当たる。礫の大きさは握り拳大で均質な亜角礫であることが特徴である。

４段と５段の際には、**26号ヤックラ**と17号ヤックラが所在する。26号ヤックラの西側は表土掘削に伴う撹乱である。Ｋ６号畑とＫ８号畑の段差に築かれたものである。標高の低位の東側には30cm大の礫が集められ、小礫が積み上げられている。17号ヤックラは、前述の通りである。



図Ⅱ.25 久々戸遺跡 3・11・16・17・19号ヤックラ



24・23号ヤックラ

1暗灰褐色土　3～5cm大の角礫を含む。やや締りはあるがポサポサしている。

1′暗灰褐色土　As-A軽石下畑の耕作土。

2暗灰褐色土　3～5cm大の角礫を含む。1層より色調全体に明るい。

2′暗灰褐色土　2層のうちのAs-A軽石下畑耕作土。

3黒色土　黒色味が強く、ややポサポサしている。10cm大の角礫を含む。

4黄褐色土　3～5cm大の角礫を主体とする。山砂と思われる黄褐色砂粒を間に含む土砂層。

5黒色土　黒色味は3層より強く、やや光沢あり。火山灰層（3ユニット確認できる）を含む(**久18**)。

6黄褐色土　土石流。砂礫を中心とする不安定な土層。8層と比較すると礫が少なく、色調が明るい。

7暗褐色土　小礫を含む。やや粘性を欠きパサパサしている。（炭化粒が23号ヤックラ下では確認できる。）

8暗黄褐色土　土石流。7層よりも色調が明るく、かなり土層が乱れる。場所により5～10cm大の角礫が多い。6層よりも礫が目立って多い(**久18**)。

9黒色土　粘性がやや強く、小礫を僅かに含むが均質で土層が安定している。

9′暗褐色土　9層に比べて土層が乱れている。

9″暗褐色土　9層もしくは9′層の土層ブロックと思われる。

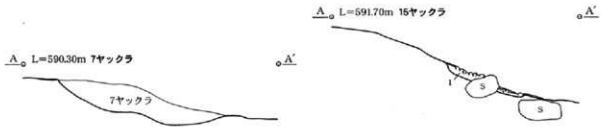
10暗黄褐色土　土石流。8層と同様で8層よりも色調がやや暗く5mm大の桃色軽石粒（もしくは岩片）を含む。

11暗褐色土　やや粘性のある3～5mm大の黄褐色軽石をやや多く含む。

12黄灰褐色ローム　やや粘性を欠く。付近でみられる土層の中では比較的安定した砂質味のある土層。5mm大の黄褐色軽石粒を多く含む。炭化粒を含む(**久18**)。

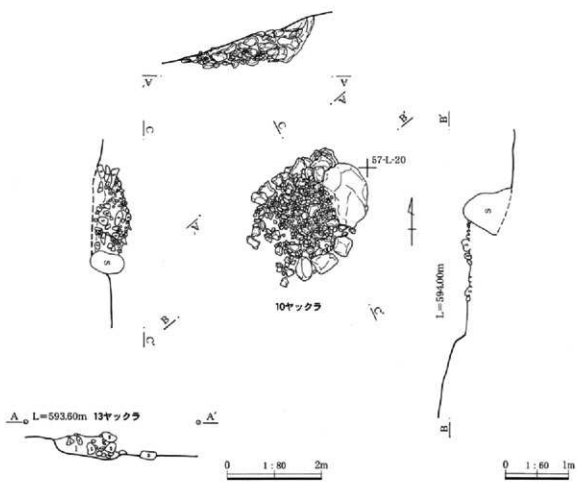
13暗黄褐色ローム　粘性がややあるが締りが弱い。砂質味がやや強く、黄褐色軽石粒、白色軽石粒(いずれも5mm大)を多く含む。5mm大の角礫を少量含む。

図II.26　久々戸遺跡　1・2・6・12・17・23・24号ヤックラ



図Ⅱ.27 久々戸遺跡 7・15号ヤックラ

図Ⅱ.28 久々戸遺跡 26号ヤックラ



図Ⅱ.29 久々戸遺跡 10・13号ヤックラ

4・8・9・10・13・14・18・22・25・27号ヤックラは、畑地内に散在するヤックラである。傾向としては、①畑内の段差や動かすのに容易ではない巨礫を核にして集積した10・13・18号ヤックラ、②畑ないしは平坦な場所に散在し、ほぼ均質な礫を集積した小規模な4・8・9・14・22・25号ヤックラ、このうち14・22号ヤックラは畑外に所在する、がある。27号ヤックラは、Ⅴ区で検出されたもので、最大50cm内外の礫が不均質に集められていたものである。

表Ⅱ.3　久々戸遺跡　ヤックラ計測値等一覧表

＊1　構成する礫の最大径（cm）

	遺構名称	位置	全長m（長径）	幅m（短径）	高さm（深さ）	形態	平面形状	出土遺物 ＊1	備考及び土層注記
1	1号ヤックラ	67区J-3	(4.6)	(2.0)	0.7	乱雑積上	楕円形	14	
2	2号ヤックラ	67区H-1	5.5	3.5	1.1	乱雑積上	不整形	30	1：30cm大の角礫を根石状に周囲に廻らせ5～20cm大の亜角礫が集められている。上位にはAs-A軽石が確認できる。
3	3号ヤックラ	57区K-25～57区Q-16	47.5	2.5	0.6	乱雑積上	長楕円形	62	
4	4号ヤックラ	57区P-23	2.5	1.6	－	乱雑積上	不整形	－	
5	5号ヤックラ	57区Q-22	(5.3)	1.4	0.2	乱雑積上	不整形	20	
6	6号ヤックラ	57区G-24	8.9	3.6	0.5	乱雑積上	不整形	40	1：6号ヤックラ。5～30cm大の亜角礫。
7	7号ヤックラ	56区U-24	5.0	3.4	0.6	乱雑積上	不整形	－	
8	8号ヤックラ	56区S-23	1.8	1.4	0.1	乱雑積上	楕円形	－	
9	9号ヤックラ	47区E-2	5.5	1.5	0.3	土坑状	不整形	20	
10	10号ヤックラ	57区L-19	2.9	2.4	0.6	核になる大石に集積	楕円形	106	
11	11号ヤックラ	57区J-19～57区L-15	19.2	3.8	0.7	乱雑積上	楕円形	40	
12	12号ヤックラ	56区W-15～57区A-16	17.0	2.1	0.2	土坑状	不整形	48	1：12号ヤックラ。5～20cm大の亜角礫。
13	13号ヤックラ	56区U-17	4.0	1.2	0.6	土坑状	不整形	48	縁は2段に積まれている。1：13号ヤックラ。10cm大の亜角礫を中心とする。
14	14号ヤックラ	56区S-20	2.8	2.6	0.1	土坑状	楕円形	30	
15	15号ヤックラ	57区C-19	2.7	1.5	0.2	土坑状	楕円形	70	1：15号ヤックラ。5～20cm大の亜角礫。
16	16号ヤックラ	57区I-15	4.5	3.3	0.4	乱雑積上	不整形	30	1：16号ヤックラ。5～20cm大の亜角礫。
17	17号ヤックラ	67区W-1～58区B-18	33.7	2.0	0.4	乱雑積上	不整形	久-152、153　60	
18	18号ヤックラ	56区U-5	1.3	0.7	0.3	乱雑積上	不整形	50	
19	19号ヤックラ	58区D-19	4.5	2.1	0.4	乱雑積上	不整形	20	1：19号ヤックラ。5～20cm大の亜角礫。
20	20号ヤックラ	57区R-16～57区T-17	10.3	4.1	0.2	乱雑積上	不整形	30	
21	21号ヤックラ	57区T-19	4.8	2.2	0.3	集石状	不整形	44	
22	22号ヤックラ	56区O-14	(4.5)	(1.0)	0.1	乱雑積上	不整形	58	
23	23号ヤックラ	57区R-24	(5.3)	4.2	0.4	乱雑積上	不整形	久-93～97　40	
24	24号ヤックラ	67区M-4～57区Q-25	26.8	4.0	1.2	乱雑積上	不整形	久-98～101　62	
25	25号ヤックラ	67区Q-3	1.5	1.1	0.2	乱雑積上	楕円形	14	
26	26号ヤックラ	67区R-5	4.0	3.6	0.5	乱雑積上	不整形	20	
27	27号ヤックラ	69区V-3	3.0	(1.7)	0.1	乱雑積上	不整形	60	

（4）草津みち

調査で確認された「草津みち」は、Ⅲ区南の山際に位置し、現道のほぼ直下で、58区D-19～57区J-13グリッドにかけ、概ね長さ80mが検出された。遺跡内での高低差は2m弱で東に高くなだらかな傾斜をとる。幅は最大で2.4m、途中長さ8m程の2号石垣や4号石垣と8箇所の樹根痕が道山側に並ぶ。途中調査区南際は地形の関係で道幅すべてが検出できていない部分もある。道面にはAs-A軽石が最大で3cm程度堆積している。

北に隣接する20号ヤックラは、現況の地形で見る限り、土砂の移動によりできた7m×15m程の窪地が道南側に所在する。ヤックラがこの土砂移動と復旧による所産とするならば、以前に道路の復旧がお

こなわれて天明三年の被災を迎えたことになる。20号ヤックラ付近では道の中央部分に凹部が確認された。他に16・11・3・17・19号ヤックラは草津みちに隣接ないしは近接するが、畑開墾に伴う所産と考えられる。過年度調査の長野原久々戸遺跡では下位面の土砂崩れに埋まった畑跡も見つかっているため、土砂崩れの年代観については周辺の調査との関連を考慮する必要があろう。

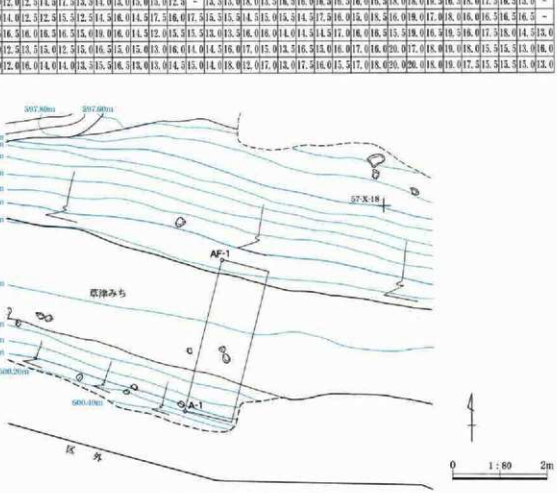
写真Ⅱ.3　久々戸遺跡　草津みち土壌硬度測定作業風景

土壌硬度測定

「山中式土壌硬度計」を用い、古道面の土壌硬度を

表Ⅱ.4　草津みち　山中式土壌硬度計による指標硬度Hi（mm）一覧表

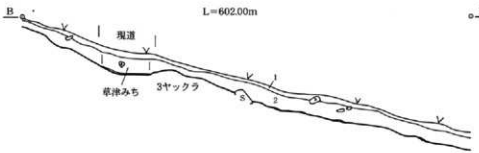
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	AA	AB	AC	AD	AE	AF
1	13.0	17.5	20.5	14.0	12.5	14.0	14.0	15.5	16.0	12.0	14.0	13.5	13.0	16.0	14.0	18.0	14.0	16.5	14.0	16.5	15.5	18.0	17.0	17.0	19.0	17.0	18.5	19.0	18.5	15.5	16.5	-
2	14.0	17.5	18.5	19.0	16.5	14.0	15.0	17.0	14.0	12.5	14.0	13.0	17.0	16.0	14.0	15.5	16.0	16.0	15.5	17.0	15.5	18.5	18.0	18.0	17.0	15.0	18.0	20.0	15.5	16.0	-	-
3	16.0	19.0	20.0	18.5	16.5	13.0	17.0	16.0	18.0	14.0	17.5	15.5	15.5	15.0	16.0	17.0	14.0	13.0	16.5	16.5	16.0	16.0	16.5	18.0	18.0	18.0	18.0	15.0	16.0	15.5	17.0	-
4	17.5	18.0	14.5	15.5	15.0	15.5	16.5	17.0	16.0	14.0	15.0	14.5	14.0	17.0	14.5	16.5	14.0	15.5	14.5	15.0	15.0	15.0	16.5	18.5	18.0	17.0	18.0	16.5	18.0	15.5	16.5	-
5	13.0	18.0	15.5	14.0	16.5	16.0	16.0	14.5	14.0	14.0	15.5	16.0	13.0	15.0	16.0	15.0	17.0	16.0	14.0	14.0	17.0	17.0	18.0	20.0	17.5	16.5	18.0	16.0	16.0	16.5	15.0	-
6	16.5	14.0	12.0	12.5	14.5	17.5	13.5	14.0	13.0	15.0	15.0	12.5	-	13.5	13.0	18.0	13.5	16.5	16.0	16.5	16.5	16.0	16.5	18.0	18.0	19.5	16.5	18.0	17.5	16.5	15.0	-
7	15.0	16.0	14.0	12.5	12.5	15.5	12.5	14.5	16.0	14.5	17.5	16.0	17.5	15.5	15.5	14.5	15.0	15.5	14.5	17.5	16.0	15.5	18.5	16.0	18.0	17.0	18.0	16.0	16.5	16.5	16.5	-
8	15.0	13.5	16.5	16.0	16.0	16.5	15.0	19.0	16.0	14.5	12.0	15.5	15.5	15.0	13.5	16.0	16.0	14.0	14.5	14.5	17.0	16.0	16.5	15.5	19.0	16.5	19.5	16.0	17.5	18.0	14.5	13.0
9	13.5	15.0	12.5	13.5	16.0	12.5	15.0	16.5	15.5	15.0	13.0	16.0	14.0	14.5	16.0	17.0	15.0	13.5	15.5	16.0	16.0	17.0	16.0	20.0	17.0	18.0	19.0	18.0	15.5	15.5	13.0	16.0
10	13.5	16.0	12.0	16.0	14.0	14.0	13.5	15.5	16.5	13.0	13.0	14.5	15.0	14.0	18.0	12.0	17.0	13.0	17.5	16.0	15.5	17.0	18.0	20.0	20.0	18.0	19.0	17.5	15.5	15.5	15.0	13.0

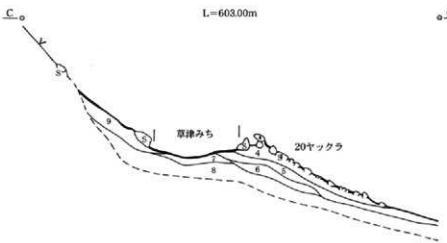


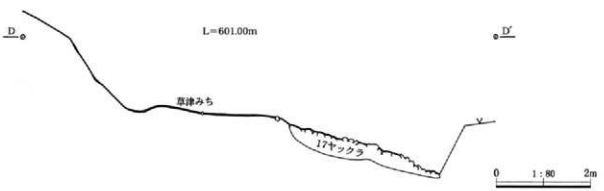
図Ⅱ.30　久々戸遺跡　草津みち指標硬度測定地点位置図

草津みち

1 表土。
2 天明泥流堆積物。
3 暗灰黒褐色土　5～20cmの亜角礫を多く含む。
4 20号ヤックラ　5～20cmの亜角礫で人為的に集積されたもの。
5 黒褐色土　やや色調褐色味を帯びる。礫を殆ど含まない。
6 黒褐色土　5層より黒色味強い。
7 黒褐色土　色調暗く、表面は小礫の密度濃い。草津みち遺構面として礫が洗い出されたものか?
8 黄褐色土　5～20cmの小礫を多く含む砂礫層。
9 黒褐色土　5層に似るが締まり弱い。







図Ⅱ.31　久々戸遺跡　草津みち

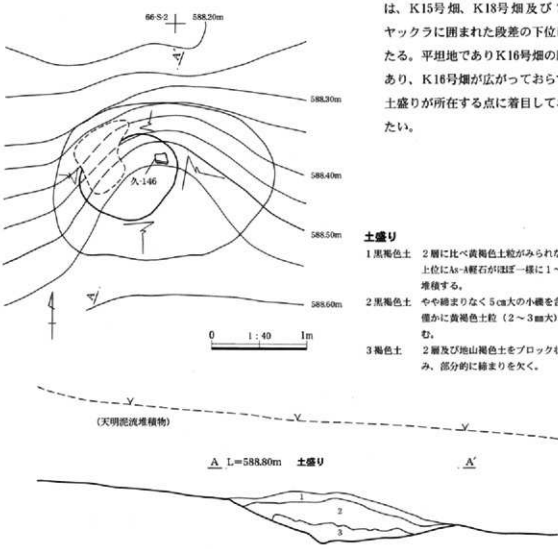
測定した。測定にあっては平面に10cmメッシュを設け、その範囲内で任意に測点をとった。土壌硬度計では、硬度計の貫入円錐体（コーン）を測定表面に対して垂直に押し当て、突き当てツバの前面に密着するまで人力で静かに押し込み測定した。測定値は、等間隔目盛りである指数硬度（硬度指数）Hiを「■」単位で記録した。なお、作業にあたっては、『橋牟礼川遺跡』の例（下山覚他1992「橋牟礼川遺跡で出土した古道の土壌硬度試験について」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)鹿児島県指宿市教育委員会)を参考にした。測定結果と地点詳細位置は表Ⅱ.4と図Ⅱ.30の通りである。

（5）土盛り

Ⅱ区北東端で確認された土盛りは、66区S－1グリッドに位置し、長軸2.3m・短軸1.6m・周囲からの盛り上がりの高さは20cmを測る。掘り込みとみられる深さは約50cmである。

調査時には、地山土層ブロックを巻き込んでいることで風倒木痕であると考えたが、その後の民俗例との照合から、葬制に関する「土盛り」の関連を指摘しておきたい。土盛り平面図の中の撹乱は、調査に伴うものではないが泥流によるものかは不詳である。人骨の出土は確認されなかった。頂部には鋳鉄と思われる鉄製品（久-146）が出土している。

この遺構の周囲の地形と位置関係は、K15号畑、K18号畑及び7号ヤックラに囲まれた段差の下位にあたる。平坦地でありK16号畑の脇にあり、K16号畑が広がっておらず、土盛りが所在する点に着目しておきたい。



図Ⅱ.32　久々戸遺跡　土盛り

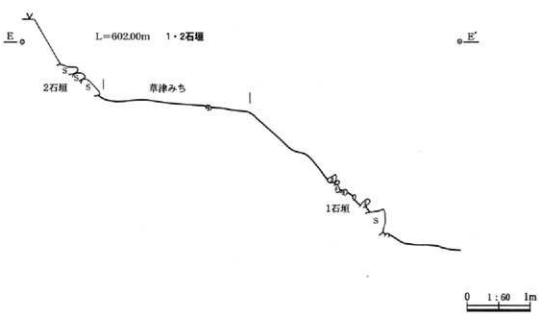
(6)石垣

石垣はⅢ区草津みち沿いに４面が検出確認された。計測値や土層注記等については表Ⅱ．５を参照頂きたい。**１号石垣**と**３号石垣**は草津みちとK13号畑との法面を保持するように構築されている。積まれた石は乱れており、泥流堆積に伴う攪乱なのか自然状態であったかは不明である。石垣上にAs-A軽石は僅かに確認されるが、上位は傾斜が急であるが故に残存状態は極めて不良であった。また、１号石垣と３号ヤックラとの境界の斜面は、K13号畑への降り口と考えられる。地面はAs-A軽石が堆積しており、礫も見られず平坦な斜面となっていた。平面図についてはK13号畑を参照されたい。**２号石垣**は草津みちの南山際の段差の土留となる形で構築されている。この石垣から南は調査区外となってしまうため、詳細については不明であるものの、構造物や異なる地形が続いている可能性が想起される。付近では標高610m付近まで天明泥流堆積物が確認されるため下位に何らかの痕跡が残されている可能性がある。**４号石垣**は草津みちと南に続く上段を区画する法面途中にある。人為的なものかどうかは不詳である。土砂崩れなどの際に先端で浮遊する礫が集まったものとも考える。この上位には平坦で礫の存在しない地形が広がっていたが、明瞭な畑遺構としての状況などが確認できなかったため、それ以上の確認はなされなかった。全面にAs-A軽石が確認されたが、厚さにばらつきがあった。特に平面図中ハッチングで示した部分にはAs-A軽石が厚く３～４㎝程度の明瞭な厚さで堆積していた。立木などによる影響かもしれない。

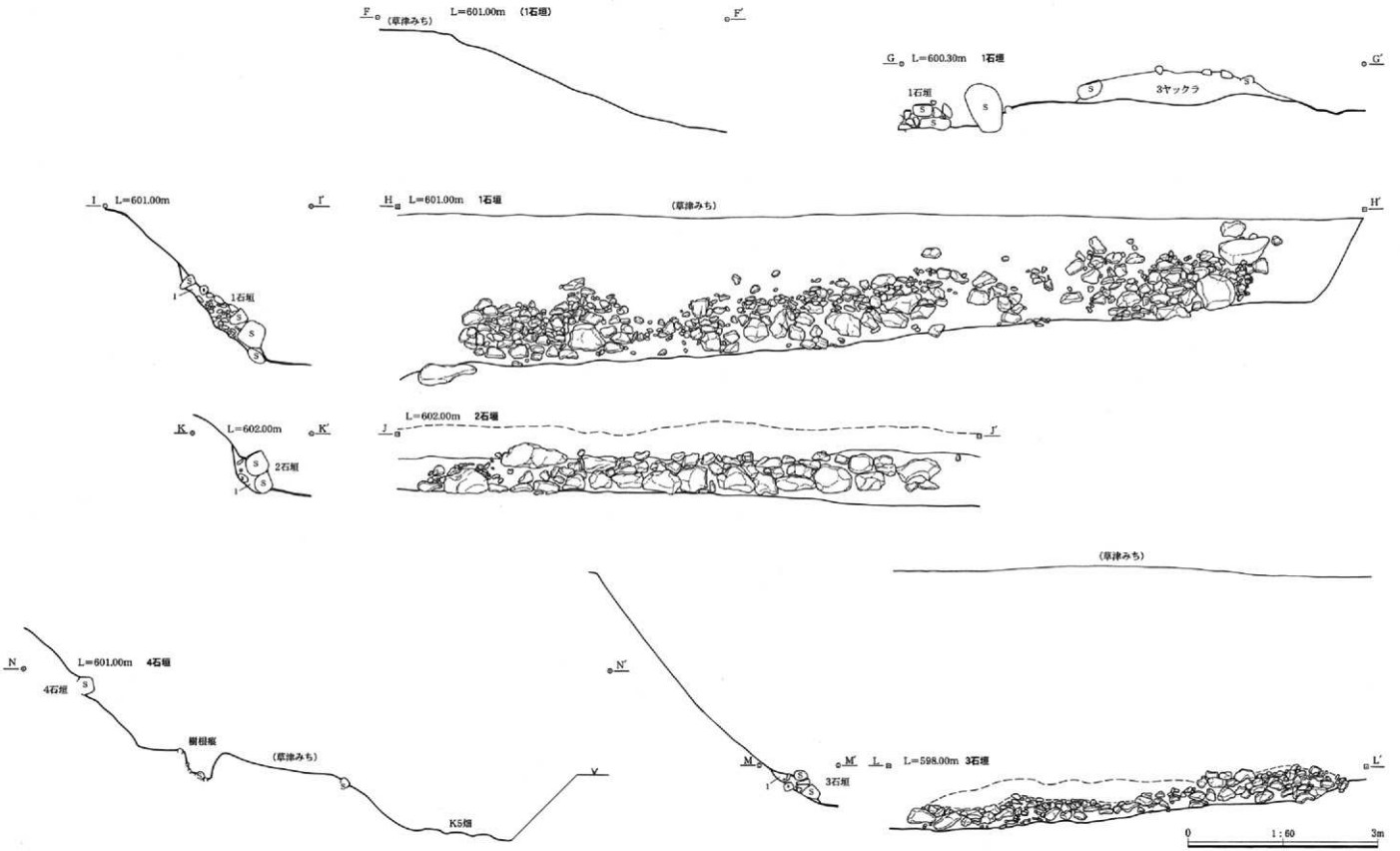
表Ⅱ.５　久々戸遺跡　石垣計測値等一覧表

＊1　構成する礫の最大径（㎝）

	遺構名称	位置	長さ m	高さ m	(段数・m)	築石の特徴	＊1	積み方	遺物	備考及び土層注記
1	1号石垣	57IX3-15～57IX0-16	13.5	8段・1.3		亜角礫多く、一部亜円礫	98	野面積乱積		1：1号石垣裏込め。
2	2号石垣	57IX0-14～57IX0-15	8.3	2段・0.8		角礫、亜角礫、亜円礫	104	布積崩積		1：2号石垣裏込め。
3	3号石垣	57IX1-14～57IX1-15	7.2	3段・0.6		亜角礫多く、一部亜円礫	42	野面積乱積		1：3号石垣裏込め。
4	4号石垣	58IX1-17～58IX1-18	8.1	―・1.2		亜角礫	44	野面積乱積		



図Ⅱ.33　久々戸遺跡　１・２号石垣



図II.34 久々戸遺跡 1～4号石垣

（7）出土遺物

久-156は慶長一分判金である。平成９年度の調査でK13号畑のサク部分で出土した。慶長一分判金の出土は、江戸の武家屋敷、伊達政宗の墓、山中で見つかったものとしては秋田県横手市の通称愛宕山で肥前染付の埋納容器に収められた105枚などが知られているものの、畑跡からの出土の例は知られていない。一分は１両の４分の１に該当し、銭に換算すると１貫文（＝1000文）に相当する。その出土は、草津みちの存在が理由かもしれない。出土遺物は、慶長六年～元禄八年（1601～1695）江戸座鋳造で、品位金857／銀143・量目4.43ｇの慶長一分判金とみられる。出土した慶長一分判金の理化学分析については、Ⅵ章を参照頂きたい。

久-118は、内野山系の肥前陶器である。内野山焼は嬉野焼とも呼ばれ、18世紀後半の明和年間には粗雑な磁器の飯碗がつくられ、製造業者が増加したといわれている。出土している陶器片はそれ以前のものと考えられる。同様な遺物として中棚Ⅱ遺跡では、中-19、174が出土している。

K15号畑を中心としている範囲で呉器手茶碗片が出土している。同碗は、こんもりした茶碗で高台が高く外に張りぎみであるのが特徴で、久-25、29、30、43、75、76、96、126、135などである。これらは、同一個体かどうかは不明である。久-33、34、89、110は美濃志野陶片である。

未掲載遺物としては、Ⅰ区及びⅡ区では内耳土器片７点、摩滅した縄文土器片７点、黒曜石片３点などが、Ⅲ区及びⅣ区では内耳土器片５点などが、Ⅶ区では縄文土器片72点（総量645ｇ）、弥生土器片９点、石器片３点、黒曜石片３点などが、Ⅷ区では縄文土器片７点、弥生土器片１点、内耳土器片１点などがそれぞれ出土している。

参考文献

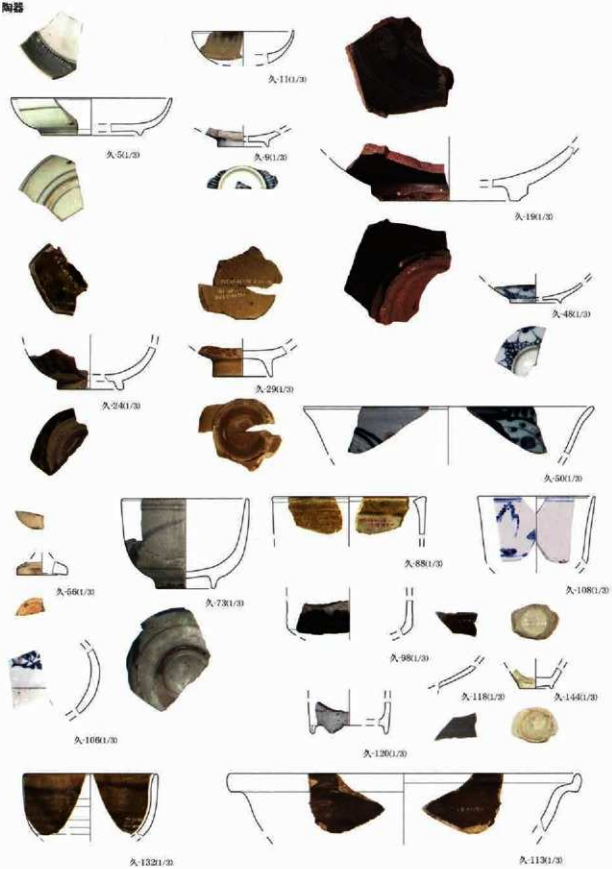
関俊明・諸田康成 1998「長野原久々戸遺跡出土の一分金について」『出土銭貨』第10号 出土銭貨研究会。

尾上実 2000「-特集20世紀の出土銭資料- 特集にあたって」『出土銭貨』第14号 出土銭貨研究会。

日本貨幣商協同組合 1998『日本貨幣カタログ』。

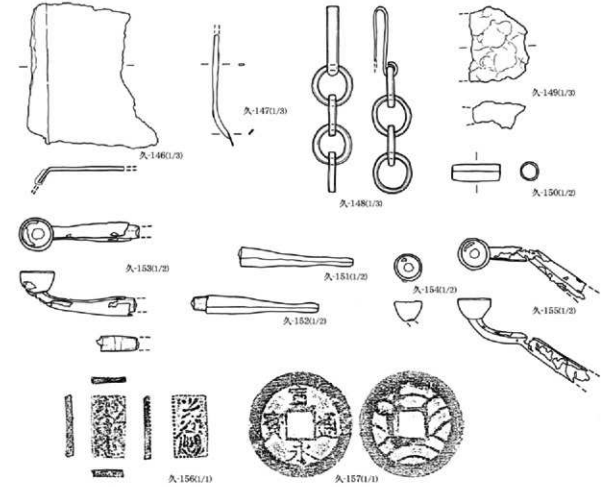
図Ⅱ.35 久々戸遺跡 慶長一分判金出土地点

陶器



図Ⅱ.36　久々戸遺跡　出土遺物(1)

金属製品・銭貨



弥生土器

縄文土器

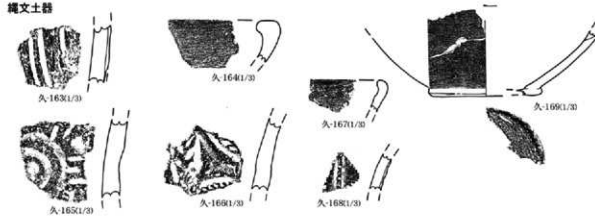
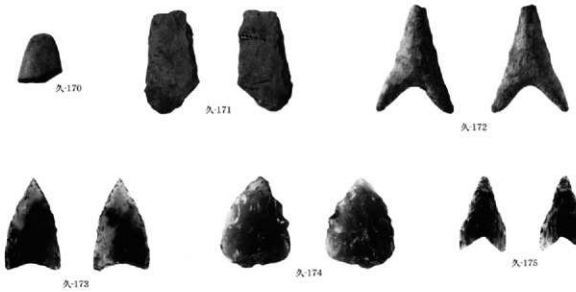
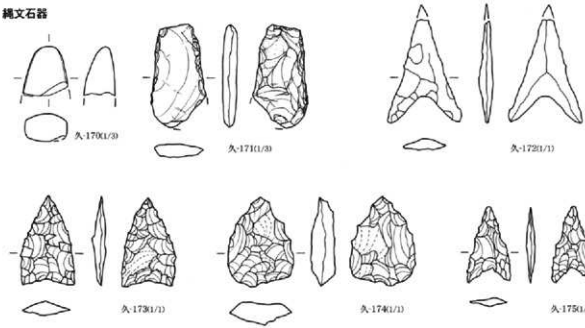


図 II. 37　久々戸遺跡　出土遺物(2)

写真図版25　久々戸遺跡出土遺物(3)

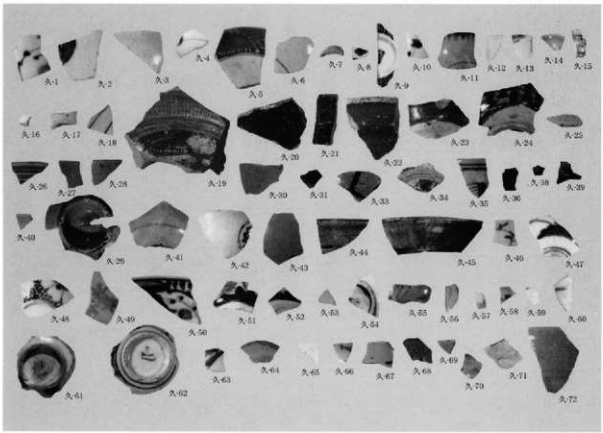


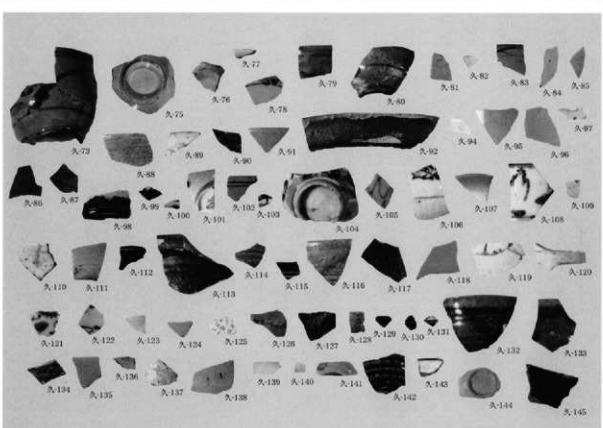
縄文石器



図Ⅱ.38　久々戸遺跡　出土遺物(3)

写真図版26　久々戸遺跡出土遺物(1)





写真図版27　久々戸遺跡出土遺物（2）

表Ⅱ.6　久々戸遺跡　出土遺物観察表

番号	出土位置	種類	口径/器高/底径/厚さ (　) は推定				残存部位	釉の特徴	胎土とその他の特徴	生産地等	時期など
			口径	器高	底径	厚さ					
久－1	Ⅰ区	57区N-23	碗器	椀	(90)			口縁部	透明。	灰白色。染付。	肥前磁器表見系	江戸(18C)
久－2	Ⅰ区	57区N-23	碗器	瓶				胴部	透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸(18C)
久－3	Ⅰ区	67区F-4	碗器	椀	(110)			口縁部	透明。	灰白色。	肥前磁器	江戸
久－4	Ⅰ区	67区D-5	碗器	椀					透明。	灰白色。染付。		江戸
久－5	Ⅰ区	67区I-3	碗器	皿	(130)	30	(80)	口縁～底部	透明。	灰白色。染付。口縁部に1条。体部下位に1条。高台側面に2条。高台内に1条の圏線。墨はじき。	肥前磁器表見系	江戸(18C)
久－6	Ⅰ区	66区W-8	碗器	椀				口縁部	透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸
久－7	Ⅰ区	67区C-6	碗器				(200)	底部	透明。	灰白色。染付。高台側面、体部下端に各1条の圏線。	肥前磁器	江戸
久－8	Ⅰ区	67区J-1	碗器						透明。	灰白色。上絵付（赤）。	肥前磁器	江戸
久－9	Ⅰ区	67区J-1	碗器	椀			(60)	底部	透明。	白色。染付。	肥前磁器	江戸(18C)
久－10	Ⅰ区	67区I-2	碗器	小瓶？				口縁部	透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸(18C)
久－11	Ⅰ区	67区B-7	碗器	椀	(80)			口縁部	透明。白濁した鈍かい現色。	灰白色。染付。口縁部に鋸歯状の連続模様。体部下位に1条の圏線。圏線分以下は厚手。中村遺跡15に似る。	肥前磁器表見系	江戸(18C中)
久－12	Ⅰ区	66区W-8	碗器					口縁部	透明。	白色。		?
久－13	Ⅰ区	67区A-9	碗器						透明。	灰白色。染付。	肥前磁器表見系	江戸
久－14	Ⅰ区	57区G-25	碗器	小瓶	(30)			口縁部	透明。	灰白色。	肥前磁器	江戸
久－15	Ⅰ区	67区A-8	碗器	小瓶				頸部	透明。	灰白色。	肥前磁器	江戸
久－16	Ⅰ区	67区A-8	碗器						透明。	灰白色。	?	
久－17	Ⅰ区		碗器						透明。	灰白色。	肥前磁器	江戸
久－18	Ⅰ区		碗器						透明。	灰白色。染付。2条の圏線。	肥前磁器	江戸(18C)
久－19	Ⅰ区		陶器	大鉢			(110)	底部	透明。	にぶい橙色。焼胎質。象嵌。	肥前陶器	江戸(17C末～18C前)
久－20	Ⅰ区	67区F-4	陶器	擂鉢					暗褐色。縄亀。	灰色。	瀬戸美濃	江戸(18C後?)
久－21	Ⅰ区	66区W-10	陶器	鉢					にぶい赤褐色。	灰色。焼胎質。	常滑？	中世？
久－22	Ⅰ区	57区L-25	陶器	擂鉢	(110)			口縁部	にぶい赤褐色。	茂美色。	瀬戸美濃	江戸(18C後)
久－23	Ⅰ区	67区A-9	陶器	鉢					黄褐色。褐釉。	茂美粗色。	瀬戸美濃	江戸(18C後)
久－24	Ⅰ区	67区B-6	陶器	椀			(56)	底部	オリーブ褐色。	灰美色。	瀬戸美濃	江戸(18C中)
久－25	Ⅰ区	66区W-8	陶器	椀					透明。	灰黄色。貝器手。	肥前陶器	江戸(18C)
久－26	Ⅰ区	67区C-8	陶器		(130)			口縁部	透明。	灰黄色。刷毛目。	肥前陶器	江戸(18C)
久－27	Ⅰ区	66区Y-10	陶器					口縁部	透明。	にぶい黄色。	肥前陶器	江戸
久－28	Ⅰ区	57区L-25	陶器		(120)			口縁部	にぶい黄色。	灰黄色。	肥前陶器	江戸
久－29	Ⅰ区	67区F-24	陶器	椀			脚	底部	透明。	灰白色。貝器手。	肥前陶器	江戸(18C前)
久－30	Ⅰ区	A下	陶器	椀					透明。	灰黄色。貝器手。	肥前陶器	江戸(18C前)
久－31	Ⅰ区	67区F-4	陶器						黄褐色。	灰白色。	瀬戸美濃	江戸
久－32	Ⅰ区	57区G-25	久-29と接合。									
久－33	Ⅰ区	66区X-10	陶器						長石粒。	灰白色。志野。鉄絵。	美濃	江戸(17C)
久－34	Ⅰ区	67区A-8	陶器	皿			(70)	底部	長石粒。	灰白色。志野。	美濃	16C後
久－35	Ⅰ区	67区E-4	陶器	椀	(115)			口縁部	透明。	黄灰色。陶胎染付。口縁部に2条の圏線。	肥前陶器表見系	江戸(18C)
久－36	Ⅰ区	67区D-5	陶器	皿					褐灰色。褐釉。	灰白色。	肥前陶器	江戸
久－37	欠番											
久－38	Ⅰ区	67区D-5	陶器						緑灰色。	黄灰色。軟質陶器。褐釉。	?	
久－39	Ⅰ区	J-1	陶器						緑灰色。	黄灰色。軟質陶器。褐釉。	?	
久－40	Ⅱ区		陶器	小鉢？				口縁部	透明。灰釉。	灰白色。	瀬戸美濃	江戸(18C)
久－41	Ⅱ区	56区S-23	陶器	椀				下部	透明。	灰黄色。陶胎染付。体部下位に1条の圏線。	肥前陶器表見系	江戸(18C)
久－42	Ⅱ区	56区U-24	磁器	椀	(110)			口縁部	透明。	灰白色。染付（コンニャク刷）。	肥前磁器	江戸(18C中)
久－43	Ⅱ区	56区U-24	陶器	皿				腰部	透明。	茂美色。貝器手。	肥前陶器	江戸(18C)
久－44	Ⅱ区		陶器	香炉	(155)			口縁部	黄褐色。褐釉。	茂美色。	瀬戸美濃	江戸(18C後)
久－45	Ⅱ区	56区R-24	陶器	擂鉢	(340)			口縁部	暗赤褐色。褐釉。	灰白色。須恵質。	瀬戸美濃	江戸(18C)
久－46	Ⅱ区	上油？	磁器						透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸(18C)
久－47	Ⅲ区	9号溝東	磁器	椀				底部	透明。	白色。染付。見込みに2条。体部下端に2条の圏線。	肥前磁器	江戸(18C)
久－48	Ⅲ区	7号溝	磁器	椀			(40)	底部	透明。	白色。染付。	肥前磁器	江戸(18C)
久－49	Ⅲ区	10号溝	磁器	椀				口縁～腰部	透明。	灰白色。染付（コンニャク刷）。	肥前磁器表見系	江戸(18C)
久－50	Ⅲ区	7号溝	磁器	皿	(230)			口縁部	透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸(18C)
久－51	Ⅲ区	4号溝	磁器	椀					透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸
久－52	Ⅲ区	17号溝	磁器	半筒椀				腰部	透明。	白色。染付。見込みに2条の圏線。	肥前磁器	江戸(18C後)
久－53	Ⅲ区	11号溝	磁器						透明。	灰白色。	肥前磁器	江戸
久－54	Ⅲ区	4号溝	磁器	椀			(45)	底部	透明。	灰白色。染付。高台側面に2条。高台内に1条の圏線。	肥前磁器	江戸
久－55	Ⅲ区	4号溝	磁器	瓶					透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸
久－56	Ⅲ区	4号溝	磁器	仏飯具			(40)	底部	透明。	灰白色。	肥前磁器	江戸
久－57	Ⅲ区	4号溝	磁器						透明。	灰白色。	肥前磁器	江戸
久－58	Ⅲ区	4号溝	磁器						透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸
久－59	Ⅲ区	4号溝	磁器						透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸
久－60	Ⅲ区	4号溝	磁器						透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸
久－61	Ⅲ区	13号溝	磁器	椀			41	底部	透明。	灰白色。染付。高台側面に2条の圏線。	肥前磁器	江戸
久－62	Ⅲ区	7号溝	磁器	椀			44	底部	透明。	灰白色。染付。高台側面に2条。体部下端に1条の圏線。	肥前磁器表見系	江戸(18C)
久－63	Ⅲ区	3号溝	磁器					口縁部	透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸
久－64	Ⅲ区	4号溝	磁器	瓶	(60)			口縁部	透明。	灰白色。	肥前磁器	江戸
久－65	Ⅲ区	11号溝	磁器		(70)			口縁部	透明。	灰白色。	肥前磁器	江戸
久－66	Ⅲ区	11号溝	磁器						透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸
久－67	Ⅲ区	13号溝	磁器		(50)			口縁部	透明。	灰白色。染付。	肥前磁器	江戸
久－68	Ⅲ区	13号溝	陶器	香炉？					明黄褐色。褐釉。	茂美色。	瀬戸美濃	江戸(18C中)
久－69	Ⅲ区	4号溝	陶器	椀？				口縁部	透明。	茂美色。	肥前陶器	江戸
久－70	Ⅲ区	4号溝	陶器	椀？					灰白色。	茂美色。	瀬戸美濃	江戸

久－71	第IX	4号炉	陶器	碗？						透明.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－72	第IX	13号炉	陶器	碗	(130)				口縁部	透明.	灰色. 陶胎染付（無文部分）.	肥前陶器産有見系	江戸（18C前）
久－73	第IX	13号炉	陶器	碗	(165)	72		(45)	口縁～底部	透明.	灰色. 陶胎染付. 口縁部に２条の圏線. 体部下位に１条、高台側面に２条の圏線.	肥前陶器産有見系	江戸（18C前）
久－74	第IX	3号炉	久-73と接合.										
久－75	第IX	3号炉	陶器	碗				41	底部	透明.	浅黄色. 兵庫手？	肥前陶器？	江戸（18C前）
久－76	第IX	11号炉	陶器	碗				(50)	底部	透明.	浅黄色. 兵庫？.	肥前陶器	江戸（18C前）
久－77	第IX	4号炉	陶器						口縁部	灰白色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－78	第IX	4号炉	陶器							灰白色.	灰白色. 陶胎染付.	肥前陶器産有見系	江戸（18C前）
久－79	第IX	10号炉	陶器		(120)				口縁部	透明.	灰色. 陶胎染付. 口縁部に２条の圏線.	肥前陶器産有見系	江戸（18C前）
久－80	第IX	1号炉	陶器					(55)	底部	透明.	灰色. 陶胎染付. 体部下位に１条、高台側面に２条の圏線.	肥前陶器産有見系	江戸（18C前）
久－81	第IX	13号炉	陶器							透明.	灰白色. 陶胎染付（無文部分）.	肥前陶器産有見系	江戸（18C前）
久－82	第IX	13号炉	陶器							透明.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－83	第IX	13号炉	陶器		(130)				口縁部	透明.	灰色. 陶胎染付. 口縁部に２条の圏線.	肥前陶器産有見系	江戸（18C前）
久－84	第IX	3号炉	陶器							透明.	灰白色. 陶胎染付（無文部分）.	肥前陶器産有見系	江戸（18C前）
久－85	第IX	3号炉	陶器							透明.	灰白色.	肥前陶器？	江戸
久－86	第IX	13号炉	陶器							オリーブ色.	淡黄色.	肥前陶器？	江戸
久－87	第IX	13号炉	陶器	鉢(小型)						黄褐色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸（18C）
久－88	第IX	13号炉	陶器	香炉	(115)				口縁部	明黄褐色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸（18C前）
久－89	第IX	13号炉	陶器	皿	(140)				口縁部	白色. 長石粒.	灰白色. 志野.	美濃	16C末～17C前
久－90	第IX	13号炉	陶器	碗？						黄褐色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸（18C前）
久－91	第IX	12号炉	磁器	碗	(130)				口縁部	明緑灰色. 青磁.	灰色. 外面は線彫りによる蓮弁文.	中国	
久－92	第IX	2号炉	陶器	擂鉢	(160)				口縁部	明赤褐色. 褐色.	淡黄色.	瀬戸美濃	江戸（18C後）
久－93	欠番												
久－94	第IX	草排みち No.2	磁器							透明.	灰白色.	？	
久－95	IV区	25号ックNo.1	陶器							明赤褐色. 明褐色.	に近い黄橙色. 低器質.	？	
久－96	IV区	25号ックNo.1	陶器	碗						透明.	灰白色. 兵庫手.	肥前陶器	江戸（18C前）
久－97	IV区	25号ックNo.1	磁器							透明.	灰白色.	？	
久－98	IV区	24号ックNo.3	陶器	碗			(90)		腰部	明黄褐色. 明褐色.	淡黄色. 腰絞. 底径横は別径.	瀬戸美濃	江戸（18C後）
久－99	IV区	24号ックNo.3	陶器	碗					腰部	明黄褐色. 明褐色.	淡黄色. 腰絞.	瀬戸美濃	江戸（18C後）
久－100	IV区	24号ックNo.3	陶器	碗						黒褐色.	灰白色. 腰絞.	瀬戸美濃	江戸（18C後）
久－101	IV区	24号ックNo.3	磁器	碗				(30)	底部	透明.	灰白色. 染付.	肥前磁器	江戸（18C）
久－102	IV区	17号炉	陶器	香炉？	(130)				口縁部	透明.	灰白色. 陶胎染付. 口縁部に２条の圏線.	肥前陶器産有見系	江戸（18C前）
久－103	IV区	17号炉	磁器	碗						透明.	灰白色. 染付.	肥前磁器	江戸
久－104	IV区	20号炉	磁器	碗				40	底部	透明.	灰白色. 染付. 高台側面に２条、高台内に１条の圏線.	肥前磁器	江戸
久－105	IV区	21号炉	磁器	碗						透明.	灰白色. 染付. 網目文.	肥前陶器産有見系	江戸
久－106	IV区	16号炉	磁器	瓶						灰白色.	灰白色. 胴部に１条の圏線.	肥前磁器	江戸
久－107	IV区	16号炉	磁器		(150)				口縁部	透明.	灰白色. 染付. 吹墨.	肥前磁器？	江戸
久－108	IV区	19号炉	磁器	猪口	(95)				口縁部	透明.	灰白色. 染付. 口縁に２条、胴部に１条、口縁内側に２条の圏線. 櫛絵.	肥前磁器	江戸
久－109	IV区	19号炉	陶器						口縁部	透明.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－110	IV区	22号炉	陶器	皿					底部	白色. 長石粒.	灰白色. 志野.	美濃	16C末
久－111	IV区	19号炉	陶器	碗						透明.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－112	IV区	20号炉	陶器	瓶	(50)				口縁部	オリーブ色. 褐色.	灰白色. 低器質. 被熱.	瀬戸美濃	江戸
久－113	IV区	22号炉	陶器	擂鉢	(210)				口縁部	暗褐色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸（18C中）
久－114	IV区	17号炉	陶器							オリーブ色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－115	IV区	22号炉	陶器	碗						透明. 鉄絵.	灰白色. 腰絞.	瀬戸美濃	江戸（18C後）
久－116	IV区	17号炉	陶器	碗	(100)				口縁部	オリーブ色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸（18C後）
久－117	IV区	22号炉	陶器	瓶						明褐色. 明黄褐色. 明黄褐色. オリーブ色. 褐色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－118	IV区	19号炉	陶器	皿					口縁部	透明.	灰白色.	肥前陶器内野山系	江戸（17C後～18C前）
久－119	VIII区	A・下	磁器		(140)				口縁部	透明.	灰白色.	肥前磁器	江戸（17C後？）
久－120	VIII区	A・下	磁器	香炉			(70)		底部	灰白色.	灰白色. 染付. 被熱.	肥前磁器	江戸
久－121	VIII区	A・下	磁器							透明.	灰白色. 染付.	肥前磁器	江戸
久－122	VIII区	A・下	磁器							透明.	灰白色. 染付.	肥前磁器産有見系	江戸
久－123	VIII区	A・下	磁器		(65)				口縁部	透明.	灰白色.	肥前磁器	江戸
久－124	VIII区	A・下	磁器							透明.	灰白色.	肥前磁器	江戸
久－125	VIII区	A・下	磁器	皿						透明.	灰白色. 染付. 櫛絵.	肥前磁器	江戸
久－126	VIII区	A・下	陶器	皿					底部	浅黄色.	灰白色. 兵庫手.	肥前陶器	江戸（18C前）
久－127	VIII区	A・下	陶器	瓶						明褐色. 明褐色. 明褐色. 明褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸（18C前）
久－128	VIII区	A・下	陶器							にぶい黄色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－129	VIII区	A・下	陶器	碗？						明赤褐色. 明赤褐色.	灰白色. 腰絞.	瀬戸美濃	江戸（18C後）
久－130	VIII区	A・下	陶器	碗						明赤褐色. 明赤褐色.	灰黄褐色. 腰絞.	瀬戸美濃	江戸（18C後）
久－131	VIII区	A・下	陶器	碗						明赤褐色. 明赤褐色.	灰白色. 腰絞.	瀬戸美濃	江戸（18C後）
久－132	VIII区	28区C, D-12	陶器	碗	(110)				口縁部	オリーブ色. 褐色.	褐灰色. 口縁部播分.	瀬戸美濃	江戸（17C後～18C前）
久－133	VIII区	28区D-12	陶器	碗					口縁部	黄褐色. 褐色.	灰白色. 口縁部播分.	瀬戸美濃	江戸（17C後～18C前）
久－134	VIII区	28区D-12	陶器	擂鉢？						暗褐色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃？	江戸？
久－135	VIII区	28区D-12	陶器	碗					口縁部	透明.	灰白色. 兵庫手.	肥前陶器	江戸（18C前）
久－136	VIII区	28区D-12	陶器						口縁部	浅黄色. 灰褐.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－137	VIII区	28区D-12	陶器	皿？						白色. 長石粒.	黄灰色. 志野.	美濃	江戸（17C前）
久－138	VIII区	28区D-12	陶器	碗？						灰白色. 灰褐.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－139	VIII区	28区D-12	磁器		(110)				口縁部	透明.	灰白色.	？	
久－140	VIII区	28区D-12	磁器							透明.	灰白色.	肥前磁器	江戸
久－141	VIII区	28区E-11	陶器							赤褐. 灰褐.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸
久－142	VIII区	18区B-13	陶器	碗						明オリーブ色. 褐色.	灰白色.	瀬戸美濃	江戸（18C前）
久－143	VIII区	18区B-13	陶器						口縁部	白色. 長石粒.	灰白色. 志野. 鉄絵.	美濃	江戸（17C前）
久－144	VIII区	18区B-13	磁器	小皿				27	底部	透明.	灰白色.	肥前磁器	江戸（17C）
久－145	VIII区	18区B-13	陶器							灰褐色.	褐灰色. 低器質.	？	

番号	出土位置	器種	縦・横・厚・重量 cm. g	残存状況	特 徴
久-146	Ⅱ区 土盛り No.1	鉄片?	(10.7)・(10.4)・0.3・188	欠損	鉄製品、鉄片と思われる破片すべて実測しており、本表の形が不明瞭である。あるいは容器の一部か。
久-147	57KK-24	不明。板状品	(3.8)・(4.4)・0.4・1.1	欠損	側面で厚みが1mm前後平で、巾4.4mほどの板状品。用途は不明である。
久-148	57KM-23撹乱	滑環状鉄製品	5.0・6.6・0.2・66 滑環の円環径3cm、厚0.5cm	一部欠損	4個の円環が繋がり鉄金具が付くもの。用途不明。錆化が著しい。
久-149	60KA-16 1号トンチ? 盗掘	鉄津	(4.0)・5.2・1.4・70	一部欠損	大部の鉄津、鍛冶津か?
久-150	67KJ-1	不明(キセル?)	2.53……3・(3.0)、3.5~6.8g	完形	側面に凹凸をとどめるが厚さ0.8~0.2mm程の鋼板?を巻いて円筒状にしたもので中央がやや太めになる。

番号	出土位置	種類	長・厚径部径・火道径/吸口径・重 cm. g	残存状況	特徴
久-151	Ⅱ区草津みち No.1	吸口	5.9・0.9・吸口0.4・3.9	完形	小口潰れる。
久-152	Ⅳ区17号ヤックラ No.1	吸口	5.9・0.9・吸口0.5・4.8	完形	雁字種管との接合部分に噛ませ物あり。久-153と同一個体と考えられる。
久-153	Ⅳ区17号ヤックラ No.2	雁首	6.1・1.0・火皿1.8・5.2	著しく損傷するが全形を留める	雁字種管の挿入部分は18mm。脂反しやや高い。補強体のくびれは明瞭。久-152と同一個体と考えられる。
久-154	Ⅱ区13号畑No.1	雁首	---・火皿1.46・1.1	火皿のみ	補強体から吸口側を欠く。補強体の嚙着部分は、同心円状。17C以前か?
久-155	57KK-24	雁首	(8.2)・(0.9<)・火皿1.7・6.4	全体に損傷し変形	補強体に嚙着痕。

番号	出土位置	器種	直径・厚・重・穿径 mm. g	残存状況	特 徴
久-156	57KI 1-24	慶長一分判金	縦幅:左側16.86・中央16.73・右側16.67 横幅:上側9.60・中央9.58・下側9.37 厚さ:右上隅1.69・右下隅1.93 ・左上隅1.90・左下隅1.92 重:3.42	完形	全体に磨耗。表面の円点の縁取りは全周しない。裏面の円点の縁取りは全周する。左(○)及び下側面(◎)に刻印。各剪断面は歪む。江戸産。分析に関しては、VI章4節分析報告を参照。
久-157	Ⅱ区4号畑No.4	古銭	28.1・1.1・3.1・6.5	完形	寛永通宝。正字(11波)。銅。明和六年(1769)。

番号	出土位置	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
久-158	78-N-12 8層No.5	甕	口縁破片	①普通②にぶい褐色③粗砂を多く含む	口縁部を折り返し、LR縄文を施す。	弥生中期前葉
久-159	78-M-12 8層No.1	甕	胴部破片	①普通②にぶい黄褐色③粗砂を多く含む	甕の胴部上半破片。LR縄文施文後、太い横位沈線を施す。	弥生中期前葉
久-160	78-N-13 7層No.1	甕	胴部破片	①普通②にぶい黄褐色③粗砂を多く含む	未端の処理のみられるLR縄文施文後、横位条痕文、内面は、荒いミガキ。	弥生中期前葉(16)と同一個体
久-161	78-N-13 7層No.2	甕	胴部破片	①普通②にぶい黄褐色③粗砂を多く含む	外面は、斜位の条痕文、内面は、荒いミガキ。	弥生中期前葉(160と同一個体)
久-162	78-M-12 8層No.5	壺	胴部破片	①普通②にぶい黄橙色③粗砂を多く含む	横位の平行沈線、沈線間に2列の細かな刺突を施す。	弥生中期前葉

番号	出土位置	種類	部位	①焼成②色調③胎土	器形・文様の特徴	備考
久-163	78-M-10 8層	深鉢	胴部破片	①良好②にぶい橙色③雲母・石英・白色鉱物を多く含む	隆帯と平行沈線で文様を構成。	縄文中期・勝坂2式
久-164	78-M-12 8層	深鉢	口縁破片	①良好②にぶい黄橙色③砂粒を多く含む	内湾する口縁部の内側が突出する。	縄文中期・勝坂3式
久-165	78-N-12 8層No.1	深鉢	胴部破片	①良好②にぶい黄橙色③砂粒を多く含む	刻目がつく隆帯で文様を区画し、区画内を沈線文様で充填する。	縄文中期・勝坂3式
久-166	78-N-11 8層No.6	深鉢	頸部破片	①良好②にぶい橙色③砂粒を多く含む	刻目がつく隆帯区画内で、三叉状陰刻文を施す。	縄文中期・勝坂3式
久-167	78-R-14 8層	深鉢	口縁破片	①良好②黒褐色③砂粒を多く含む	口縁端部が「く」の字状に内折する。	縄文後期・掘之内2式
久-168	78-N-13 8層	深鉢	頸部破片	①良好②にぶい黄橙色③砂粒を多く含む	口縁部に刻目が付く隆線懸垂文を施す。	縄文後期・掘之内2式
久-169	78-L-11 8層No.3	鉢	底部片	①良好②にぶい黄灰色③細砂を少量含む	高台状の底部が付く土器で、内外面とも研磨が施されている。	縄文後期後半

番号	出土位置	種類	出土状況・残存状況	高・幅・厚・重 cm. g	石材	形状や特徴
久-170	78KCO-11(8層)No.1	定角式磨製石斧	欠損した基部の破片。	(3.9)・(3.5)・(2.4)・46	輝緑岩	—
久-171	78KL-12(8層)No.2	短冊形打製石斧	使用により刃部が斜めになっており、基部を欠損する。	8.1・3.8・1.1・48	黒色頁岩	—
久-172	78KCM-11(8層)No.3	無茎石鏃	基部の抉り込みの深い三角鏃で、表面が風化している。先端部欠損。	2.7・2.0・0.4・1.4	黒色頁岩	—
久-173	78KCP-12(8層)	無茎石鏃	—	2.3・1.4・0.4・1.0	黒曜石	基部の抉り込みの浅い鏃。
久-174	A下No.1	無茎石鏃	厚みがあり粗い剥離の跡で未製品と考えられる。表裏両面の一部に自然面を残す。	2.4・1.8・0.7・2.8	黒曜石	—
久-175	78KCN-13(8層)	無茎石鏃	—	2.0・1.1・0.2・0.4	黒曜石	鏃は粗いが非常に薄い鏃。

4. 小結

遺跡は、浅間山火口から北東方向直線距離で20kmの距離に位置し、遺跡内ではAs-A軽石が２～３cmの厚さで堆積する。その上位に天明泥流堆積物の堆積が確認される。このAs-A軽石の降下日時が確定したことで、８月５日泥流被災までの10日間の人々の農事の営みが検証できるようになった。その契機となったのが本遺跡の畑の遺構調査であった。畑の畝断面から土用の培土とAs-A軽石の降下期日の検証をおこなう視点は本書の中に記載した畝断面図をはじめとする内容である。

天明泥流災害による長野原の被害状況は、Ⅰ章に記述の通り富沢久兵衛の『浅間山津波実記(浅間記)』では、「長野原では71軒流失152人死」と記録されている。本書で扱った久々戸遺跡は、長野原の居住域の対岸およそ１km下流の地点に位置している。浅間山の火口からの流下距離は25km、８月５日の噴火イベントでは、およそ20～30分後に被災した地点と考えられている。久々戸遺跡で見つかった畑地景観は天明三年（1783）新暦８月５日という時点で季節性を反映しつつ厳封されている。

久々戸遺跡の調査では、被災直前の畝サクに培土を伴った軽石が含まれていた。培土が人為的な痕跡であることは、**久１**、**２**の植物珪酸体分析からも確認できる。これらの判断材料をもって農事暦とのクロスチェックから降下日時の検証をおこない、As-A軽石に降下期日が与えられた。このことにより、検出された畝が何種類もの耕作状況を示していることが確認できるようになった。地元の古老の聞き取りにより集約した農事暦からは、山間地であるがゆえに、時節に従った農事が色濃く反映されることがわかる。このことも、検証につながった理由である。以降の調査においても同様な観察視点と資料の蓄積に期するところである。畝断面を中心とする分析により、今回の発掘調査では、９種類の畑の耕作状況を確認することができた。

K17号畑は、As-A軽石降下後の畝サクを鋤き込んでいる状況と判断したものである。調査では４面のトレンチ断面を記録したが、作業の方向までは確定できなかった。この地方では、蕎麦は「盆がくるまでに蒔け」といわれるので農事暦に当てはめると蕎麦の播種が想起される。しかし、蕎麦は75日で収穫できる作物で、他の作物の収穫が見込めないと判断してから種を蒔く救荒作物でもあった。明確な畝立てが確認された畑に鋤き込みがおこなわれ始めているという考えに立つと、救荒の意味合いが想定されるが、まだ結論を出すには早いかもしれない。これらを含め、さらなる事例を必要とするかもしれない。Ⅶ章４節で天明三年の作柄の不良を反映した耕作状況を想定したので参照頂きたい。

畑遺構に関して、調査時点では不明瞭で範囲確定や平坦面の確定など不足する項目も残されるが、概ね本遺跡の場合では、「60坪＝200㎡」を単位とした面積で畑の間墾形態がとられていたことが整理作業を通して確認された。

発掘された泥流畑では、一筆の畑であっても、畝サクの交錯、微妙なズレ、断面形状の違いなどが観察できる。これが単一畑内の単位の区分けの根拠であり、単位あたりの面積を揃えつつ耕作にあたった、いわば「ツカ」を単位とした耕作状況であった可能性に注目してきた。このことは、これまでその性格付けがなされていなかった畑内に配された「平坦面」を基とする耕作の単位を分析の足掛かりとしたということでもある。

また、耕作状況を基に分析した「単位畑」の面積については、整理作業を通して「耕作状況」から「畑の地割り面積」が単位となっていることがその後、判然としてきた。

耕作状況から「単位畑」を扱う視点については、現在でも相模原台地、南九州、長野県東信地方～群馬県北西毛にかけての地域で「ツカ」という私的な単位が聞かれ、「一ツカに一駄の堆肥を入れる」といった施肥の単位であったり、「一ツカ一人役」というように土地の地代の対価に用いられたり、種蒔きの量や収穫量を示したりするのに用いられてきたことに基づいている。また、地域により「一ツカ」の

広さは異なり、「一ツカ30坪」であったり「七ツカ1反」であったりもすることも、ここでは重視しておきたい。

これら発掘調査で検証されつつある、近世農事に関する資料は近世の実資料であり、文献史学や歴史学の中だけでは判断し得ない多くの問題点を提起させ、同時にデータを提供できるものと考えられる。

また、平坦面の機能と8月5日までの存続理由や時代性についてもその方向性が見出せるようになってきた。近世農業史を語る上で極めて重みのある実資料が提示されたものと考えられる。これらの点についても、あわせて報告書作成時の考察としてⅦ章4節の考察に記述した。さらに今後とも、得られた資料の歴史考証を期するものである。

畑遺構を構成する要素として、境木の根株痕跡が検出された。現在でも地元では畑の地境に境木が植えられているが、Ⅳ区では、境木痕について樹種を特定することができた。空洞化していた樹根痕は、横に走る筋の状況から、桑であったと判断できたことも畑地景観を復元する成果といえる。畑の境木に関する記録として、同じ郡内中之条町の唐沢家文書である、宝暦十一年（1761）『連判定書之事』に天領四万村の道路定書きに巡検の回村に備えて道敷整備を定めた記録が残されている。「田畑等にうつ木又ハ桑その他を植え屋敷囲の竹木を植え出しくねを作り出し道代を狭めること固く慎む。万一道とせばた(ママ)時は無断で掘とる」とされていることから、天明当時、桑やうつ木の境木が長野原町に存在したことが十分想像できる。

Ⅱ区で検出された土盛りについて、民俗例からその関連を提起しておきたい。『人の一生』には、「繭恋村田代ではイヌバジキの上にガンブタをのせ、その上に頭大の丸石を沢山積み上げたり、土盛りの周囲に多くの棒をさし縄で結び、編んで、鍬・鎌を囲いの中にさしている。割った竹をもって土盛りの周囲を周らすハジキ類がより丁寧になったのが、竹木を三角に組んで石を吊した形のものとするならば、繭恋村にみられる土盛りの周囲に多くの棒をさして縄で結び編んだ形は、簡単な家屋ともみられ、モガリの原義に近いようにも考えられる。」と記載されている。また、『上州路の埋もれた民俗』から「繭恋村のもがり」を引用すれば「子どもの墓のもがりは、大人のものと異なり丁寧に作るのが特徴である。骸を埋めた墓土の上は丸くドーム形の土山にし、もがりの材料の木で…中略…木の頂上のところから、おとなの頭大の石を縄でしばり、ぶらさげておくのだ。これが子どものもがりなのである。…中略…鍬の柄を切り、金具の部分だけを墓土の上に突き刺しておくのである。それは夜になって、月の光が鍬に反射し、その不気味な光で死体をあさりに来た狼は、山に逃げ帰るからだ。」という。繭恋村では、頂上からぶら下げた石も鍬などの金属を突き刺しておくのも、また、墓土の上につくる「もがり」が始められたのは大飢饉の年だ、という。飢えて相次ぐ死者に対して墓穴を掘ることができず、浅穴にして埋葬したことで狼に掘り起こされた亡骸が食い荒らされたということにその起源を求めている。

本調査の中で確認された土盛りは1基のみの検出であったが、畑景観の広がりの中で、東に断崖に面した平坦部分の隅に位置していることが理葬された

図Ⅱ.39 「繭恋村のもがり」
（『上州路の埋もれた民俗』より引用）

場所であることを連想させる。また土盛りの上位からは金属片が出土していることもその可能性を示す理由にあげられる。近世の葬制を示す資料との照合として遺構を指摘しておきたい。

Ⅲ区で見つかった「草津みち」は現旧道「草津道」のおよそ直下から検出された。これは、天明泥流被災後も旧地形を踏襲することがそれまでの調査を通して判り始めてきたため、調査区の南端の急傾斜部

分の調査で確認した結果であった。このことから被災当時の街道が山裾を這うように遺跡内を通っていたことが確認できた。この道は将軍吉宗が江戸城に草津の湯を運ばせた「献湯」ルートと考えられており、当時の往来を偲ぶにふさわしい資料といえる。確認された草津みちは、遺跡内の最大幅は2.4mと計測される。前述の唐沢家文書『連判定書之事』には、天領四万村の道路定書きに巡検の回村に備えて道敷を六尺五寸と定めた記録も残されている。この例は、四万温泉へ向かう主要街道と考えられるものである。比較してみても、草津街道である「草津みち」として、急峻な地形に存在し山裾を地形に沿って這うように通る状況から、街道筋としては十分な幅員を有していたものと考えられる。石垣状の積み石や道脇の列になった樹痕のピットの検出も、現道直下で検出したことに加え、街道「草津みち」確定の要素としたい。天明三年という時間で厳封されたことで、畑地景観を通る近世の街道の状況を伝える資料として注目できる。

自然科学分析等の報告により、本遺跡で確認できた主な内容については、以下の通りである。

24号ヤックラの下位では、**久18**で浅間山を起源とする1108年（As-B）ないしは1128年（As-Kk）のテフラが良好な状態で検出された。浅間山から北東方向へのテフラの降下と残存状況はAs-BよりもAs-Kkが顕著とされていることも含め、フォール・ユニットの検討など資料の蓄積として着目される。**久20**では、畑遺構面で検出された火山灰が黒豆河原露頭においてみられるものと同一のテフラである可能性を追求した。その結果、As-Kkのテフラの上位でAs-Aとの間に確認されているAs-A′の可能性が示された。これは、中近世の時期決定を考える上で有効な鍵層となる可能性もあり、今後の調査視点としても重視していくべきであろうと考えられる。これらについては、Ⅵ章を参照されたい。また、補遺資料として実施した、川原湯勝沼遺跡のテフラについては、天明三年の6月28日前後に降下したことが史料に記録される火山灰である可能性が高く、発掘調査で検出されることは火山学の分野からも注目されるであろう。分析結果から、As-BやAs-Kkに近似する測定値をとることになり、今後のデータの蓄積が望まれる。**久8**、**16**、**17**などからは、As-BやAs-C（浅間山起源4世紀）下の環境なども推定されている。**久18**などからは、イネ・ムギ類・キビ属の栽培が、**久1**、**12**ではソバの栽培が指摘されている。

参考文献

金井幸佐久 1997『折田村の歴史』自費出版。
池田秀夫 1988『人の一生』群馬の民俗2 みやま文庫。
酒井正保 1990『上州路の埋もれた民俗』あさを社。
関俊明・諸田康成 1999「天明三年浅間災害に関する地域史的研究-北東地域に降下した浅間A軽石の降下日時の考古学的検証」『研究紀要』16財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
関俊明 2000「天明三（1783）年浅間起源下の畑」『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会。
関俊明 2002「農事『サクイレ』と降灰による川原湯勝沼遺跡の畝断面解剰- 天明三年浅間災害に関する地域史的研究②-」『八ッ場ダム発掘調査集成（1）』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 第303集。

Ⅲ中棚Ⅱ遺跡の調査記録

1. 調査の概要

中棚Ⅱ遺跡は、27地区39・40・49・50区、28地区31・41～44・53・54区に位置する。Ⅰ区及びⅡ区の調査は、工事用道路建設に伴い実施された。工事期間との調整から掘削部分のみについて実施するトレンチ状の調査となり、遺構の性格付けをおこなう上での有益なデータを得るにはいたらなかった。しかしながら、Ⅱ区の東端で天明泥流堆積物と泥流面耕土との間に最大22㎝を測る逆級化を呈する砂層が見つかった。２週間に満たない調査であったが、次年度に向けて、天明泥流流下と堆積に関して新しい知見を供する調査の契機となった。

次年度、Ⅱ区東部分を追加調査した。ここでは、逆級化構造の砂層の検出が吾妻川側へ続くことと地形の様子を確認した。さらに、現在の地境となっている石垣の直下に、被災前の石垣が面を揃えて検出された。このことは罹災後の人々がどう復興に取り組んだかを伝える痕跡といえる。

Ⅲ区は狭窄した吾妻川が右に蛇行しやや川幅を広げる地点に舌状に張り出した低位段丘に位置する。周辺は明治43年以来の甚大な被害をもたらすことになった昭和10年の山津波により被害をうけていることが記録に残されている。県下で278名の犠牲者を出し、吾妻・利根地方は陸の孤島と化した。長野原町管内でも３箇所で大規模な災害応急復旧土木事業がなされた。遺跡の立地する林中棚地内もその１地点に該当する。地元での聞き取りによれば、当時トロッコを用いた復旧工事がおこなわれたと聞く。このような聞き取りのもと、遺構の破壊を想定しつつ、遺構の検出にあたった。

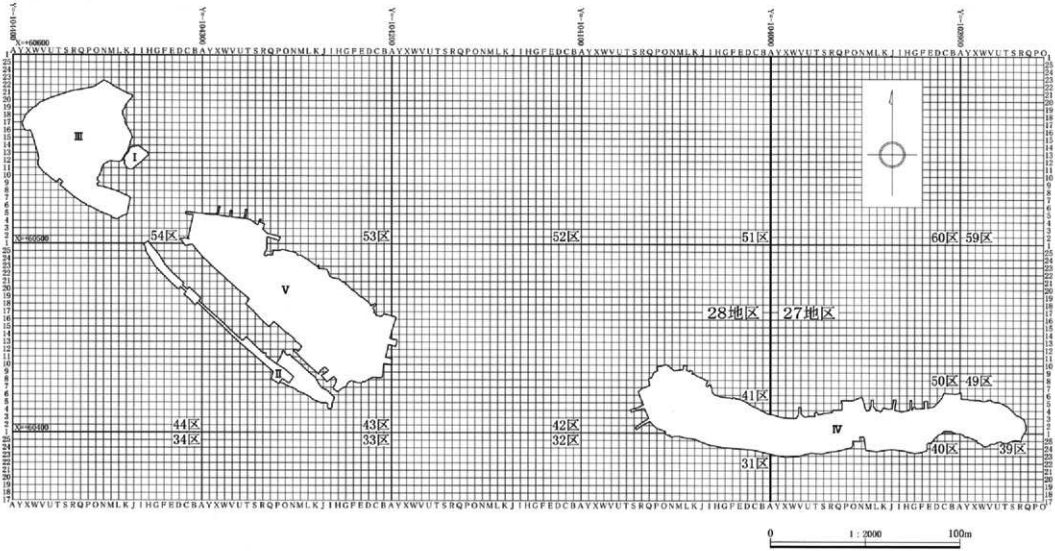
まず、着目したのは、現況の地形が天明泥流後のものか、山津波の復旧後かという点であった。表土掘削は調査区の20度近い傾斜と天明泥流堆積物が２次的に動かされていることの判別に困難を伴い、これまでにない天明泥流下の遺構調査となった。調査は、散在する礫がその作業の進行を遅らせた。最終的に調査区は、昭和10年の山津波後に造られた石垣やヤックラ、その下位には天明泥流被災後に構築されたもの、天明泥流被災前に構築されたもの、さらにその下位には土砂崩れ層により埋まった遺構があることが判明した。

Ⅲ区の天明泥流下の調査では、散在する礫の中に狭小な畑跡が見つかった。道が各畑を連絡しあう景観を彷彿させたが、いずれの畑も作業性を意識できない耕作地と看取できた。狭小な畑地においても畑に隣接する礫が片付けられたヤックラが数箇所で確認できた。また平坦面と呼ぶ他の遺跡や調査区で検出されたものとは異なる様相を呈する場所が確認された。様相が異なるため、調査時には敢えて「平坦面」と確定しなかった。その後自然科学分析により、耕作のおこなわれた可能性が提示された。そこで、「区画」の遺構名称を用い、堆肥置き場の可能性を鑑み平坦面と同じ性格を持つ遺構として扱うことにした。いずれにせよ、破損の著しい部分もあり、不確定な要素が多い。今後の調査の進展の中で着目しつつ、遺構存在の解明をはかっていくことが課題となろう。

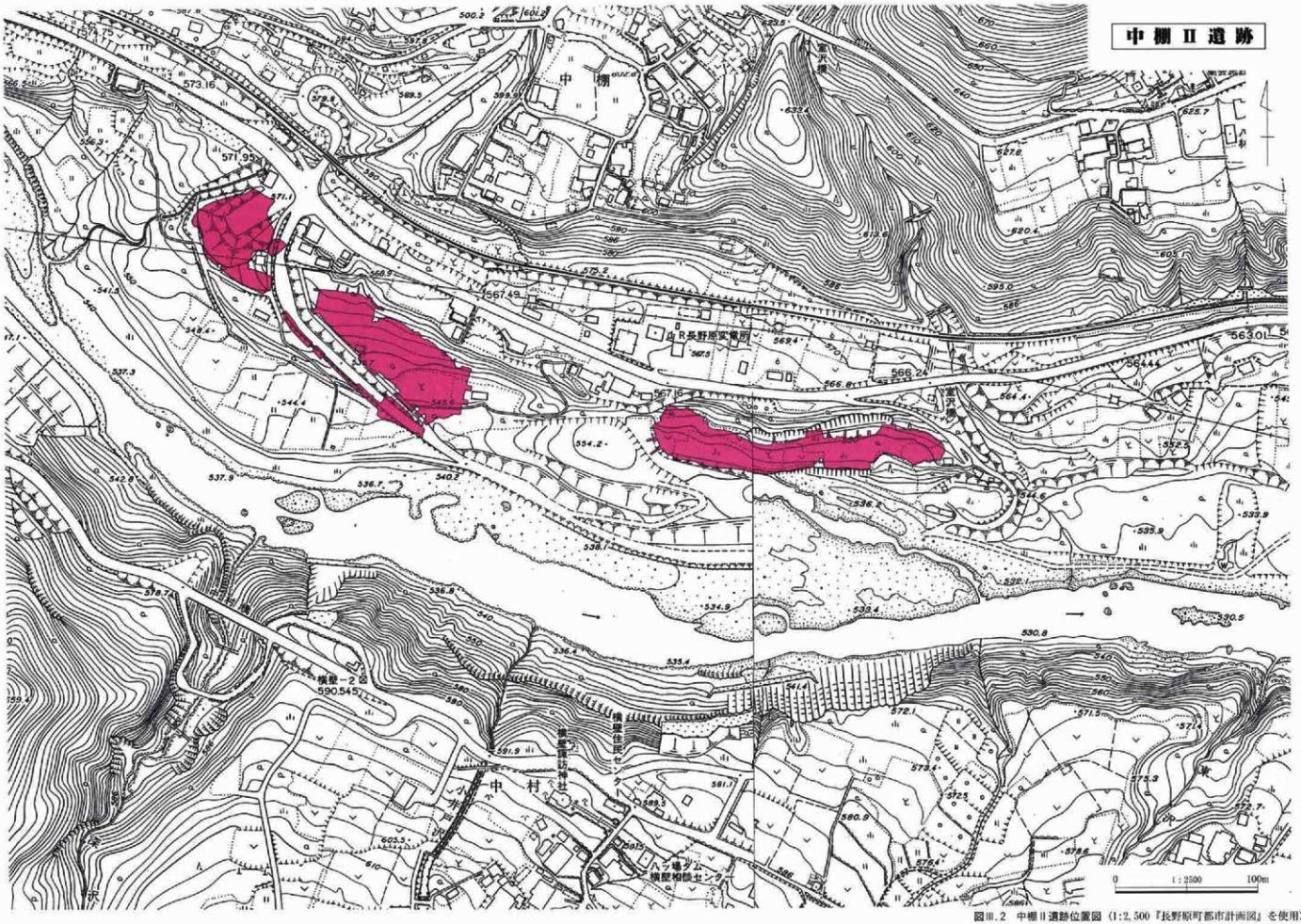
Ⅲ区の西側で泥流畑の下位の土砂崩れ層の下から、２面目の畑跡を検出した。最大で１mに及ぼうとする厚さの土砂崩れにより埋没したものである。遺物の出土と林地区に残された史料から、時期の確定が望まれ、整理作業を通しての年代決定へと連った。この土砂崩れ層はⅤ区の北西端で僅かに確認されるものと同一と考えられるが、道路建設等により核心部分についての状況は未集約である。

Ⅳ区は吾妻川の断崖上に位置する調査区である。泥流被災後の耕作による撹乱が著しかったが、泥流畑間墨時の畑の面積の規格性についての示唆を得ることができた。

Ⅴ区は、逆級化構造を示す砂層の記録化やイモの型取り、株根検出による栽培作物の限定などが記録できたことが成果としてあげられる。また、「ツカ」を単位とする当時の農耕形態についての検証へとつながるデータが蓄積された。



図Ⅲ.1　中棚Ⅱ遺跡グリッド設定図



図Ⅲ.2　中棚Ⅱ遺跡位置図（1:2,500『長野原町都市計画図』を使用）

2. 中棚Ⅱ遺跡の基本土層

調査区間の層序は遺跡内で対応するものとし、遺跡間では必ずしも層序は対応するものではないこと、地点において土色が異なっており土色は目安としての記載であることを付記しておく。吾妻川の中位・上位段丘に位置する周辺の遺跡で見られる土層に対比できるもので、As-B、As-Kkをテフラ分析で確認できたものもあるが、部分的にしか検出できず、ここでは取り上げられなかった。これらについては、Ⅵ章を参照されたい。中棚Ⅱ遺跡における基本的な土層は以下の通りである。

第Ⅰ層　表土

Ⅳ区では近現代の耕作による撹乱が顕著であり、部分的に耕作が遺構面に及んでいる。

第Ⅱ層　暗褐色土(天明泥流堆積物)

アグルチネート岩片をわずかに含む。河床起源と考える亜円礫（最大径30cm大）が、遺構である当時の石垣などの地形変換部分に多く残されていた。このことは、吾妻川の下位段丘に位置する調査区内で共通する天明泥流堆積物中での特徴であった。多くの場合、遺構面を傷つけたと考えられる大きさ(30cm以上)の礫はこの土層中には見られない。Ⅱ′層、Ⅱ″層は逆級化構造の砂層部分である。

第Ⅲ層　As-A軽石

１～２mm大の発泡のよい白色軽石。少量ではあるが20mm大の同質の軽石を含む。現時点では、降下日時の違いによるユニット分けはできない。本遺跡ではプライマリーな状態で１～２cm程度の厚さで堆積する。

第Ⅳa層　灰暗褐色土

泥流畑作土。Ⅳb層を基層として耕作により形成された作土。Ⅲ区及びⅤ区の一部で見つかっている土砂崩れ上の作土で継続して耕作がおこなわれたⅤa層（N37(2)号畑、38N(2)号畑）にも対応する。

第Ⅳb層　灰褐色土

２～３cm大の亜角礫を多く含む不均質層。締まりやや弱い。発掘調査時に、寛保年間の土砂崩れを想定した。その後、関連する史料の集約や遺物の年代から、子の歳の水害の可能性を指摘される。確認できるのはⅢ区とⅤ区の北西端のみである。

第Ⅴa層　黒色土

泥流畑作土及びⅢ・Ⅴ区の２面目畑作土。やや色調明るく、灰色味を帯びる場合もある。全体的に締まりはやや弱い。ボサボサして、粘性ややあり。Ⅴb層を基層とし礫が除去され、耕作がおこなわれた作土と考える。一般に基層に比べて色調明るい。

第Ⅴb層　暗褐色土

Ⅴa層よりも色調暗く、赤色の鉄分凝集が混じらず均質だが、１～５cm大の亜角礫を含む。

第Ⅵ層　黒色土

Ⅴ層に比べて黒色味強く、多少粘性も強いが、Ⅴ層との区別は難しい。白色軽石を含む。炭化物を部分的に含む場合がある。

第Ⅶ層　暗褐色土

３～５cm大の亜角礫を含む礫層。

第Ⅷ層　黒色土

Ⅴ層、Ⅵ層よりもさらに黒色味強く、層中の下位に30cmを超える亜角礫を含む場合あり。炭化物も少量含む。Ⅳ区ではこの土層より、弥生時代の遺物が見つかっている。

第Ⅸ層　暗黄褐色土

くすんだ色調のローム２次堆積土。部分的に亜角礫（30cm大以上）を含む。

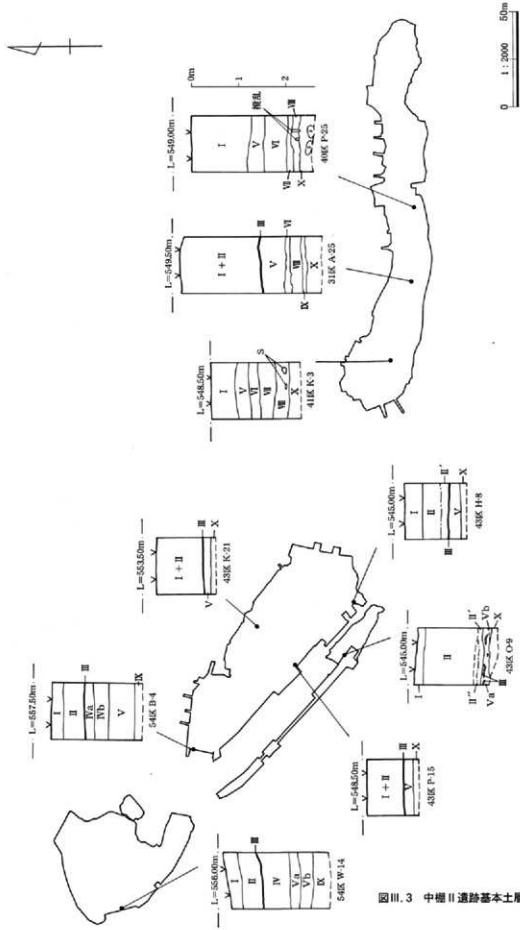
第Ⅹ層　黄褐色土

細粒の均質な河床砂土。数層に分層できるが、いずれも均質。部分的に30cm以上までの河床礫（亜円礫）を層状に含む場合がある。

3. 泥流面の遺構と遺物

（1）畑の全体構造

中棚Ⅱ遺跡においても多くは小礫を含む石畑である。畑の外へ不要な石をはじき出したり積み上げたりして作られた「ヤックラ」は少なかったが、他遺跡で確認されていない形態の、不要な礫を地境の位置に溝状に埋め込んだものや長楕円の土坑状の穴に石を埋め込んだ例などが確認された。これらは、い



図Ⅲ.3 中棚Ⅱ遺跡基本土層図

ずれも畑地開墾に伴う所産と考えられる。

遺跡内で検出された畑は傾斜が大きく、15度以上の傾斜地、中には20度に及ぶものまであった。いずれの場合においても、たいていは等高線耕作がなされていた。特に傾斜の強い畑地では、この傾斜が理由で地滑りのな客土がおこなわれるため、比較的良好な地味を形成することが考えられる。特に畑には平坦面を単位とした単位畑の存在が久々戸遺跡や下原遺跡と同様に看取できる。

Ⅰ区及びⅢ区では、累々とした礫の中に「猫の額」と形容したくなるような狭小な畑跡が検出された。この畑の基盤となる土砂は、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ区の北西部分付近を覆っていた。このことで、下位面の遺構の存在が想定され、土砂崩れに埋まった２面目畑のⅢ区N37(2)号畑及びⅤ区N38(2)号畑が検出された。N37(2)号畑には平坦面が確認されるとともに、入念に手入れされた耕作地景観が偲ばれる。それらは、Ⅲ章４節以下に記載する。

計測をおこなった畝幅は、１尺４寸ないしは１尺５寸が中心でやや狭く、久々戸遺跡と比較することでその傾向が異なることがわかる。

本遺跡では、調査が断続的におこなわれた為に、年度や調査区が絡み合い状況を把握しにくい。天明泥流堆積物下という観点でⅠ～Ⅴ区の調査区内の畑地景観を概観しておきたい。いずれも、吾妻川の左岸南傾斜の畑である。

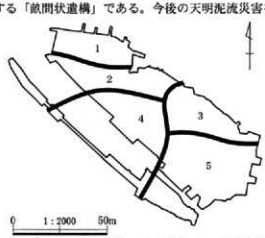
Ⅰ区とⅡ区は、トレンチ状に設定された調査区であったため、畑遺構の明確な状況が把握できなかった。西側では特に泥流による撹乱が顕著で遺構の残存状況は極めて不良であった。そのため、ヤックラの存在は確認されたが畑遺構の確認はできなかった。Ⅲ区との交わる部分でも不確定な要素を残している。

Ⅲ区は累々とした礫群の中で検出された畑景観から、土砂崩れ後の耕作状況が想定された。前述の通り、泥流畑下位からの２面目畑検出もなされた。土砂崩れの年代観により、今まで不確定なテフラの噴出年代や農事に関する資料提示がなされるものと考えたが期待したデータを得ることはできなかった。

Ⅴ区の調査により連続する畑遺構が想定された。また、久々戸遺跡のヤックラの例にならい、図Ⅲ．４の通りⅤ区を概ね１～５段と仮称し、その地形における位置を考慮し、各畑の項で記述していく。

Ⅳ区は南に比高10数mに及ぶ断崖が存在しており、当時の地形も同様なものであったと推定される。

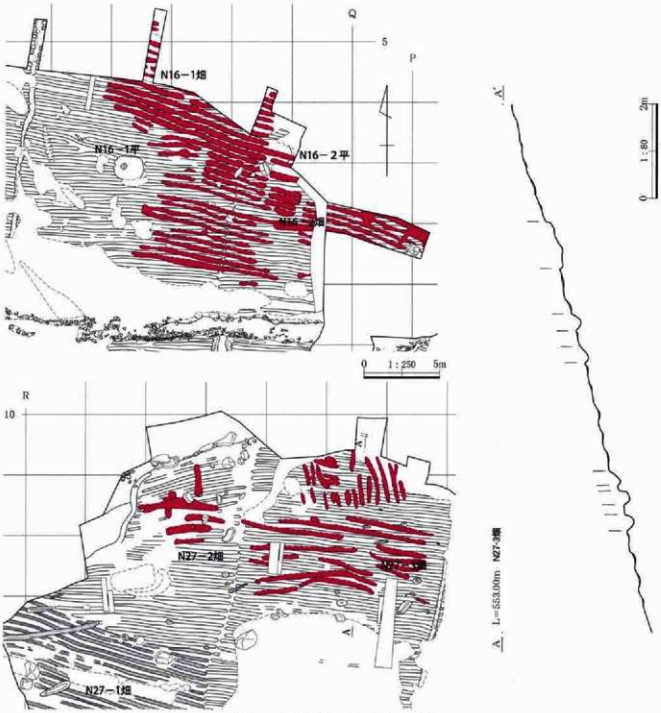
また、Ⅳ区及びⅤ区では、泥流被災以降現在までの撹乱（復旧）痕跡が部分的に検出されている（図Ⅲ．5）。被災後おこなわれた復旧によるものか、経年的におこなわれた耕作によるものなのかは、現時点では知る由がないが、被災後の人々の営みを検証する「畝間状遺構」である。今後の天明泥流災害を考える上で資料を補完する意味合いから、平面図を作成した。いずれの場合も泥流畑の表面を数cm程度掘り込む深さで検出された。Ⅴ区の場合では、最上位の１段の調査区東で確認された。表土及び天明泥流堆積物の厚さは併せて50cm内外である。被災後の復旧ないしは耕作により掘り込まれた溝状の痕跡は泥流畑と同様に等高線と平行する。泥流畑の調査時に確認された覆土底部中には天明泥流堆積物中から出た礫等が確認された。断面図N16号畑Ｂ－Ｂ′を参照頂きたい。なお、表土として扱った現況の耕作部分により、掘り込みがおこなわれた掘込面の状況は保たれてはいないことはいうまでもない。溝状の痕跡の立ち上がり角度は急勾配であったことと掘込みは数cm程度で実際の深さは不明であることを確認しておきたい。



図Ⅲ．4　中棚Ⅱ遺跡　Ⅱ・Ⅴ区　１～５段位置図

Ⅳ区では、N27号畑の北側部分で確認される。等高線と平行する場合と直行する場合がある。切り合う部分から見る限り等高線と垂直方向の撹乱が古いことが確認できる。充填された埋土は礫が殆ど確認できず黒色土であった。現況の表土及び天明泥流堆積物の厚さは併せて概ね１ｍを測る。N27号畑ｃ－ｃ′の畝断面図を参照されたい。畑遺構は畝とサクにより構成される構造の単純なものであり、繰り返しの耕作により改変がなされる。直上層が自然堆積かどうかで畝、サクと耕作痕との区別がなされるものであることを確認しておきたい。

このほかに、調査区内では、自然薯を栽培した痕跡等も確認できたが、撹乱扱いとしてある。計測値等については表Ⅲ．１・２を参照されたい。



図Ⅲ.５ 中棚Ⅱ遺跡 Ⅴ・Ⅳ区撹乱痕跡

表III.1　中棚II遺跡　畑計測値等一覧表

*面積単位はm²。1 歩＝6 尺平方で算出。

畑名	単位畑名	単位畑 面積	単位畑 反・畝・歩	畑面積 科度	畑面積 斜面面積	畑面積 反・畝・歩	畑面積 畑面積	畑面積 反・畝・歩	耕作土 pb
N 1 畑		—	・・・	—	・・・	・・・	—	・・・	—
N 2 畑		60	・・18	8	61	・・18	61	・・18	—
N 3 畑		11	・・3	10	11	・・3	11	・・3	—
N 4 畑		—	・・・	7	—	・・・	—	・・・	—
N 5 畑		19	・・5	7	19	・・5	19	・・5	—
N 6 畑		61	・・18	11	62	・・18	62	・・18	—
N 7 畑		—	・・・	11	—	・・・	—	・・・	—
N 8 畑		34	・・10	13	35	・・10	35	・・10	—
N 9 畑		—	・・・	8	—	・・・	—	・・・	—
N10畑		35	・・10	14	36	・・10	36	・・10	—
N11畑		—	・・・	13	—	・・・	—	・・・	—
N12畑		—	・・・	6	—	・・・	—	・・・	—
N13畑		—	・・・	9	—	・・・	—	・・・	—
N14畑		—	・・・	7	—	・・・	—	・・・	6.9
N15畑		257	・2・12	10	261	・2・18	261	・2・18	6.8
N16畑	N16-1畑	—	・・・	10	—	・・・	—	・・・	6.9
	N16-2畑	—	・・・	10	—	・・・	—	・・・	7.0
N17畑		—	・・・	11	—	・・・	—	・・・	6.9
N18畑		—	・・・	9	—	・・・	—	・・・	6.9
N19畑		229	・2・8	13	232	・2・10	232	・2・10	7.0
N20畑		—	・・・	14	—	・・・	—	・・・	7.0
N21畑	N21-1畑	208	・2・2	15	215	・2・5	549	・5・16	6.9
	N21-3畑	158	・1・17	3	158	・1・17			6.9
	N21-4畑	175	・1・22	5	176	・1・23			6.9
	N21-5畑	—	・・・	14	—	・・・	—	・・・	6.9
	N21-6畑	—	・・・	4	—	・・・	—	・・・	6.9
N22畑	N22-1畑	94	・・28	15	97	・・29	257	・2・17	7.0
	N22-2畑	157	・1・17	11	160	・1・18			7.0
N23畑		—	・・・	14	—	・・・	—	・・・	—
N24畑		—	・・・	20	—	・・・	—	・・・	—
N25畑		—	・・・	4	—	・・・	—	・・・	6.9
N26畑	N26-1畑						1777	1・7・27	—
	N26-2畑	316	・3・5	5	317	・3・5			6.8
	N26-3畑								—
	N26-4畑	277	・2・23	6	278	・2・24			6.9
	N26-5畑								6.9
	N26-6畑	176	・1・23	9	178	・1・23			6.9
	N26-7畑								7.0
	N26-8畑	453	・4・17	4	454	・4・17			6.0
	N26-9畑								7.0
	N26-10畑	111	・1・3		111	・1・3			6.8
	N26-11畑			9					6.9
	N26-12畑	438	・4・12	4	439	・4・12			6.9
	N26-13畑								6.9
N27畑	N27-1畑	285	・2・20	10	269	・2・21	389	・3・27	—
	N27-2畑	114	・1・4	17	120	・1・6			—
	N27-3畑	—	・・・	10	—	・・・	—	・・・	—
N28畑		—	・・・	7	—	・・・	—	・・・	—
N29畑	N29-1畑	343	・2・13	7	245	・2・14	391	・3・28	—
	N29-2畑	145	・1・13		146	・1・14			—
N30畑	N30-1畑	—	・・・	7	—	・・・	—	・・・	—
	N30-2畑	379	・3・24	12	387	・3・27	—	・・・	—
N31畑	N31-1畑	257	・2・20	7	269	・2・21	—	・・・	—
	N31-2畑	—	・・・	7	—	・・・	—	・・・	—
N32畑		281	・2・18	11	266	・2・20	266	・2・20	—
N33畑		—	・・・	11	—	・・・	—	・・・	—
N34畑	N34-1畑	—	・・・	19	—	・・・	—	・・・	—
	N34-2畑	279	・2・24	5	289	・2・24	—	・・・	—
N35畑		—	・・・	11	—	・・・	—	・・・	—
N36畑		—	・・・	9	—	・・・	—	・・・	—
N37畑(1)		—	・・・	5	—	・・・	—	・・・	—
N38畑(1)		—	・・・	7	—	・・・	—	・・・	6.9

＊1 凡例は、表IV.2を参照。

平坦面名	平坦面 ＊1 面積	形状	溝	踏み	形状	比高
N2-1区画	(2.74)	(円)	×	／	—	—
N2-(2)区画	(4.49)	—	—	—	—	—
N12-1区画	2.33	(円)	×	／	—	±
N15-1平	2.68	◇ 円	×	／	—	±
N16-1平	2.49	◇ 不	×	凹	円	↓
N16-2平	2.86	◇ 不	×	／	—	±
N18-1平	1.49	◇ 不	○	／	—	↑
N20-1平	0.47	◇ (円)	○	／	—	(±)
N21-2平	1.44	◇ 不	／	—	(±)	
N21-4平	3.93	◇ 円	×	／	—	±
N21-5平	0.74	◇ (円)	○	／	—	—
N22-1平	2.18	円	×	／	—	±
N22-2平	1.83	円	×	凹	楕	±
N23-1平	1.97	不	×	／	—	(±)
N24-1平	1.78	◇ (円)	×	／	—	(±)
N25-1平	1.90	(円)	(○)	／	—	(±)
N26-2平	2.94	円	○	／	—	±
N26-3平	2.01	円	○	／	—	±
N26-4平	2.44	円	◇ (○)	凹	楕	↓
N26-5平	2.16	◇ (円)	○	／	—	↓
N26-7平	1.99	円	×	／	—	±
N26-8平	2.03	円	○	／	—	±
N26-9平	1.23	円	○	／	—	±
N26-10平	1.12	円	(○)	／	—	±
N26-11平	2.84	円	×	凹	円	(±)
N26-12平	2.60	円	○	／	—	±
N26-13平	2.44	円	○	／	—	±
N27-1平	1.22	◇ 円	(○)	／	—	(±)
N29-1平	2.18	円	○	／	—	↓
N30-1平	1.87	◇ 円	○	／	—	↓
N30-2平	2.32	円	×	／	—	(±)
N31-1平	1.99	円	○	凹	円	↓
N32-1平	1.64	◇ (円)	(○)	／	—	(±)
N34-1平	1.39	◇ (円)	(○)	／	—	±
N34-2平	1.85	円	○	／	—	±
N37 (2)-1平	2.23	不	×	／	—	±

表III.2　中棚II遺跡　畝幅計測値一覧表

＊尺換算は曲尺：1尺=10/33mを用い、「参考」は同畑内の別地点の計測値を指す。

畑名	単位畑名	畝幅：m	相当尺寸
N 1 畑		0.40	1.33
N 2 畑		0.45	1.48
N 3 畑		(0.45)	1.49
N 4 畑		—	—
N 5 畑		0.44	1.45
N 6 畑		0.42	1.39
N 7 畑		—	—
N 8 畑		0.42	1.38
N 9 畑		0.70	2.31
N10畑		0.47	1.54
N11畑		0.46	1.52
	参考	0.47	1.55
N12畑		—	—
N13畑		—	—
N14畑		0.45	1.48
N15畑		0.43	1.43
	参考	0.44	1.45

畑名	単位畑名	畝幅：m	相当尺寸
N16畑	N16-1畑	0.45	1.50
	参考	0.45	1.49
	N16-2畑	0.48	1.59
N17畑		0.43	1.41
N18畑		0.48	1.60
N19畑		0.49	1.60
N20畑		0.43	1.41
N21畑	N21-1畑	—	—
	N21-2畑	0.46	1.51
	N21-3畑	0.46	1.53
	N21-4畑	0.46	1.53
	N21-5畑	—	—
	N21-6畑	0.46	1.51
N22畑	N22-1畑	0.47	1.54
	N22-2畑	0.45	1.49
N23畑		0.44	1.46
N24畑		0.44	1.45

畑名	単位畑名	畝幅：m	相当尺寸
N25畑		0.48	1.58
N26畑	N26-1畑	0.42	1.39
	N26-2畑	0.41	1.36
	N26-3畑	0.41	1.34
	N26-4畑	0.41	1.35
	N26-5畑	0.41	1.35
	N26-6畑	—	—
	N26-7畑	0.43	1.42
	N26-8畑	0.42	1.39
	N26-9畑	0.42	1.39
	N26-10畑	0.41	1.35
	N26-11畑	0.42	1.39
	N26-12畑	0.43	1.41
	N26-13畑	0.43	1.43
N27畑	N27-1畑	0.45	1.49
	N27-2畑	0.49	1.61
	N27-3畑	0.46	1.50

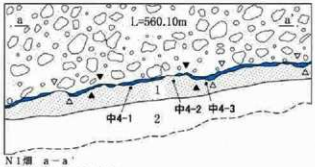
畑名	単位畑名	畝幅：m	相当尺寸
N28畑		0.43	1.42
N29畑	N29-1畑	0.43	1.42
	N29-2畑	0.45	1.47
N30畑	N30-1畑	0.46	1.52
	N30-2畑	0.46	1.50
N31畑	N31-1畑	0.46	1.52
	N31-2畑	0.47	1.55
N32畑		0.48	1.57
N33畑		0.48	1.57
N34畑	N34-1畑	0.45	1.48
	N34-2畑	0.46	1.51
N35畑		0.44	1.45
N36畑		0.47	1.56
N37(1)畑		0.42	1.39
N38(1)畑		0.37	1.23

（2）畑

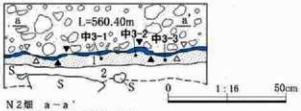
N１～３号畑は、残存状況が不良で、不明瞭な畝サクの痕跡しか確認できなかった。耕作の状況を考えると、土用の培土がおこなわれずに被災した状況を呈していることになるが、検出作業時に残した畝断面の観察によって考えるしかない。**N１号畑**とN２号畑には、調査区最北端の攪乱部分から下る４号道が終着している。

N２号畑に付属すると判断した**N２－１号区画**は、北側を囲うように礫が積まれ、断面図のように上２段は土砂崩れ後に積まれたものと考えられる。４号道と共有する部分があるが、この畑に帰属する平坦面と同等な施肥などに関する役割をもつ遺構と考えられる。そこで、「区画」の遺構名称を用いるが、平坦面の分類に含めておくこととした。なお、**N２－１(2)号区画**はN２－１号区画の耕土を除去した後の垣方の可能性もあるが、土砂層堆積前の下位面の遺構の可能性もある。そのため、全体図には２面目の遺構として掲載したが、内容的にはここで扱うものである。また、同様な遺構と考えられるN12-１号区画の分析結果**中10**も参照頂きたい。

N３号畑は５・７・12号ヤックラに囲まれた狭小な傾斜の強い畑である。３枚のいずれの畑の場合も、土砂崩れ後に開墾した雑然とした状況から、花粉分析とプラント・オパール分析をおこない耕作がなされた確認をおこなった。その結果については、**中３、４、８**を参照頂きたい。耕作状況は土用の培土はおこなわれていない状況と捉えられる。

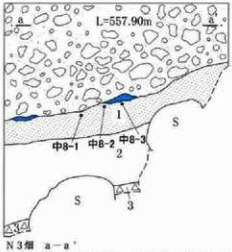


N１畑　a－a'
1　暗褐色土　２層の作土。
2　暗褐色土　砂質味強く小礫（１～２cm大）を僅かに含む。

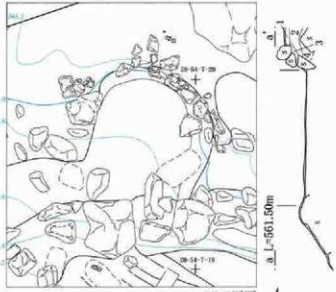


N２畑　a－a'
1　暗褐色土　砂質味強い作土。
2　黄褐色土　砂質味強いが、１層とは色調のみ異なる。

N２－１号区画　a－a'
1　黄褐色土　２層相当土層と考えるが、粒径の大きい砂礫層（最大１cm）を中心とする。
2　黄褐色土　基本土層Ⅳ層。土砂崩れ層。
3　黄褐色土　空隙多い乱れた２層。
4　黒色土　締まり弱く均質。礫を含まない。（構築時の土層と考える。）

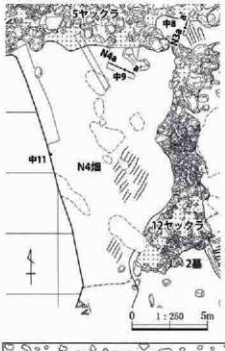


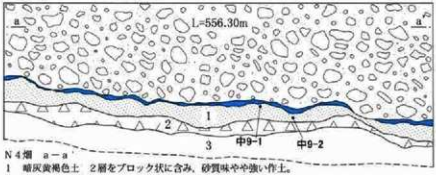
N３畑　a－a'
1　暗褐色土　締まり弱く，黄褐色砂質土のブロックを少量含む。
2　黒褐色土　１層より若干色調明い。20cm大の亜角礫を多く含む。
3　にぶい褐色土　砂質土。二次堆積と考えられる。亜角礫を多く含む。



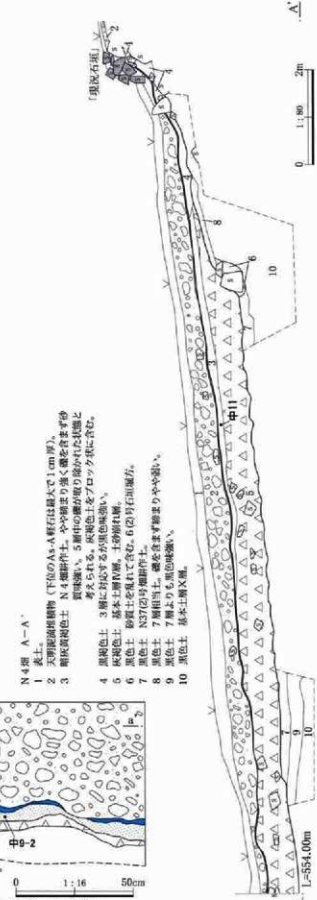
図Ⅲ.6　中棚Ⅱ遺跡　N１～３号畑

Ｎ４号畑は５・12号ヤックラに囲まれる状況で検出された。不明瞭ながら畝サクの方向が部分的に検出できた。耕作土は、移動してきた土砂から礫を除去して耕作がなされたことがわかる。また、**中９**からも耕作がおこなわれたと考えられる。なお、畝サクの存在のみで耕作状況に関する観察は不詳である。天明三年という年代が確定している耕作面と耕作土の母体となっている土砂崩れの年代確定がおこなわれることは、考古学的にテフラを検証できる極めて良好な条件が揃うことになる。浅間山を起源とするテフラであるAs-A′軽石の検出がおこなわれる可能性を考え、**中11**で確認されたテフラをAs-A′軽石の想定をおこなってテフラ分析を実施し、土砂崩れ層とのテフラ降下年代との比較を試みたが、想定





N４畑　ａ－ａ′
1　暗灰黄褐色土　２層をブロック状に含み、砂質味やや強い作土。
2　灰褐色土　砂質味強い。土砂崩れを起源と考える二次堆積土。
3　黒色土　やや粘性あり。礫少ない均質土。

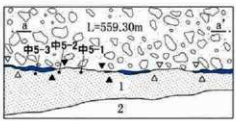


N４畑　Ａ－Ａ′
1　表土
2　天明泥流堆積物（下位のAs-A軽石は微大で１cm厚）。
3　暗灰黄泥色土　N４畑耕作土。やや粘質り強く礫を含まず砂質味強い。５層中の礫が取り除かれた状態と考えられる。灰褐色土をブロック状に含む。
4　黒褐色土　３層に対応する砂質色味強い。
5　灰褐色土　基本土層層位。土砂崩れ層。
6　黒色土　砂質土を多量に含む。６(2)号石垣層。
7　黒色土　N37(2)号畑耕作土。
8　黒色土　７層相当土。礫含まず粘質よりやや強い。
9　黒色土　７層よりも黒色味強い。
10　黒色土　基本土層区画。

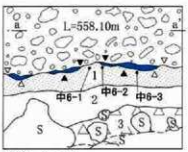
図Ⅲ.7　中棚Ⅱ遺跡　Ｎ４号畑

した結果を得ることはできなかった。なお、下位からは37(2)号畑が検出され、周囲のヤックラ等も土砂崩れ被災前と同様な範囲で確認された。詳細については、周辺調査を待つ必要がある。

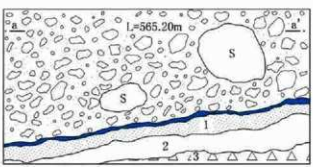
N５～８号畑は検出部分が狭小であったり、残存状況が不良であり、耕作状況を確定するには困難で↗ある。N５・６・８号畑は畝幅が１尺４寸に相当する計測値をとる。N６～８号畑では２面目を覆っている土砂崩れ層を母体とした耕作土である。N７号畑は、特に畝サクの方向が判然としなかった。N８号畑は、畝サクとAs-A軽石の残存状況から、土用の培土がおこなわれていた可能性が高い。



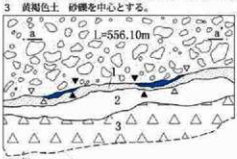
N５畑　a－a'
1　黒褐色土　やや粘性ある砂質味強い作土。
2　暗褐色土　１層に比べて、色調異なる。



N６畑　a－a'
1　暗褐色土　やや砂質味ある作土。
2　暗褐色土　１層に比べて、色調暗く、やや黒色味強い。
3　黄褐色土　砂礫を中心とする。



N７畑　a－a'
1　黄褐色土　礫を含まない砂質層(土砂崩れ二次堆積の礫を除いたものと判断する)。黒色土ブロックを斑状に含む。
2　黒色土　礫をほとんど含まず粘質で締まり弱い。
3　黄褐色土　20cm大の亜角礫多く含む砂礫層。

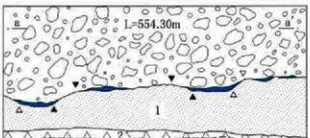


N８畑　a－a'
1　黒褐色土　やや粘性ある砂質土。２層までの耕起があり、１層の厚みである程度の期間耕作が行われていたものと判断される。(１層、２層を合わせて耕作土とする。)
2　黄褐色土　１層の黒褐色土をブロック状に含み、３層の砂礫層を主体とする。この畑の耕起された部分と考えられる。
3　黄褐色土　３～５cm大の角礫を少量含む砂礫層。

0　1:16　50cm

図Ⅲ.８　中棚Ⅱ遺跡　N５～８号畑

N９号畑は畝幅が70cmと本書で扱う中では突出した値を計測する。イモ類の耕作などが想定されるが、調査時点ではそれ以上の観察確認はできなかった。畑内を西から途中途切れながら東へ向かう撹乱の跡は、泥流中の石による撹乱と考えられる。耕作状況はN21号畑と比較しても畝サクの明瞭な高低差が確認できないこと、サトイモの型取りがおこなわれた畝と比較しイモの耕作では培土の時期が多少異なることに注目すれば土用の培土がおこなわれていない状況と考えられる。

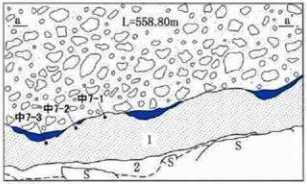


N９畑　a－a'
1　暗褐色土　締まりやや強く、粘性のある作土。２層の黄褐色土と砂礫を一部ブロック状に含む。
2　黄褐色土　５～10cm大の角礫を僅かに含む砂礫層。

0　1:16　50cm

図Ⅲ.９　中棚Ⅱ遺跡　N９号畑

N10号畑は11号ヤックラに周囲を囲まれている。畑としての耕作土を確保するために礫を周囲に片付けた状況を呈しているものと考えられる。耕作状況は、土用の培土を終了させた後にAs-A軽石が降下した状態とみられる。南西端の片付けられた礫に囲まれた畳1枚分程度の範囲は、N2号畑やN12号畑で見られる平坦面の機能を持つ区画とした遺構と同様であった可能性も指摘しておくが詳細は不明である。



N 10畑　a－a'
1　黒褐色土　やや粘性ある作土。粘性強い褐色土をブロック状に少量含む。
2　黒褐色土　色調は1層よりややや暗く、粘性はやや強い。暗褐色ブロックは含まない。

0　1:16　50cm

0　1:250　5m

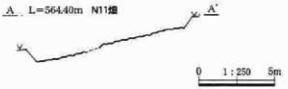
0　1:250　5m

図III.10　中棚II遺跡　N10号畑

N11号畑はI区とII区に跨る。調査年度が異なることや調査面積と部分が断片的であるなど、不確定な要素が多い。畑は、確認されている部分の南側3分の1が比較的傾斜が少なく、1号石垣の北側から大きく傾斜する。畝幅は、石垣の両地点でほぼ同一の計測値をとっている。

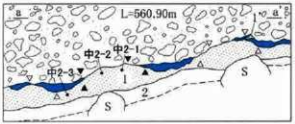
畝断面の形状からは、概ね傾斜の高い側への培土ないしは「ヒキザク」の痕跡を窺い知ることができる。ヒキザクは培土の一つとも考えられるが、除草や土の凹凸を馴らすような、狭義ではいわゆる培土とは異なる作業である。人為的な耕作の痕跡と考えられるが、確証を得た耕作状況を把握するためには、さらに周辺の調査の結果を待たねばならない。なお、I区の南部分は畑傾斜とは逆に、南に地形が高まり、礫の集まりが確認されたが、時期不明の攪乱を受けている。

0　1:250　5m

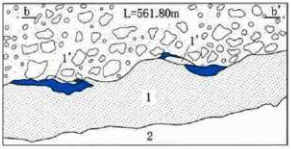


0　1:250　5m

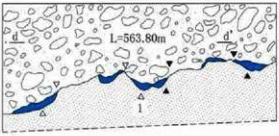
図III.11　中棚II遺跡　N11号畑(1)



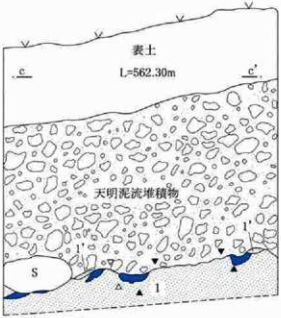
N11畑　a－a'
1　黒色土　やや粘性ある作土。
1'　黒色土　1層とA軽石の混土(培土と考えられる)。
2　褐色土　均質の砂礫土。20cm大の角礫を含む。



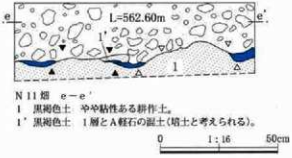
N11畑　b－b'
1　黒色土　やや粘性ある耕作土。
1'　黒色土　1層とA軽石の混土(培土と考えられる)。
2　褐色土　均質の砂礫土。20cm大の角礫を含む。



N11畑　d－d'
1　黒褐色土　やや粘性ある耕作土。



N11畑　c－c'
1　やや粘性ある耕作土。
1'　1層とA軽石の混土(培土と考えられる)。

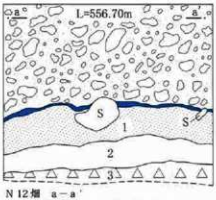


N11畑　e－e'
1　黒褐色土　やや粘性ある耕作土。
1'　黒褐色土　1層とA軽石の混土(培土と考えられる)。

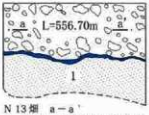
図Ⅲ.12　中棚Ⅱ遺跡　N11号畑(2)

N12号畑と**N13号畑**は畝サクが検出されないが、礫が除去され、比較的平坦な地形を呈していることとAs-A軽石のほぼ一様な堆積状況を確認し、畑遺構と判断した。N12号畑の北端には**N12-1号区画**が確認される。これは、N2-1号区画と様相が似る。**中10**のプラント・オパール分析により遺構の内外で出現率が異なり、併せて内側で草本類やイネの出現率が多いことなどから、稲藁に加え雑草堆肥などの想定がなされる。しかしながら、調査区内は畑遺構の一部分が確認されたのみの状況であるので、遺構の南側への広がりなど詳細については周辺の調査の状況を待つ必要がある。

N14号畑からN28号畑は、Ⅱ区及びⅤ区で検出されたものである。図Ⅲ.4によるⅤ区の最上位の1段に位置する**N14・16号畑**はその全体が検出できなかったが、畑の東西の割付間口に単位を確認することができる。3枚の畑の区別は、ヤックラの存在及び畑の地境に存在する踏み分け道である。東西の間口はおよそ15m内外の計測値をとる。N16号畑は、被災以降現在までのサクないし土坑状の攪乱である。いわゆる「畝間状遺構」が目立つ。これについては図Ⅲ.5で掲載した通りである。なお、N16-2号畑の南端石垣の北には2条の幅広の畝が確認できたが、攪乱が著しく、N21号畑の様な耕作状況を確

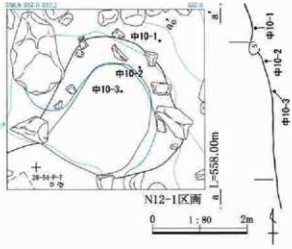


N 12畑　a－a'
1　黒色土　締まりやや弱くボサボサしている。
　　亜角礫を僅かに含むが均質。
2　黒色土　1層に3層の砂礫を部分的にブロック状に含む。
3　黄褐色土　砂土を中心とする砂礫層。



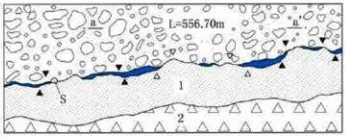
N 13畑　a－a'
1　黒色土　やや粘性のある耕作土と判断する。

0　1：16　50cm



図Ⅲ.13　中欄Ⅱ遺跡　N12・13号畑

認するにはいたらなかった。**N16－2号畑**は東側が範囲未確定である。**N16－1号畑**の間口と**N15号畑**の60号ヤックラ南付近での測定値はほぼ同じ値をとる。この間口の幅については本遺跡の他の畑に関しても重要な意味を持ってくる。なお、他の畑の例から、単位畑の面積値を推定した場合には、**N15－1号平坦面**や**N16－1号平坦面**から南側の11号石垣までの面積を計測すると概ね他との計測値が一致するが、単位畑の区分けは、敢えておこなわなかった。いわば、N26号畑の状況の様に中単位の区割りを確認したことで、それ以外については周辺部分の調査を待つ必要があろう。なお、これらの畑において重要な視点は、60号ヤックラとの位置関係である。開墾時にそれぞれ異なる筆単位の開墾がおこなわれたとするならば、N16号畑において他の筆を超えてヤックラへ畝を移動させることが考えられなくなる。つまり、1段のこれらの畑が筆の区別があるにも関わらず、同時期に開墾された可能性がある。**N16－2号平坦面**は撹乱により、ごく僅かの部分が検出されたのみであるが、その存在と位置が確認されたことは肝要である。N15号畑では、範囲確認の拡幅トレンチにより北側範囲を確認できたため、推定面積を計測した。N16号畑の南には、道が存在した可能性があるが、泥流中の撹乱により不確定である。耕作状況はN14号畑では一番ザク終了後に被災した状態を呈していると考えたい。

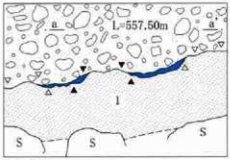


N 14 畑　a－a'

1　暗黄褐色土　粘性やや強く、砂質味強い作土。この下位を中心に乱れて黒色土層がブロック状に入る。(人為的な耕作により、形成されたものと判断される。)2層の土砂崩れ層を母体とする。小礫ほとんど含まず。(基本土層Ⅳa層。)

2　灰暗褐色土　3～5cm大の亜角礫を多く含む土砂崩れ層。砂質味強いが、やや粘性もある。(Ⅲ区で確認される2面目の土砂崩れと考えられる。)

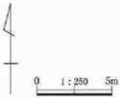
図Ⅲ.14　中棚Ⅱ遺跡　N14号畑

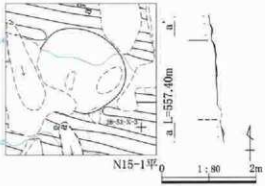


N 15 畑　a－a'

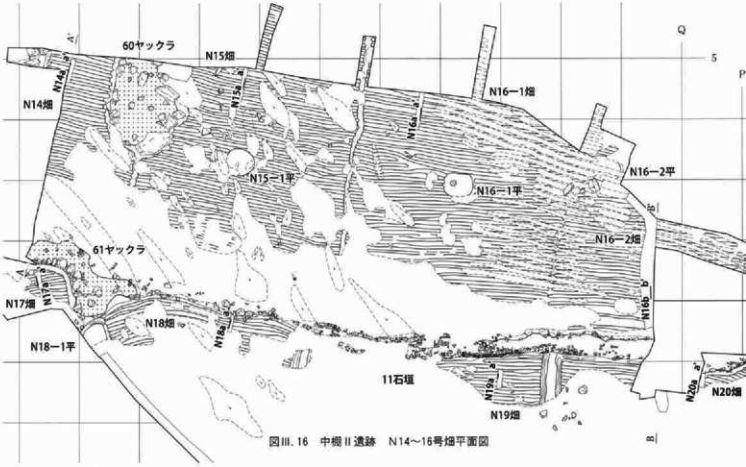
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)

0　1:16　50cm

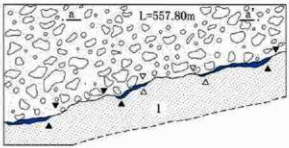




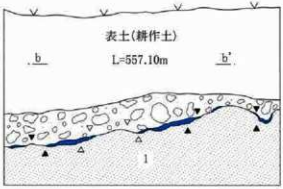
図Ⅲ.15　中棚Ⅱ遺跡　N15号畑



図Ⅲ.16　中棚Ⅱ遺跡　N14～16号畑平面図

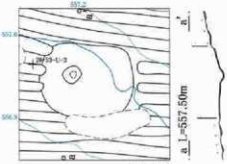


N 16畑　a－a'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。
（作土の区別はできない。）

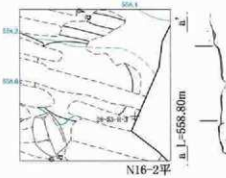


N 16畑　b－b'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。
（作土の区別はできない。）

0　1：16　50cm



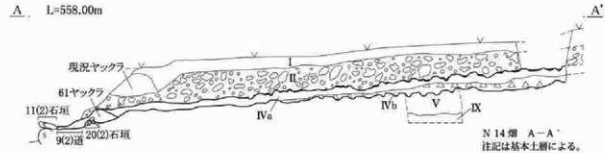
N16-1平



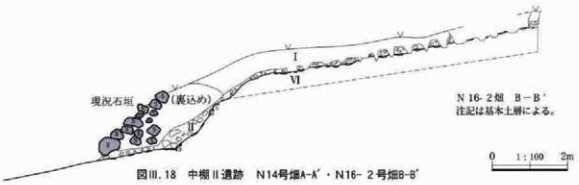
N16-2平

0　1：80　2m

図Ⅲ.17　中棚Ⅱ遺跡　N16号畑



N 14畑　A－A'
注記は基本土層による。

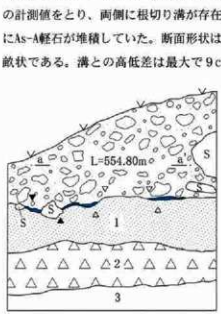


N 16-2畑　B－B'
注記は基本土層による。

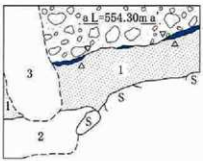
0　1：100　2m

図Ⅲ.18　中棚Ⅱ遺跡　N14号畑A-A'・N16-2号畑B-B'

2段に位置する**N17～20号畑**はいずれの場合も現況の畑の区割りと一致する撹乱により残存状況は不良である。ただし、石垣により懐となった部分については天明泥流被災時の状況を残存していた。このことでN19号畑の間口幅が確定できる。この畑の東西にはいずれも南北に通る畦状の高まりが地境として確認される。これらは、幅が概ね0.5ないし0.7mの計測値をとり、両側に根切り溝が存在しその部分にAs-A軽石が堆積していた。断面形状はやや潰れた畝状である。溝との高低差は最大で9cm を測る。



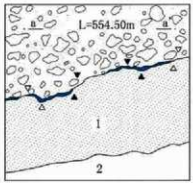
N 17畑　a－a'
1　黒色土　2層に比べて黒色味強く締まり弱い。暗黄褐色土のブロックは2層に比べて均質で小さい。(基本土層Ⅳa層。)
2　灰暗褐色土　3層に加えて2面目土砂崩れ層の暗褐色土を多く含む土層。暗黄褐色土：黒色土＝1：1で不均質に混ざる。(基本土層Ⅳb層。)
3　黒色土　均質な粘質土。締まりやや強い。



N 19畑　a－a'
1　黒色土　均質な粘質土。(土砂崩れ層下の2面目畑の耕作土に対応するものと考えられる。)小礫含まず。
2　暗褐色土　黄色味やや強い砂質土。均質で礫を含まない。
3　黒色土　天明泥流堆積後の撹乱。

0　1：16　50cm

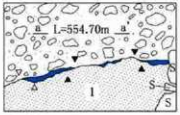
調査された他の畑遺構では確認されていない畑地境の構成要素である。N20号畑側の高まりには境木痕と思われる窪みが確認されたが、調査途中で土竜が周辺を掘り返してしまい断面図等の記録をとることが不能となってしまった。N17号畑はその周囲に踏み分け道状の平坦な道が廻っているが、西側が調査未実施のため畑の広がりや単位等は確認できない。N18号畑では、撹乱が著しい中で、**N18－1号平坦面**を検出した。N20号畑は、現代までの耕作による著しい撹乱の中で**N20－1号平坦面**が僅かに残されてその位置が確認された。11号石垣、12号石垣、14号石垣に画されていたと考えれば、N19号畑側にさらに、平坦面を配する単位畑が存在した可能性がある。N17～19号畑は、いずれも土用の培土は完了しない状況と判断される。



N 18畑　a－a'
1　黒色土　均質な粘質土。(2面目土砂崩れ下の耕作土に対応すると考える。)小礫含まず。
2　暗褐色土　黄色味やや強い砂質土。均質。礫含まず。

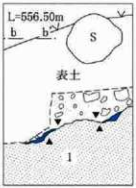
0　1：16　50cm

図Ⅲ.19　中棚Ⅱ遺跡　N17～19号畑

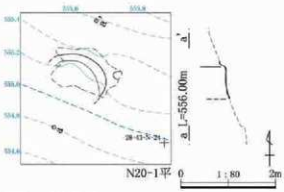


N 20畑　a－a'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)

N 20畑　c－c'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)



N 20畑　b－b'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)



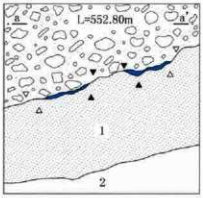
図III.20　中棚II遺跡　N20号畑

3段には、N22・23号畑、さらに5段へ繋がる斜面部にN24号畑が位置する。

N22号畑は、**N22-1号畑**と**N22-2号畑**の2枚の単位畑に分けられ、**N22-1・2号平坦面**の2基を配置している。**中13**においては、平坦面の性格を裏付けられるデータを検出するための分析であったが、その結果を読みとるにはいたらなかった。北端部分を僅かに欠くがほぼ完全な状況で検出された畑といえる。単位畑の区別を畝サクの変換点で考えたが、単位畑の見かけの面積は97㎡、160㎡と大きく異なるものの、合計し2分することで概ね40坪の計測値をとることになる。この値は、前出のN15号畑を2枚の単位畑と考えたときに近似する値となる。

N23号畑は、大半の部分が攪乱を受けているが西端に位置する**N23-1号平坦面**が確認された。これは、8号道に隣接するものである。畝からみる耕作状況は断面図を残せなかったが、土用の培土がおこなわれずにAs-A軽石の降下があった状況と判断する。

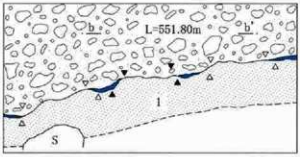
N24号畑は、傾斜が20度に及ぶ急な斜面に位置する畑跡である。16号石垣によりN23号畑とは区画されている。N26号畑との同一畑かどうかの関係が気になるところであるが、①畝幅は別の値をとる、②畝の断面形状が近似しない、③中単位の区割りが明確ではなく一致しない、④前述の区割りと同じく平坦面の位置がずれる、などの根拠から、N26号畑とは別遺構と判断した。また、攪乱が著しいのは、地山地形の状況と泥流の流下方向によるものと考えられるが、詳しくは周辺の調査を待つ必要があろう。N24号畑では、土用の培土がおこなわれていないものと判断した。



N 22畑　a－a'

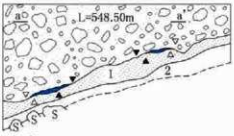
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)

2　黄褐色土　均質な細粒砂層。周辺の基盤砂層。(基本土層Ⅹ層。)



N 22畑　b－b'

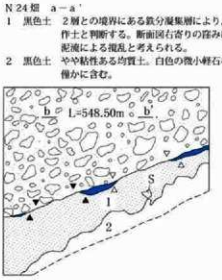
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)



N 24畑　a－a'

1　黒色土　2層との境界にある鉄分凝集層により，作土と判断する。断面図右寄りの窪みは泥流による攪乱と考えられる。

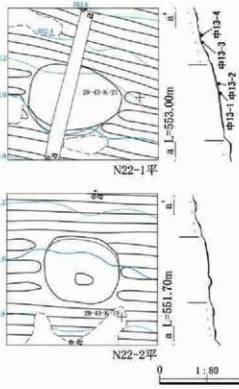
2　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。

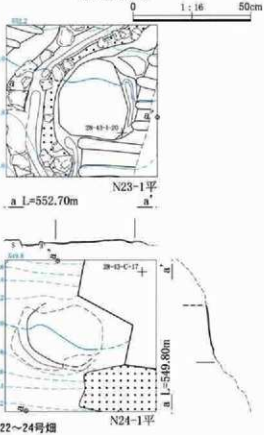


N 24畑　b－b'

1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)

2　黄褐色土　均質な細粒砂層。周辺の基盤砂層。(基本土層Ⅹ層。)

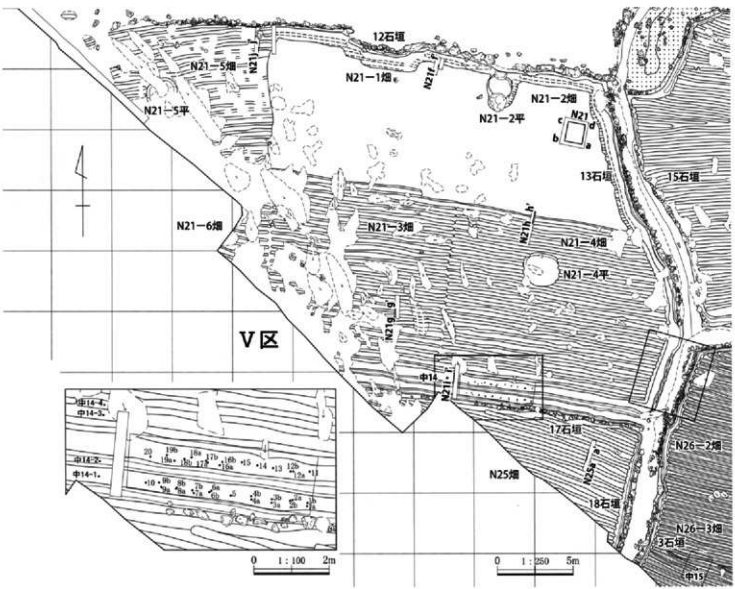




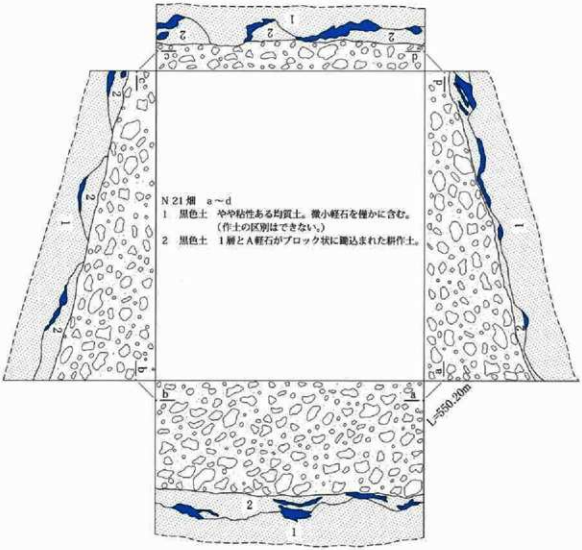
図Ⅲ.21　中棚Ⅱ遺跡　N22～24号畑

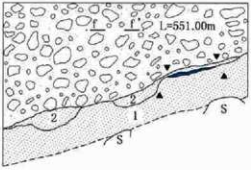
4段に位置するのは、**N21・25号畑**である。N21号畑はV区の範囲内で6枚の単位畑に区分される。**N21-1・2号畑**は、土用の培土終了後、As-A軽石の降下があり、泥流被災前に鋤込みがおこなわれた状況を呈している。N21-3・4号畑の境界に併せて区分をおこなった。**N21-2号平坦面**は石が南に所在する特徴をもっている。鋤込みがこの部分だけおこなわれずに残存したことが分かる。**N21-3・4号畑**は、As-A軽石降下後の二番ザクがなされた状況を呈している。その南には2本の幅広の畝が確認された。これはN21-3・4号畑の区分に左右されず、N21号畑の端に異なる作物を栽培した状況と考えて良い。一斉作業終了後の詳細な検出作業の結果、20地点のサトイモと考えられる空隙の石膏型取りに成功した。詳細については、124頁及びⅦ章4節を参照されたい。畝幅は、他の2倍の計測値を測る。培土痕跡も明瞭でサトイモ栽培の耕作状況を示している。栽培された植え付けの状況は、1条植・株間40～50cm内外（10箇所の株痕跡平均で47cm）、地上部分から種イモと考える塊茎まで約8cm（泥流の圧密を無視）を測る。**N21-5・6号畑**は泥流による撹乱が顕著であると同時、調査面積が狭いことで明瞭な耕作状態を看取できないが、いずれもAs-A軽石降下後の二番ザクの痕跡を確認することができない状況と判断する。

N21-1～4号畑の単位畑について面積に関する解釈を記述する。まず、4枚の単位畑の面積は計測値一覧表のように近似する値とはいえない。この理由には、南に植え付けられたサトイモの畝の分の面積が影響する。仮に、**N21-4号平坦面**の北縁にそ

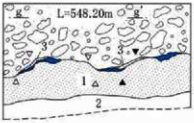


図Ⅲ,22　中棚Ⅱ遺跡　N21号畑平面図及び石膏型取り地点位置図





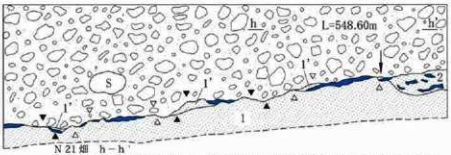
N 21畑　f－f'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。（作土の区別はできない。）
2　黒色土　1層とA軽石を不規則にブロック状に含む。人為的に混入された耕作土。



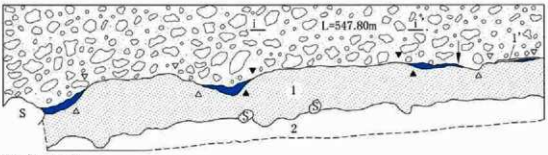
N 21畑　g－g'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。（作土の区別はできない。）
2　黒色土　1層に加え，暗灰褐色の灰層（降下火山灰か草木灰等の判別は不明）を不均質にブロック状に含む。
3　黒色土　1層の地土。ブロック状にA軽石を不均質に含む。

0　1:16　50cm

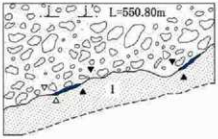
図Ⅲ.23　中棚Ⅱ遺跡　N21号畑(1)



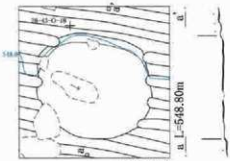
N 21 畑　h－h'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)
1'　黒色土　1層の培土と考える。
2　黒色土　1層とA軽石がブロック状に鋤込まれた耕作土。



N 21 畑　i－i'
1　黒色土　不均質な黒色土。炭化粒を部分的に僅かに含む。同じ畑内の北側の畝に比べて土層はやや乱れている。A軽石降下以前の培土の手法によるものか？。畝中からはイモ類の栽培等が想定された。(Ⅲ章3節(8)を参照。)
1'　黒色土　1層の培土。
2　黄褐色土　均質な細粒砂層。周辺の基盤砂層。(基本土層X層。)

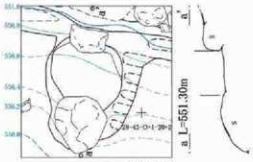


N 21 畑　j－j'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)

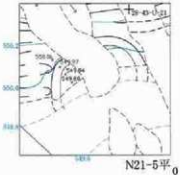


N21-4平

0　1:16　50cm



N21-2平



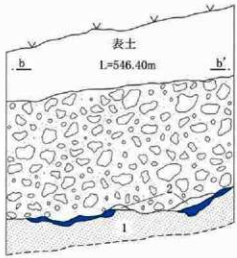
N21-5平

0　1:80　2m

図Ⅲ, 24　中棚Ⅱ遺跡　N21号畑(2)

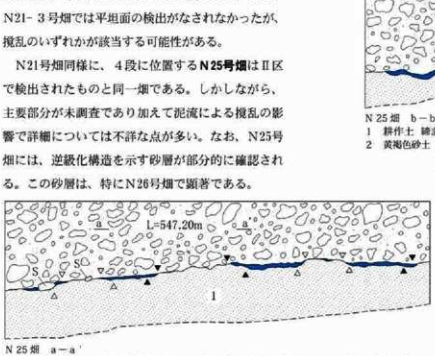
の境をもってくると、良好な測定値となる。さらに、N21-１～４号畑の単位畑を合計し、４で除すると概ね40坪の計測値が得られ、単位畑の面積算出に適合する数値となる。さらに、西側の残り部分の検出により適切な解釈が得られるかもしれない。**N21-５号平坦面**は泥流による攪乱が顕著であるがその存在は、単位畑を考える上で重要である。また、N21-３号畑では平坦面の検出がなされなかったが、攪乱のいずれかが該当する可能性がある。

N21号畑同様に、４段に位置する**N25号畑**はⅡ区で検出されたものと同一畑である。しかしながら、主要部分が未調査であり加えて泥流による攪乱の影響で詳細については不詳な点が多い。なお、N25号畑には、逆級化構造を示す砂層が部分的に確認される。この砂層は、特にN26号畑で顕著である。



N 25畑　b－b'
1　耕作土　締まりやや強い。小礫を僅かに含む。
2　黄褐色砂土　土層は乱れるが５～10cm大の砂礫を多く含み上位の天明泥流堆積物とは様相異なる（逆級化構造を示す砂層）。

0　1：16　50cm



N 25畑　a－a'
1　黒色土　粘性やや強く、白色軽石（5mm大）を僅かに含む。小礫（1～2cm大）を極少量含む。

図Ⅲ.25　中棚Ⅱ遺跡　N25号畑

５段に位置する**N26号畑**は、Ⅱ区で検出されたものと同一畑であるが、調査年度が異なりその調査観点も若干の差異がある。未調査区である東側は、トレンチにより中単位の範囲が把握できたが、畑は東側へ延びる可能性を含んでいる。N26-６号畑を除くと各単位畑は平坦面を北側に配した単位畑であり、N26-６号畑はAs-A軽石降下後、鋤込みがおこなわれた畑である。**N26-１～６号畑**の中単位は間口がおよそ20mを測る。６枚の単位畑の合計を６で除すると、概ね39坪の計測値を得る。**N26-７～10号畑**の中単位では、15.5mで43坪、**N26-11～13号畑**の中単位では、14.5mで44坪の計測値を得ることができる。面積の計測には攪乱部分や未調査部分については、平面図中の推定範囲を用いた。各単位畑の区分は、N26-３・４号畑については畝サクの方向の交錯方向、N26-５・６号畑については断面形状、N26-９・10号畑については埴土痕跡による畝サクの幅のズレを根拠とした。総面積1777㎡を13で除すると137㎡（41坪）の単位面積を得られる。

例外を除いて、N26-１～13号平坦面は中単位で括るN26-１～10号平坦面と**N26-11～13号平坦面**の面積が異なる傾向が抽出できる。このことは、平坦面の構築方法の例からすると、耕作者の違いなども示唆できて興味深い（Ⅶ章４節参照）。つまり、何人かの共同作業で構築が進められたことが示される可能性がある。N26-10号平坦面北の破線で表示した部分については、畝としての高まりとサクとしての窪みの中間の高さを示している。その両側のサク

部分が培土によりそれぞれの単位畑側の畝に土寄せされた状況で、破線部分でその土の動きがなかった状況と観察できた。つまり、作業行程ないしは作業手順により残された痕跡と考えられる。

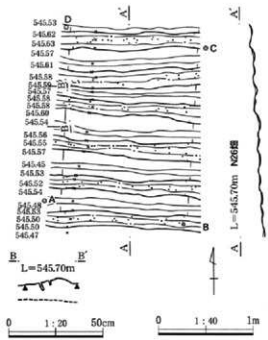
N26号畑では逆級化構造を示す砂層が極めて顕著に確認できた。これは天明泥流流下メカニズムに関連する事象として注目される。詳細については、Ⅶ章2及び3節を参照されたい。

また、N26号畑では逆級化構造を示す砂層が存在したために極めて良好な状況で被災直前の状況が確認されている。このことから、N26- 3・8号畑周辺の3箇所で局所的に厳重な精査をおこなった。その結果、20cm間隔で点播きされた作物痕が確認できた。多くは1地点に3つの穴を確認した。そのうちN26- 3号畑（地点①）で、「株痕検出」作業として詳細な図化記録と根成孔隙を確認するための軟X線写真撮影や自然科学分析をおこなった。Ⅵ章3節（**中15**、EpAと図Ⅲ.26のAが対応）を参照頂きたい。ここでは、事実記載と経過説明をおこなう。

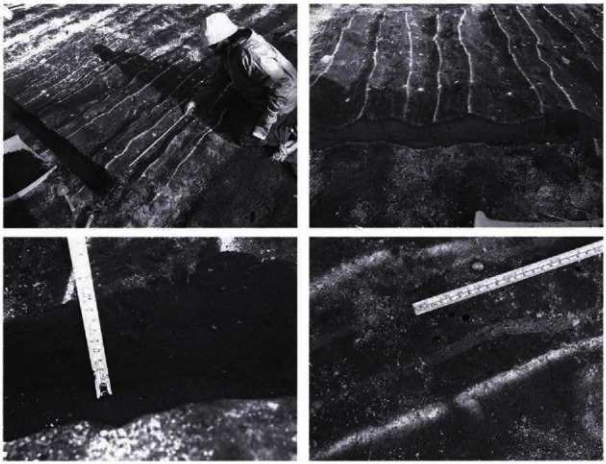
地点①から③までは、13の単位畑が確認される（後日、東側の調査で拡幅される予定を含む）天明泥流堆積物により被覆された安定な状態で保たれた一筆の畑跡のものである。とくに、最大厚22cmを測った逆級化構造の砂層の影響により極めて良好な状態で畑面を検出することができた。そこで、一斉作業では検出困難なため、①から③地点の砂層を5cm程度残し、後日入念な検出作業にあたった。畑跡は、概ね畝幅42cm・1尺4寸に相当する畝サクをもち、畝の培土の痕跡を見ると、川寄りの一番ザク側がより厚く、二番ザク側もそれなりに明確な培土痕が看取される。いわば、「断面ふたこぶ」状ではあるが畝上位に平担部が残されているような形状も他とはやや異なる。このことは、農業経験者からの「サク切りでマメの根元の茎を埋めないように培土する」という聞き取りとも附合する。

精査の結果、畝の中心部分に、2ないし3個の穴（直径7～10mm）群がおよそ20cmの株間間隔で残されている状態を検出することができた（写真Ⅲ.1）。これは、点播きされた作物の茎痕跡と判断され、3粒ずつ点播きされた作物痕を示し、マメ類の作物が植えられた痕跡と推定さる。このことから、根粒菌や特徴的な根の張り具合が残されていないかと考え、断ち割り・穴痕跡の実寸実測と写真で一部の断面を記録化したが、そこまでが調査段階における記録化の限界であった。

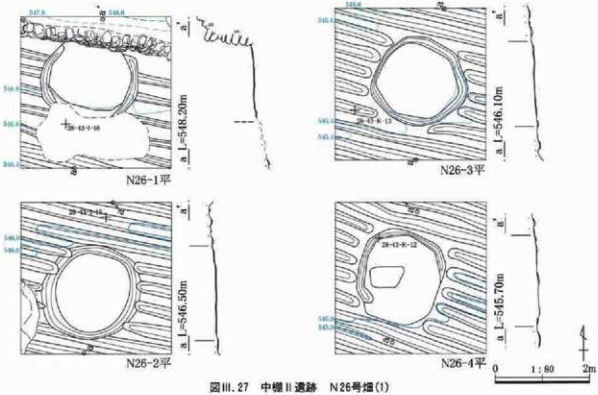
すぐに分析依託がおこなえない状況から、切り取り保存する場合に、乾燥することで根成孔隙の破損が生じる。そのため、ビニールで梱包し下位に穴を開け水に浸すことで、毛細管現象で乾燥から回避するよう保管するのがよいとされることから、試料は買い物かごに入れビニールで覆い、その中にスポンジ、タオルを含水させておきさらに隙間を発泡硬質ウレタンフォーム（三井東圧建設資材株式会社製）で固定し保管した。なお、①地点について写真図化、資料保存をおこなったが、他の2地点については同様な状況を確認し、写真記録のみで対応した。断面図中には記録されないが、As-A軽石の上位には10数cmの逆級化構造を示す砂層が載っている。なお、本書では①地点について報告するのみである。



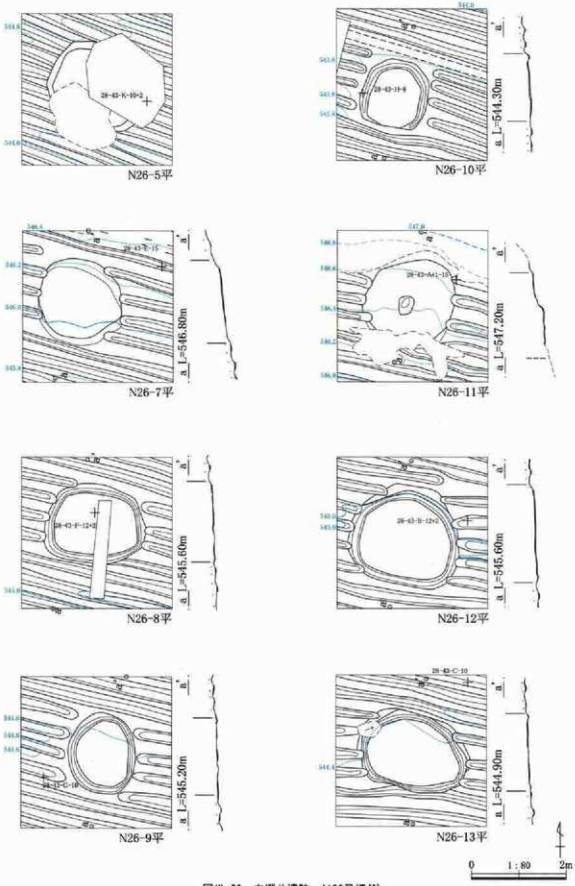
図Ⅲ.26　中棚Ⅱ遺跡　N26号畑株痕検出①地点



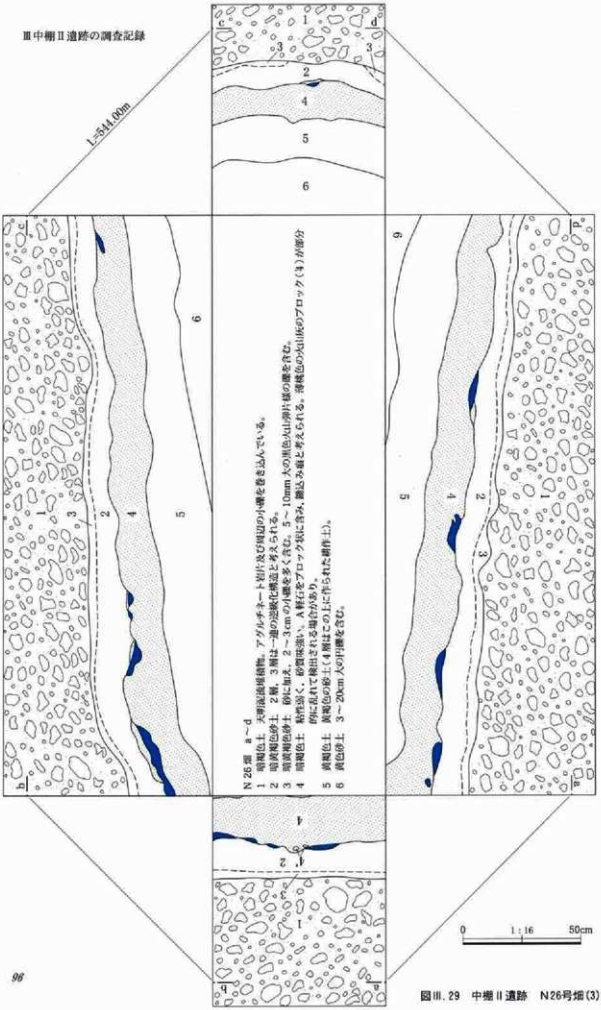
写真Ⅲ.1　中棚Ⅱ遺跡　N26号畑株痕検出①地点



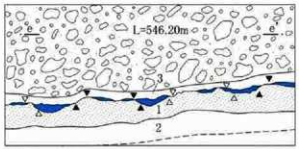
図Ⅲ.27　中棚Ⅱ遺跡　N26号畑(1)



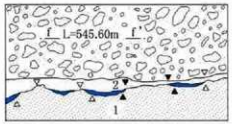
図III.28 中棚II遺跡 N26号畑(2)



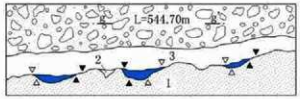
図Ⅲ.29 中棚Ⅱ遺跡 N26号畑(3)



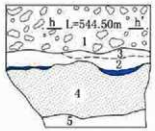
N 26畑　e－e'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。作土と判断される。
2　黒色土　1層との境界は鉄分の凝集層あり。
3　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大の小礫で構成される。



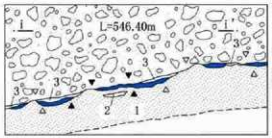
N 26畑　f－f'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)
2　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大の小礫で構成される。



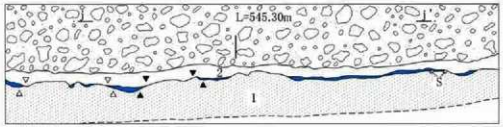
N 26畑　g－g'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)
2　黒色土　土層乱れ締まり欠く。(樹根痕か？)
3　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大の小礫で構成される。



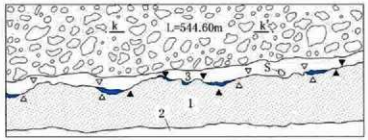
N 26畑　h－h'
1　暗褐色土　天明泥流堆積物。アグルチネート岩片及び周辺の小礫を巻き込んでいる。
2　暗黄褐色砂土　2層、3層は一連の逆級化構造と考えられる。
3　暗黄褐色砂土　砂に加え、2～3cmの小礫を多く含む。5～10mm大の黒色火山弾片様の礫を含む。
4　暗褐色土　粘性弱く、砂質味強い。
5　黄褐色土　均質な砂土。(4層はこの上に形成された耕作土。)



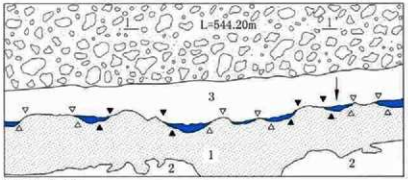
N 26畑　i－i'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)
2　暗灰褐色土　やや粘性ある灰層ブロック。(火山灰か草木灰か等の判別は不明。)
3　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大の小礫で構成される。



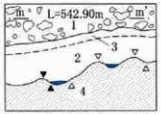
N 26畑　j－j'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)
2　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大の小礫で構成される。



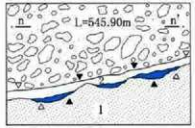
N 26畑　k－k'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)
2　黄褐色土　均質な細粒砂層。周辺の基盤砂層。(基本土層X層。)
3　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大の小礫で構成される。



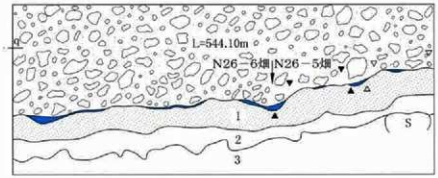
N 26畑　l－l'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)
2　黄褐色土　均質な細粒砂層。周辺の基盤砂層。(基本土層X層。)
3　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大の小礫で構成される。



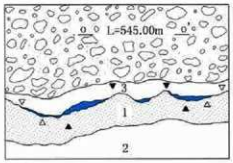
N 26畑　m－m'
1　暗褐色土　天明泥流堆積物。アグルチネート岩片及び周辺の小礫を巻き込んでいる。
2　暗黄褐色砂土　2層、3層は一連の逆級化構造と考えられる。
3　暗黄褐色砂土　砂に加え、2～3cmの小礫を多く含む。5～10mm大の黒色火山弾片様の礫を含む。
4　暗褐色土　耕作土。



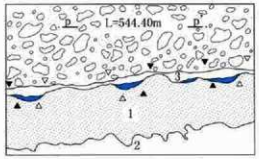
N 26畑　n－n'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)
2　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大の小礫で構成される。



N 26畑　q－q'（逆級化構造を呈する砂層については記録不審。）
1　耕作土。
2　1とほぼ同質だが3のブロックを多く含む。
3　黄褐色砂層　3～5cmの円礫を少量含む。



N 26畑　o－o'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む作土。
2　黒色土　1層より褐色味強い。1層との境には鉄分の凝集層あり。
3　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大で構成される。

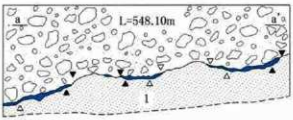


N 26畑　p－p'
1　黒色土　やや粘性ある均質土。白色の微小軽石を僅かに含む。(作土の区別はできない。)
2　黄褐色土　均質な細粒砂層。周辺の基盤砂層。(基本土層X層。)
3　暗黄色土　逆級化構造を呈する砂層。地点により細粒砂土～10mm大の小礫で構成される。

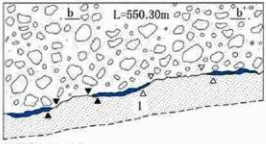
0　1:16　50cm

図Ⅲ.30　中樽Ⅱ遺跡　N26号畑(4)

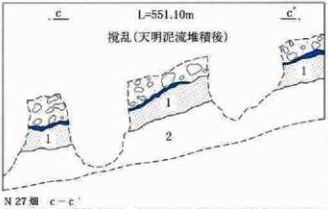
図III. 31 中畑II遺跡 N26号畑平面図



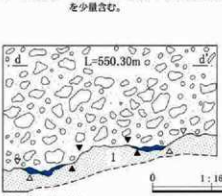
N 27畑　a－a'
1　暗褐色土　礫を含まずやや粘性あり。白色軽石粒と青色味を帯びた風化岩片を僅かに含む。



N 27畑　b－b'
1　暗褐色土　2～3cm大の角礫を僅かに含むが、ほぼ均質。白色軽石粒と青色味を帯びた風化岩片を僅かに含む。

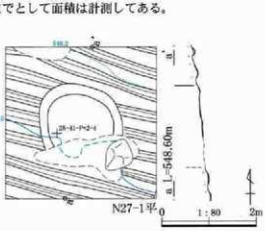


N 27畑　c－c'
1　暗褐色土　やや粘性あり。白色軽石粒と青色味を帯びた風化岩片を僅かに含む。2層を母体とする。
2　暗褐色土　1層の母体となる。やや粘性ある埴土。1～3cm大の角礫を少量含む。



N 27畑　d－d'
1　暗黄褐色土　粘性やや強い均質土。礫を含まない。白色軽石を僅かに含む。

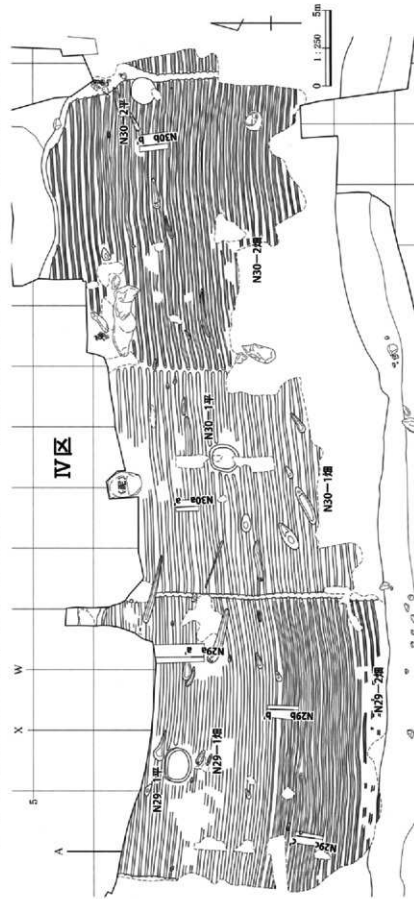
N27～36号畑はⅣ区で検出されたものである。Ⅳ区の調査区内を東西に走る筋状の撹乱は、泥流によるもので詳細については、Ⅶ章２節を参照されたい。**N27号畑**は、３枚の単位畑に区分けした。根拠は割付間口の幅と畝断面の形状によるが、不明確な要素も含まれる。**N27－１号畑**では、東西に撹乱が入るが、泥流によるものではなく平成12年11月の試掘によるものと考えられる。この撹乱付近に平坦面の存在が推定されるが、残念ながら検出できなかった。中央付近の畝幅の広い部分が見られ、単位畑の可能性も考えられるが、推定の域を出ない。しかしながら、N27－１号畑を２枚の単位畑と考えると、それぞれは40坪の単位畑という計測値を得ることができる。**N27－１号平坦面**は取り除くことができない礫をその一部に据えている。**N27－２号畑**は中央南寄りに撹乱が確認される。調査時点で担当者間でも確定がなされないが、平坦面の存在の可能性も含まれている。これから北は断崖となっている。泥流による撹乱により、平坦面の有無についてはこれ以上言及できない。N27－１～２号畑を３枚の単位畑とすれば、40坪弱の値をとることになる。**N27－３号畑**については、図Ⅲ.５も参照されたい。また、主要部分が耕作により撹乱されているため、単位畑など詳細については不詳である。なお、８号石垣ではAs-A軽石が部分的に被覆されていた。ここまで畑が及んでいない可能性もあるが、畑と一体となった景観をなしていたと考えられる。畑の推定範囲は、この石垣までとして面積は計測してある。



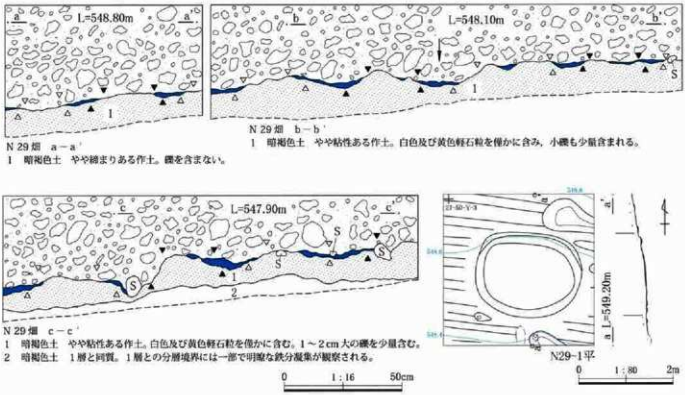
図Ⅲ.32　中棚Ⅱ遺跡　N27号畑

N28号畑は耕作によりその殆どの部分が撹乱を受けている。As-A軽石の筋状の残存状況から畝幅を計測した。**N29号畑**との地境は19(1′)号ヤックラの項を参照頂きたい。このヤックラの位置が地境となる。N29号畑は断面図b－b′にみるように**N29－1号畑とN29－2号畑**との間に畝幅が広がる地点が確認される。これを境に畝断面の様相が異なる。これは、作業途中を示すものか、作業者の違いを示すものと考えられる。畝の形状とAs-A軽石の残存状況から、前者は土用の培土がおこなわれず、後者が一番ザク終了後に被災した状況と判断しておくが検討を要する。N29－1号畑が未調査区も含めて2枚の単位畑、N29－2号畑と併せて3枚の単位畑が存在したと考えるならば、単位畑は39坪の計測値を得ることになる。また、N29－2号畑では、畝サクの乱れる位置が**N29－1号平坦面**と対応するかのようにも観察できる。なお、割付の間口は20mを測る。

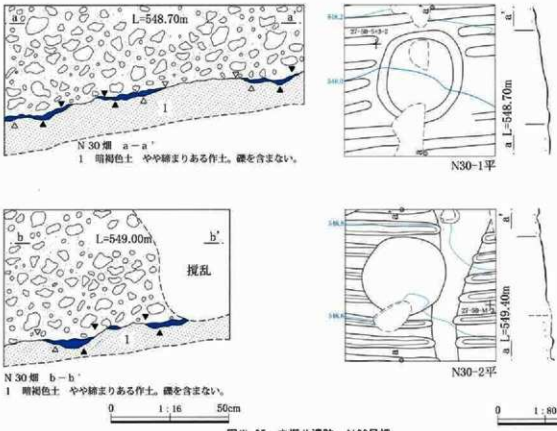
N30号畑は2枚の単位畑に便宜上区分けした。**N30－1号畑**には、**N30－1号平坦面**（南北に走る撹乱は平成12年11月の試掘によるものと考えられる）が位置する。この平坦面から南側を単位畑とすると40坪の計測値を得ることができ、北側の畝の切れ目をN30号畑の範囲とすることで2枚の単位畑が構成されるように考えられる。しかし、未調査部分により不確定である。**N30－2号畑**ついては**N30－2号平坦面**が東側の踏み分け道寄りに確認されるが、3枚の単位畑が存在すると考えるとその面積は、40坪単位の単位畑に一致する。なお、間口はそれぞれ16mと20mを測る。畝サクの形状が異なり、前者は土用の培土未終了、後者が土用の培土終了後に被災した状況と判断しておくが検討を要する。



図III.33　中棚II遺跡　N29・30号畑平面図



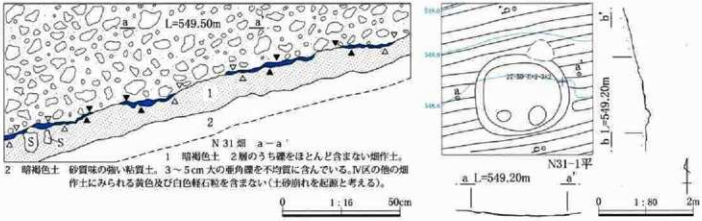
図Ⅲ.34　中棚Ⅱ遺跡　N29号畑



図Ⅲ.35　中棚Ⅱ遺跡　N30号畑

N31号畑は2枚の単位畑に区分けしたが、詳細については不詳である。地境及び18号ヤックラとの間には、踏み分け道が廻る。トレンチで範囲確認を試みたが、崖に向かい土量が多く土砂崩落の危険があり、範囲を確認するにはいたらなかった。

N31-1号畑にある**N31-1号平坦面**には2箇所の凹があるがこれは攪乱ではないものと判断する。作物等の痕跡である可能性がある。**N31-2号畑**はそ／の大半部分を現代までの耕作により攪乱を受けている。N30号畑との境界付近では、表土腐削時に天明泥流堆積物中に穫が列状に残されていることが確認された。このことは、19（1′）号ヤックラと同様なケースと考えられるが、泥流畑からの検出は見られなかった。前者は土用の培土未終了、後者が土用の培土終了後に被災した状況と判断しておくが検討を要する。



図Ⅲ.36 中棚Ⅱ遺跡 N31号畑

N32号畑は、調査区南北の両側が断崖となって段状に寸断される地形を呈している。間口は、14m弱で他の畑に見るような統一された値をとらない。そのために地割の間口が調整されて、単位畑の面積を揃えようとしているものと考えられる。この畑では平坦面が検出されなかったが、その面積266㎡という数値からは40坪の単位畑が2枚という状況が判然とする。耕作状況は、土用の培土終了後にAs-A軽石の降下をうけたと判断できる。

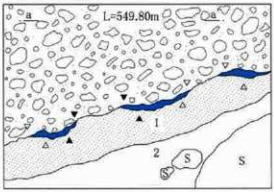
N33号畑には、**N33-1号平坦面**がその東端に存在している。周辺の石垣や耕作土の状況から、前出の畑同様に割付の間口に統一値が与えられたとするならば、その後の土砂崩れ等により、地形が乱れたと考えられる可能性を含んでいる。石垣等周辺の調査からはそれについて示唆を得る判断材料は得られなかった。なお、北側の天明泥流堆積物及びその後の土砂の流入、近現代の国道工事のための土盛りが厚く、崩壊の危険等も考えられたため、さらに北側の調査は及ばず、これ以上詳細についての検討は及ばない。

N34・35号畑は間口が統一値に当てはまらない。土砂崩れなどにより規格性のある耕作地が復旧改良された状況とすることも、規格の存在の判断材料と考えておくべきであろう。

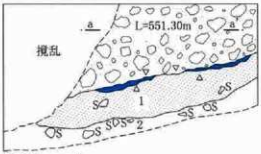
N34-1号畑では、その傾斜が19度と著しい。その傾斜の変換点に**N34-1号平坦面**（片付けられない礫を宛っている）が配置されるが、これは**N34-2号畑**に対応するものと考えられる。N34-2号畑の面積が280㎡の計測値をとる。これを2枚の単位畑に宛うと、本遺跡で扱ってきた単位畑と概ね相違ない面積が得られることになる。N34-1号畑は、その形状から、As-A軽石降下後二番ザク前に泥流被災したものと考えられる。

N35号畑と**N36号畑**は、調査区がこれ以上広げられない状況でもあり、調査時の観察においても不確定要素が多く、検討を要する。

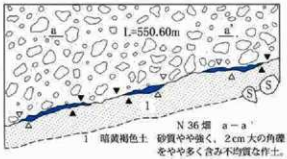
図Ⅲ.37　中棚Ⅱ遺跡　N32～36号畑平面図



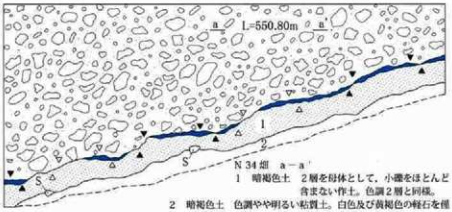
N 32畑　a－a'
1　暗褐色土　2層を母体とした作土。亜角礫をほとんど含まずほぼ均質。
2　暗褐色土　砂質味強く、やや粘性あり。土層中にはⅣ区の崩作土にみられる軽石粒がみられない。2～3cm大の亜角礫をやや多く含む(土砂崩れを起源と考える)。



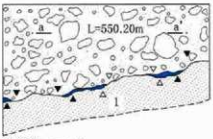
N 33畑　a－a'
1　暗褐色土　2層を母体とする作土。
2　暗褐色土　3～5cm大の亜角礫を少量含む。粘性があり黒色味強い。Ⅳ区の他の畑断面図にみる軽石粒を含まない。



N 36畑　a－a'
1　暗黄褐色土　砂質やや強く、2cm大の角礫をやや多く含み不均質な作土。

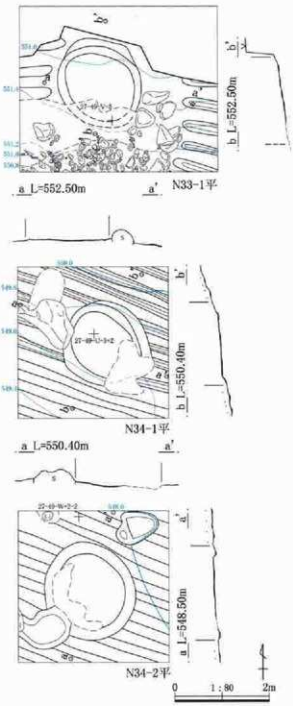


N 34畑　a－a'
1　暗褐色土　2層を母体として、小礫をほとんど含まない作土。色調2層と同様。
2　暗褐色土　色調やや明るい粘質土。白色及び黄褐色の軽石を僅かに含み、2～3cm大の角礫を少量含む。



N 35畑　a－a'
1　暗黄褐色土　砂質やや強く、2cm大の角礫をやや多く含み、不均質な作土。

0　1:16　50cm



図Ⅲ.38　中棚Ⅱ遺跡　N32～36号畑

（3）ヤックラ

ヤックラは、不要な礫を片付けた場所である。溝状に掘り込んで不要な礫を充填させた19（I′）号ヤックラも見つかっている。これは本来泥流面よりも下位に相当し、泥流畑の境界として埋められていたもので形状がやや異なっている。しかしながら、畑関墾に伴い築かれた遺構で、泥流面と密接に関わるために項で扱うこととした。計測値や土層注記等については表Ⅲ．3を参照頂きたい。

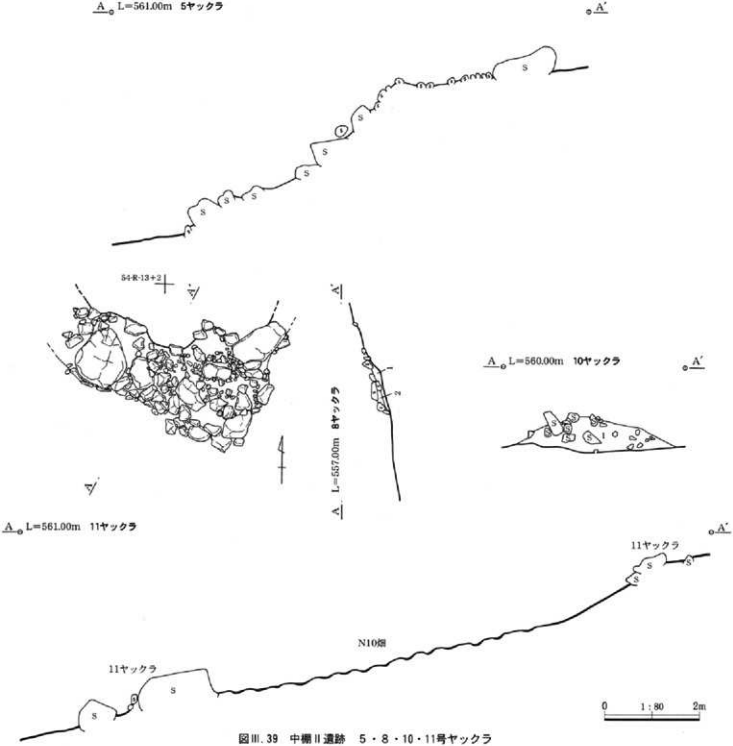
1・2号ヤックラはⅡ区の調査で見つかった。トレンチ状に調査をおこなわざるを得なかったことから遺構面の明確な状況を判断するにはいたらなかったが、斜面の傾きの変換点に礫の集中するヤックラと厚さ1～2cm程度の密度の濃いAs-A軽石の堆積状況が確認された（As-A軽石の範囲を全体図でハッチング表示）が、周辺は泥流による撹乱と考えられる地表面の凹凸が著しく、ヤックラ以外の遺構確認はできなかった。なお、2号ヤックラの礫の下位からは焼土や炭化物が出土している。それぞれのヤックラが11・12号石垣の延長地点に位置することは、耕作地の景観を把握する為に考慮するべき点であろう。いずれも、詳細については調査が及ばなかった周辺の状況から判断されるべきであろう。**3号ヤックラ**はⅡ区のN25号畑の南端に位置し、南の傾斜法面にかけて構築されている。その礫はN25号畑から出されたものと考えられる。

表Ⅲ．3　中棚Ⅱ遺跡　ヤックラ計測値等一覧表

＊1 構成する礫の最大径（cm）

	遺構名称	位置	全長m（長径）	幅m（短径）	高さm（深さ）	形態	平面形状	出土遺物	＊1	備考及び土層注記
1	1号ヤックラ	44EG-23	(4.2)	1.6	(0.7)	集石状	不整形		96	
2	2号ヤックラ	44EB-19	(2.7)	0.9	0.1	集石状	不整形	中- 2	56	
3	3号ヤックラ	43EP-9	(3.0)	(1.6)	(0.4)	集石状	不整形	中- 3	62	
4	4号ヤックラ	54EK-14	3.6	2.1	－	乱雑積上	不整形		150	
5	5号ヤックラ	54EI-16～54EN-17	14.3	5.2	1.3	乱雑積上	不整形		194	
6	6号ヤックラ	54EG-10	12.0	4.4	0.5	乱雑積上	不整形		230	
7	7号ヤックラ	54EG-14	4.4	2.2	0.2	核になる大石に集積	不整形		144	
8	8号ヤックラ	54EQ-13	6.9	2.9	0.2	核になる大石に集積	不整形	中-263	120	I 黒褐土：一部黒褐色土を含むてりもろ質土。2 黒褐色土：空隙にいちょうどの礫石を詰め明瞭な規格礫を混合配置。Ⅲ層、Ⅳ層に比較して多くてこまかみ。
9	9号ヤックラ	54EN-14	3.1	(1.4)	(0.3)	乱雑積上	不整形		70	
10	10号ヤックラ	54EQ-15	(8.5)	4.0	0.2	乱雑積上	不整形		74	1：10～75mmスの最角礫を主体とする、大形乱流発掘物を含む仁部ガビ状。
11	11号ヤックラ	54EN-11	10.8	7.2	0.4	乱雑積上	不整形		190	
12	12号ヤックラ	54EH-13	10.4	2.2	0.2	一部石垣状に積上	不整形		96	
13	13号ヤックラ	54ES-11	4.2	1.7	0.3	乱雑積上	不整形		104	
14	16号ヤックラ	54ES-18	1.6	0.6	0.4	一部石垣状に積上	不整形		54	
15	17号ヤックラ	31EB-25	4.1	2.1	0.5	土坑状	楕円形	中-250～252	86	黒褐色土：5～10cmの円礫を多量含む黒褐色土。1：溶ラ～30cmの円礫・砂円礫（ヤックラ本体）。黒色土を伴なう。空隙が多くあり、細まり小砂い、ふあり。2 黒褐色土：溶ラ～20cm前後の多く含まれ、細まり小砂い。3 黒褐色土：溶ラ～30cmの最角礫を中心とする。4 黒褐色土：溶ラ～30cmの最角礫を中心とする。細まり砂い。
16	18号ヤックラ	40EK-25	7.5	(2.0)	0.2	一部石垣状に積上	不整形		72	地域に見つかった所は、原因は地形は緩やか円礫を主として敷かれる。地表に現かゴミ状ものは以前迄で、はとんど以前に見られていた。1：13号ヤックラ、溶ラ～20cmの円礫を主体とする。
17	19(I′)号ヤックラ	31EB-24～41EA-3	17.2	0.4	0.3	溝状	－	中-45,273	26	1表土。2 天明泥流発掘物。3 As-A軽石。4 黒褐色土：色調は表土ないが基本土層V層と同じ。断面図中Ⅲ層とA色軽石Ⅳ層間ガ分離出土なっていない。4 黒褐色土：Ⅲ24～Ⅳ26層ガ。5 黒褐色土：溶ラ～5ヤックラ。6 褐色軽石ル不整広点金属ル点金属ル点。20cmスの最角礫を中心とする。6 褐褐色土：4層に似るが、4 層の混入ガやや多く、褐色味ガ強い。7 黒褐色土：砂質味少強い。色調は黒色味ガ強い。円礫を含まない。8 黒褐色砂質：基本土層X層に相当するガ円礫を含まない。
18	60号ヤックラ	54EX-4	(5.7)	4.8	0.5	核になる大石に集積	不整形		156	
19	61号ヤックラ	54EX-1	(8.0)	1.6	0.2	乱雑積上	不整形		82	
20	62号ヤックラ	43EG-22～43EH-21	(17.7)	2.4	0.8	一部石垣状に積上	不整形	中-172,173	90	
21	63号ヤックラ	43EG-17～43EG-21	(19.0)	2.3	0.5	乱雑積上	不整形		100	8号遺より東側は、原因地方の礫が1ヨりと同盗に。1：63号ヤックラ、溶ラ～30cmの礫で構成されている。円礫と角角礫がまざてる。ヤックラ上ガは泥流で覆されているる。相当空隙が多かったと思われる。7 黒褐色土：黒褐色土。2 黒褐色土：溶ラ～5cm前後の礫が分散混じる。3 土砂流出と、石化物ガ混じりなて。溶ラ～5cm前後の礫が分散混じる。3 土砂流出と、石化物ガ混じりなて。溶ラ～5cm前後の礫が分散混じる。4 黒褐色砂質：溶ラ～30cmの円礫をやや多く含む。5 黒褐色砂質：溶ラ～30cmの円礫をやや多く含む。
22	64号ヤックラ	43EC-16	3.5	(1.5)	0.2	集石状	不整形		48	1：63号ヤックラ、溶ラ～10cm石多円礫。
23	65号ヤックラ	43EA-15	3.6	2.6	0.2	乱雑積上	不整形		160	1：65号ヤックラ、溶ラ～20cmの円礫で構成される。南側の高さ1m程の石を延長にて確認されている。
24	66号ヤックラ	43EG-16	(1.8)	(1.2)	0.5	乱雑積上	不整形		48	1：In-KT耕作土と同質ガ礫を多くさむ。(66号ヤックラ)が耕したものと考える。1：66号ヤックラ、溶ラ～30cmの円礫で構成される。

Ⅲ区の泥流面では12箇所でヤックラが検出された。累々と礫が露出した状況から、遺構としてヤックラの検出にも判断しにくい部分があった。2面目土砂崩れの下位面からヤックラが検出される例も多く、概して、泥流面のヤックラは雑然と集められているものが多い。それらの中で、**4号ヤックラ**は地形的に迫り出した地点に構築されている地形の変換点でもあり、2面目土砂崩れ後に構築されたものと考えられる。**5号ヤックラ**は北側上段のN1号畑とN4号畑の段差を画する位置に所在する。5(2)号ヤックラが前身でその範囲は2面目の土砂崩れにより南に範囲が狭まり、段差側へ礫が集められている



図Ⅲ.39 中棚Ⅱ遺跡 5・8・10・11号ヤックラ

ことが2面目調査で判明した。つまり土砂が旧ヤックラ範囲に堆積して放置されヤックラが段差側に継続したことになる。2mを超える巨礫は、土砂崩れ等を起源とする自然土砂移動によるものと判断され、土石流堆積物のうちの先頭部に浮遊する巨礫が密集する部分と考えられる。巨礫が含まれるが、一様に片付けられている様子が確認されるのは、20cm内外の亜角礫であり、5(2)号ヤックラとは、土砂の間層の存在で区別される。

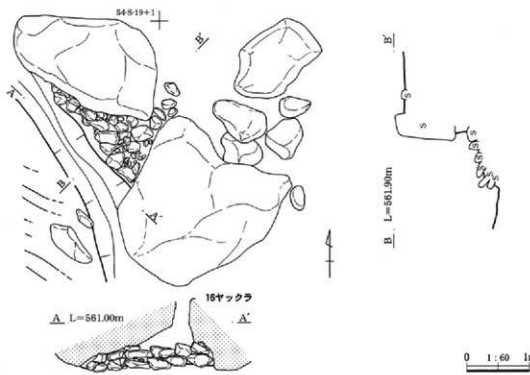
6号ヤックラは3号道と5号道に囲まれた迫り出した地点に位置する。2面目の土砂崩れ層下から見つかった6(2)号ヤックラの西側は一部石垣状に礫が積まれた状態が確認されたが、6号ヤックラではその状況は確認できなかった。茶褐色味の強い土砂崩れ層上に乱雑に礫が積まれた状況で検出された。

7号ヤックラと**12号ヤックラ**は間にある攪乱により寸断されるが、本来は繋がっていた可能性もある。

(遺跡周辺には、大きな攪乱が計3箇所ほど見られるが、昭和10年などの自然災害による土砂の移動の可能性も想定される。)**8号ヤックラ**はN6号畑とN8号畑に挟まれて位置する。3号道を縁取るように石積みが見られ、N8号畑への開口部にもなっている。**9号ヤックラ**はごく一部分が調査区に確認されたものでその主体部分は西側へと続くものと考えられる。詳細は不明である。70cm大の礫を核に握り拳大の礫がやや均質に集められている。

10号ヤックラは、2面目で検出され北西に伸び僅かな段差に集められた10(2)号ヤックラの存在から考えると、段差の東端部分に土砂崩れ後に集積されたものであることがわかる。**11号ヤックラ**はN10号畑圃整の為に周囲に礫を除けたと考えられ、環状を呈している。N10号畑の項でも触れた通り、南西部分の空白部分についての平坦面の可能性は今後の検討課題である。

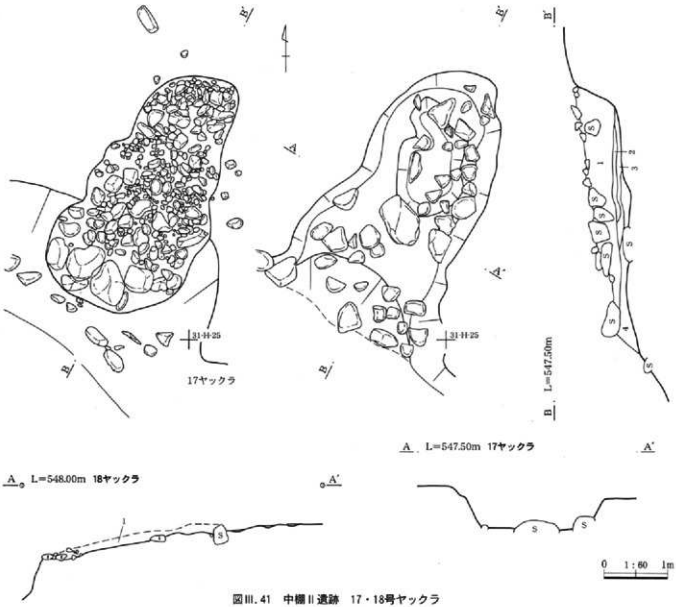
12号ヤックラはN4号畑の東側の周囲に沿っている。泥流面では礫が密集するものの積み石部分は検出されなかった。12(2)号ヤックラと7(2)号石垣に囲まれる37(2)号畑がこの下位で検出されることになる。N8号畑とN9号畑に両側を挟まれる**13号ヤックラ**は南西方向に広がる可能性があるが、礫の散在状況からこの面ではヤックラの範囲は13号ヤックラの範囲のみと判断した。南西部分からは14(2)



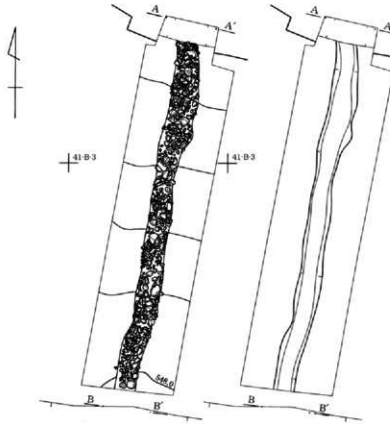
図Ⅲ.40 中棚Ⅱ遺跡 16号ヤックラ

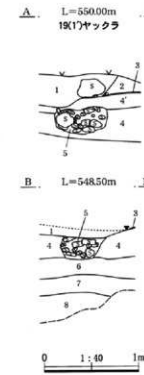
号ヤックラが検出されることになる。このヤックラは両畑の礫を片付けた所産と考えられる。**16号ヤックラ**はN２号畑の北東に隣接する３m以上の巨礫（網掛け）の間で検出され、布積状に積まれていた。巨礫が背面にあることなどから、祠が祀られていたなどの想定がなされるが、他に判断材料はない。不要な礫を集めたというよりも、意図的に積み上げてある点を特徴とするが、ヤックラとして扱った。

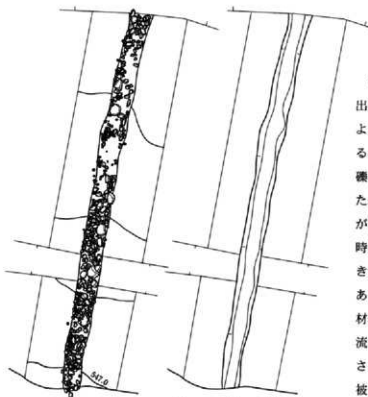
Ⅳ区で見つかった**17号ヤックラ**は畑遺構の南端断崖寄りに位置している。As-A軽石の検出は確認できなかったが、当時の畑面と併せて近現代の耕作等による攪乱を受けたものと考えられ、時期は天明被災以前である。南の最前面は70～80cm大の礫が積まれており、礫を片付ける為の意図的痕跡をたどれる。断面図に見るように、地山の窪みに間層を持ち礫が片付けられていることから窪みの成因は流水などによる自然なものと考えられる。遺物は縄文晩期土器片と石製品（砥石）が出土している。前者は流れ込みであろう。**18号ヤックラ**はN31号畑の南を通る道の外側に位置する。道との地境に埋め込まれている最大で70cm大の礫と同質の亜角礫や亜円礫が集積されており、南端断崖寄りに位置している。As-A軽石の検出があり軽石降下時の状況を呈しているが、南側の断崖方向の範囲は不明確であった。



図Ⅲ.41 中棚Ⅱ遺跡 17・18号ヤックラ



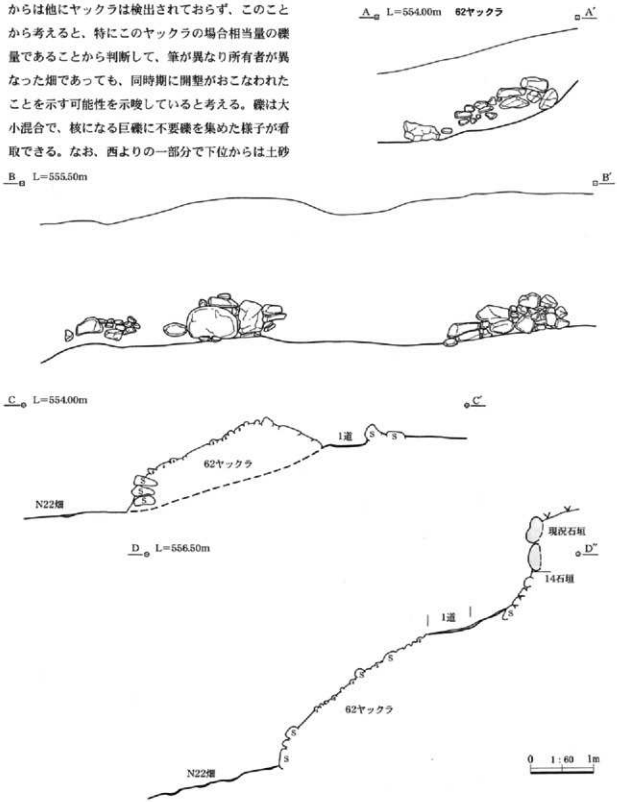




図Ⅲ.42　中棚Ⅱ遺跡　19(1′)号ヤックラ

19(1′)号ヤックラは泥流面調査終了後に検出された。一部地境を残して近現代の耕作による撹乱部分とN29号畑との境部分に位置する。このことからN29号畑の開墾時に不要な礫を溝状に掘り込み充填させたものと判断した。礫は最大で26cmを測るが20cm弱の亜角礫が極めて均質に充填されていた。残念ながら時期決定にいたるまでの遺物の出土は確認できなかったが、寛永通宝と陶器片の出土があった。畑開墾の年代観に関して今後の検討材料としたい（図Ⅲ.54参照）。なお、上位の泥流中にもこの種の石の列が表土掘削時に確認された。断面図にのみ記録化したが、天明泥流被災後に同様な不要な礫の処理がおこなわれたことも興味深い。被災後も同様な手法で地境の復旧開発にあたったことが想定される。

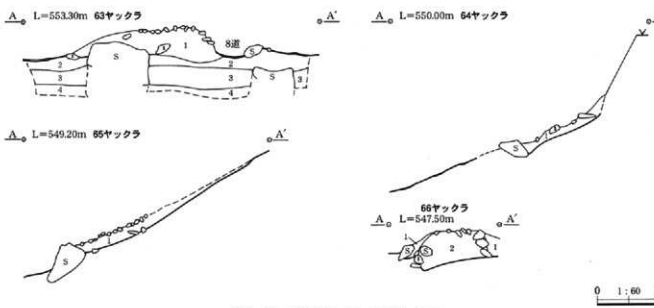
V区で検出された**60号ヤックラ**は、N14号畑とN15号畑の間に位置する。調査区を5つの段に区分すると最上段にあたる。ヤックラの位置する段の畑面からは他にヤックラは検出されておらず、このことから考えると、特にこのヤックラの場合相当量の礫量であることから判断して、筆が異なり所有者が異なった畑であっても、同時期に開墾がおこなわれたことを示す可能性を示唆していると考える。礫は大小混合で、核になる巨礫に不要礫を集めた様子が看取できる。なお、西よりの一部分で下位からは土砂



図Ⅲ.43 中棚Ⅱ遺跡 62号ヤックラ

崩れ下の２面目畑が見つかった。このことから、土砂崩れ前から存在していたヤックラがその後も礫を加えて継続したことになる。60(2)号ヤックラが前身である。また、このヤックラ付近から東は２面目土砂崩れ層がなくなる。実測図等は60(2)号ヤックラの項を参照されたい。**61号ヤックラ**は、60号ヤックラと同様に11号石垣の一部分に２面目土砂崩れ層中の不要な礫を集めたものであることが、下位面の調査から判明した。断面図については11(2)号石垣等を参照されたい。

62号ヤックラはN20号畑とN22号畑の間に築かれた大規模なヤックラで、２段目と３段目を区画する段差に築かれている。南側のN22号畑側の礫をおさえる側には部分的に石垣状の積み石が確認される。このヤックラの傾斜上縁を１号道が通る。**63号ヤックラ**はN22号畑とN23号畑の縁を通る８号道とによって区画される。所により８号道と交錯する場所も見られるが、N22～24号畑の開墾時の所産と考えられる。**64号ヤックラ**は30～50cm前後の不揃いな礫を並べその北側に３～10cm程度の亜円礫を積み上げている。表土掘削時にその上部を削ってしまったが本来はもっと厚かったものと考えられる。北側の調査区外へも延びている。**65号ヤックラ**も１m前後の不揃いな礫を並べその北側に３～10cm程度の亜円礫を積み上げている。表土掘削時にその上部の一部を削ってしまったが本来はもっと厚かったものと考えられる。**66号ヤックラ**は19号石垣の東端に位置する。東西は径20cm前後の礫が３～４段に積んでありその中に礫が充填されていたが、土砂により被災当時はかなり埋まっていたと考えられる。



図Ⅲ.44　中棚Ⅱ遺跡　63～66号ヤックラ

（4）道

１号道は、43区P－７～Ⅰ-22グリッドにかけ、南は２号石垣と３号ヤックラの間の調査区際の段差から始まり、北上して14号石垣と62号ヤックラの間まで通じる。長さは80m弱である。途中、調査区内の段差の際に沿うように蛇行しながらⅡ区からⅤ区へ通じる。道幅は最大で１mを測り、硬化面が見られたのは極一部分であった。特に62号ヤックラ付近では、断面が凹状であることが観察できた。泥流により攪乱を受けた箇所を除いて路面にはAs-A軽石が比較的良好に残存していた。

なお、現在でも、北の段丘上の国道145号からＪＲ吾妻線を超えて林中棚集落へ通じる道がある（図Ⅲ.２）。調査区外の先は１号道がこの道に通じていた可能性もある。被災後、この道に沿って被災前の石垣の直上に復旧作業がおこなわれていることから見

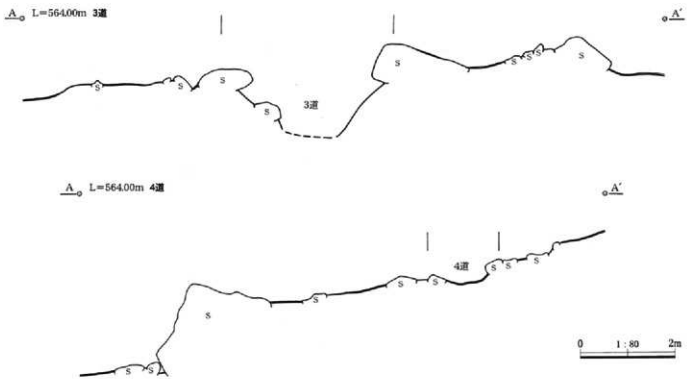
て，この景観の中での１号道の重要度が偲ばれる。周辺の踏査では天明泥流堆積物がＪＲ吾妻線手前付近まで確認され、国道145号下を含め旧道が残されている可能性もある。断面図に関しては，13・14号石垣、62号ヤックラの項を参照頂きたい。

８号道は、Ｎ22～24号畑の境界を南北に走り、63号ヤックラと一部交錯する。19号石垣付近が泥流の撹乱を受けており確証を得られないが、19号石垣と交差してＮ22号畑との間を西へ続くと考えられる。43区H-21～L-16グリッドにかけ、併せて長さ30m強を測る。断面図は63号ヤックラを参照されたい。

２号道はⅡ区Ｎ26-６号畑内で検出されたものである。同畑は天明三年新暦７月27日～29日にかけて降下したAs-A軽石を鋤込み８月５日に天明泥流により被災している。この間に人為的な鋤込みがおこなわれた畑である。この鋤込まれた耕作土ブロックを除去したところ、As-A軽石が溝状に検出された。このことから、As-A軽石が降下した時点では、７号道から２・３号石垣の切れ目方向へ向かう幅30cm、凹部深さ５cm内外の踏み分け道として存在していたことが判る。43区Ｎ-７～Ｎ-10グリッドにかけ、長さは９m弱である。

Ⅱ区で検出された**７号道**はＮ26号畑の南側を区画している。１号区画の背面を通り、同畑を区画するものと考えるが、周辺の調査が完全におこなえず、不詳である。43区Ｏ-８～Ｊ-７グリッドにかけ、長さ22mを測る。

Ⅲ区の**３号道**は最大で３m近い幅を持ち、傾斜の上端はその２倍近い値の地点も見られる。54区Ｌ-21～Ｒ-10グリッドにかけ、長さ50m強である。Ⅲ区の北東から南西に下り、Ｎ６・８・９号畑へ向かう。これらの畑はこの道方向に開口している。さらに、５号道へと続いていく。**５号道**は幅１mとなっているが、調査区の東側は調査区外となり詳細は不明である。54区Ｎ-11～Ｒ-９グリッドにかけ、長さ22m強である。**４号道**は幅１m内外でＮ２-１号区画と一部重なり、Ｎ１・２号畑へ向かっている。54区Ｏ-21～Ｕ-17グリッドにかけ、長さ35mを測る。いずれも、３条の道は作業道として用いられたものと想像される。



図Ⅲ.45 中畑Ⅱ遺跡 ３・４号道

（5）石垣

畑は石垣や道により区画がなされている場合が多い。特に天明泥流被災後も地形が踏襲する場合、復旧後も石垣がその上位に造られる場合がみられた。特に、Ⅱ区とⅤ区においては復旧後の石垣が直上に構築されたことが確認され、被災後の人々の営みを検証する痕跡として資料価値を評価したい。3（1′）号石垣は3号石垣の前身となるものであり、3号石垣の一部分が再構築されていたものであるが、ここで扱った。また、**5・9号石垣**は欠番である。計測値等については表Ⅲ．4を参照頂きたい。

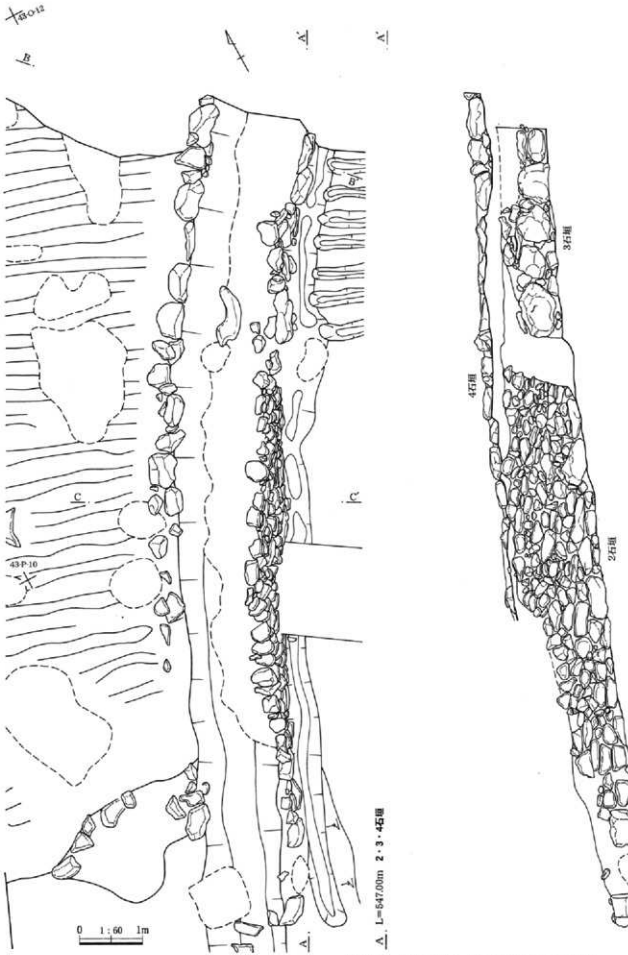
1号石垣は、Ⅲ区2面目の土砂崩れ下で検出された15(2)号ヤックラの石積み部分に繋がる可能性があるが、鉄塔に近接するためそれ以上調査が及ばず範囲を特定できなかった。N11号棚内の1mの段差を構成している。

2号石垣はⅡ区に位置し3号石垣と途中で分かれる。天明泥流堆積後も旧地形を継承するということが想起され、表土掘削時に現況石垣を残しながら、検出作業をおこなった。その結果、2号石垣直上に現況石垣（図中網掛け）が東向きの面を揃えて載っていることが確認された。現況石垣の多くの礫は、天明泥流により運ばれてきた火山弾等の「浅間石」で構成されていることがわかる。面が揃っていることから被災前の状況を基に、地形や地境を意識しつつ被災後比較的早い段階で復旧作業に取り組んだものと判断される。**3号石垣**は、1号道を構築しⅡ区からⅤ区へと繋がる。2号石垣との切れ目は1号道への登り口である可能性がある。平面的なズレに加え、N26-6号畑の鋤込み土を剥ぐとAs-A軽石の堆積した2号道が検出され、7号道と登りロとを繋ぐように位置していることもその理由である。**3（1′）号**

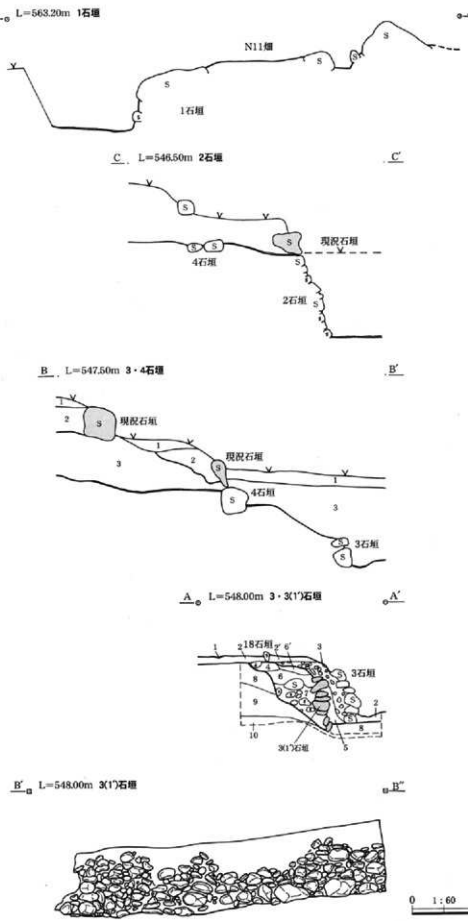
表Ⅲ．4　中棚Ⅱ遺跡　石垣計測値等一覧表　　＊1 構成する礫の最大径(cm)

	遺構名称	位置	長さm	高さ (段数・m)	築石の特徴	＊1	積み力	遺物	備考及び土層注記
1	1号石垣	54GX-11	(5.0)	2段・1.0	亜角礫	160	野面積乱積		
2	現況石垣(一括)	－	－	2段・－	亜角礫多く、一部亜円礫	64	野面積乱積		2・3・4・14号石垣の上位に構築。
3	2号石垣	43GX-10～43GO-8	10.4	7段・1.4	亜角礫多く、一部亜円礫	74	一部布積崩積		
4	3号石垣	43GX-16～43GO-10	25.8	7段・6.9	亜角礫多く、一部亜円礫	88	野面積乱積	中-144	3（1′）号石垣に同じ。
5	3（1′）号石垣	43GX-16	3.2	7段・1.0	亜角礫多く、一部亜円礫	50	野面積乱積		1：As-A軽石。2：3T耕作土と同質だが、若干硬かり As-A1 軽石が、3：3号石垣の裏込め。直径3～5cmの礫を主体とする。4：14号石垣の下部にあり、3（1′）号石垣に対応するものと思われる。5：黒褐色土：6層土到達は（1′）号石垣構築後に当掘積土。6：黒褐色土：8層と同質。6′：6層と同質質で硬けが非常に強い。3（1′）号石垣と対応する？可能だが、未確認。なお、確認した限りでは、直径3mほどの礫を中心多く含む。7：3（1′）号石垣の裏込め。直径10～30cmの礫を主体とする。8：黒褐色土：直径3mほどの礫を中心多く含む。9：黄色土：直径5mほどの礫を少量含む。10：黒褐色砂土：礫を中心で含まない細粒砂。
6	4号石垣	43GX-11～43GO-10	8.5	1段・0.4	亜角礫多く、一部亜円礫	68	－		1：表土。2：黒褐色土：5～20cmの礫(現況中心)。この判断されるものが中心として、表面からの石を中心とする上層。3：7.8黒褐色粘土。
7	5号石垣	31GX-25	(5.2)	2段・1.1	亜円礫、亜角礫	84	野面積乱積		
8	11号石垣	43GX-25～54GX-1	(13.9)	7段・1.2	亜角礫多く、一部亜円礫	64	野面積乱積		1：ヤックラ対応に直径3～5cmの角礫、最広めというよりは、表面に偏がかっている石。石垣の裏には切り石が敷設なし。
9	12号石垣	43GX-21～43GO-21	31.9	4段・1.1	亜角礫多く、一部亜円礫	150	野面積乱積	中-143	調査は必要なかったが、直線状区切り状態ずのようで、建ずりの上に1～2m部平耕作土が載っていた。1：As-B軽石。2：As-B軽耕土。3：(1)号石垣裏込め。直径3～30cmの角礫を主体とする。4：黒褐色土：直径3～30cmの亜角礫を多く含む。
10	13号石垣	43GX-20～43GO-16	16.8	6段・0.9	亜円礫、亜角礫	38	野面積乱積		1：As-B軽石下耕作土。2′：11の裏積土。2：黒褐色土：直径5～20cmの礫を多く含む。3：黒褐色砂質土：直径5cmほどの礫を少量含む。
11	14号石垣	43GX-22～43GO-22	(19.7)	4段・0.6	亜円礫、亜角礫	54	野面積乱積		1(現況)：(2)裏込め耕作土：6次調査で耕かった現況石垣が載る。
12	15号石垣	43GX-20～43GO-17	15.0	1段・－	亜角礫多く、一部亜円礫	50	－		
13	16号石垣	43GO-17～43GG-18	14.1	1段・0.5	亜角礫	102	－		1：現在表土で表面は全面、現況面の場合となっている。1：1A下耕作土。2：1B石垣裏込め。直径3～20cmの礫で構成されている。3：黒色土：直径3～20cmの礫を多く含む。4：黒褐色砂質土：直径3～20cmの礫を主体とし、直径5～50cmの礫をやや多く含む。
14	17号石垣	43GO-15～43GQ-15	14.8	1段・0.2	亜円礫、亜角礫	40	－		1：黒色土：一部石垣表土を掘削かこブロック状に含む。(2)表土：直径3～30cmの礫を多く含む。3：暗赤褐色土：N34号畑の黒色土と同じ。2層色砂質：現況の基盤層と考えるが現状不明。
15	18号石垣	43GO-15～43GM-13	(7.0)	1段・－	亜角礫	50	－	中-154	同石垣と同じと考えられる。
16	19号石垣	43GX-16～43GX-16	20.5	5段・2.1	亜角礫多く、一部亜円礫	148	一部布積崩積		
17	21号石垣	49GX-5～49GV-1	3.7	8段・1.3	亜円礫多く、一部亜角礫	110	一部布積崩積		1：20cm大の亜円礫(同石礫)。2：5～15cm大の亜角礫(砂利)。東方へ延びている石(1)号ヤックラ。3：30～50cm大の亜円礫(同石礫)が敷設。4：暗褐色土(粘土)。5：同明度褐褐色(ベルト)。
18	22号石垣	49GX-5～49GV-1	5.1	6段・1.2	亜円礫多く、一部亜角礫	116	布積崩積	中-42	1：暗褐色土：N32号畑耕作土。2：黒褐色土：礫を含まない。
19	23号石垣	49GX-1～49GV-3	2.3	3段・0.6	亜円礫多く、一部亜角礫	74	野面積乱積		

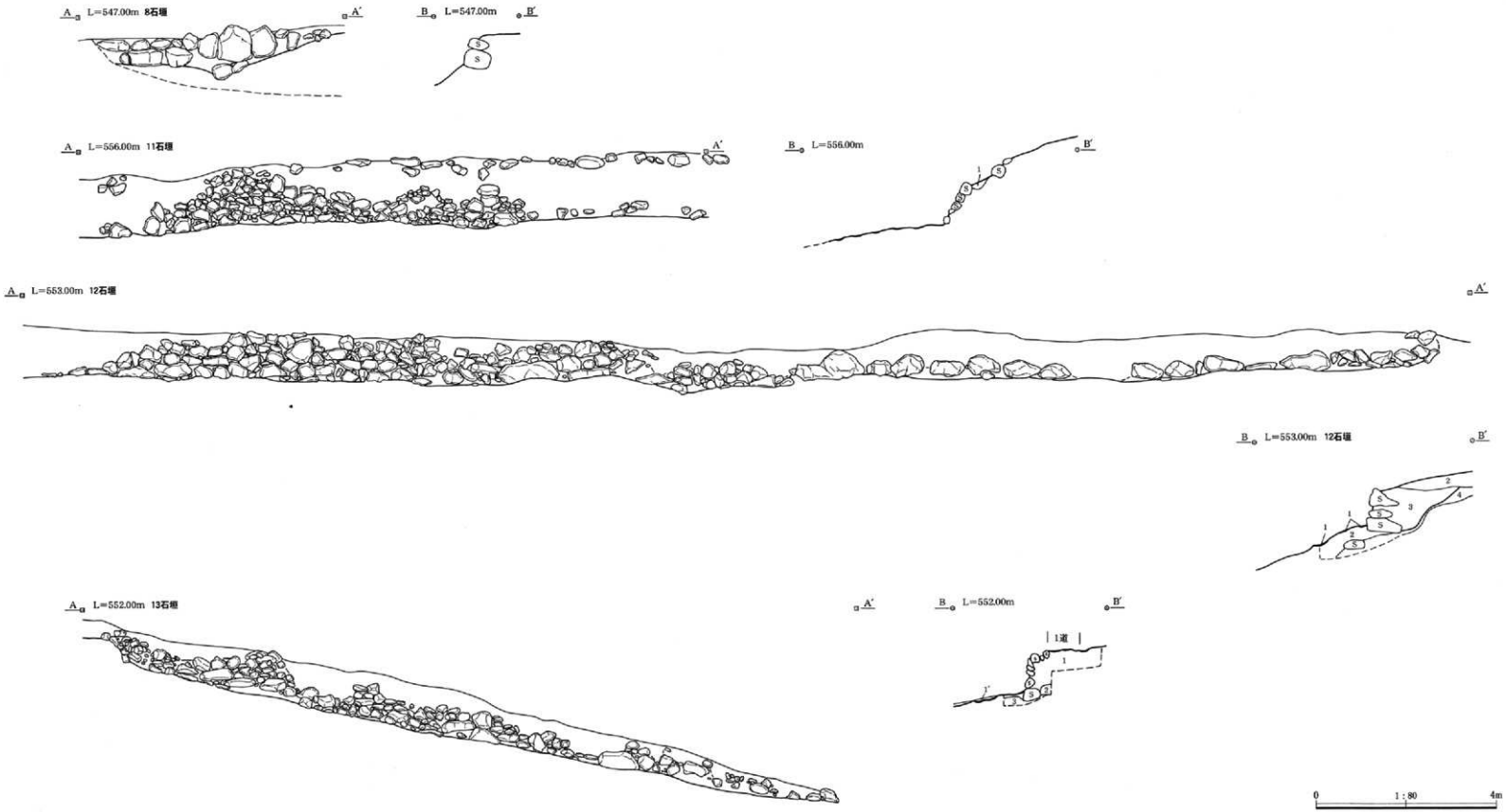
横沢石橋



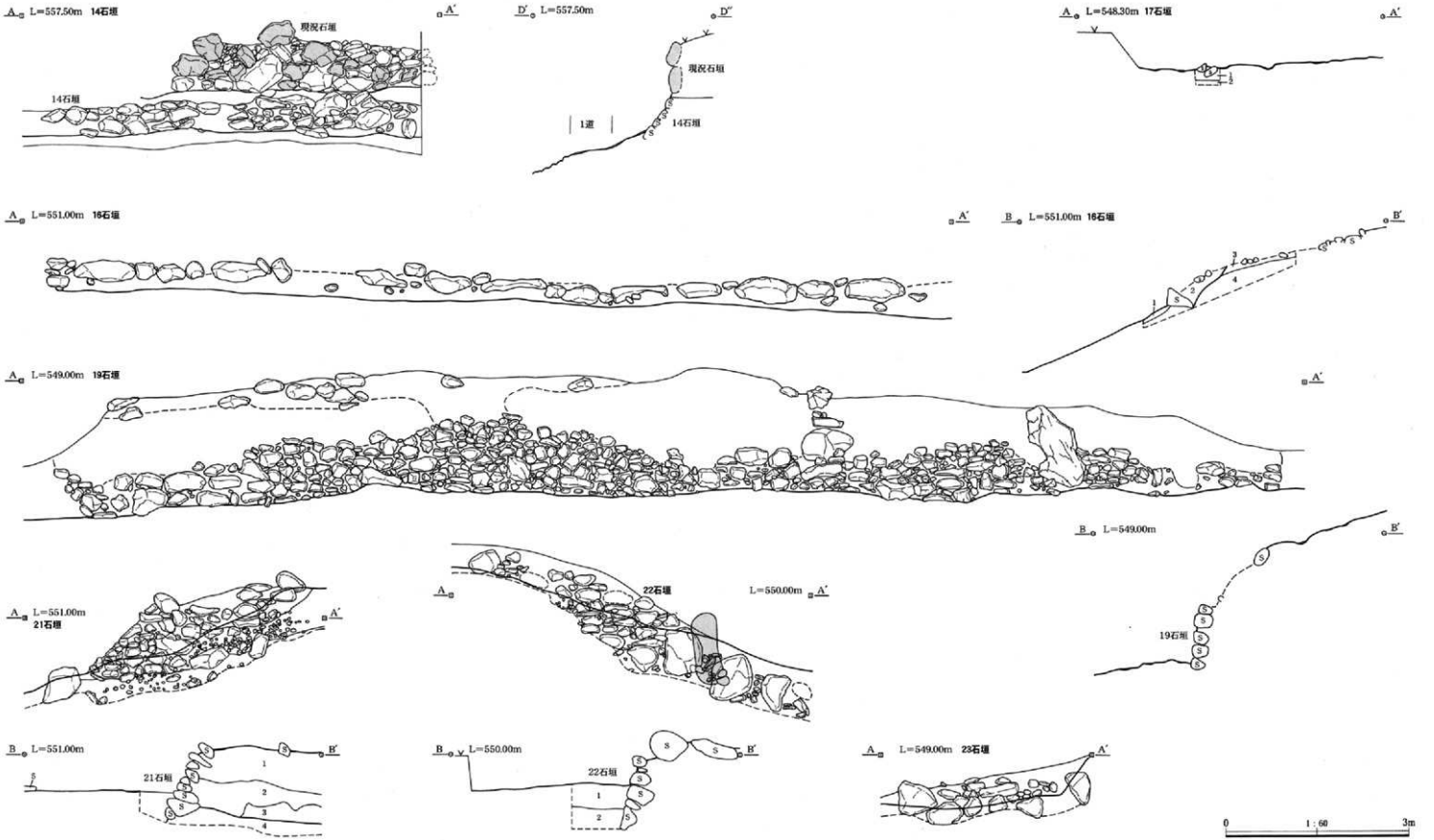
図III.46 中棚II遺跡 2～4号石垣・現況石垣



図III.47 中柵II遺跡 1～4・3(1')号石垣



図III.48 中標II遺跡 8・11～13号石垣



図III.49 中棚II遺跡 14・16・17・19・21～23号石垣

石垣（断面図網掛け）はⅤ区の一部分で確認されたもので、3号石垣の孕んでいる部分の奥後方に位置し、3号石垣が積み替えにより構築される前身であることを確認した。3号石垣は一部で現況石垣と平面で重なっていたこともわかる。**4号石垣**と**18号石垣**は互いに繋がるものと考えられるが、調査区が広げられず確定できないため、調査時に付した遺構番号で、別遺構名を用いた。いずれもN25号畑と1号道を画するものと考えられる。

8号石垣はⅣ区で検出されたものである。当初は、天明泥流以後の構築と考えられたが、石垣の中央付近にある礫の周辺を中心にAs-A軽石とプライマリーな堆積と判断できる天明泥流堆積物を確認した。天明泥流被災後もその一部が石垣として地形を画していたことになる。

Ⅱ区及びⅤ区を含め調査区を5段の段丘に区分(図Ⅲ.4)すると、**11号石垣**はその最上段と2段目を区画する段差に構築されている。天明泥流によりその段上は大きく撹乱を受けている。61号ヤックラの下位からは、2面目土砂崩れ前の11号石垣の前身となる部分の11(2)号石垣が検出されている。根石部分は一般に堅牢に据えられ、横長に据えたものが多いが、上位の積み方は乱雑で若干不安定である。小礫を宛った裏込めは極部分的で殆ど見られない。石垣は立面図の西側へも延びるが、泥流による撹乱が特に著しかった為、図化していない。

12号石垣は、2段と3段を区画する段差に構築されている。径が1m以上もある礫は横長に据えられ、中程度の大きさのものは縦長に用いて丁寧に据えられていて安定感がある積み方がなされている。裏込めは握り拳大の亜角礫がぎっしりと込められており、殆ど見られなかった11号石垣とは対照的である。

13号石垣は、3段と4段を区画する段差に構築されている。1号道とN21号畑を画する段差を構築するものである。ほぼ垂直に築かれ、裏込めは殆ど見られない。積まれた石の上位部分の多くは撹乱を受けていた。**14号石垣**の上位には20cm前後の表土層を挟んで現況石垣（浅間石を網掛け）がほぼ真上に載る。14号石垣を構築する礫は円礫が多く、面の揃いは不均質である。

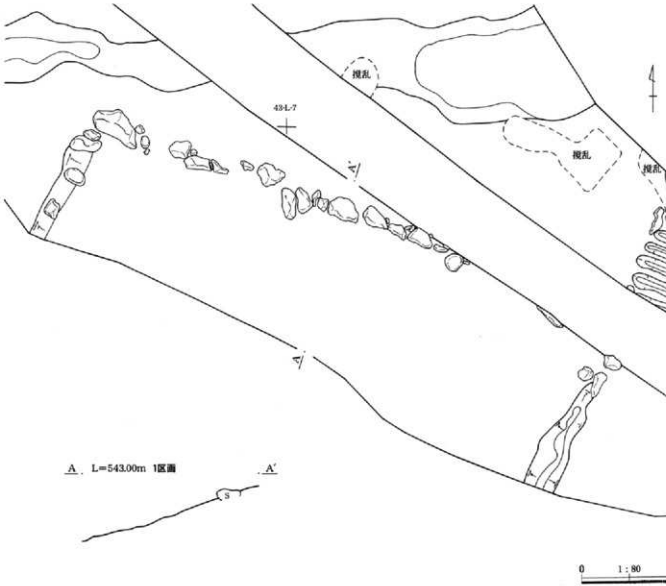
15号石垣は13号石垣と平行し1号道とN22号畑を区画する。石垣というよりも石の列であり、20～50cm大の円礫を並べている。北端では縦であるが、大半は平置きに埋め込んでいる。**16号石垣**は1m前後の巨礫を横長に据えている。ただし、上面は泥流ないしは泥流堆積以降の耕作の撹乱により、本来の状況が残存していない。構築時から一段だったのか、上位に積まれていたのかは不明であるが、地形と畑を区画している。**17号石垣**は4・15・16・18号石垣と同様に礫が畑の区画として並べられていた。20～40cmの大きさの亜角礫がやや不規則に地境をなしている。この石垣の存在から北側に位置する2条の畝はN21号畑の一部分であると考えられる。

19号石垣付近では、この石垣とは別にN22号畑との境界に円礫が一列並んでいたものと考えられるが泥流による撹乱を受けていて詳細は不明である。19号石垣は、3段と5段を区画する段差に構築されている。N22号畑の南端で礫のない傾斜部分がありその南に石垣が積まれる。石垣は大小の礫を取り混ぜ丁寧に積まれ、裏込めの量も比較的多かったが図化記録できなかった。西は3号石垣の北端と1号道から始まり、東へいくに従って低くなり、66号ヤックラと接する。

21・22・23号石垣はⅣ区の東部分の墳状に迫り出した部分に付随した石垣である。墳に対して**21号石垣**は西壁となっている。32(1')号ヤックラを含み、段の中位に布積崩積を思わせる不整合な積み方が見られる。**22号石垣**は東壁となっている。西に飛び出して、全長1.2mの柱状の亜円礫が0.4m地表に露出して立っていた（立面図で網掛け）が、文字や刻銘等は確認できなかった。目的は不明である。**23号石垣**は22号石垣の延長上にあり、N32号畑とN34号畑の段差を区画し逆に西壁を呈している。3箇所の石垣はいずれも、部分的には天明三年被災時に土砂が堆積し全体は見えない状態であった。なお、立面図中の太線は、天明三年被災時の地表面を示す。

（6）区画

1号区画は43区K－５～M－７グリッドに位置する。「区画」という遺構名称は、畑内の平坦面と同機能を持つと考える遺構にも用い、それぞれの畑で報告した。ここで扱うものはそれとは性格の異なると考える石の囲いで本書の中では１箇所のみ扱う。調査当初石垣の遺構名称を用いたが、「コ」の字状に囲われた場所が確保され、北辺の約８ｍの部分には礫が段差を築くように並べられる。東と西の２辺については記録は残せなかったが調査時に北の１辺と同様に礫が多少散在していた。排水溝のようにも見受けられる溝状の窪みと段差により区画されていたものと考えられる。概ね12ｍ×３ｍの範囲が調査区内では確認された。西側の段差は24cmを測る。築石は最大径110cmで亜角礫が大半であるが、一部円礫を含んでいた。緩やかな南勾配を保ち３辺で周囲とは区画される範囲が確認されたため、「区画」の遺構名称を用いた。なお、Ⅱ区南寄り周辺は全体的にAs-A軽石の残存状況が不良ではあるが、１号区画内にはAs-A軽石が全く見られなかった。以上の観察から、覆屋などの構造物の存在などが示唆されるが、調査区外の南側部分等の状況から判断されるべきであろう。泥流による地面の凹凸が著しく、ピット等の検出にはいたらなかった。

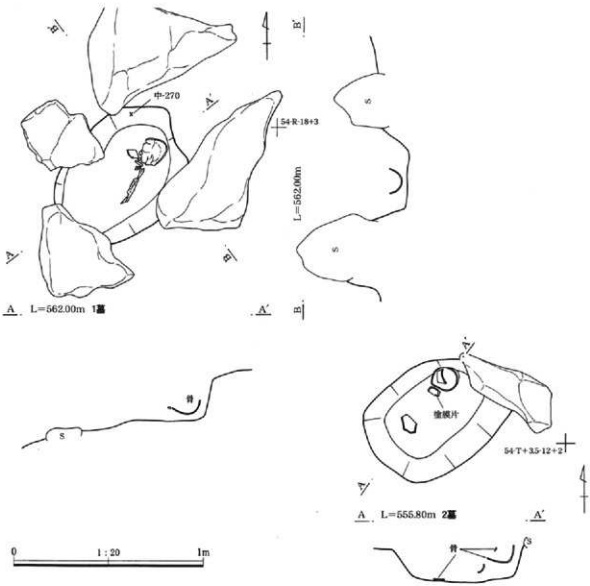


図Ⅲ.50 中棚Ⅱ遺跡 1号区画

(7) 墓

Ⅲ区で2基の土坑墓が検出された。いずれも泥流面の調査で検出されたが、埋土は天明泥流堆積物層が互層として含まれていたため、泥流堆積以降のものと考えられる。計測値等については表Ⅲ．5を、人骨に関する所見については区章の考察を参照頂きたい。

1・2号墓ともに頭骨をはじめとする骨が出土した。**1号墓**からはキセル（中-270）が出土した。キセルの編年上からは、肩付や脂返しの形状の特徴から天明泥流被災以降の19世紀代までの時期を想定できる。検出面が不明確であったため、南西側の範囲は不確定である。**2号墓**からは漆器塗膜や櫛の出土がある。時期は泥流堆積以降である。



図Ⅲ．51　中棚Ⅱ遺跡　1・2号墓

表Ⅲ．5　中棚Ⅱ遺跡　墓計測値等一覧表

	遺構名称	位置	長軸×短軸(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1	1号墓	54KR-18	(75)×59	—	中-270（キセル雁首）	掘り込み面はかなり上位か？
2	2号墓	54KU-12	(78)×57	—	漆器塗膜	掘り込み面はかなり上位か？